

く むい ぼる 小堀原遺跡

- キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業 平成 〆 年度 -

< 付篇 > ちやたんぐすく 北谷城の調査概要

2009 平成 21 年 3 月

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

北谷町教育委員会では、平成7年度から平成9年度にかけて旧キャンプ桑江北側返還に伴う区画整理事業の事前調査として、文化庁の補助を得て返還地の試掘調査と北谷城の試掘調査を実施して参りました。その結果、旧キャンプ桑江北側返還地では10遺跡4遺物散布地が確認され、北谷城ではグスクのほぼ中央南側斜面から平坦地にかけて遺跡の存在が確認されました。

小堀原遺跡は、試掘調査時に遺跡の存在は確認されなかった。しかし、周辺に遺物が多量に出土することから試掘データの再検討を行ったところ、遺構の可能性のある窪みがあること、更に海生白砂層に土器が存在することが判明したため、それらを手がかりに平成11年度から平成12年度に範囲確認調査を行い発見された遺跡であります。

範囲確認調査の結果、遺跡はグスク時代と貝塚後期の文化層があることが確認されました。グスク時代の文化層からは10世紀から11・12世紀頃の集落跡で住居址と高床式建物址がセットで検出され、近くからは埋葬人骨も発見されました。貝塚後期においては、尖底土器とアラスジケマンが伴う時期と、丸底土器と大型のシャコ貝、イノシシの下顎骨が多く出土する時期の2時期あることが判明しております。

北谷城は、平成9年度から11年度・13年度にグスク南側の斜面部から平坦地にかけて試掘・範囲確認調査を行っております。設定された調査区において、麓近くで戦前の井戸が確認されております。また、近くの調査区では下位の層よりグスク時代の埋葬人骨も出土しております。斜面地ではグスク時代の文化層が平坦に堆積していて、礎石も確認されたことから建物が建っていたことが判明しております。出土遺物も中国陶磁器や土器など多数出土しており、丘陵上から斜面地まで利用していたことが判明しました。このことにより、北谷城における縄張りを把握する上で大変貴重な成果が得られております。

今回、調査で得られた成果を報告書として刊行することとなりましたが、本書が文化財保護への御理解と認識を深める一助となり、また北谷町の歴史を考える研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々の御理解とご協力を賜りました方々に対し、心からの謝意を表します。

平成21年3月

北谷町教育委員会
教育長 比嘉 秀夫



巻首図版1 小堀原遺跡・北谷城航空写真（北側より）



1トレンチ 東壁



1トレンチ 西壁



2トレンチ 両側より



2トレンチ 東壁



3トレンチ 南壁



3トレンチ 東側壁



3トレンチ 西側壁



4トレンチ 北側より



北側家跡



北側家跡



北5～南5 西壁



試掘穴A 西壁 (5トレンチ 北5～南5)



西壁 (6トレンチ)



試掘穴B 東壁 (5トレンチ 南5～10)



試掘穴E 南壁 (5トレンチ 南20～28)



試掘穴C 東壁 (5トレンチ 南10～20)



7トレンチ 西壁



7トレンチ 東壁



8トレンチ 東壁



8トレンチ 北壁



掘立柱建物址 1-2



掘立柱建物址 1-3



5トレンチ ビット111



5トレンチ ビット29



5トレンチ ビット100



5トレンチ ビット110

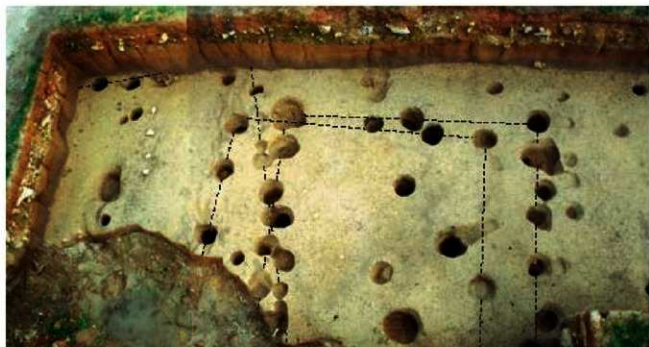


5トレンチ ビット158



5トレンチ ビット160

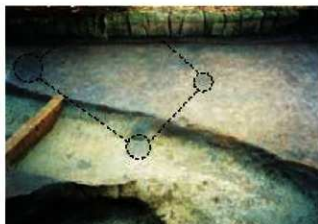
巻首図版7 掘立柱建物址プラン・ビット検出状況



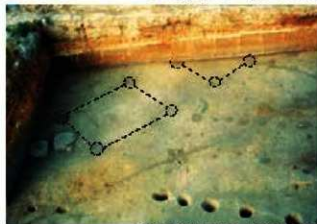
掘立柱建物址 5-8-7 (7トレンチ)



掘立柱建物址 4 (8トレンチ)



近方形遺構・高床式建物址 (5トレンチ)



高床式建物址 2-3 (8トレンチ)



高床式建物址 4 (7トレンチ)



巻首図版9 土墳墓検出状況（7トレンチ）



IV層b検出面(6トレンチ)



IV層c検出面(6トレンチ)



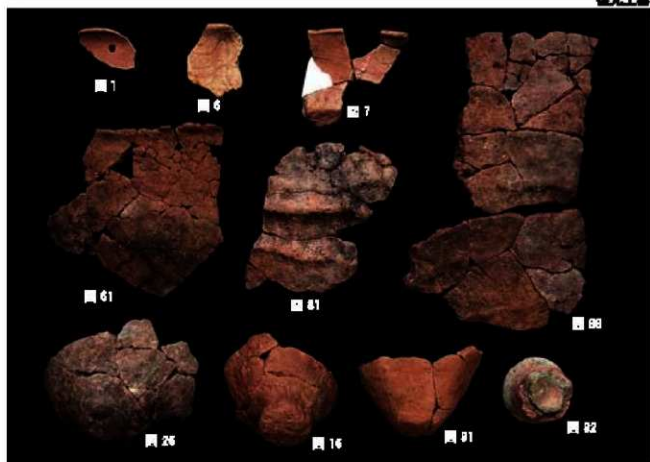
IV層c 土器・動物骨検出状況(6トレンチ 北5~南6)

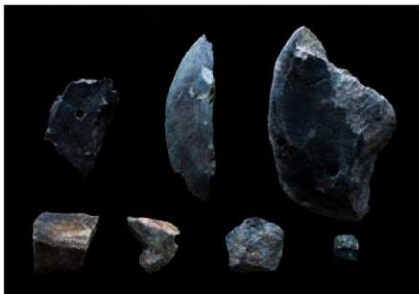


貝類遺物検出状況(6トレンチ 北5~南6)



IV層c 土器・動物骨検出状況(6トレンチ 北5~南6)

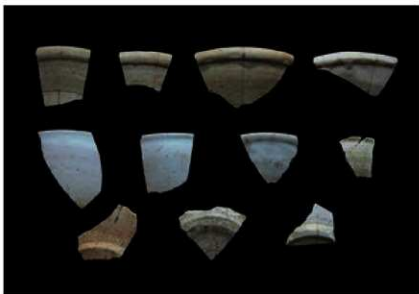




滑石製品 (第58・59図)



カムイヤキ (第56・57図)



巻首図版12 滑石製品・カムイヤキ・白磁

白磁 (第61・62図)

例 言

1. 本報告書は「キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業」として文化庁補助を受けてキャンプ桑江北側返還に伴う範囲確認調査、平成11年から13年度に実施した『小堀原遺跡』発掘調査の成果と北谷城の調査概要をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図（昭和54年測量）を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告の方位は磁北をさす。
3. 遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。（敬称略）記して感謝申し上げます。

石 質	大城 逸朗（北谷町文化財審議員：理学博士）
人 骨	土肥 直美（琉球大学医学部 准教授）
貝 類	黒住 耐二（千葉県立中央博物館 上席研究員）
魚 骨 類	樋泉 岳二（早稲田大学 非常勤講師）
カムイヤキ	三辻 利一（鹿児島国際大学 客員教授）
4. 土肥直美氏・黒住耐二氏・樋泉岳二氏・三辻利一氏には玉稿を頂いた。記して謝意を表します。
5. 放射性炭素分析は、バリノサーヴェイ株式会社で行った。
6. 本報告書の編集は、東門研治が中心となり、島袋春美ほかの協力で行った。執筆分担当は下記のとおりである。

第一章 第一・二節	東門 研治
第二章・第三章 第四節 2 C	秋本 真孝
第三章 第一～三節	東門 研治
第三章 第四節 1、2 A・B	島袋 春美
第三章 第四節 2 D	上地千賀子
第三章 第五節 1 A～F	細川 愛
第三章 第五節 1 G	島袋 春美
第三章 第五節 2 A	上地千賀子
第三章 第五節 2 B	東門 研治
第三章 第五節 2 C・D	秋本 真孝
第三章 第六節 1	細川 愛
第三章 第六節 2 A～C・H・I	秋本 真孝
第三章 第六節 2 D～G	山城 安生
付 篇（北谷城）	東門 研治

7. 遺物洗浄・接合・実測・復元・集計・写真撮影・図面整理・トレース・図版作成等の資料整理は下記の人員で行った。

上間真寿美	豊里 初枝	東 順子	照屋 元子	佐久間クリエ	山城小百合
稲嶺恵理奈	西原 美草	仲村渠恵子	東恩納里花	大城 光	曾木 菊枝
知念 栄子	渡口沙里恵				

8. 本遺跡の遺物の注記は下記のとおりである。尚、遺物台帳は別添の「CD」に「小堀原遺跡遺物台帳.xls」収録した。

・遺物台帳例

台	枝	出土地	層序名	日付	
226	a	㊦トレンチ南側10～20m	黒褐色砂層下	H12.11.7	→

・注記例

226-a ㊦トレンチ南側10～20m 黒褐色砂層下 H12.11.7
--

9. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会に保管している。

報 告 書 抄 録

ふりがな	くむいばる いせき							
書名	小堀原遺跡							
副書名	キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査							
巻次								
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第30集							
編著者名	東門研治・山城安生・島袋春美・上地千賀子・細川 愛・秋本真孝・土肥直美・黒住耐二・樋泉岳二・三辻利一・パリノ・サーヴェイ (株)							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2009年(平成21年)3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
くむいばる いせき 小堀原遺跡	おき ちゅん ちゅん ちゅん ちゅん ちゅん 沖 北 谷 桑 江 あび ちゅん ちゅん ちゅん 字 小 堀 原	473260		26° 19' 14"	127° 45' 45"	2002.02 ～ 2001.	1,220	キャンプ桑江北側返還に伴う範囲確認調査
所収遺跡名	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
小堀原遺跡	近・現代	溝状遺構			沖縄産施釉・無釉陶器・陶質土器・本土産磁器・瓦・円盤状製品			
	グスク時代	堀立柱建物址・高床式建物址・炉址・溝状遺構・自然流路・土壇墓・ピット群			カムイヤキ・滑石製品・白磁・羽口・鉄滓		幼児骨	
	貝塚後期	貝溜まり・ピット状遺構・獣骨集中部分・一括土器			土器・貝製品・石器・チャート製品			
	要 約	<ul style="list-style-type: none"> ・3トレンチ南東角で戦前頃の川跡が確認された。 ・グスク時代の遺構は標高4.0～3.0mの琉球石灰岩砂丘縁部から沖積層に展開。11世紀後半～13世紀頃の時期を考えられる。 ・貝塚後期は住居址の遺構などは確認されず、貝溜まり、獣骨集中部、一括土器など生活面の痕跡がみられた。 						
北谷城	グスク時代	チンガー(井戸)・石列・建物の礎石・土壇墓			土器・青磁・白磁・染付・本土産陶器・褐陶陶器・青銅製品・鉄製品・ガラス玉		成人骨	
	要 約	<ul style="list-style-type: none"> ・北谷城は丘陵南側麓の斜面地と平坦地を調査、その結果、斜面地では建物の基礎と石列が、平坦地はチンガーと土壇墓が検出された。平坦地はチンガーが近世、土壇墓が12世紀頃、斜面地は14～15世紀頃と思われる。 						

本文目次

巻首図版

はじめに

例言

第一章 調査に至る経過	1
第一節 調査に至る経緯	1
第二節 調査体制	1
第二章 遺跡の位置と環境	4
第一節 遺跡の位置	4
第二節 地理的環境	4
第三節 歴史的環境	5
第三章 調査の方法と成果	10
第一節 調査の方法	10
第二節 調査の経過	10
第三節 層序	21
第四節 貝塚後期	37
1. 遺構	37
2. 出土遺物	46
A. 土器	46
B. 貝製品	103
C. 石器	110
D. チャート製品	117
第五節 グスク時代	119
1. 遺構	119
2. 出土遺物	143
A. カムィヤキ	143
B. 滑石製品	151
C. 白磁	157
D. 羽口・鉄滓・焼土	165
第六節 近・現代	169
1. 遺構	169
2. 出土遺物	171
A. 青磁	171
B. 染付	171
C. 褐釉陶器	172
D. 沖縄産施釉陶器	173
E. 沖縄産無釉陶器	178
F. 陶質土器	179
G. 本土産磁器	182
H. 瓦	184
I. 円盤状製品	184
第四章 科学的分析	187
第一節 小堀原遺跡出土の人骨	187
第二節 小堀原遺跡出土の脊椎動物遺体	189
第三節 小堀原遺跡から出土した貝類遺体	204
第四節 小堀原遺跡の放射性炭素年代測定(カーボン測定)	213
第五節 カムィヤキ(須恵器)の蛍光X線分析	216
第五章 まとめ	221
付篇(北谷城の調査概要)	231

図版目次

巻首図版1	小堀原遺跡・北谷城航空写真(北側より)	図版30	チャート	118
巻首図版2	1・2トレンチ(層序)	図版31	溝状遺構1検出状況	135
巻首図版3	3・4トレンチ(層序)	図版32	溝状遺構3検出状況	135
巻首図版4	5トレンチ(層序)	図版33	自然流路(礫)検出状況	136
巻首図版5	5・6トレンチ試掘穴(下層確認)	図版34	人骨検出状況	137
巻首図版6	7・8トレンチ(層序)	図版35	カムイヤキ1	147
巻首図版7	掘建柱建物址プラン・ビット検出状況	図版36	カムイヤキ2	149
巻首図版8	掘建柱建物址・高床式建物址プラン	図版37	滑石製品1	153
巻首図版9	土壇墓検出状況(7トレンチ)	図版38	滑石製品2	155
巻首図版10	貝塚後期IV層b・IV層c面・遺物検出状況	図版39	白磁1	161
巻首図版11	土器	図版40	白磁2	163
巻首図版12	滑石製品・カムイヤキ・白磁	図版41	羽口	166
図版1	貝溜まり出土状況	図版42	鉄滓	167
図版2	土器出土状況	図版43	近世溝状遺構検出状況(5トレンチ)	169
図版3	獣骨検出状況	図版44	近世溝状遺構検出状況(7トレンチ)	169
図版4	ビット遺構検出状況	図版45	青磁	171
図版5	遺物出土状況	図版46	染付	171
図版6	一括土器出土状況	図版47	埴輪陶器	172
図版7	土器1(口縁部)	図版48	沖縄産施軸陶器	177
図版8	土器2(口縁部)	図版49	陶質土器	179
図版9	土器3(口縁部)	図版50	沖縄産無軸陶器	181
図版10	土器4(口縁部)	図版51	本土産磁器	183
図版11	土器5(口縁部)	図版52	瓦	184
図版12	土器6(口縁部)	図版53	円盤状製品	185
図版13	土器7(口縁部)	図版54	イノシシ骨	199
図版14	土器8(口縁部)	図版55	イノシシ骨	199
図版15	土器9(口縁部)	図版56	魚骨	200
図版16	土器10(口縁部)	図版57	カメ・クジラ・ジュゴン	200
図版17	土器11(口縁部)	図版58	ウシまたはウマ	201
図版18	土器12(口縁部)	図版59	貝類(巻貝1)	201
図版19	土器13(復元土器)	図版60	貝類(巻貝2)	202
図版20	土器14(3・4トレンチ)	図版61	貝類(巻貝3)	202
図版21	土器1(底部)	図版62	貝類(二枚貝1)	203
図版22	土器2	図版63	貝類(二枚貝2)	203
図版23	土器3(底部)	図版64	貝塚後期(IV層b・IV層c面検出状況)	224
図版24	貝製品1	図版65	貝塚後期 (IV層c面 遺物検出状況・炭化物)	225
図版25	貝製品2(ホラガイ)	図版66	グスク時代(遺構検出・遺物出土状況)	226
図版26	石器1(石斧・蔽石)	図版67	発掘作業風景(全景・作業風景)	227
図版27	石器2(蔽石・凹み石・磨石・石皿)	図版68	発掘作業風景(作業風景・集合写真)	228
図版28	石器3(石球・サンゴ石)			
図版29	チャート製品			118

挿図目次

第1図	北谷町の遺跡	7	第49図	高床式建物址1・2	132
第2図	小堀原遺跡の位置	9	第50図	高床式建物址3・4	133
第3図	グリッド設定	11	第51図	溝状遺構配置図	134
第4図	土層断面図(1トレンチ)	26	第52図	溝状遺構断面図	135
第5図	土層断面図(2トレンチ)	27	第53図	自然流路(平面・断面図)	136
第6図	土層断面図(3トレンチ)	29	第54図	土城墓と柱穴	137
第7図	土層断面図(5トレンチ)	31	第55図	口縁形態のタイプ別模式図	143
第8図	土層断面図(4トレンチ)	33	第56図	カムィヤキ1	146
第9図	土層断面図(6トレンチ)	34	第57図	カムィヤキ2	148
第10図	土層断面図(7トレンチ)	35	第58図	滑石製品1	152
第11図	土層断面図(8トレンチ)	36	第59図	滑石製品2	154
第12図	IV層b遺物検出状況(貝溜まり)	38	第60図	滑石製品(個数・重量別)	156
第13図	IV層c遺物検出状況	40	第61図	白磁1	160
第14図	土器片集中部平面・断面図(6トレンチ)	42	第62図	白磁2	162
第15図	一括土器出土状況平面・水平分布 (5トレンチ)	43	第63図	白磁分類図(森田 1981)	164
第16図	軽石(個数・重量別)	45	第64図	羽口出土量	165
第17図	土器胴部(個数・重量別)	46	第65図	羽口	166
第18図	土器1(口縁部)	60	第66図	鉄滓	167
第19図	土器2(口縁部)	62	第67図	焼土出土量	168
第20図	土器3(口縁部)	64	第68図	近世溝状遺構(横断面)	169
第21図	土器4(口縁部)	66	第69図	近世溝状遺構位置	170
第22図	土器5(口縁部)	68	第70図	青磁	171
第23図	土器6(口縁部)	70	第71図	染付	171
第24図	土器7(口縁部)	72	第72図	褐釉陶器	172
第25図	土器8(口縁部)	74	第73図	沖縄産施軸陶器	176
第26図	土器9(口縁部)	76	第74図	陶質土器	179
第27図	土器10(口縁部)	78	第75図	沖縄産無軸陶器	180
第28図	土器11(口縁部)	80	第76図	本土産磁器	183
第29図	土器12(口縁部)	82	第77図	瓦	184
第30図	土器13(復元土器)	84	第78図	円盤状製品	185
第31図	土器14(3・4トレンチ)	86	第79図	7トレンチ乳児骨の出土部位	188
第32図	土器1(底部)	95	第80図	7トレンチ乳児骨の歯	188
第33図	土器2(底部)	98	第81図	小堀原遺跡における脊椎動物遺体 全体の組成	192
第34図	主な復元土器(Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ類)	101	第82図	小堀原遺跡における脊椎動物遺体の 地区別・層別の出土数分布	192
第35図	貝製品1	106	第83図	小堀原遺跡における魚類遺体の組成	193
第36図	貝製品2(ホラガイ)	108	第84図	小堀原遺跡における貝類遺体の 生息場所類型組成	209
第37図	石器1(石斧・巖石)	112	第85図	小堀原遺跡のアラスジケマン 殻長組成	210
第38図	石器2(巖石・回み石・磨石・石皿)	114	第86図	沖縄産アラスジケマンの殻高- 殻長相関関係	210
第39図	石器3(石球・サンゴ石)	116	第87図	小堀原遺跡(沖縄県北谷町)出土 陶器片の両分布図	219
第40図	チャート製品	118	第88図	沖縄県内遺跡出土のカムィヤキ・ 土器の両分布図	219
第41図	グスク時代の遺跡とピット群(平面図)	121	第89図	沖縄本島出土陶器の産地推定 (K, Fe, Rb, Sr)	220
第42図	掘立柱建物址1	125	第90図	小堀原遺跡の遺物変遷図	229
第43図	掘立柱建物址2	126			
第44図	掘立柱建物址3	127			
第45図	掘立柱建物址4	128			
第46図	掘立柱建物址5	129			
第47図	掘立柱建物址6	130			
第48図	掘立柱建物址7	131			

表目次

表1	北谷町遺跡一覧	8	表30	沖繩産施軸陶器出土量	175
表2	土器口縁部分類別出土量	54	表31	沖繩産無軸陶器出土量	179
表3	土器口縁部・胴部観察一覧	55	表32	本土産磁器出土量	182
表4	土器底部分類別出土量	88	表33	円盤状製品観察一覧	185
表5	土器底部観察一覧	93	表34	小堀原遺跡における脊椎動物遺体の 地区別・層位別の出土数(NISP)	193
表6	貝製品出土量	104	表35	小堀原遺跡から出土した魚類遺体の同定結果	194
表7	貝製品観察一覧	105	表36	小堀原遺跡から出土したイノシシ遺体の同定結果	195
表8	石器観察一覧	111	表37	小堀原遺跡から出土したイノシシ上顎歯の詳細	197
表9	石器出土量	116	表38	小堀原遺跡から出土したイノシシ下顎歯の詳細	197
表10	チャート製品出土一覧	117	表39	小堀原遺跡から出土した脊椎動物遺体 (魚類・イノシシ以外)の同定結果	198
表11	掘立柱建物址プラン一覧	123	表40	小堀原遺跡における焼骨片の地区別・ 層位別重量分布	198
表12	高床式建物址プラン一覧	124	表41	小堀原遺跡における脊椎動物遺体の組成	198
表13	本島内の遺跡一覧	124	表42	生息場所類型および優占種の割合	209
表14	溝状遺構出土遺物	134	表43	小堀原遺跡出土貝類とその生息場所類型	211
表15	自然流路出土遺物	136	表44	小堀原遺跡のビックアップ法で得られた 貝類遺体の組成	212
表16	土壇墓・人骨(幼児骨)比較表	137	表45	放射性炭素年代測定結果	214
表17	ピット計測一覧	138	表46	暦年較正結果	215
表18	カムイヤキ出土量	143	表47	小堀原遺跡7トレンチ南壁出土陶器片の 分析データ	216
表19	カムイヤキ観察一覧	144	表48	沖繩県内遺跡出土のカムイヤキ・土器分析データ	220
表20	滑石製品出土量	156	表49	海産腹足類(タカラ貝を除く)の出土量	(CD収録)
表21	白磁観察一覧	158	表50	二枚貝類の出土量	(CD収録)
表22	白磁出土量	163	表51	陸・淡水産貝類の出土量	(CD収録)
表23	羽口出土量	165	表52	タカラ貝類の出土量	(CD収録)
表24	羽口観察一覧	165	表53	小堀原遺跡遺物台帳	(CD収録)
表25	鉄滓観察一覧	167			
表26	焼土出土量	168			
表27	近世溝状遺構出土遺物	169			
表28	青磁・染付・褐釉陶器出土量	172			
表29	青磁・染付・褐釉陶器観察一覧	172			

付篇(北谷城の概要)目次

挿図目次

第1図	北谷城の位置	232	第3図	北谷城 第八次～第十一次調査範囲	239
第2図	北谷城 第一次～第七次調査範囲	238	第4図	北谷城 第十三次～第十五次調査範囲	240

図版目次

図版1	第十三・十四次調査(全景北側より)	241	図版7	白磁	247
図版2	第十三・十四次調査 (No.1トレンチ・No.2トレンチ)	242	図版8	青磁1	248
図版3	第十三・十四次調査(No.2トレンチ・土壇墓)	243	図版9	青磁2	249
図版4	第十五次調査(石列検出状況)	244	図版10	染付	250
図版5	第十五次調査(獣骨・遺物出土状況)	245	図版11	本土産陶器(備前焼)・褐釉陶器(中国・タイ)	251
図版6	土器	246	図版12	ガラス玉・青銅製品・鉄製品	252

第一章 調査に至る経過

第一節 調査に至る経緯

小堀原遺跡の範囲確認調査については、キャンプ桑江北側返還跡地に伴う区画整理事業の事前調査として、文化庁の補助を得て、平成7年度から平成9年度の3年間に実施された。この試掘調査の成果、9遺跡と6遺物散布地が存在することが確認された。そこで、区画整理事業を円滑に進めるために、発見された遺跡及び遺物散布地の性格を詳細に把握する必要があること、また、キャンプ桑江北側返還が当初、平成13年度の予定となったことから、平成11年度より範囲確認調査を行うこととなった。

本遺跡は、試掘調査（平成7年度）の段階では遺物及び遺構は確認されなかった^(注1)。しかし、本遺跡の西側に遺物散布地があることから、周囲に遺跡本体が存在することが想定された。そこで、遺物散布地の南東側にグスク時代の遺跡である後兼久原遺跡が所在し、遺物の内容を比較したところ、差異が見られたので該当しないと判断されたため、再度、試掘調査データを見直す作業を行うこととした。

試掘調査データを検討したところ、柱穴状になる落ち込みが遺物散布地の東側に存在することが判明し、範囲確認のためのトレンチを設け調査することとした。

範囲確認調査は、未だ米軍基地が機能しているため発掘調査及び立ち入りの許可申請を平成11年9月17日付けで提出し、米軍側からは同年10月21日付けで回答を受けた。その後、範囲確認調査のトレンチを設定するために、米軍側の埋設物（水道・下水道・電話線等）調査や調査範囲を安全柵で囲う等の対策を行った。調査は平成12年12月より平成13年4月まで実施した。範囲確認調査終了後は、平成19年4月から平成20年3月まで資料整理を行った。

<引用文献>

注1、中村 恵・東門 研治 ほか『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－』北谷町文化財調査報告書第23集 北谷町教育委員会 2005年3月

第二節 調査体制

1. 範囲確認調査の組織

本補助事業による調査体制は以下のとおりである。

事業主体	北谷町教育委員会		
	教育長	瑞慶覽	朝 宏（平成14～19年度）
	同	比 嘉	秀 夫（平成20年度）
事業総括	教育次長	伊 礼	喜 正（平成14～16年度）
	同	阿波根	進（平成17・18年度）

	教育次長	謝 花 良 継 (平成19・20年度)			
	文化課長	嘉手納 昇 (平成11・12年度)			
	社会教育課長	大 城 操 (平成17～20年度)			
調査総括	文化係長	中 村 愿 (平成11～19年度)			
	同	嘉陽田 朝 榮 (平成19・20年度)			
調 査 員	主任主事	東 門 研 治 (平成11～20年度)			
	同	山 城 安 生 (平成20年度)			
調査作業員	平成11年度				
臨 時	伊波 静江	安仁屋郁子	新垣千代子	伊波 千代	當山 敏子
	東 康博				
	平成12年度				
	井上 美里	玉城 和美	砂川 正幸	尾木 綾	森田 直哉
	大濱 永寛	屋嘉比邦之			
調査作業員	平成11・12年度				
	安里 盛保	天久 和彦	平良 宗二	高江洲安廣	仲間 勝
	牧志 宗保	仲村 幸有	根間 平雄	松本 文喜	山川 守真
	屋良 朝正	吉田 昌博	金城孝次郎	比嘉 勇	玉城 清忠
	新城 賢志	金城 良勝	花城 可順	金城 良夫	比嘉ハル子
	宮城キク子	仲嶺 文子	宮里ミチ子	比嘉美佐子	伊計 明貞
	浦田 ワカ	新垣 吉子	仲真次政典	宮里 辰雄	屋比久孟盛
	宮里 福栄	與那覇政栄	親富祖行平	金城 健治	普久原朝栄
	森屋 正一	仲本 潤一	高江洲義雄	具志堅用徹	大村 泉一
	桑江 良善	宮城 吉廣	東江清治郎	松島 正吉	小浜 守市
	稲嶺 盛仁	島袋 盛厚	知念 勇進	多和田真栄	儀間 真吉
	棚原 三郎	垣花 忠雄	神山 鴻善	平 武彦	池宮城昌一
	多和田クニ子	宮里 武	新里 安子	浜里 ヤス	新田 保栄
	菊原 義久	津波 勇雄	新城 正雄	兼島 兼清	島袋 雅治
	屋良 朝盛	安次嶺長英	山川 実	西里 肇	大城 吉子
	仲宗根ヨシ子	比嘉 清子	伊禮 千代	金城貴美子	山城キヨ子
	仲道トミ子	西銘 和子	仲真千代子	田里 和子	稲嶺スミ子
	津波古ヨシ	豊里タマ子	具志堅スミ	与名城盛夫	石原 昌診
	上里 拡裕				
整理作業員	平成12年度				
臨 時	我那覇知美	玉城 和美	成田満利子	目取真貴子	喜友名朝代
	平成11・12年度				
嘱 託	上間真寿美	豊里 初江			
	平成19年度				
嘱 託	秋本 真孝				
臨 時	新川美和子	比嘉 美絵	大城 梨乃	中里 知子	上江洲陽子

蔵本奈々子 仲村渠恵子 稲嶺恵利奈 仲村渠晴樹 名嘉真弥生
 東恩納里香 大城 光
 平成20年度

嘱託 上間真寿美 上地千賀子 島袋 春美 東 順子 山城小百合
 臨時 仲村渠恵子 稲嶺恵利奈 大城 光 渡口沙里恵

調査協力及び助言

ポール 宜野座 (在沖海兵隊基地施設部不動産事務所長)
 クリス・ホワイト (在沖海兵隊基地環境保全課 自然・文化財保護官)
 平 敷 兼 直 (同上 自然・文化財保護係)
 エリック・ウィリアムズ (同上 考古学専門員)
 喜友名 朝 重 (在沖海兵隊基地施設営繕部部长)
 上 村 俊 雄 (鹿児島国際大学教授)
 大 西 智 和 (鹿児島国際大学教授)

第二章 遺跡の位置と環境

第一節 遺跡の位置

小堀原遺跡の在する北谷町は沖縄本島中部に位置し、県庁所在地の那覇市から約20km北東に所在している（第2図）。町の総面積は13.62km²で、南北約6km、東西約4.3kmと長方形である（第1図）。北は嘉手納町、東は島のほぼ中央を境として沖縄市と北中城村、南は宜野湾市に接している。西は東シナ海に面している^(註1)。町西部の海岸低地には、南部の那覇市と北部の名護市を結ぶ主要幹線道路である国道58号が通っている。また北谷町は県道23・24・130号線によって中部の沖縄市とも結ばれており、重要な交通の要所となっている^(註2)。人口約27,000人あまりで第三次産業を主とした町である。北谷町役場の緯度経度はそれぞれ、北緯26度19分12秒、東経127度45分49秒である^(註3)。

本遺跡は現在の北谷町役場の北西側に位置する。遺跡の南東側では旧奈留川（以下ナルカー）跡が見られ、奈留川（ナルカー）の蛇行流域に存在している。戦時中の米軍航空写真を見ると、本遺跡には、水田と建物が建っていたことがわかる^(註4)。

第二節 地理的環境

北谷町の地形は、町西部の東シナ海に沿った海岸低地と比高40～120mのなだらかな台地、丘陵の発達する東部から構成されている。周辺市町村との行政境界となっているこれらの台地、丘陵面は西の海岸低地に向かって傾斜している。台地と海岸低地の接する地域では、所々那覇石灰岩（琉球石灰岩）の露頭のみられる急崖が形成されている。また町の南部を東西に流れる白比川上流域の玉上地区では浸食崖の発達した開折谷がみられる。町内に分布する地質は、新第三系の島尻累帯に属している那覇層群の砂質シルト層、シルト質砂層、砂層、那覇石灰岩、海浜堆積物からなっている。これらの地質のうち、砂質シルト層とシルト質砂層は白比川上流の台地基部にみられる。砂層は桑江、吉原以北の台地、丘陵の所々に分布している。これらの地層を基盤として、台地、丘陵の大部分は那覇石灰岩に覆われている^(註5)。東側は標高100mの石灰岩台地で沖縄市に隣接し、北側は国頭礫層と隆起石灰岩が露胎する標高10～20mの微高地が続き、嘉手納町に至る。西側の海岸線は海生沖積土層からなる低地である。東側の沖縄市や南側の宜野湾市側の海岸段丘は隆起石灰岩台地であることから保水性が悪く、段丘下には所々に湧水を排出し、特に沖積世平野部の近くでは多く、戦前まではそれを源とする水田が広がり、北谷町から宜野湾市までの沖積世平野部に連続して存在していた。特に北谷町南側に位置する字北谷地域（現在のキャンプ・ズケラン）一帯は戦前までは沖縄本島の三大美田の一つとされている北谷ターブクァ（北谷田圃）と呼ばれる田圃風景が広がっており、往時には風光明媚な景色が見られたであろう。

第三節 歴史的環境

海岸段丘の縁辺部や湧水近くには遺跡が点在し、特に宜野湾市に所在する米海軍普天間飛行場の丘陵上部の西側縁辺部（オープン・サイト）や麓は顕著で、数十箇所の遺跡が集中している⁽⁸⁵⁾。北谷町域では北側の古い石灰岩の残りといわれる円錐形のカルスト残丘が点在し、その一つである砂辺集落背後の丘陵部一帯には遺跡（砂辺貝塚・クマヤー洞穴遺跡・サーク原遺跡・サーク原貝塚・カーシーノボントン遺物散布地・浜川御願遺跡）が集中し、南側では北谷城の丘陵部一帯の遺跡（北谷城・北谷城第7遺跡・玉代勢原遺跡・長老山遺跡）がそれらにあたり知られている（第1図）。

キャンプ桑江のある平坦部は略北西方向から南東部方向への一直線上を境として北東部は標高約30mの海岸段丘の丘陵部が連なり、南西部は標高10m前後の小段丘を介して沖積世平野部の麓に至る。ここは桑江断層⁽⁸⁷⁾といわれ湧水の所在するラインでもある。旧キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査で段丘の麓から沖積世平野部にかけての一帯に、北側から千原遺跡・平安山原A遺跡・平安山原B遺跡・平安山原C遺跡・伊礼原遺跡・伊礼原D遺跡・伊礼原E遺跡・小堀原遺跡・後兼久原遺跡の遺跡が発見され密集している様相がうかがえる。

この沖積世平野部は戦後の米軍によって削平や客土が施され、当地域の現状は一見すると標高数メートルの低平な平野部であると見受けられるが、石灰岩の岩塊が所々に露頭がみられる。試掘調査の成果や戦前の地形図、戦中の米軍航空写真などから丘陵部の形状や河川を追って旧地形を復元すると石灰岩微高地や河川の流路が確認でき、それらに伴う海岸線の形成過程である砂丘の発達上部に戦前の集落の配置も位置づけられ、旧地勢の様相の一旦が垣間見ることができる⁽⁸⁸⁾。先史時代の遺跡ではクマヤー洞穴遺跡を先駆けとして伊礼原遺跡などがある。クマヤー洞穴遺跡は貝塚時代前期前半に位置づけられる条痕文土器からグスク時代に至る遺物が確認されており、特に宇佐浜式期の改装人骨が多数検出されたことは注目される。伊礼原遺跡は小堀原遺跡北方の沖積低地に位置し、特に近年の発掘調査では沖縄諸島で最古の土器とされる爪形文であるヤブチ式・東原式土器が出土し、次いで曾畑式土器、室川下層式土器、面縄前庭式土器、カヤウチバンタ式土器、宇佐浜式土器、弥生式土器、縄文晩期系土器、浜屋原式土器、玉縁口縁白磁、滑石、カムイヤキ、青磁、華南三彩、天目茶碗、瑠璃釉などグスク時代の遺物まで連続として出土している。沖縄諸島の先史時代編年体系が網羅できるほどの各型式が粗密はあるものの存在していて生活の場として息の長い地域であったことがうかがわれる。

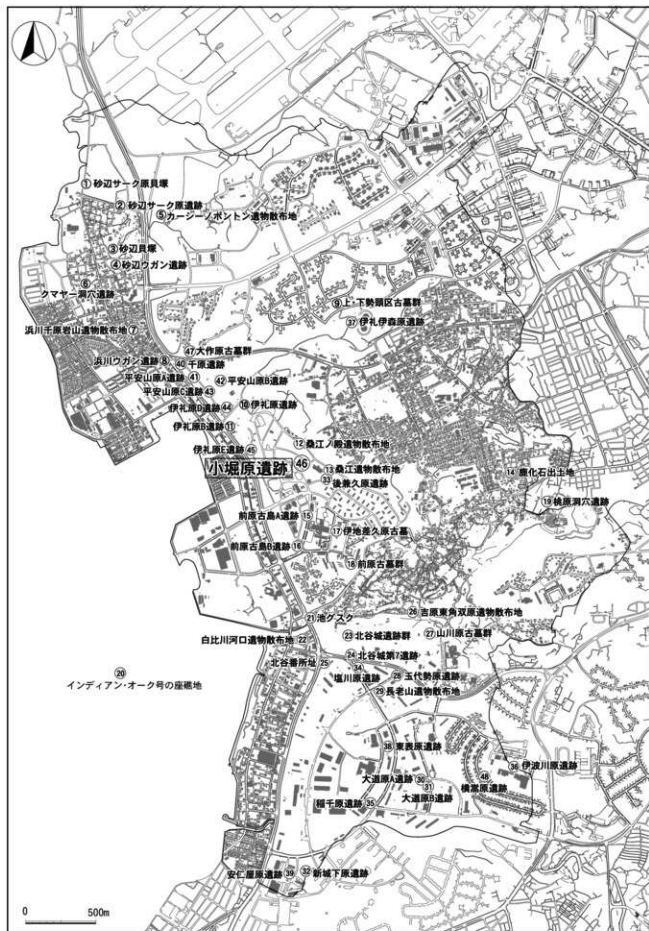
グスク時代初期からの遺跡である後兼久原遺跡は、本委員会による町庁舎建設に伴う緊急発掘調査によって性格が明らかとなった遺跡で、平地住居・高床式建物址・畠・鍛冶関連遺物・埋葬人骨などが検出され多大な成果を挙げている。また、埋蔵文化財センターによる発掘調査が町庁舎の裏手丘陵側で行われており、本委員会が実施した調査区の南東側にあたり、さらに遺跡の性格を明らかにできたと考えられる。遺跡周辺には世帯高い地域としての伝承が残っており、調査区の東側には屋号メーマシの「火の神の祠」があり、現在も厚い信仰の対象となっている。『琉球国由来記』に記された北谷間切桑江村にある「ミヤマシ原之殿」との関わりがあるとも考えられる⁽⁸⁹⁾。当遺跡の南東側には旧奈留川（ナルカー）があり、現在でも、米軍が工業用水として利用するほどの水量をもつ水系が上流域に広がっている。この上流には、北谷城の按司であった「大川按司」が再び城主に返り咲くまで隠れ住んだ、との伝承を残す洞穴もあった。遺跡の南方には北谷城が存在する。グスク時代初期と考えられているフェンス下層式土器が出土することからグスク時代開始期から存

在し、14世紀～15世紀に盛行期を迎えたと考えられている⁹¹¹⁰。時期的に共存する北谷城とやや離れた場所に位置する後兼久原遺跡・小堀原遺跡・伊礼原遺跡の関係等は今後の課題となろう。

平成13年のキャンプ桑江北側地区返還による区画整理事業の緊急発掘調査によって、記録保存の対象となった。

<引用・参考文献>

- 註1. 北谷町役場『北谷町の植生 一みどり豊かなまちづくりのためにー』1986年
- 註2. 北谷町役場『北谷町勢要覧』1982年
- 註3. 国土地理院 <http://watchizugsigo.jp/mapsearch.html>
- 註4. 北谷町教育委員会『北谷町の地名－戦前の北谷の姿－』北谷町文化財調査報告書 第24集 2006年
- 註5. 地域創造研究所『コザ市総合開発計画調査報告書』1973年
- 註6. 宜野湾市教育委員会『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市文化財調査報告書第 10集 1989年
- 註7. 松田順一郎『伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地痕跡』『伊礼原遺跡－伊礼原B遺跡ほか発掘調査－』北谷町文化財調査報告書 第26集 2007年
- 註8. 北谷町教育委員会『キャンプ桑江返還に伴う試掘調査－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－』北谷町文化財調査報告書 第23集 2005年
- 註9. 北谷町教育委員会『後兼久原遺跡展』1997年
- 註10. 北谷町教育委員会『北谷城－北谷城第一次調査－』北谷町文化財調査報告書 第1集 1984年



第1図 北谷町の遺跡

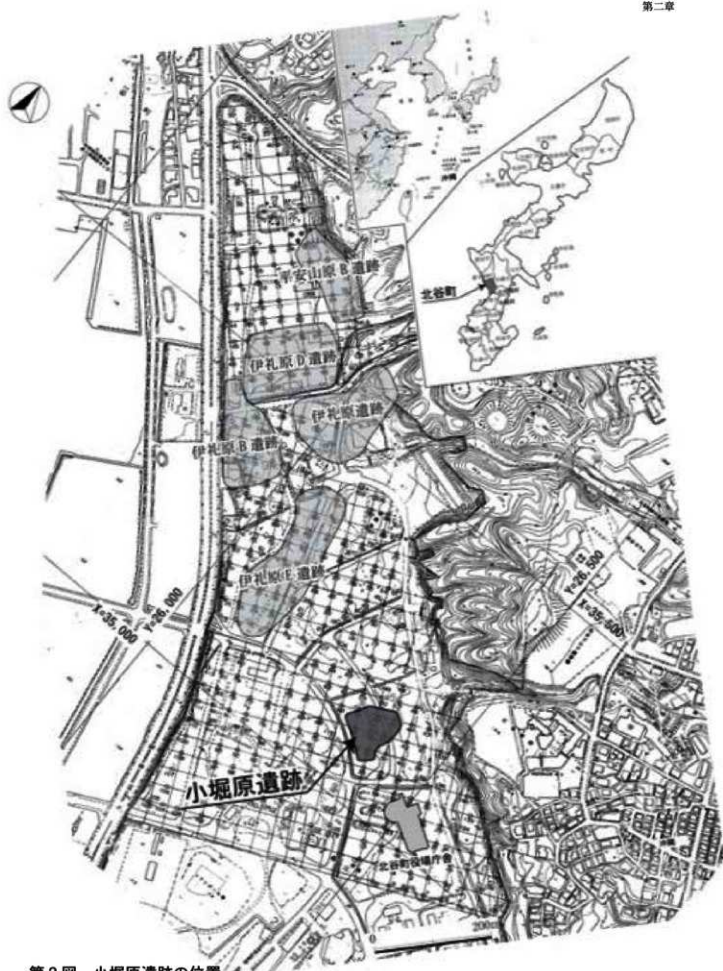
表1 北谷町遺跡一覧

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺サーク原貝塚	前期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	後期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	後期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	後期～グスク	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	グスク	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	前期～グスク	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山遺物散布地	後期	字浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	後期	字浜川千原
9	上・下勢頭区古墓群	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原遺跡	前期～近世	字伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	近世・近代	字伊平伊礼原
12	桑江ノ殿遺物散布地	後期～近世	字桑江小堀原
13	桑江遺物散布地	後期	字桑江後兼久原
14	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
15	前原古島A遺跡	近世	字桑江桑江原
16	前原古島B遺跡	近世	字桑江桑江原・前原
17	伊地差久原古墓	近世	字桑江伊地差久原
18	前原古墓群	近世	字桑江前原
19	桃原洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
20	インディアン・オーク号の座礎地	近世	字北谷地先
21	池グスク	後期	字吉原東宇地原・西宇地原
22	白比川河口遺物散布地	グスク	字北谷西表原
23	北谷城遺跡群	後期～近世	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	後期～近世	字大村城原
25	北谷番所址	後期～近世	字北谷北谷原
26	吉原東角双原遺物散布地	グスク	字吉原東角双原・西角双原
27	山川原古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原遺跡	後期～近世	字大村玉代勢原
29	長老山遺物散布地	後期～グスク	字大村玉代勢原
30	大道原A遺跡	後期	字北谷大道原
31	大道原B遺跡	後期	字北谷大道原
32	新城下原遺跡	早期～近世	字北谷安仁原
33	後兼久原遺跡	グスク～近世	字桑江小字後兼久原・字桑江小字小堀原
34	塩川原遺跡	後期	字北谷塩川原
35	稲千原遺跡	前期	字北前稲千原
36	伊波川原遺跡		字北前横蓋原・伊波川原
37	伊礼伊森原遺跡	後期	字上勢頭伊礼伊森原
38	東表原遺跡		字北谷東表原
39	安仁原遺跡		字北前安仁原
40	千原遺跡	後期	字伊平千原
41	平安山原A遺跡	後期	字伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	後期～近世	字伊平平安山原
43	平安山原C遺跡		字伊平平安山原
44	伊礼原D遺跡	後期～近世	字伊平伊礼原
45	伊礼原E遺跡	後期～近世	字伊平小字伊礼原
46	小堀原遺跡	後期	字桑江小堀原
47	大作原古墓群	前期～近世	字伊平大作原
48	横蓋原遺跡	後期	字北前横蓋原

北谷町文化財調査報告書 第28集『伊礼原D遺跡』(2008)の表1北谷町遺跡一覧を改変
 註：「前期」→「貝塚前期」、「後期」→「貝塚後期」をさす。

＜参考文献＞

- ①中村憲・田場勝也ほか『北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書—』北谷町文化財調査報告書 第14集 北谷町教育委員会 1994年
 ②中村憲・東門研治・島袋春美『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業』北谷町文化財調査報告書 第23集 北谷町教育委員会 2005年3月
 ③中村憲・東門研治・松原哲志・島袋春美ほか『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡『キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業』(平成10～14年度)』北谷町文化財調査報告書 第27集 北谷町教育委員会 2008年3月
 *番号は位置図に付随



第2図 小堀原遺跡の位置

第三章 調査の方法と成果

第一節 調査の方法

範囲確認当初は、米軍基地として機能していたため、掘削できる場所が限られていた。そこで、東側の丘陵から西側の海岸方向へどのように遺跡が立地しているかを把握するために、ほぼ南北に走る道路を挟んで東西にトレンチを設けることとした。

まず、丘陵側は遺跡の有無及び遺跡が存在した場合を想定し、遺跡東端部の南北の規模を把握するために5×55mを一本設け2トレンチとした。そのトレンチ長軸の両端に直行するかたちで、北側に5×15m、南側に5×18mのトレンチを設け、北側を1トレンチ、南側を3トレンチとした。道路の西側も同様に遺跡の規模を把握するために南北に5×100mを1本設け5トレンチとした。更に、5トレンチの北側に1トレンチの延長線上に5×22mを設け4トレンチとし、南側は5トレンチ中央部よりやや南に3トレンチの延長線上に5×13mを設け7トレンチとした。また、5トレンチの東となり5×5mと5×17mのトレンチを設け前者を6トレンチ、後者を8トレンチとした。トレンチはその後、調査中に遺構の検出に伴い、状況を把握するために6と8トレンチ、8と5トレンチをつないで調査を進行した。5トレンチのほぼ中央で貝塚後期の貝溜まりが検出されたため、南側を更に掘り下げる。その際、調査区切りを中央の杭No.13を基準に北側5～南側5m、南側5～10m、南10～20m、南20～28、南28m～と設定した。報告書ではグリッドを「北5～南5」、「南5～10」、「南10～20」、「南20～28」、「南28～」と表記する。

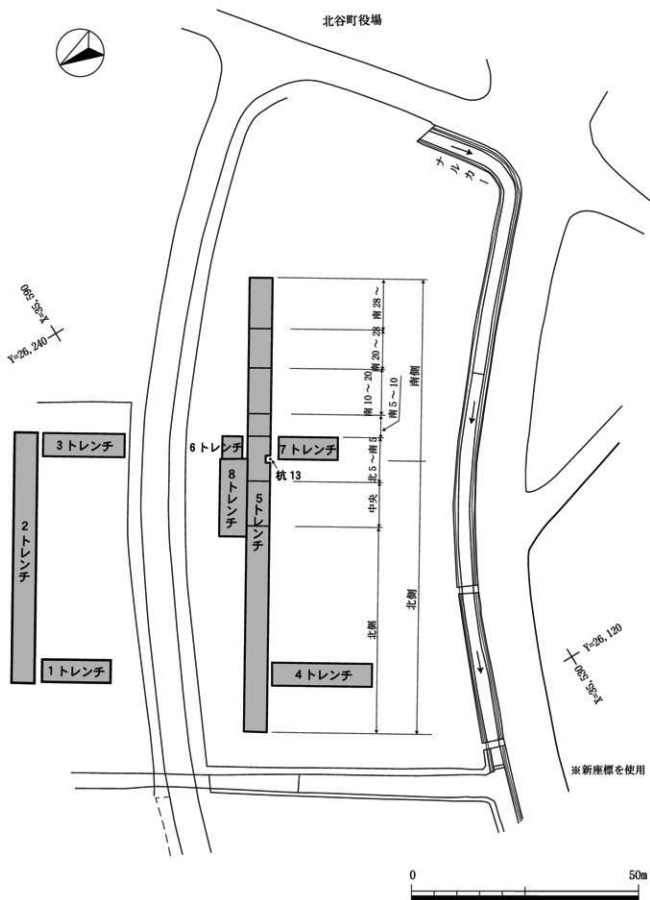
第二節 調査の経過

小堀原遺跡は平成12年2月14日から調査区の設定を行った。調査区の設定は前述の調査の方法のとおりである。その後、調査範囲の周辺に安全柵を設けた。

調査はバックホウにより掘削を行い、包含層確認後、手掘りによる調査を行った。調査区東側は、バックホウで掘削すると客土と岩盤が露出し、東側丘陵が延びていたと推測された。また、米軍によって敷設されたパイプが通っている状況であった。3トレンチの南東角で戦前頃と思われる川跡が確認された。本調査区は、遺物はわずかに散布している状況であるが、遺構が存在しないことから西側に存在すると推測された。そこで、西側をバックホウで掘削している間、セクション図の作成と写真撮影などの作業に従事し、終えることとした。

一方、西側は4トレンチと5トレンチの北側は岩盤が確認された。この状況から、1・2トレンチから曲線を描くように岩盤が覆っている地形を成していることが推測された。そして、5トレンチの北側20m前後付近から南側調査区において2時期の包含層が確認された。

最初に確認された包含層はグスク時代で、5・7トレンチで柱穴の並びが見られ、その様相が東西に広がるのが予想された。そこで、調査可能な5トレンチのほぼ中央隣に5×17mのトレンチを設け、8トレンチとして平行に拡張し、確認調査を行うこととした。その結果、遺構の続きが確認され、更に東に広がる状況であった。しかし、東側は南北に走る米軍の道路が存在することか



第3図 グリッド設定

ら調査はできず、返還後に本調査で確認することとした。

グスク時代の包含層は、5トレンチ南側で川跡が確認され、その手前あたりまで確認できた。従って、前述したよう北東側は石灰岩基盤でそこから南西側に広がることが判明した。調査は、住居址や高床式建物址のプランが明確であったため、平面図等の図面作成や写真撮影、セクション図の作成を行った。その後、現状のまま保存して本調査で全体像を押さえることとした。

次に確認されたのは、貝塚後期でグスク時代の遺構が比較的少ない5トレンチの中央部から南側と6トレンチで掘削を行い確認された。グスク時代の包含層下40～50cmに貝層が存在し、上下で土器が異なっていることが判明した。上層部はアラスジケマンが主体で土器は粘土帯を残す大当原式土器であった。明確な遺構は確認されなかった。遺物の広がりを図化し、写真撮影等の作業を行い、更に掘り下げた。下層はシャコガイなどを主体とし、土器は頸部が屈曲し、研磨手法が施される丸底の浜屋原式土器が出土した。本層も遺構は確認されなかった。特徴的であったのがイノシシの下顎骨の出土がやや多かった。その分布状況を図化し、写真撮影等を行った。また、本層までのセクション図作成も行った。

範囲確認調査は以上のようにグスク時代の遺構を保存した状況と、5トレンチ中央から南側及び6トレンチで貝塚後期を確認した。しかし、貝塚後期の広がりが押さえられないことから、5トレンチでグスク時代の遺構に影響のない部分6カ所ほどで下層調査を実施したところほぼグスク時代と重複している状況であった。その後、セクション図の作成とその他の実測、写真撮影等を行い、埋め戻して作業を終了した。

平成 年度

2月14日	調査区の設定
2月28日	1トレンチ、2トレンチ壁面清掃。写真撮影。
2月29日 ～3月1日	1トレンチ、2トレンチ壁面清掃、床面（石灰岩基盤）清掃。写真撮影。
3月3日	各杭にレベル設置。基点は役場建設時の標高。 A-6 x.35、065、108 y.26、445、592 標高5.02m
3月4日	2トレンチ南側、3トレンチ四面。南北面の写真撮影。
3月6日	2トレンチ東側壁面清掃、3トレンチ北側壁面清掃。1トレンチ割付け。
3月7日	3トレンチ東西壁面清掃、写真撮影。3トレンチ南北壁面の分層。
3月8日	2トレンチ南角の写真撮影（3面）。
3月9日 ～11日	5トレンチ東側壁面清掃、西壁面清掃。6トレンチ四面壁面清掃。
3月17日	4・5・6トレンチ壁面清掃。
3月21日	5トレンチ北側の西壁面清掃、中央、南側 床面柱穴の露出作業。4トレンチは南壁面清掃。

- 3月22日 6トレンチ中央部のみ、幅1.3mほどの上層のラインが斜めに見られる。直角に幅50cm深さ30cmほど掘り下げ、中央部に深いじ字状の溝。その中に直径約30cmほどの柱穴が見られる。7トレンチ四壁面の写真撮影。
- 3月23日 6トレンチ北側区(溝)、中央区、南側区 グスク時代面の露出作業。
～24日
- 3月27日 4トレンチ、5トレンチ中央部、南側部分の床面掘り下げ。1・2トレンチ壁面実測。
～29日
- 3月30日 4トレンチ床面清掃、土器出土。5トレンチ中央部床面、南側床面清掃。1・2トレンチ実測。

平成 年度

- 4月5日 1トレンチ西壁面、2トレンチ東壁面、3トレンチ北・東壁面実測。
～6日
- 4月7日 2トレンチ東壁面実測、3トレンチ東壁、北壁断面実測。
- 4月10日 2トレンチ東壁面実測。
～17日
- 4月18日 4トレンチ南壁面、5トレンチ東壁面、7トレンチ断面実測。
～5月10日
- 5月11日 5トレンチ東壁面、北壁面、7トレンチ北断面実測。
- 5月12日 5トレンチ東壁面、西壁面、7トレンチ北断面実測。
～5月31日
- 6月1日 4トレンチ、5トレンチ、7トレンチ断面実測。(所見の記入)
～13日
- 6月15日 6トレンチ割付、断面清掃。壁面実測。(南壁、西壁、東壁、北壁)
～22日
- 6月26日 5トレンチ平面グスク時代ピット群、割付及び床面清掃、平面実測。壁面清掃、割付。
～7月14日
- 7月17日 3トレンチ断面清掃。試掘穴にたまった水のくみ上げ。
- 7月18日 3トレンチ西側の床面掘り下げ、東側床面清掃。
～19日 5トレンチ グスク時代ピット群平面実測。試掘穴にたまった水のくみ取り。
- 7月27日 3トレンチ掘り下げ、水抜き作業。西壁側に1mの試掘穴をあける。東側暗褐色砂層の範囲確認
- 8月9日 3・5・6トレンチ内の水抜き。
- 8月10日 3トレンチ水抜き及び壁崩壊部分土上げ。
5トレンチ石列付近の掘り下げ。露出した暗褐色土層(炭多量に含む)の範囲確認。
- 8月11日 5トレンチの中央付近(ピット群)床面清掃。石列の平面及び断面見通し実測、写真

撮影。石列付近の遺物取り上げ。

- 8月14日 5トレンチの石列実測。5トレンチのグスク時代ビット確認。
3トレンチ中央付近の試掘穴をあけて層序を確認。
- 8月15日 5トレンチ北側付近の床面清掃。石列の取り上げ及び溝（砂利層、黄褐色砂層）内部の掘り下げ。
- 8月16日 5トレンチ北側の床面清掃。幅1～1.5m程の溝内部（近世の溝）の掘り下げ。石列の写真撮影、平面実測及び断面見通し（立面図）実測。
- 8月17日 5トレンチ北側付近の近世溝内の掘り下げ。西側にもかすかに近世溝が検出、並行して掘り下げ。石列付近の平面及び断面実測、石を取り上げて溝の下層の範囲確認。
- 8月18日 北側溝 5トレンチの検出、割付。サブトレ内において溝の範囲確認。
- 8月21日 北側溝 5トレンチの実測、写真撮影。溝の西側掘り下げ、壁面清掃。
- 8月23日～25日 5トレンチ南側溝、北側、西側掘り下げ。7トレンチ床面清掃、割付、溝の検出、試掘溝（東側）清掃。
- 8月30日～31日 5トレンチ壁面清掃、北側掘り下げ、水抜き作業。7トレンチの割付。
- 9月1日～6日 5トレンチ南側 グスク時代石列下溝清掃、実測、撮影。北側溝付近の掘り下げ及び中央北側付近の床面清掃。7トレンチ床面清掃、実測。5・7トレンチの水抜き。
- 9月7日 5トレンチ南側溝の平面実測（石列下部、グスク時代の溝）、北側溝付近の掘り下げ。7トレンチ グスク時代溝・ビット群の平面実測。
- 9月18日～19日 5・6・7トレンチの水抜き作業。5トレンチ壁面付近の清掃。5トレンチ北側の掘り下げ作業。5トレンチ中央付近、7トレンチ床面、壁面清掃。
- 9月20日 7トレンチ床面実測。5トレンチ北側溝付近の掘り下げ。（黒色砂質土層）南側清掃と割付。
- 9月21日 5トレンチ北側溝付近の掘り下げ。南側 グスク時代溝・ビットの平面実測。6トレンチ床面、壁面清掃（北半分のみ）。7トレンチ平面実測及び西側床面清掃。
- 9月22日～25日 5トレンチ南側溝断面実測。南側、平面、壁面清掃。北側（溝）、層序観察畦の掘り下げ。6トレンチ南側床面、壁面清掃。7トレンチビット平面実測及び西側溝付近掘り下げ。
- 9月26日 5トレンチ南側壁面、床面清掃。杭より南側28m地点から掘り下げ。試掘穴内の清掃。5トレンチ南側17m～24m地点付近、（グスク時代と同時期か下層）暗褐色炭混じり層、砂利層の平面実測。5トレンチ北側溝付近の割付。6トレンチ平面清掃。7トレンチ平面実測。
- 9月27日 5トレンチ北側のグスク時代ビット平面実測。
- 9月28日 5トレンチ南側28m地点から掘り下げ。川の最下部の掘り下げを行い、暗褐色砂層を検出する。南側17～24m地点の掘り下げ、砂利層の範囲確認。5トレンチ北側のビット群平面実測及びその付近の掘り下げ。遺物検出状況写真撮影。（北側－滑石製品・フタ、南側－石器）

- 9月29日 5トレンチ北側溝付近のグスク時代ビット平面実測。(南側17~24m) 地点の掘り下げ、南側25m地点に1m×0.5mの試掘穴を開ける。6トレンチの割付、グスク時代ビット平面実測を行う。
- 10月2日 5トレンチ北側 グスク時代ビットの平面実測、グスク時代床面まで掘り下げ。(南側17~24m) 溝?砂利層の掘り下げを行い、下層を検出する。(南側25~28m) 付近の掘り下げ、川の最下部を掘り下げ、下層を検出。6トレンチ壁面実測を行いグスク時代ビットの半裁及び断面実測。
- 10月3日 5トレンチ北側のグスク時代ビット平面実測及びビット面まで掘り下げ。(南側17~24m) 付近の溝?の床面、壁面清掃。南側25m~の掘り下げ、黄褐色粘質土層の上層まで掘り下げる。6トレンチのグスク時代ビットの断面実測、床面清掃。
- 10月4日 5トレンチ南側の試掘穴を広げ掘り下げ作業を行う。
- 10月5日 5トレンチ南側25m~の掘り下げ(黄褐色と下層との漸移層まで)。西壁側の掘り下げ。
- 10月6日 5トレンチ北側のグスク時代ビット平面実測及び床面清掃。(南側17~24m) の溝?の床面、壁面清掃、写真撮影。南側(25m~) 東壁から3mラインまで掘り下げ。
- 10月10日 水抜き作業。5トレンチ北側床面清掃及びグスク時代ビット平面実測。南側25m地点~は黄褐色と下層との漸移層まで掘り下げ。5トレンチ20m、明緑灰色細粒砂質土層を掘り下げ。
- 10月11日 5トレンチ北側の床面清掃及びグスク時代ビット平面実測。南側(東壁から3m付近まで)の掘り下げ。(南側10~20m) は東壁側を漸移層まで試掘。10m~25m付近までは黄褐色粘質土層を掘り下げ。
- 10月12日 5トレンチ北側掘り下げ、グスク時代ビット群平面実測。中央付近のビット(プラン1)の掘り下げ。南側(10~25m)の漸移層まで掘り下げ。~16日
- 10月17日 5トレンチ北側掘り下げ、平面実測。中央付近のビット半裁掘り下げ。(南側10m~)に試掘(1×0.5m程度)を6本開け並行して漸移層を掘り下げ。15m付近(東壁側)に土器出土、範囲確認及び写真撮影。
- 10月18日 5トレンチ中央付近のビット半裁、掘り下げ。(南側10m~) 漸移層を掘り下げ黒褐色砂層まで検出。(28m~) 床面清掃。試掘穴を設け掘り下げる(9~10m)。6トレンチ壁側清掃。~19日
- 10月20日 5トレンチ中央付近ビットを半裁、掘り下げ、断面実測。(10~20m) は黒褐色を掘り下げ、部分的には下層を検出。一括土器出土。20m~黒褐色砂層掘り下げ。~23日
- 10月24日 5トレンチ中央付近のグスク時代ビット半裁、掘り下げ、断面実測。(南側10m~)の黒褐色砂層の掘り下げ。(南側25~28m) で黒褐色砂層より壺の口縁部検出。南側25m~東壁付近の土器を取り上げ。南側全体の写真撮影。
- 10月25日 5トレンチ中央付近及び、南側の床面、壁面清掃。7トレンチの床面清掃。
- 10月30日 5トレンチ中央付近のグスク時代ビット半裁し、掘り下げ、断面実測。6トレンチ南側、黒褐色砂層掘り下げ。
- 10月31日 5トレンチ(南側10m~)の土器の取り上げ及び掘り下げ。14~16m黒褐色の遺構
~11月1日 より土器一括取上げ。

- 11月2日～7日 5トレンチ中央付近のグスク時代ピット半裁、断面、床面清掃、断面実測。北側の断面観察用畦掘り下げ、(南側10m～)の掘り下げ、写真撮影。10～20mの土器取り上げ、中央付近の黒褐色砂層掘り下げ。
- 11月8日 5トレンチ中央付近から北側にかけて床面、壁面清掃。(南側10m～)の掘り下げ。10～20mの写真撮影。14～16mの黒褐色砂層遺構面よりイノシシ下顎骨及び土器集中。
- 11月13日 5トレンチ(南側10m～)壁面崩壊部分の土上げ。(南側10～20m)の土器、炭取り上げ。(28m～)の土器取上げ。北側の掘り下げ。
- 11月15日～17日 5・6トレンチの水抜き及び壁面崩壊部分の土上げ。5トレンチ北側の掘り下げ、清掃(グスク時代ピット面の検出)。(南側10～20m)の土器検出及び獣骨平面実測、取り上げ。(南側20m～)の床面、壁面清掃。
- 11月22日～24日 5トレンチの水抜き作業。南側の床面、壁面清掃、掘り下げ。北側はグスク時代ピットの半裁掘り下げ、断面実測。5トレンチ(南側10～20m)の写真撮影、土器、獣骨の取り上げ。
- 11月27日 5トレンチ北側のグスク時代ピット半裁、掘り下げ、断面実測。(南側10～20m)(20～28m)(28m～)黒褐色の掘り下げ及び貝の検出。7トレンチ床面清掃。
- 11月28日 5トレンチ南側の掘り下げ。(南側10～20m)北側の黒褐色砂層の掘り下げ。(20～28m)(28m～)砂り層を掘り下げ。7トレンチの床面清掃、グスク時代ピット半裁。
- 11月29日～12月1日 5トレンチ(南側10～20m)北の黒褐色砂層の掘り下げ。5トレンチ中央付近への壁面、床面清掃。6トレンチ壁面、床面清掃。7トレンチ床面、壁面清掃、グスク時代ピットの半裁、断面実測。
- 12月2日 5・6・7トレンチのグスク時代ピット平面写真撮影。
- 12月4日～5日 5トレンチのグスク時代ピット掘り下げ、床面清掃。(南側10～20m)黒褐色砂層の掘り下げ。7トレンチグスク時代ピットの半裁掘り下げ、断面実測。7トレンチの南壁側の人骨の掘り下げ。
- 12月6日 5・6トレンチ床面、壁面清掃。(南側10～20m)北の黒褐色砂層下部を掘り下げ。7トレンチ南壁側の幼児人骨の掘り下げ、平面実測。
- 12月7日 5トレンチ(南側10～20m)の黒褐色砂層下部の掘り下げ、試掘(9～9.75m)の掘り下げ。5トレンチのグスク時代ピットの掘り下げ、平面実測。6トレンチのピット写真撮影、掘り下げ。7トレンチ南壁側の幼児人骨の検出及び平面、断面実測。
- 12月8日 5トレンチのグスク時代ピット残り掘り下げ。(南側10～20m)の茶褐色及び黒褐色砂層下部の掘り下げ、試掘穴(7.5～9.75m)の漸移層を掘り下げ。6トレンチの漸移層の掘り下げ。7トレンチグスク時代ピット断面実測。人骨鑑定、土肥先生。
- 12月11日 5トレンチ中央付近(東西)に(1.5×5m)を開け掘り下げ。南側試掘穴(5～9.75m)の砂層を掘り下げ。南側西側試掘穴を黒褐色砂層まで掘り下げ。(南側10～20m)北側。6トレンチ漸移層の掘り下げ。7トレンチピット断面実測。人骨の取り上げ。
- 12月12日 5トレンチ中央付近の試掘穴(北3.5～5m)東西を、茶褐色砂層(軽石混じり)まで掘り下げ。さらに東壁側に北側(5～7m)へ試掘。5トレンチ(南側5～10m)漸移層まで掘り下げ。(南側10～20m)北、写真撮影。窪みと14～15m付近を掘り下げ。7トレンチのピットの断面実測及び掘り下げ。

- 12月13日 5トレンチ(北5~南5m)(南側5~10m)の黄褐色粘質土層、漸移層の掘り下げ。7トレンチピットの図面及び写真撮影。
- 12月15日 5トレンチ(北5~南5m)(南側5~10m) 漸移層の掘り下げ。6トレンチ黒褐色砂層の掘り下げ。7トレンチ、ピットの完掘。
~20日
- 12月21日 平板実測及び縮尺s=1/500(小堀原遺跡全域のトレンチ)
~22日
- 12月25日 7トレンチのピット掘り下げ、壁面・床面清掃。平板実測。(トレンチ全域)
- 12月26日 7トレンチのピット完掘図面実測、写真撮影、滑石の取り上げ。1・3トレンチの埋め戻し作業(重機)。3トレンチについては下層まで重機で埋り下げ。
- 12月27日 3トレンチ泥炭層のふるいかけ。7トレンチのグスク時代ピット掘り下げ及び実測、
~28日 完掘後の写真撮影。トレンチの埋め戻し(重機)。
- 12月29日 4トレンチ掘り下げ(重機)、埋め戻し。北側は包含層確認できず、南側の西半分褐色砂質土層よりピットらしきもの確認。5トレンチ北、南側掘り下げ。5・6トレンチ拡張する。(グスク時代ピットの中柱折り返しの確認)
- 1月5日 5・6トレンチ拡張部分の壁面、床面清掃、写真撮影。ピットの平面実測。4トレンチ床面清掃、ピットの有無確認。
- 1月9日 5トレンチ(北5~南5m)(南側5~10m)を黒褐色砂層まで掘り下げ。6トレンチ黒褐色砂層を掘り下げ。5・6トレンチ拡張部分のグスク時代ピット半裁、完掘、
~11日 実測。写真撮影。
- 1月12日 5トレンチ(北5~南5)黒褐色砂層(茶褐色砂層)の掘り下げ及び貝溜まりの検出。
~17日 (南側5~10m)の黒褐色砂層の検出及び一括土器の検出。6トレンチ貝層の掘り下げ及び茶褐色の範囲確認。貝溜まりの検出。貝溜まり一括土器の写真撮影、取り上げ。
- 1月18日 5トレンチ(北5~南5m)(南側5~10m)の貝検出作業。5トレンチ北西の貝検出、
~19日 南東の黒褐色砂層の掘り下げ、北東・南西の土器検出、写真撮影。6トレンチの貝の取り上げ、南西の黒褐色砂層の掘り下げ。
- 1月22日 1・2・3トレンチ埋め戻し。5トレンチ水抜き作業。5トレンチ(北5~南5m)の
貝検出作業。5トレンチ床面清掃、貝・土器検出。5・6トレンチ掘り下げ。
- 1月23日 5トレンチ(北5~南5m)床面清掃、南東隅の黒褐色(茶褐色)掘り下げ。(南側
5~10m)南西・北西側の貝検出作業。南東側の黒褐色ピット状遺構4分割での掘り下げ、写真撮影。6トレンチの貝検出。北西側の貝層(土器底部)写真撮影。1・2・3トレンチ埋め戻し後、種子ふきつけ作業。
- 1月24日 水抜き・壁面仕上げ。5トレンチ(北5~南5m)貝層②(南西側)掘り下げ、北側
~30日 床面清掃。(南側5~10m)の黒褐色砂層(茶混)掘り下げ、ピット状遺構の土器取上・周辺の貝検出。南東側ピット状遺構?の平面・断面実測。6トレンチ北西貝層の掘り下げ、貝・土器の検出。南中側の貝写真撮影。
- 1月31日 5トレンチ(北5~南5m)貝層③掘り下げ。(南側5~10m)の貝・貝層(北西・
中・北東)掘り下げ。6トレンチ南西貝層の掘り下げ、貝・土器検出。
- 2月1日 5トレンチ(北5~南5m)貝層③掘り下げ。(南側5~10m)北西貝層①掘り下げ、
~2日 北東の貝検出、ピット状遺構の畦掘り下げ。

- 2月5日 5トレンチ（北5～南5m）貝層②断面実測、貝層③掘り下げ。北側試掘の清掃、掘り下げ、南東側の土器取上げ、貝検出。（南側5～10m）貝層①断面実測、ピット状遺構内畦の掘り下げ。6トレンチ黒褐色（茶混）掘り下げ、貝・土器検出。北西側貝層の掘り下げ、北東側、南東側、貝検出。
- 2月7日 5トレンチ（北5～南5m）南東側の貝取上げ、黄褐色砂層掘り下げ。（南側5～10m）ピット状周辺の土器（一括）取上げ、10mベルトの掘り下げ、ピット状遺構の実測・西側掘り下げ。6トレンチ北西・北東貝層の掘り下げ及び貝検出。
- 2月9日 5トレンチ（北5～南5m）床面・壁面清掃（グスク時代ピット）。ピット平面（住居址）写真撮影。7トレンチ床面・壁面清掃（グスク時代ピット）。
- 2月15日 5トレンチ（北5～南5m）ピット掘り下げ（貝層まで）。（南側5～10m）北東から南西にかけ試掘。黄褐色砂層（パミス状）掘り下げ。（10～20m）床面、壁面清掃後貝検出。6トレンチ北東・北西・南東貝層掘り下げ。
- 2月19日 5トレンチ（北5～南5m）床面清掃、貝層③取り上げ、周辺の貝検出。（南側5～10m）掘り下げ、ピット状遺構掘り下げ。（南側10～20m）黄褐色砂層の掘り下げ。6トレンチの北東・北西貝層の取上・混土貝層取上げ。
- 2月20日 5トレンチ（北5～南5m）の南東 貝取上げ。東側（貝層③隣）黒褐色・獣骨集中部分の掘り下げ。（南側5～10m）の貝層①取上げ、黄褐色砂層、貝検出。6トレンチ北東貝層取上げ、黒褐色砂層下部の掘り下げ。
- 2月21日 5トレンチ（北5～南5m）北東 黒褐色砂層 貝検出。東 獣骨集中部分の実測、畦掘り下げ。貝層②土器、写真撮影。北側（貝層③隣）茶褐色砂層の掘り下げ。（南側5～10m）平面実測（ピット状遺構等）白砂（黄混）。貝層①掘り下げ。（南側10～20m）掘り下げ。6トレンチ北東貝層畦掘り下げ、南西側 黒褐色（茶混）掘り下げ。
- 2月26日 5トレンチ（北5～南5m）北 茶褐色砂層掘り下げ、貝層③掘り下げ。（南側5～10m）貝層①ベルト掘り下げ、貝層③貝取上げ、ピット状遺構畦部分掘り下げ。（南側10～20m）黄褐色砂層掘り下げ。6トレンチ北東のベルト掘り下げ、黒褐色（茶混）掘り下げ土器取上げ。
- 3月2日 5トレンチ（北5～南5m）貝層②ベルト掘り下げ、北側 茶褐色砂層掘り下げ。（5～10m）床面清掃。（南側10～20m）北、床面清掃及び南側貝検出。東中央付近ピット状遺構半裁、写真撮影。北側黒褐色ピット状遺構、ベルト掘り下げ。6トレンチ黒褐色（茶混）掘り下げ、貝取上げ。
- 3月5日 5トレンチ（北～南5m）貝層②ベルト掘り下げ、東側貝層③隣のジュゴン肋骨製品？検出。北側茶褐色砂層掘り下げ。（10～20m）平面実測、ピット状遺構の半裁。南東側緑灰色砂層の貝検出。ピット状（黒褐色）の掘り下げ。（南側20～28m）床面清掃及びピット？（カニ穴）半裁。北側から掘り下げ（白砂層まで）。6トレンチ東側 黒褐色貝クズ混 貝遺物取上げ、南側 黒褐色（茶混）混貝土層、北東貝層暗茶褐色（貝クズ混）、北西側遺物取上げ、東側茶褐色砂層まで検出。
- 3月7日 5トレンチ（北5～南5m）貝層①・②下部の検出。貝層②下部 黒褐色（貝クズ混）貝取上げ、北側 茶褐色砂層掘り下げ。（南側10～20m）ピット状遺構②掘り下げ。南側貝検出（貝層①・②・③）。（南側20～28m）北側 貝検出、南側 緑灰色砂層の掘り下げ。6トレンチ西側貝取上げ。
- 3月9日 4トレンチ埋め戻し。5トレンチ東側（6×17m）拡張（重機）。北側東壁断面実測。（北5～南5m）北 茶褐色砂層掘り下げ。（南側10～20m）ピット状遺構2（黒褐

- 色) 完掘。南側貝層②半裁貝取上げ。(南側20~28m) 緑灰色砂層掘り下げ。6トレンチ北東の土器集中取り上げ、西側掘り下げ。
- 3月12日 ~13日 5トレンチ(北5~南5m) 北側 茶褐色砂層、土器・貝取上げ。(南側10~20m) 貝層②掘り下げ、貝層③半裁。(南側20~28m) 灰色砂層掘り下げ、ピット状遺構完掘。(南側10~28m) 割り付け作業。6トレンチ西側混貝土層の土器取り上げ、北東貝層掘り下げ。8トレンチ(5トレンチ東側拡張部) 壁面、床面清掃、暗褐色砂質土層(カワナ混)掘り下げ、ピット上面まで検出。
- 3月14日 ~15日 5トレンチ(北5~南5m) 北側貝層③付近貝掘り下げ、石器検出。(南側10~20m) 貝層③掘り下げ、緑灰色砂層範囲確認。(南側20~28m) 緑灰色砂層掘り下げ、北側、南側試掘、泥炭層まで掘り下げ、シイの実・木片出土。6トレンチ東、西 貝・土器取り上げ。白砂まで掘り下げ。8トレンチ壁面清掃、ピット面まで掘り下げ。
- 3月16日 5トレンチ(北5~南5m) 貝層③下部隣り掘り下げ、石器検出。(南側10~20m) 北側に試掘、白砂層掘り下げ、晩期系土器。貝層③掘り下げ。(南側20~28m) 試掘1、2掘り下げ泥炭層まで確認、断面実測。6トレンチ土器、貝取上げ、白砂層(黄混)上面まで。
- 3月19日 5トレンチ(北5~南5m) 北側茶褐色砂層の貝・土器取り上げ。(南側10~20m) 北側試掘掘り下げ、泥炭層まで確認、写真撮影後、埋め戻し。(南側20~28m) 試掘1、2掘り下げ、砂利層まで確認。6トレンチ茶褐色貝クズ混掘り下げ。8トレンチピット直上まで掘り下げ。
- 3月20日 5・6トレンチの割り付け。6トレンチ断面(3面)実測。8トレンチ東壁断面、ピット状遺構平面実測実測。(南側10~20m) 南 緑灰色砂層の土器一括検出、(南側10~20m) 中央付近貝取上げ。
- 3月21日 ~22日 5トレンチ(北5~南5m) (南側5~10m) 東壁実測。(北5~南5m) 北 茶褐色砂層掘り下げ、南貝層②下部貝取上げ。(5~10m) 試掘、獣骨出土。(南側10~20m) 試掘(中心部分~15m)、南 緑灰色砂層の土器清掃取り上げ。6トレンチ断面実測、暗茶褐色貝クズ混の掘り下げ(白砂まで)。8トレンチグスク時代ピット面まで掘り下げ。
- 3月23日 5トレンチ(北5~南5m) 東貝層③隣り灰褐色砂層、獣骨集中部隣り 貝取上げ。(南側5~10m) 北西貝層①茶褐色(貝クズ混)貝取上げ。(南側10~20m) 南 緑灰色、緑灰色白砂混掘り下げ。試掘2掘り下げ埋め戻し。6トレンチ土器・貝取上げ。北西に試掘を開け、白砂層掘り下げ、土器底部検出。周辺を掘り下げ確認、南側獣骨検出。8トレンチ北側 暗褐色泥炭層まで検出、撮影。
- 3月25日 5トレンチ(北5~南5m) 南西イノシシ下顎骨実測及び中心付近掘り下げ。6トレンチ白砂層を掘り下げ、土器1・2が広がるかを確認。
- 3月26日 5トレンチ(北5~南5m) 床面清掃、北側掘り下げ、土器・イノシシ取り上げ。(南側5~10m) 貝層①下部の貝取上げ。6トレンチ黄褐色白砂混掘り下げ、南側イノシシ3~4個体分、貝検出、東壁断面実測。8トレンチ北側を中心に掘り下げ。
- 3月27日 5トレンチ(北5~南5m) 南貝層②下部土器・貝・石皿取上げ、白砂まで掘り下げ。北貝層②掘り下げ、炭の範囲確認。北側掘り下げ、平面実測(スミの範囲とピット状)。東側ピットの半裁。(南側5~10m) 貝層①下部 灰褐色砂層(貝クズ混)掘り下げ。6トレンチ床面清掃、北壁断面実測。8トレンチ北側 暗褐色(スミ混)を掘り下げ。

- 3月28日 5トレンチ(北5～南5m)北 炭の範囲確認。(北5～南5m)中、灰褐色(貝クズ混)貝検出。東側 灰褐色(貝クズ混)掘り下げ遺構。北側 黄褐色白砂掘り下げ。(南側5～10m)貝層の下部の掘り下げ。6トレンチ、イノシシ・土器実測。8トレンチピット面まで掘り下げ。
- 3月29日～30日 5トレンチ(北5～南5m)北 白砂(黄褐色混)の掘り下げ。東 貝層を確認。(南側5～10m)北 貝層①下部の灰褐色(貝クズ混)貝取り上げ。6トレンチ北土器南側 貝層取り上げ、イノシシ下部から獣骨と土器底部検出。8トレンチピット面までの掘り下げ(北側を中心に)。
- 3月31日 5トレンチ(北5～南5m)写真撮影、(南側5～10m)貝層②下部土器取り上げ、写真撮影。6トレンチ獣骨取り上げ及び白砂掘り下げ。8トレンチピット実測及び写真撮影。
- 4月1日 5トレンチ(北5～南5m)灰褐色(貝クズ)・灰白色砂層遺物取り上げ、北西側(北5～)試掘。6トレンチ北東側試掘、イノシシ取り上げ。8トレンチプランの検出及び遺物取り上げ、写真撮影。
- 4月2日 8トレンチの断面実測(東壁、北壁)
- 4月3日～4日 5トレンチ(北5～南5m)床面清掃、灰褐色(貝クズ)、灰白色砂層掘り下げ、貝取り上げ、北東貝取り上げ、獣骨検出。北側白砂(スミ混)掘り下げ
- 4月5日～6日 5トレンチ(北5～南5m)北東 イノシシ写真撮影。西 黒褐色掘り下げ、東中黒褐色掘り下げ。北東 黒褐色掘り下げ。(北5～南5m)北東に試掘(1×1m)を設け、黄褐色砂利層まで確認後写真撮影、埋め戻し。5トレンチ写真撮影。
- 4月9日～10日 5トレンチ(北5～南5m)南側 白砂(黄褐色混)掘り下げ(白砂層まで)。東中の灰白色砂層の遺物取り上げ、掘り下げ。北東 灰褐色(貝クズ混)掘り下げ。北白砂掘り下げ。5トレンチ北側東壁断面実測。
- 4月11日～12日 5トレンチ(北5～南5m)北側 白砂層掘り下げ、土器検出。東中 灰白色砂層の掘り下げ、獣骨集中部分の範囲確認、土器検出、遺物取り上げ。5トレンチ北東 灰褐色(貝クズ混)の遺物取り上げ、北ピット状(樹痕)の掘り下げ。西中に獣骨集中部分の半裁掘り下げ。(南側5～10m)北西の灰白色砂層掘り下げ、獣骨検出。7トレンチの水抜き、壁面清掃、断面実測。
- 4月13日 5トレンチ(北5～南5m)北と南側の土器実測。西中獣骨検出及び平面実測。東側灰白色砂層掘り下げ。
- 4月14日 5・7トレンチ埋め戻し。5トレンチ(南側28m～)土器取り上げ。重機で掘り下げ(南側20～28m)南 10m程度。北 泥炭を確認。(10～20m)北半分 泥炭層(厚い)を確認、1つ上層(灰色層)より獣骨検出。(南側5～10m)泥炭層確認、灰色砂層より土器検出。
- 4月16日 5トレンチ北東 灰褐色(貝クズ)掘り下げ。東中 灰白色砂層掘り下げ、西中 獣骨取り上げ。埋め戻し作業。6トレンチ砂利層まで重機で掘り下げ。
- 4月18日～19日 5トレンチ(北5～南5m)北東 貝層掘り下げ。東中 灰白砂層掘り下げ。西中 灰褐色(貝クズ)掘り下げ、土器一括検出。南西 土器一括取り上げ、下の獣骨(肩甲骨)検出。重機による埋め戻し作業。
- 4月20日 5トレンチ(北5～南5m)北東 貝層②掘り下げ。西中 土器一括取上。東中・中 灰褐色(貝クズ)掘り下げ、黄褐色砂層遺物取り上げ。南西 獣骨写真撮影、取り上

B. 3 トレンチ

トレンチ西壁で下層調査による試掘で、泥炭層の堆積が確認された。そこから検出された木片で、放射性炭素年代測定を行った結果、補正年代 $1,890 \pm 30$ （第四章第四節）であった。本トレンチの南側に貝塚後期の堆積があることが確認された。

I 層：客土

米軍基地建設の際に整地され、上層部は橙褐色土、下層部は橙褐色混礫土で構成されている。南東角で川跡がみられる。

II 層 a：旧表土（戦前の耕作土）

米軍基地建設以前の旧耕作土で、トレンチ全面に見られる。北東側より緩やかに傾斜し、南西側は平坦になる。本層は西側調査区へと続く。

II 層 b：灰色土、灰褐色土粘質土層・黄褐色粘質土層（カワニナを含む）

3 トレンチの南西側にほぼ水平に堆積し、東側は薄く、西側は厚い。本層も西側調査区でも確認できる。

III 層 b：漸移・黄褐色粘質土層

東側から西へ緩傾斜している。

IV 層 b：黒（暗）褐色砂層・茶（黄）褐色砂層（貝塚時代後期の文化層）

東壁及び北壁に薄く堆積する。樹根がみられる。

V 層：緑灰色砂層・泥炭層（試掘）

東側から西へ緩傾斜している。層厚約40 cm。下層調査では本層の下部で泥炭層が確認されている。

C. 4 トレンチ

I 層：客土

米軍基地建設の際に整地され、上層部は橙褐色土、下層部は橙褐色混礫土で構成されている。II 層の一部を掘り込み米軍の廃材が見られる。

II 層：旧表土（戦前の耕作土）

米軍基地建設以前の旧耕作土で、薄く堆積している。

III 層 a：暗褐色細粒砂質土層・灰褐色粘質土層・暗灰褐色土層・暗灰褐色土層

（グスク時代の包含層）

米軍等の攪乱を受け西側に部分的に見られる。カムイヤキ・白磁・滑石・羽口などの遺物が出土する。

IV 層 a：黒褐色土

東側よりわずかに堆積が見られ、西側に広がるようである。くびれ平底土器が出土する。

IV 層 b：黒（暗）褐色砂層・茶（黄）褐色砂層（貝塚時代後期の文化層）

北側に僅かに堆積する。

IV 層 c：白色砂層・灰白色砂層（貝塚時代後期の文化層）

トレンチ中央から西側に堆積する。

VI 層 b：岩盤

トレンチ北西に岩盤が露頭する。

D. 5 トレンチ

I層：客土

米軍基地建設の際に整地され、上層部は橙褐色土、下層部は橙褐色混礫土で構成されている。北側は約1mで、南方はほぼ30cmの厚さである。トレンチ南側はナルカー（奈留川）の河川跡が確認できる。

II層 a：旧表土（戦前の耕作土）

米軍基地建設以前の旧耕作土である。トレンチ北側と、北側から20m前後辺りから南側に堆積する。約40cmの厚さである。

II層 b：灰褐色粘質土層・黄褐色粘質土層（カワニナを含む）

カワニナを含む。トレンチ北端と、北側から20m前後辺りから南側に堆積する。

III層 a：暗褐色細粒砂質土層・灰褐色粘質土層・暗灰褐色土層・暗灰褐色土層・砂利層（石列）・黄褐色砂利層（溝）・暗オリーブ灰色粘質土層・ピット内（グスク時代の包含層）

高床式建物址や住居址、溝及び溝状遺構が検出される。カムイヤキ・白磁・滑石・羽口などの遺物が出土する。北側が高く南側が低い地形を成している。層厚約20～30cm。

III層 b：黄褐色粘質土層・漸移層

III層の遺構が掘り込まれている。東側から西へ緩傾斜し、厚く堆積する。

IV層 b：黒（暗）褐色砂層・茶（黄）褐色砂層（貝塚時代後期の文化層）

アラスジケマンを主体とし、その貝溜まりが北5～南5、南5～10、南10～28の範囲で見られる。本層は北側の8トレンチ及び北西側へ広がる様相を呈している。本調査で詳細を把握したい。

IV層 c：白色砂層・灰白色砂層（貝塚時代後期の文化層）

シャコガイを主体とし、イノシシの下顎骨が多く出土する。IV層 b 同様の範囲で遺物が確認できる。南10～28の南西角で土器一括資料が出土。本層は8トレンチ及び北西側へ広がる様相を呈している。

IV層 d：砂利層・赤褐色砂層・灰白色粘質土層・攪乱

トレンチ内に下層調査を行うために6カ所試掘穴（北側よりA～Fとした）を設けた。下層調査穴D・E・Fの下部は砂利と砂層の互層が見られることから、この間に川跡など水の影響を受けた凹地が予想される。この堆積から土器及び獣骨、木片が検出された。木片で、放射性炭素年代測定を行った結果、補正年代1,960±30であった。最下部辺りより水が湧く。

V層：緑灰色砂層

南20～28に設けた下層調査の試掘穴で確認された。

VI層 b：白砂層：石灰岩

トレンチ南端に設けた下層調査の試掘穴で確認された。

E. 6 トレンチ

I層：客土

米軍基地建設の際に整地され、上層部は橙褐色土、下層部は橙褐色混礫土で構成されている。

II層 a：旧表土（戦前の耕作土）

米軍基地建設以前の旧耕作土で、トレンチ全面に見られる。

II層b：灰褐色粘質土・黄褐色粘質土層（カワニナを含む）

カワニナを含む層で、全面に広がる。

III層a：暗褐色細粒砂質土層・灰褐色粘質土層・暗灰褐色土層・暗灰褐色土層・砂利層（石列）・黄褐色砂利層（溝）・暗オリーブ灰色粘質土層・ピット内（グスク時代の包含層）

高床式建物址や住居址、溝などの遺構とカムイヤキ・白磁・滑石・羽口などの遺物が出土する。薄く堆積する。

III層b：黄褐色粘質土層・漸移層

グスク時代の遺構が掘り込まれている。全面に厚く堆積する。

IV層b：黒褐色砂層（貝塚時代後期の文化層）

全面的に堆積し、貝溜まりが見られる。5トレンチから6トレンチが、ほぼ本期の中心部に近いと思われる。北がやや高く、南が低い。本層は北側の8トレンチ及び東へも広がる様相を呈している。約40cmの厚さである。

IV層c：白砂層（貝塚時代後期の文化層）

IV層b同様である。土器や貝、獣骨が散在する。北がやや高く、南が低い。約20～30cmの厚さである。本層も北側の8トレンチ及び東へ広がる様相を呈している。

IV層d：砂利層・赤褐色砂層・灰白色粘質土層

トレンチ内に下層調査のための試掘穴を設け確認を行った。土器が出土した。また、本層の下部に腐植土の堆積があり、そこから出土した木片で、放射性炭素年代測定を行った結果、補正年代1,840±30であった。腐植土が堆積する層より水が湧く。

F. 7トレンチ**I層**：客土

米軍基地建設の際に整地され、上層部は橙褐色土、下層部は橙褐色混礫土であるが礫が少なくなる。

II層a：旧表土（戦前の耕作土）

米軍基地建設以前の旧耕作土で、上部は黄色系砂質土で下部は黄褐色系砂質土である。本層の上部は灰色土で、中層は黄褐色土、下層は黄褐色混砂土層である。

II層b：灰褐色粘質土・黄褐色粘質土層（カワニナを含む）

カワニナを含む層。

III層a：黒混黄褐色粘質土層（グスク時代の包含層）

柱穴が南北方向に並び少なくとも3棟分のプランが重複して確認できる。プランに沿って溝状遺構が見られる。幼児人骨が検出された。白磁・滑石・カムイヤキ・羽口などが出土。

III層b：黄褐色粘質土層・漸移層

グスク時代の遺構が掘り込まれている。

G. 8トレンチ**I層**：客土

米軍の埋土で、北側は約1.3mと厚く南側は薄く堆積する。

Ⅱ a 層：旧表土（戦前の耕作土）

米軍基地建設以前の旧耕作土で、トレンチ全面に見られる。本層は、北側は低く南側が高くなる地形を呈している。

Ⅱ 層 b：灰褐色粘質土・黄褐色粘質土層

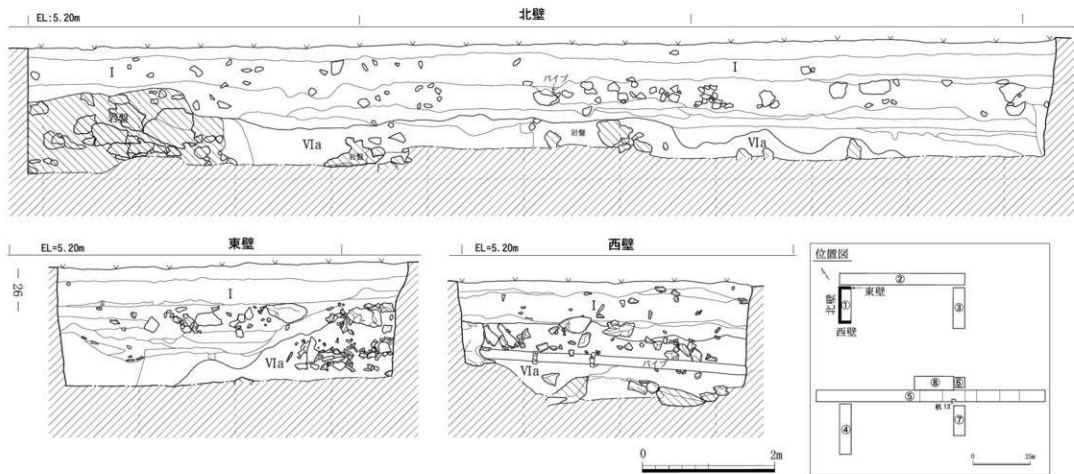
カワニナを含む。

Ⅲ 層 a：灰褐色砂質土（グスク時代の文化層）

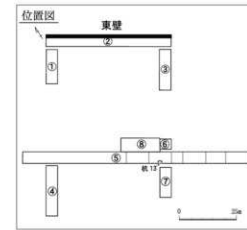
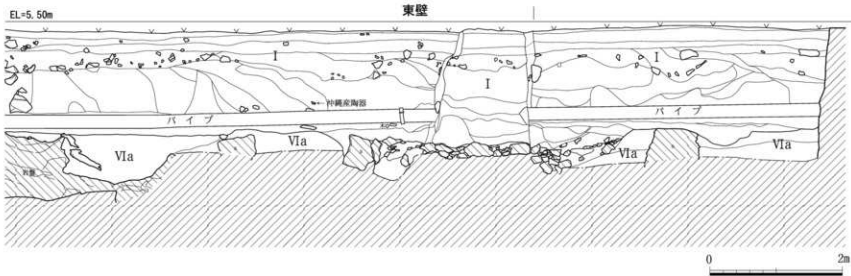
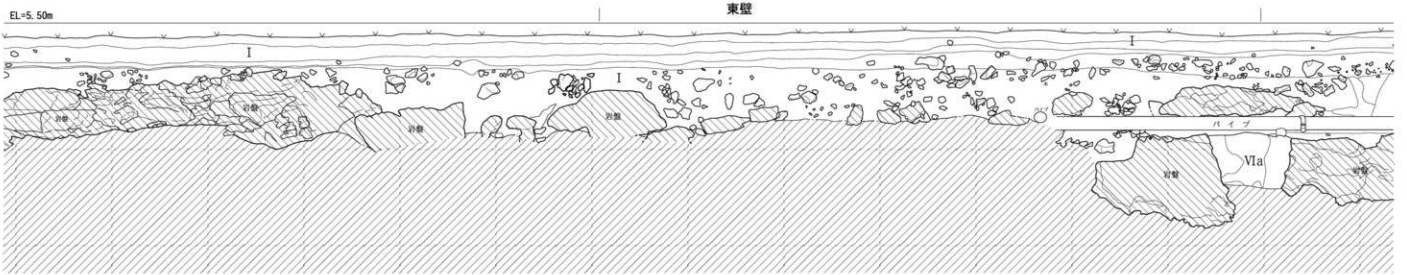
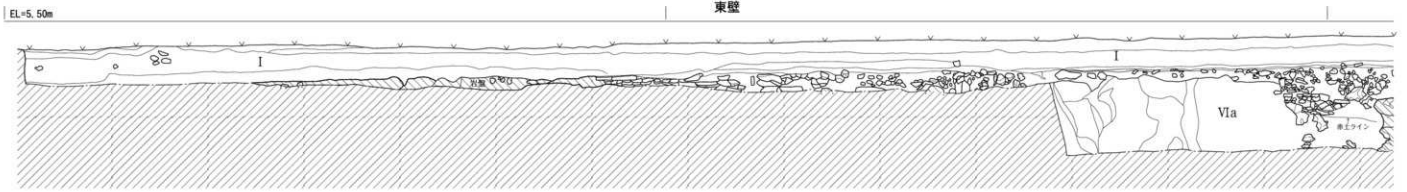
本層は薄く堆積する。高床式建物址や住居址などが検出された。更に東側に広がる様相を呈している。白磁・滑石・カムイヤキ・羽口・鉄滓が出土。

Ⅲ 層 b：黄褐色粘質土層・漸移層

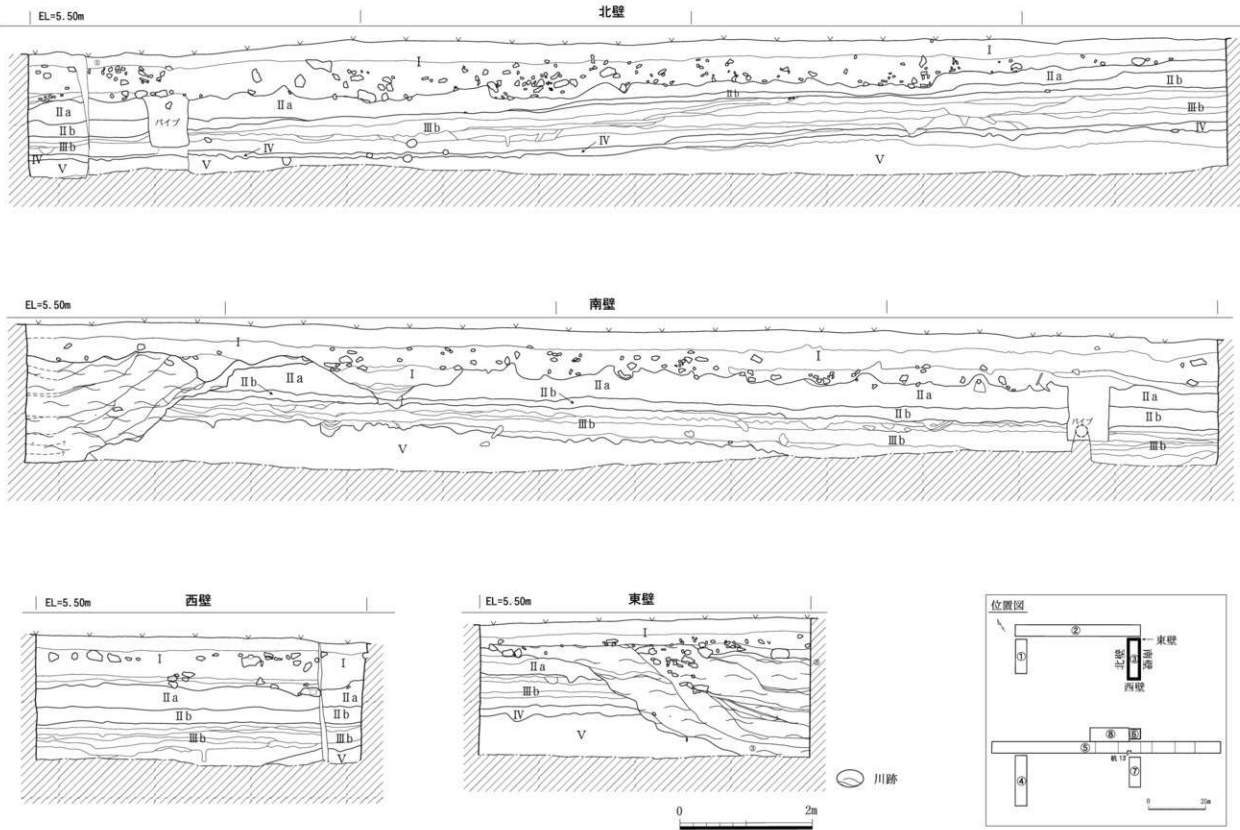
グスク時代の遺構が掘り込まれている。



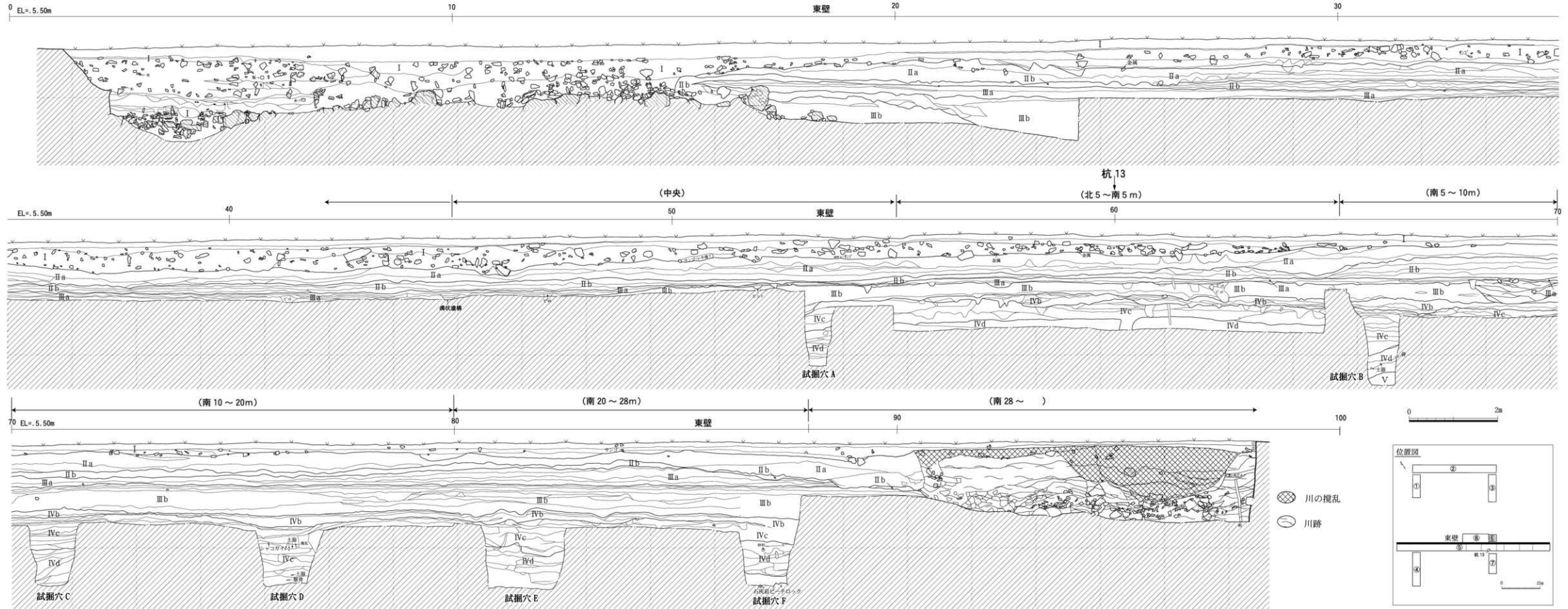
第4図 土層断面図（1トレンチ）



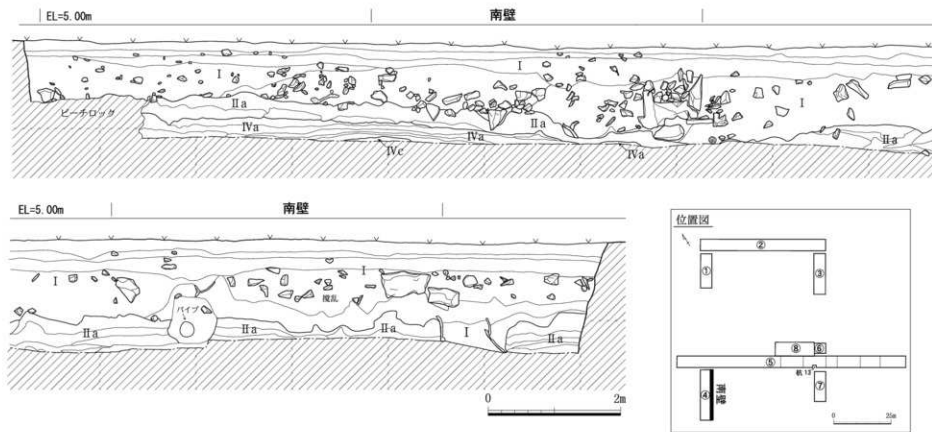
第5図 土層断面図(2トレンチ)



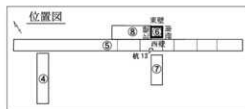
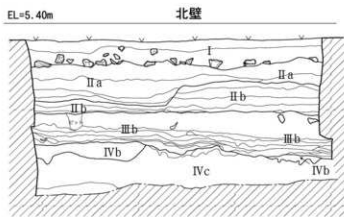
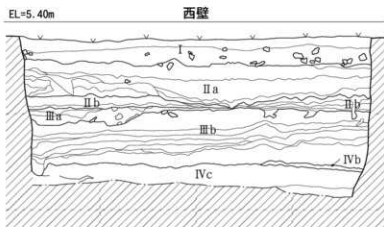
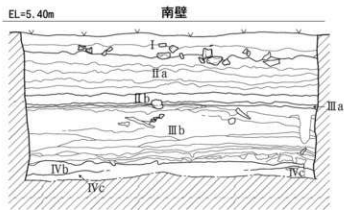
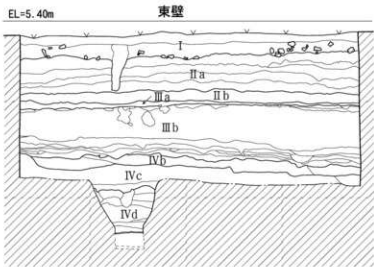
第6図 土層断面図(3トレンチ)



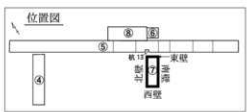
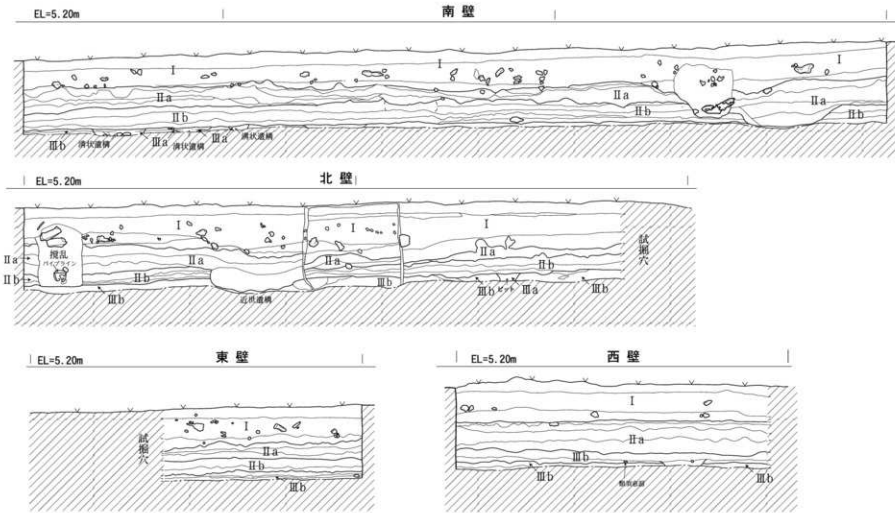
第7図 土層断面図(5トレンチ)



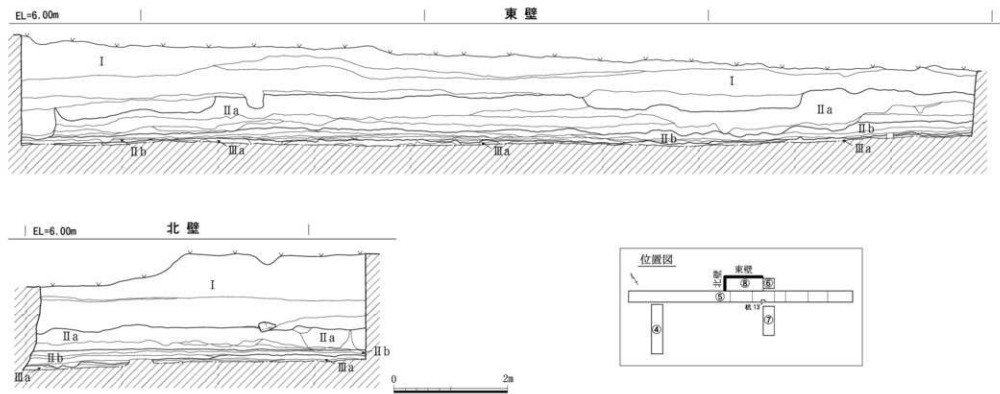
第8図 土層断面図(4トレンチ)



第9図 土層断面図(6トレンチ)



第10図 土層断面図（7トレンチ）



第11図 土層断面図（8トレンチ）

第四節 貝塚後期

1. 遺構

貝塚後期は住居址などの遺構は検出できなかったが、貝溜まりや獣骨集中部、一括土器、ビット状など生活面の痕跡がみられた。

A. IV層b面（貝溜まり）

グスク期の灰褐色砂質土層の下部で検出されたアラスジケマンを主体とした貝溜まりである。5トレンチの北5～南5で3カ所、南5～10で3カ所、南10～20で3カ所され、平均の厚さは約10cmである（第12図）。

北5～南5の貝溜まりの大きさは貝層①が2.3m×0.8m、貝層②が3.8m×1.8m、貝層③が1.6m×2.0mで貝層①からはシャコガイや土器、磨り石、軽石などか出土。

南5～10の貝層①は北側畦に幅2.6m、貝層②と貝層③も幅1.5mで隣接する北5～南5に沿ることからこれらと一連のものと思われる。南10～20の貝層①は0.5m×0.8m、貝層②は0.6m×1.0m、貝層③は0.8m×2.0mを測る。6トレンチでは北西貝層は3.2m×1.6m、南東貝層は、北東貝層1.4m×1.2mで、厚さ6mである。6トレンチでは部分的に中央や北側に黒砂褐色砂層が検出されている。形状は5トレンチは楕円形、6トレンチは不定形である。南10～20の貝溜まりは小さく、東側よりである。

出土遺物は北5～南5貝層①では底部（第33図32・38）、貝層②では乳房状尖底（第32図13）、口縁部（第21図38・第24図61・第27図78・80）、貝層③では小型土器（第19図12）くびれ底部（第33図39）、口縁部（第28図81）、南5～10の貝層①では小型土器の底部（第33図45）、南10～20の貝層①では壺（第19図8）、6トレンチでは直口口縁（第25図65）、底部（第32図17・18）が出土している。

また、北5～南5貝層①の北側で樹痕が確認された。

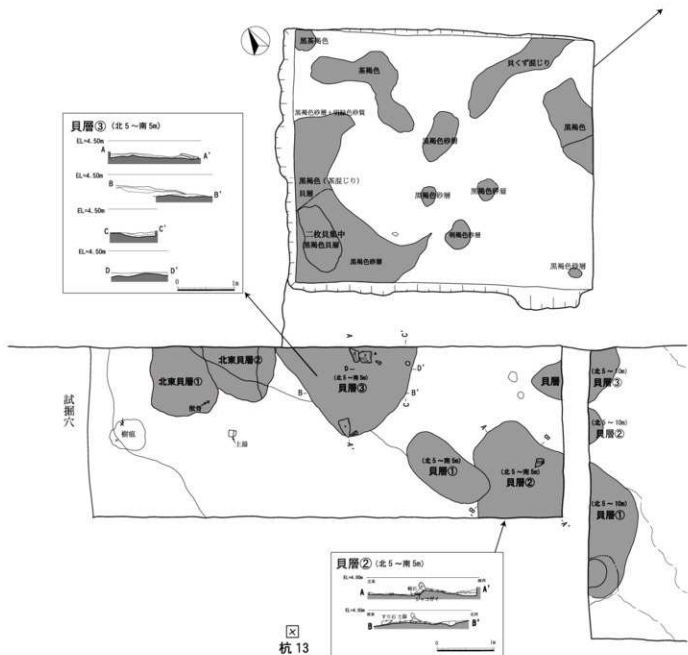
B. IV層c面

5トレンチ南側と拡張部の6トレンチの黒～茶褐色砂層面を掘り下げると灰～白褐色砂層面からイノシシの骨やまとまって土器が出土した（第13図）。

そのほとんどは前記の貝溜まりの下部である。6トレンチでイノシシ下顎骨が2点、5トレンチ北5～南5で5カ所に集中部があり、周辺からはアラスジケマンやシャコガイ、クモガイ、マガキガイなども検出される。イノシシ下顎骨が左右対で出土する例は少なく、渡喜仁浜原貝塚で報告されている。骨の検出状況を見ると下顎骨の切歯骨部分と他に部分が離れて検出されたものも見られることから、解体によって切断されたものと思われる。また、6トレンチとの境でウシまたはウマの肋骨（図版58）が出土したが攪乱かどうか明瞭でなく、本調査で再度検討したい。

<引用・参考文献>

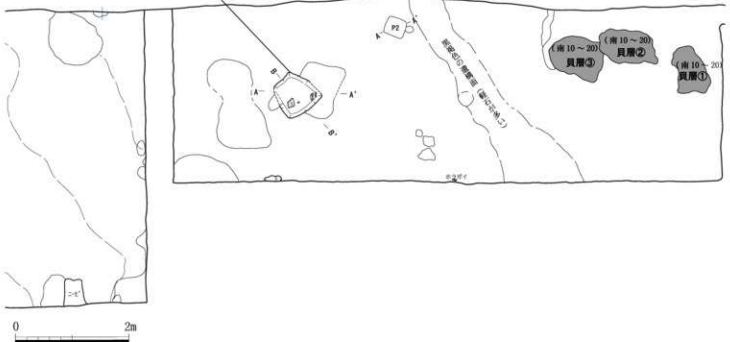
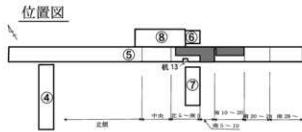
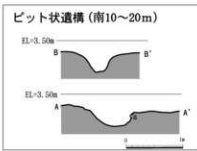
- 新田重清・呉屋義勝ほか 『渡喜仁浜原貝塚調査報告書 [1]』 今福仁村文化財調査報告書 第1集
今福仁村教育委員会 1977年



第12図 IV層b遺物検出状況(貝溜まり)

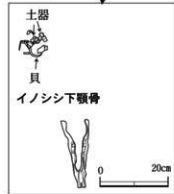
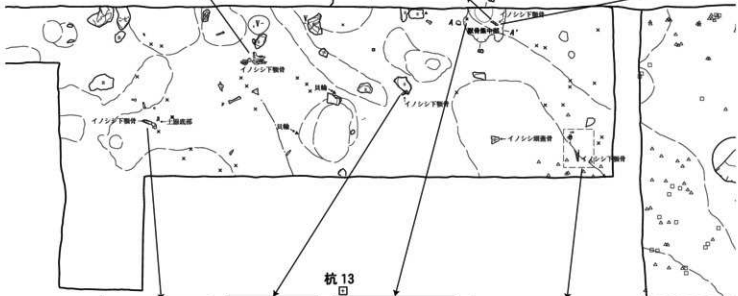
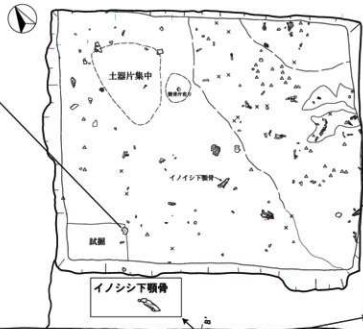
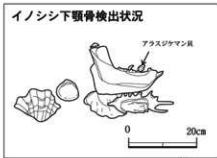


図版 1 貝溜まり出土状況





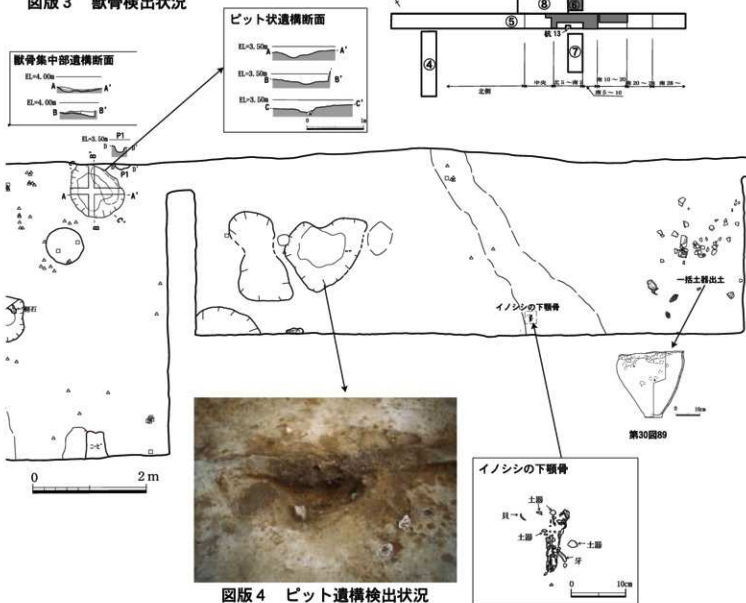
図版 2 土器出土状況

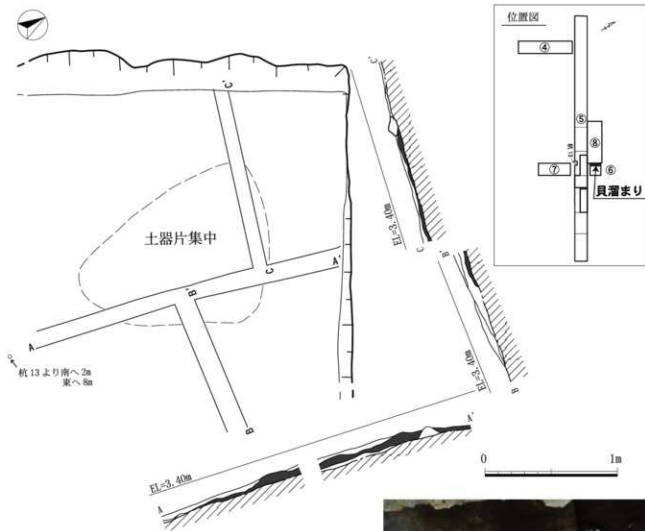


第13図 IV層 c 遺物検出状況



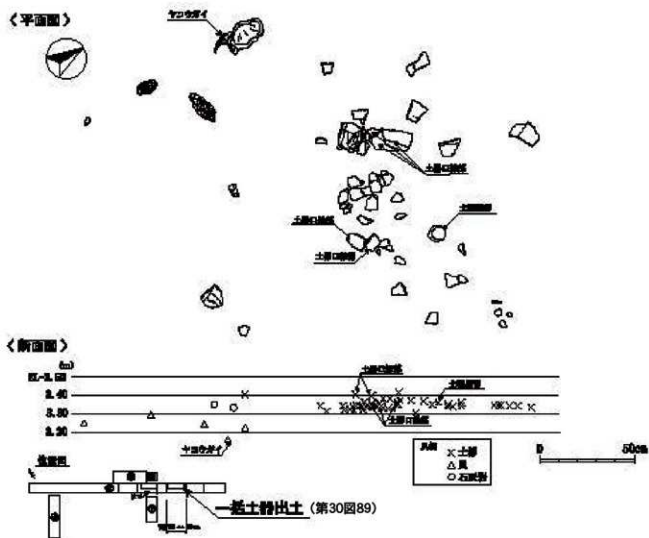
図版3 獣骨検出状況





図版5 遺物出土状況

第14図 土器片集中部平面・断面図(6トレンチ)



第15図 一括土器出土状況平面・水平分布 (5トレンチ)



図版 6 一括土器出土状況

C. 一括土器

6 トレンチと5 トレンチ南10～20に検出された。6 トレンチでは北東側（第14図）、南10～20では東側（第15図）で検出された。6 トレンチでは、ほぼ全面に貝等の遺物も検出されており、貝塚後期の包含層中と思われる。

第30図89は口縁部から底部まで接合でき、貝塚後期の土器としては好資料である。また、近接するイノシシ下顎骨の近くからは弥生系の壺形土器（第18図1）、同じ面ではシャコガイやヤコウガイが出土した。

D. ビット状

5 トレンチの南5～10、南10～20で出土。白砂層に黒褐色の落ち込みが見られるが、深さは約10cmである。

南5～10の①は73cm×75cmの円形、②は径60cmの円形、③93cm×73cmの楕円形、南10～20は④径20cmの円形、⑤110cm×140cmの略三角形、⑥50cm×40cm楕円形、④と⑥には黒色砂層が包含されていた。いずれも深さは10～20cm、断面は緩やかに落ち込むもので柱穴の可能性は低く、包含層の凹みのようである。

以上の状況からこれらが集中する6 トレンチ、5 トレンチ北5～南5は土器の出土量が最も多く（第17図）、今回調査した試掘トレンチの中では遺跡の中心部分と捉えられる。また、上面の貝溜まりと下面のイノシシ骨や土器の集中は一連のもので食料残滓の捨て場としての機能を持ったものと思われる。

E. 軽石の集中

南10～20のほぼ中央を横切るように軽石の集中がベルト状に検出された。検出面は貝溜まりが検出されたIV層b面から獣骨や一括土器が検出されたIV層c面に及ぶ。その南側ではIV層c面の下部から緑灰砂層（V層）が露出した。この層出土の木片の放射性炭素年代測定は1960+30の結果が出た（第四章第四節参照）。南側は川跡の可能性がある。

遺跡および伊礼原遺跡の所在する北谷の沖積低地の遺跡（伊礼原遺跡（低湿地区・砂丘区）伊礼原B遺跡、伊礼原D遺跡、伊礼原E遺跡）からは大量の軽石が出土する。これらは自然堆積か人為的かを検討する為、計測や観察を行ってきた。また、中には加工したもの（伊礼原D遺跡2008）も見られるが、これまでの状況から多くは海岸の縁に堆積したものと思われる。

最も多い伊礼原遺跡の低湿地区では20コンテナ、砂丘区では25コンテナ得られている。伊礼原B遺跡（2008）、伊礼原E遺跡（2008）では白砂層にベルト状に堆積していた。

伊礼原D遺跡（2008）では海岸側に大きい軽石、陸側に小さい軽石が出土する傾向が見られた。本遺跡ではこれらの状況がみられたので下記のような分析を行った。

<資料と方法>

分析した軽石はピックアップ法で採取したものである。

資料は軽石の分布状況を見るため、大（5cm以上）、中（5cm～3cm）、小（3cm以下）に分け、グリッドおよび層別に個数と重量を計測した。

<結果>

軽石の総量は1056個、重さ5,326.18gである。

重量

4 トレンチでは小 1 点、3.54g のみの検出

6 トレンチでは茶・黒褐色砂層 (IV 層 b) で大 2 点 (45)、中 5 点 (56.76)

5 トレンチ 10～28 黒褐色砂層 (IV 層 b) 128 個、1630.94g

5 トレンチ 北 5～南 5 茶・黒褐色砂層 (IV 層 b)。12 個、1302.92g。

(南 10～20) 黄褐色粘質土層。291 個、670.92g。

(南 10～23) 黒褐色砂層の大 3 点 (290.57g) が多い。

軽石の平面分布でみると 3・4 トレンチではほとんど出土しない。

7 トレンチでは黒褐色土層で小 14 点 (1.63g) 出土し、そのほとんどは柱穴の中である。

層別には

・Ⅲ層 b では 5 トレンチ 南 10～20 で最も多く 291 点 (670.92g)、ついで南 20～25 で 22 点 (54g) とつく。

・茶・黒褐色砂層 (IV 層 b) では南 10～23 で 91 点 (1326.93g)、北 5～南 5 では灰白色砂層 (IV 層 c) で小 38 点 (13.21g)

・漸移層では南 20～29 で中 18 点 (104.25g)、小 6 点 (3.63g) である。

・明緑灰色砂層 (V 層) では南 10～24 で、大 1 点 (18.88g)、中 5 点 (43.03g)、小 4 点 (8.59g) である。

・6 トレンチの黒褐色砂層 (IV 層 b) では小が多く、大は少ない。

茶・黒褐色砂層 (IV 層 b) で大 2 点 (45g)、中 5 点 (58.75g)、小 65 点 (19.53g) である。

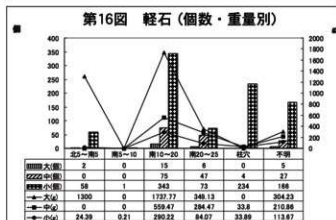
5 トレンチでは南 10～20 の黄褐色粘質土層での出土量が最も多い。

軽石は、主に黄褐色粘質土層 (Ⅲ層 b) と黒褐色砂層 (IV 層 b) で出土し、その中でも 5 トレンチの南 10～20 では第 13 図に示したようにベルト状に堆積している。軽石は海岸の打線ライン、波

打ち際に堆積する遺物である。松田順一郎氏によると大きいものは海岸側に近い所に堆積し、小さいものは風によって飛ばされ、陸地側に堆積する傾向があるとのことである。

これを考えあわせると 5 トレンチの北 5～南 5 は海岸に近く、南 10～25 は海岸から離れていることが推測される。(第 16 図)

このような状況は宜野座村前原遺跡 (1999) やキガ浜貝塚 (1978) でも見られる。



＜引用・参考文献＞

- ・金武正紀・比嘉春美 (1978) 「津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書』第 17 集
- ・知名定順ほか (1999) 「前原遺跡—県道漢那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書—」宜野座村乃文化財 第 14 集
- ・細川 愛 (2007) 「軽石」中村恵ほか『伊礼原遺跡—伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査—』北谷町文化財調査報告書 第 26 集 北谷町教育委員会
- ・細川 愛 (2008) 「27. 軽石」『伊礼原 D 遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業 (平成 10～13 年)』北谷町文化財報告書 第 28 集 北谷町教育委員会

2. 出土遺物

土器、貝製品、石器、チャート類、脊椎動物遺体、貝類遺体が出土した。最も多いのは貝類遺体の60コンテナ（中コンテナ）、続いて土器の21コンテナ、脊椎動物遺体4コンテナの順で貝製品、石器、チャート類は少ない。

以下、それぞれについて報告するが、脊椎動物遺体、貝類遺体は第四章で報告する。

A. 土器

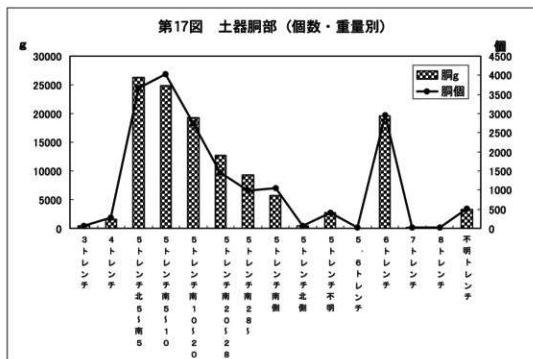
土器は「中」コンテナの21個得られ、出土量は貝殻の60コンテナについて多い。出土地をみると5トレンチで最も多く出土し、南東側（山手）の③トレンチ、北西側（海側）の4トレンチでは少量である。第17図に土器の出土地別の出土状況を示した。これによるとトレンチ別には5トレンチが最も多く、6トレンチと続く。5トレンチは「北5～南5」、「南5～10」、「南10～20」の順に多い。

土器はグリッドおよび出土層ごとに接合を試みた。その中で第30図89（巻首図版11）は出土状態が良く、口縁部から底部まで接合・復元した。口縁部から底部まで接合あるいは図上復元可能な土器はわずかで、特徴的なものは図示した。なお、図示したのは口縁部82点、底部48点、胴部13点である。個々の詳細は観察表に示した。

図の掲載はトレンチの性格を見るため、出土量の多い5・6トレンチと少ない3・4トレンチを別に示した。5・6トレンチは（1）搬入土器、（2）壺形土器、（3）外耳・有孔土器、（4）有文土器、（5）甕・深鉢形土器の順に記述する。

なお、甕・深鉢形土器は口縁部及び底部とも約3cm以上の土器片で口縁部・底部の形態・器面調整・胎土などで分類を試み、表2と表4に示した。

実測は推定径の8分の1以上を図上復元の対象としたが、一部基準から外れるものもある。遺物実測図と写真の順で掲載し、実際の遺物の大きさがわかるようにした。観察に示した口径・底径は



第30図89以外はすべて推算径である。

遺物の記述に際し、外器面→「外面」、内器面→「内面」と記述した。

土器分類で器面調整も含めて検討し、ユビを用いたものに「ユビナデ」、「指頭圧痕」、ハケを用いたものは「ハケナデ」、ヘラを用いたものは削りとナデがあり、削りとしたのは器面調整時に混和材が引きずられているものを「ヘラケズリ」、ナデとしたものは起点が明瞭にヘラ幅が認められ、混和材の引きずりが無いものを「ヘラナデ」として区別した。ヘラの幅は15mm程度のものが多い。指頭圧痕は粘土帯の境、口唇の調整に見られる。

以下、図示された遺物を中心に略述する。表3に口縁部・胴部の観察一覧、表5に底部の観察一覧、表2に口縁部の分類別出土量、表4に底部の分類別出土量を示した。

(1) 搬入土器 (第18図)

搬入土器としたのは、胎土が細かく、混和材に透明粒や角閃石を含むもので、胎土や焼成、器形などが在地土器に見られないもので、いわゆる弥生系土器である。

器種は壺形(図1～図5)、甕形(図6)、深鉢形(図7)がある。

a. 壺形

口縁部および胴部が6点で、出土地別では5トレンチ南10～20IV層b、南20～28Ⅲ層b、IV層b、南28～IV層b、IV層c、6トレンチIV層bと後記の3トレンチIV層bからそれぞれ1点ずつの計6点である。

図1は薄手の外反口縁で、口唇の側面は凹線文を施し、外面は頸部で縦位にヘラナデ(刷毛目)で調整されている。全体的に器面調整は丁寧で、器厚もほぼ均一である。類例は伊礼原遺跡砂丘区(2007)、平敷屋トウバル遺跡(1996)で報告されている。

図2・図3は頸部に文様を施すもので、図2は幅広沈線文で頸部に1条圍繞し、口縁方向に縦位に2条施すものである。図3は頸部に沈線文を横位に4条施し、その下位に重弧文を施すものである。いずれも器厚が10mm以上と厚手で、内外面は暗黄褐色、内部は黒褐色のサンドイッチ状を呈する。

図4と5は弥生式土器の胴下部の部分で、4が底部に膨らみを持ち、図5は底部にくびれる。器色は内外面とも明灰褐色で角閃石など、多量混入。

b. 甕・深鉢形

3トレンチIV層bで1点、5トレンチ南5～10IV層bで1点、南20～28IV層bで2点、南28～IV層bで1点、IV層dで1点の計6点の出土。主に南側で出土。

図6は口径19.4cmで口縁部が最大胴径より小さく、頸部から胴部にかけて細くなる。内外面に沈線文を施すもので、外面は6条の重弧文を圍繞するものである。5トレンチ南28～、IV層bの出土。

図7は口縁部が「く」字状に屈曲し、外反するもので、口唇はやや玉縁を呈する。内外面に沈線文で文様が施され、外面は渦巻き状、内面は口唇に対して縦位に4本を1セットとして施す。同様な文様は津堅貝塚(2005、第11図36)がある。器色は内外面とも明橙色、胎土は細かい砂質を呈する。

(2) 壺形 (第19図8～11)

壺形の土器は有頸5点、無頸2点、有肩1点、不明4点の計12点の出土した。主なものは図8～11に示した。ほとんどは薄手の土器である。

図8・10は有頸タイプで、図9は無頸タイプ、図11は有肩タイプである。

有頸のうち、図8はやや直口、図10はアサガオ状に外反するもので、口唇近くは指でつまみ、外反させる。

図11は最大胴径が36.8cmを測るもので、器色は明橙～赤褐色、外面の器面調整は丁寧で、内面は肩部に積み痕が明瞭に残り、ユビナデの痕が明瞭に見られる。他に図示していないが口径6.8cmを測るものもある。

(3) 小型土器 (第19図12)

1点の出土で、図12は口径12cm、高さ10.5cm、底部は径3.8cmを測る。脚台様の小型土器である。口唇に刺突文、口縁部二条の鞍状凸帯文を施すもので、口縁部は内湾、不規則な口縁丸外面ユビで調整。アカジャンガー貝塚(1980)ナガラ西貝塚(1979)で出土。

(4) 外耳・有孔土器 (第19図13～16)

外耳土器は丸型3点、横型1点の計4点出土で、耳に機能を有するものと装飾的なものがある。

図13は浅鉢土器の口縁部と考えられ、口縁直下に横位に耳を装着、さらに中央に縦位の穿孔が施される。類例は伊礼原遺跡(砂丘区)(2007)、手広遺跡で出土。

図14は胴部に径3cmの円盤状の凸帯を貼り付けたもので、深鉢の胴部と考えられる。薄手で、器面調整は外面が雑に縦位に調整されている。

他に径15mm、厚さ10mmの饅頭型の貼り付け文が出土。口縁部で貼り付けの位置は図13と同じである。

図15は横位に耳を持つタイプである。ほかに幅5mmの小ぶりな横耳が出土、内外の器面調整は丁寧である。類例は伊礼原遺跡(砂丘区)でも得られた。

図16は口縁部近くに径6mmの孔を施すもので、孔はやや不定形である。口縁部は直口で、舌状を呈する。明黄～灰褐色を呈する。内外面ともユビ調整する。VI類に属する。赤色粒を多量混入する。他に径7mmのものや穿孔の位置が口縁部近く(図1・26)、胴部(図30・89)がある。

(5) 有文土器 (第20・21図)

文様の施された土器は35点で、全体の割合では1割と少なく、文様の種類は凸帯文、沈線文、刺突文があり、これらを組み合わせたものもある。

a 凸帯文 (図17～19)

5点出土した。

図17は口縁が玉縁状、最も張り出した部分に幅広凸帯文を圍繞するもので口径19.0cmと小降りである。舌状に外反し、内外面ともヘラナデで調整する。

図18は胴上部で緩やかに屈曲し、口縁部で外反する。凸帯文は断面が三角形で、「W」状に複数、貼り付けるようである。口径は37.4cmを測る。やや泥質で5トレンチ南20～28IV層bで出土。図90の3トレンチ出土の土器と類似する。

図19は口縁部に鞍状凸帯文が1つ確認できる。小破片であるが、他の遺跡(平敷屋トウバル遺跡)の例から2個の可能性も考えられる。口縁部は玉縁状で外反する。混和材は赤色粒を少量混入。

b. 刺突文 (図20~22)

4点出土した。図20は口縁部は「く」字状に屈曲し、断面は舌状を呈し、やや外反する。文様は口縁部上部の竹管状の施文具で横位に文様を施す。文様は径2mmで、1個のみ貫通し、孔をなす。文様の失敗か、孔として機能するかは不明。口径27.0cmを測り、器色は外面が暗茶褐色、内面は明黄褐色を呈し、器面は外面は丁寧へラナデされ、口縁部は横位、胴下部は縦位に調整される。胎土は細かい砂質で、搬入土器の可能性も残る。図21も同様で、出土地も近いことから同一個体の可能性が高い。

図22は口径20.2cmを測り、器厚は8mmと厚く、胴部で外面にやや膨らみ、皿あるいは脚台の可能性が考えられる。この他に口唇に刺突文を施すものがあり、形態からはVI類bに分類される。

c. 刺突文+沈線文 (図23・24)

刺突文+沈線文2点出土した。図23・24は口唇部に刺突文、外面に沈線で鋸歯文を施す。口唇部は粘土紐を加えて、太くなり、その上に刺突文を施す。いずれも6トレンチで出土し、同一個体の可能性が高い。

d. 沈線文 (図25~38)

沈線文24点出土した。沈線文には幅広のヘラで浅い幅広沈線文、細い工具でやや深い沈線文の2種で、文様構図は横位、鋸歯状、不規則な曲線、斜位がある。

図25は口唇近くで舌状に外反するもので、2条を1組で3セットを横位に施文。器面は丁寧にヘラで調整する。外面は明赤~茶褐色、内面は黒褐色を呈し、胎土に石英・白色粒・角閃石を多量混入。

図26は内外面に沈線文をラフに施文するもので、外面は口縁に沿うように重弧文、内面は約10mm間隔で縦位に沈線文を施す。口縁部は舌状を呈し、やや外反する。器厚9mmと厚手で、器色は内外面とも暗茶褐色を呈し、器面はヘラナデ調整、孔は径6mm前後の楕円で、焼成前に穿孔されている。

図27・28・30は幅広沈線文を曲線状に施すもので、図27は舌状の口縁で、緩やかに屈曲し、外面は幅広沈線文で不規則な曲線を描き、内唇近くに数条の沈線文を施す。図28は緩やかに屈曲する胴部で、施文は不規則で胴上部に限られる。図30は胴部で器面調整がやや雑で、穿孔が見られる。鋸歯状の構図を持つものは図29・30がある。

図29は胴部で、沈線文をラフな鋸歯文に描くもので、器面調整は内外面をヘラナデし、外面は縦位、内面は横位に施す。

図31~38は幅広のラフな曲線を描くものである。図31は残りの良い資料で、口径22.4cm、最大胴径25.4cmと胴径の方が大きい。口縁の内外に幅広の沈線文を施す。外面は弧文と鋸歯文、内面は弧文を施すもので文様は浅い。口縁部は「く」字状にくびれ、胴部に張る。器面は外面が丁寧に、内面は幅2.5cmのヘラナデが顕著に見られる。混和材には黄褐色のシルト質の粘土粒が含まれる。粒は粗く、ヘラナデにより、引きずる。焼成はやや悪い。他に口縁の内外に深い沈線文で重弧文を描くも出土した。

図32・34は外面、図33は内外面にラフな曲線を描くもので、図32は口縁部が舌状を呈するもので、図33・34も断面の形状から舌状を呈すると思われる。

図35~37は口縁部断面が丸く、直口か内湾するタイプである。図37はさらに口唇に凸帯文を施し、図36は径6mmの孔が施される。また、図37のように幅22mmの扁平の凸帯文を施したもの

が見られ、外面は凸帯は明瞭でない。

図38は口縁部断面が舌状を呈し、僅かに外反する。文様は斜沈線文を3条、ラフに施文する。器面調整は外面がヘラナデ、内面はハケナデが見られる。特に図37は胴下部のヘラナデは顕著である。

(6) 無文土器 (第22図)

主に深鉢で、口縁部の形態、器厚、器面調整などで8類に分類した。特に器面調整は多様で丁寧なものから雑なものまで見られる。

I類 (図39)

器面調整が丁寧で器厚が5mm前後の薄手の土器で、口縁部断面が角を呈し、胴部で「く」字状に屈曲する、いわゆる阿波連浦貝塚下層タイプ。出土量も5点で、5トレンチ北5～南5Ⅲ層b、南20～28V層、南28～のIV層c、不明で得られている。

図39は口縁部が玉縁状を呈し、「く」字状に強い湾曲をなすもので、口径21.8cm、器厚5mmの薄手で、内外面とも明橙褐色、器面調整は内外面とも丁寧で、混和材にシルト質の粘土粒が多く含まれる。

Ⅱ類 (図40～45)

いわゆる浜屋原式土器とされるもので、器厚は5～7mmの直口あるいは外反で、混和材に角閃石を多く含み、砂質で、器面調整は外面が丁寧で、内面に指頭圧痕が見られる。出土量は23点である。外面の調整が丁寧で、裏面に指頭圧痕が見られるのをaタイプ、内外面に粘土紐の痕が残り、ヘラナデの調整が見られるものをbタイプとした。aタイプの出土量は14点で南20～28で10点、南28～、で1点得られた。

・aタイプ (図41～44)

図41は口唇が角状で口縁部が逆「ハ」字状に開く。口径26.6cm、裏面にヘラナデが見られる。図42～44は直口で断面が角を呈し、裏面は指頭圧痕が見られるものである。図42は直口、図43はやや外反し、口唇は若干、玉縁状を呈する。図44はやや外反する。

・bタイプ (図40・45)

図40は直口口縁で内唇は若干、丸味を帯び、胴部でやや膨らみを持つものである。外面は丁寧に調整されるが、口縁の粘土帯を残す。口径は29.4cmを測る。器色は内外面とも明赤褐色を呈する。

図45は口縁部で、断面は丸く、外反するもので、口径26.8cmの深鉢形の土器である。外面は明橙褐色、内面は灰褐色を呈する。器面調整は両面ともハケナデで、外面は横位、内面は斜位の方角である。やや泥質で、幅5cmの積み幅が両面で確認できる。

Ⅲ類 (第22図46・第23図47～51、第30図89)

胴部上部で屈曲するもので、「く」字状の屈曲が明瞭で口径より最大胴径が同じが大きくなるものをaタイプ(図46・47・51)、緩やかに屈曲し、口径が最大胴径より大きいものをbタイプ(図48・49・89)、口縁が玉縁状を呈し、口径が最大胴径と同じが小さくなるものをcタイプ(図50)と細分した。前述した有文土器の図17・18・20・21・28も「く」字状に屈曲するものであるが、胎土が細かく、弥生系土器と思われる。

aタイプ13点、bタイプ15点、cタイプ1点の計29点得られた。出土地は南10～20IV層bに多

く出土している。

・ aタイプ

口径が最大胴径より小さい。「く」の字に屈曲し、口縁部では細くなり、外反するもの(図46)、外反部分が舌状に曲がる(図47)ものがある。

・ bタイプ

口径が最大胴径よりわずかに大きく、緩やかに湾曲するもので、器厚が厚手(図48)、薄手(図49)があり、いずれも口唇は舌状を呈し、胴下部は縦位にヘラナデで調整され、隆帯状を呈する。図89は唯一の完形土器で、口縁部は「く」字状に屈曲し、断面は丸味を帯び、外反する。

口径は27.4cm、底径は7.4cm、器高は26.4~28.1cmと左右はアンバランスで片側の胴部は膨らみが強く、胴部の中程に径4mmの孔が施されている。器面調整は外面が丁寧で、内面が横位にハケナデである。

くびれ平底ではEaに分類され、底径は大きい方である。

・ cタイプ

口径が最大胴径より小さく、口縁部が玉縁を呈するものである。

図50は口径13.3cmと小ぶりで、器厚は均一でなく、器面は内外面とも主にハケナデで、外面は斜位に調整する。

IV類：外反するもの(第23図52~55・第24図)

口縁部が最大胴径と同じか、大きいもので、器面調整は丁寧、わずかに輪積みの粘土帯がのこるが基本的には丁寧に仕上げる。器厚は均一で8mm以下で、内外の器面調整は良く、外反の度合いにより、a~eまで細分した。aタイプ3点、bタイプ22点、cタイプ1点、dタイプ10点、eタイプ11点、不明4点の計51点の出土。

・ aタイプ(図52)

口径が最大胴径とほぼ同じ大きさである。図52は外反口縁で、口径38.2cmの大きな土器である。外面は暗橙褐色、内面は茶暗~黄、口縁部はユビナデ、胴部および内面はヘラナデ調整である。やや泥質で、焼成は良く、胎土に黄褐色粘土を混ぜる。

・ bタイプ(図54・58)

口径が最大胴径より大きく、外反の反りが強い。図54は外反口縁で口唇に徐々に細くなるが、断面は丸味を残す。口径24.2cm、内外面とも明赤褐色を呈し、内外面ともヘラナデで、外面は縦位、内面は横位に調整される。

図58は口径30.6cm、器厚10mmと大ぶり、内外面は丁寧にユビで調整される。器色は明黄褐色で胎土に黄褐色粘土粒を少量含み、やや泥質で焼成は良好である。

・ cタイプ(図53)

口径が最大胴径より大きく、口縁部は大きく反る或いは折れ曲がる。図53は口縁部が渦巻き状に曲がるもので、薄手で、外面は明赤褐色、内面は明橙褐色と呈し、ユビナデ調整。

・ dタイプ(図55~57)

図55は口縁部断面は丸く、外反の度合いが弱いものである。

図56は口縁部に孔(補修孔?)と外面には浅い沈線文が施される。5トレンチ南10~20IV層cで、イノシシ骨と共伴して出土。

図57は口縁部断面が丸で、口径24.2cm、器厚が7mmと厚さが均一の土器。内外面との斜めにヘラナデで調整される。

・ eタイプ (図60・61)

口縁部断面が舌状のもので、図60は口唇の内側を削り、舌状を呈する。口径18.6cmと小振りで、器色は暗橙～茶褐色を呈する。

図61は口径26.2cm、器厚9mm緩やかに外反する。器面調整をみると外面は丁寧にユビナデで調整し、やや粘土の積み痕をのこす。内面はハケナデが顕著にみられる。

V類：直口するもの (第25図・第30図88)

逆「ハ」字状に開くタイプで、口径が最大胴径より大きいものをaタイプ (図62・63・64)、内傾するものをbタイプ (図65・66・67) と細分した。aタイプ25点、bタイプ27点、cタイプ1点の計53点である。

・ aタイプ (図62～64)

図62、図63は器面調整が丁寧に、外面の胴部は縦位にヘラナデ、内面は口縁部が指頭圧痕で調整され、胴部は横位にヘラナデを施す。

・ bタイプ (図65・66・88)

図65と66は、口縁部が内傾するもので、図65口縁部は舌状を呈し、器厚は8mm前後の中厚で、器色は暗橙色、内面の器面はヘラナデで、大当原貝塚にも類例は見られる (高宮廣衛1993)。とくに内面の器面調整がよい。浅鉢で双状突起の可能性も考えられる。

図66は口縁部は舌状で内湾する。口径28.0cm、器厚は均一で、器色薄内外面とも明橙色、内面の横位のヘラナデで調整される。

図88は口縁部が直口口縁で舌状を呈し、器厚は6～10mmで均一でなく、器色は内外面とも暗橙褐色、器面調整は外面はユビナデ、内面は横位にハケナデが見られる。やや砂質で、焼成はやや良好。胎土に赤色粒の粗粒を少量混入。

・ cタイプ (図67)

図67は厚さ4mm弱の薄手の土器である。器面調整は内外面ともヘラナデが顕著に認められ、光沢がある。口縁部は意識的に稜が見られ、粘土帯が変化したものと思われる。薄手の土器は平安山原B遺跡 (2008) の上層で1点出土。

VI類：粗隆文土器 (第26～29図)

土器製作のための粘土帯をそのまま残すもので、胴上部の粘土紐接合の為にヘラや指でナデ調整を明瞭に残すもので粗隆文 (高宮1993) に酷似、口唇に粘土紐を付け足し、有段状をなすaタイプ、口唇をそのまま、断面を舌あるいは丸状を呈するものをbタイプ、内傾するのをcタイプとした。

aタイプ12点、bタイプ (cタイプ2点含む) 97点、dタイプ11点、eタイプ14点、fタイプ8点、gタイプ6点の計148点出土した。

最も多い出土地は6トレンチIV層bの36点、北5～南5IV層bの35点、南5～10IV層bの27点、北5～南5IV層cの16点、南10～20のIV層b12点である。

・ aタイプ-有段 (図68~70)

図68~70は土器全体に粘土帯の形を残し、口縁は外反する。口縁部直下は粘土帯で凹み、有段のようにもみえる。器面調整は雑で、内外面ともハケナデ、凹凸が強い。器厚も9mmと厚手である。

図68は直状に外反し、口唇は舌状を呈する。口径は30.0cmを測る。器色は暗赤褐色、器面は指とヘラで調整し、内面は指頭圧痕が顕著に見られる。胎土に石英や黄褐色の粘土粒を混入する。器面調整と胎土から底部の図9と同一個体と思われる。

図69は薄手で、他に比べて、やや泥質で、胎土に黒色粒、赤色粒を多量混入する。5トレンチ南20~28の石皿付近のIV層bで出土。

図70も同じで口径28.6cm、器色は外面暗茶~赤褐色、内面は明黄褐色を呈する。同じようなタイプでハケナデの幅が18mmを測るものがある。

・ bタイプ-直口 (図72・73)

粘土帯を明瞭に残すもので、口唇部は舌状を呈し、胴部は均一でなく、粘土帯の稜が明瞭に残る。薄手である。

図72・73は有段、凸帯文を施す。口縁部は直口で断面は丸い。粘土帯が明瞭に残る。薄手でハケナデが縦位、内面は横位に施される。

図72は口唇の内側が丸味を帯びるもので僅かに外反する。口径28.7cmを測り、混和材に赤・黄粘土粒を混入、明橙~灰褐色を呈する。器面調整は内外面ともヘラで斜めになでる。やや泥質。

図73は口径32.8cmの直口口縁で、口唇は不揃いである。器色は明赤~橙褐色を呈し、内外面とも粘土帯が明瞭に残る。

・ cタイプ (図71・74)

内傾気味の口縁で、「く」字状に屈曲するものである (図71・74)。

図71は口径19.0cm、図74は口径16.8cmと小振りである。胴上部で、粘土帯の接合部分が「く」字状に屈曲する。赤色粒を混入。嘉門貝塚A (第21図4・5) に類似。集計はVI類bと類似しているため、VI類bに含めた。

・ dタイプ (図75~78)

口縁部の内湾の強い土器で、図75・76・77・78がある。

器面調整は外面が雑にユビヤハケナデ、内面はやや丁寧にハケナデを横位に施す。粘土帯の境は見られるが、VI類ほど顕著ではない。

図75はやや内湾し、舌状を呈する。口径17.7cmを測り、胴下部ヘストレートに伸びるようである。器面調整は外面がユビナデ、内面は横位にヘラナデを施す。泥質で、粘土紐の幅5.5cm、類似は宇堅貝塚 (1980) に見られる。

図76は口縁部は内側に大きく内湾させる部分とやや内湾する部分があり、口縁は花卉状波打つような口縁である。口縁部断面は角が舌状を呈する。器厚は5mm~9mmと均一でなく、器色は外面は明茶~赤、内面は茶褐色、外面は口縁部近くをユビナデ、外面はヘラナデを施す。黒色粒を混入する。

図77も内湾するもので、口縁部断面は丸味を帯びる。厚さは6mmと薄く、器色は明橙褐色、明黄褐色を呈する。器面調整は雑で斜めにハケナデ、内面は丁寧に横位にハケナデ、ハケの幅26mm。粘土帯幅は3cm。

図78は厚手の内湾する口縁部である。器厚は7.5mmでより内湾強い。外面の胴上部から口唇に

表 3-1 土器口縁部・胴部観察一覧

第図版	No.	図番号	部位	口径(cm) 胴径(cm) 底径(cm)	分類 (大)	分類 (小)	観察一覧	出土地 台帳番号
第18 図 (図版7)	土 器	1	1	口縁部	14.6 — —	壺	角。外反。やや泥質。焼成:良好。混入物:角閃石。やや少量。細かい外面色:暗一茶赤。内面色:明一茶赤。器面調整:外面・ヘラーナゲ一縦明瞭。内面・ヘラーナゲ一横。	5トレンチ 南10~20 黒褐色砂層 IV層b 台297
			2	胴部	— — —	壺	やや泥質。焼成:やや悪い。混入物:石英・貝。やや少量。細かい。外面色:明一横。内面色:明一横。器面調整:外面・ヘラーナゲ一横。内面・ユビーナゲ一縦。	5トレンチ 白砂 IV層c 台1160
			3	胴部	— — —	壺	やや砂質。焼成:やや悪い。混入物:石英・石灰岩。やや多い。細かい。外面色:明一横。内面色:暗一黒。器面調整:外面・ヘラーナゲ一横。内面・指痕。	5トレンチ 黄褐色 粗砂+灰白砂 IV層 台1080
			4	胴部	— — —	壺	やや砂質。焼成:やや悪い。混入物:石英(角閃石)。やや多い。やや粗い。外面色:明一黄。内面色:明一灰。器面調整:外面・ヘラーナゲ。内面・ヘラーナゲ。立ち上がり丸味。	5トレンチ南20~28 黄褐色粘質土層 IV層c 台146
			5	胴部	— — —	壺	やや砂質。焼成:良好。混入物:石英(角閃石)。やや多い。外面色:明一黄。内面色:明一黄。	5トレンチ南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台176・2029・527・ 280・287・1343
			6	口縁部	19.4 — —	甕	角。外反。やや砂質。焼成:やや良い。混入物:角閃石。少量。やや粗い。外面色:明一黄。内面色:明一黄。器面調整:外面・丁寧・ヘラーナゲ。内面・丁寧・ヘラーナゲ一横。文様一幅広く沈線文、5条。弧状。	5トレンチ 南28~ 黒褐色砂層 IV層b
			7	口縁部 胴部	— — —	深鉢 深鉢	角・丸。外反。やや砂質。焼成:良好。混入物:角閃石。やや少量。細かい。外面色:明一横。内面色:明一横。器面調整:外面・ユビ・ヘラーナゲ一横。内面・ヘラーナゲ一横。 砂質。焼成:良好。混入物:白。やや少量。細かい。外面色:明一黄。内面色:明一黄。器面調整:外面・ヘラーナゲ。内面・ユビ一押。	5トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台279 5トレンチ 川の覆土 II層 台117
第19 図 (図版8)	土 器	2	8	口縁部	11.0 — —	壺	丸・舌。やや直口。やや泥質。焼成:やや悪い。混入物:石英(角閃石)。やや少量。細かい。外面色:暗一茶赤。内面色:暗一茶赤。器面調整:外面・ヘラーナゲ一横。器面のこり良い。	5トレンチ 南10~20 茶褐色砂 IV層b 台907
			9	口縁部	10.4 — —	壺	角。直口。やや砂質。焼成:やや良い。混入物:石英・貝・角閃石・赤粒。少量。細かい。外面色:明一灰黄。内面色:明一灰。器面調整:外面・ハケ。内面・ユビ。	5トレンチ 南28~ 灰白砂層 IV層c 台333
			10	口縁部	13.0 — —	壺	丸。外反。やや泥質。焼成:やや良い。混入物:白。やや少量。細かい。外面色:暗一茶。内面色:暗一茶。器面調整:外面・内面・ユビ一押。うすい。	6トレンチ 白砂No.27 IV層c 台1076
			11	胴部	— 36.8 —	壺	泥質。焼成:良好。混入物:石英。少量。細かい。外面色:明一横。内面色:明一赤。器面調整:外面・肩部一指ナゲ、胴部一ハケ(縦) 踵。内面・ユビ(横) 踵。	5トレンチ 南10~20 不明 台2069
			12	口縁部	11.0 10.5 3.8	小型 土器	角。内湾。やや砂質。焼成:やや良い。混入物:石英・白。少量。細かい。器面調整:外面・ユビで調整。内面・ユビ一押。ヘラーナゲ。口唇部に刺突文、鞍状凸帯文、二条。	5トレンチ 北~南 黒褐色砂層 IV層b 台647
			13	口縁部 (耳)	— — —	浅鉢	舌。直口。やや砂質。焼成:良好。混入物:角閃石。やや多い。細かい。外面色:明一黄。内面色:明一黄。器面調整:外面・ヘラーナゲ一横。内面・ユビ一押一ハゲ一横。	5トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台247
			14	胴部 (耳)	— — —	深鉢	丸形 耳	やや泥質。焼成:良好。混入物:赤。少量。やや粗い。外面色:明一赤。内面色:明一赤。器面調整:外面・踵一ユビ。縦位。内面・踵一ユビ。I 弥生
15	胴部 (耳)	— — —	深鉢	横耳	混入物:赤。少量。外面色:暗一赤。内面色:暗一赤。器面調整:外面・丁寧一ユビ。内面・丁寧一ユビ。均。	不明		
16	口縁部	— — —	—	舌。直口。砂質。焼成:良好。混入物:赤粒。やや多い。外面色:明一黄。内面色:明一灰。器面調整:外面・内面・ユビ。有孔。孔は△一複孔。積み痕明瞭。	5トレンチ 南28~ 黒褐色砂層 IV層b			
第20 図 (図版9)	土 器	3	17	口縁部	19.0 — —	凸帯 文	角。やや外反。やや泥質。焼成:良好。混入物:角閃石。少量。細かい。外面色:明一横。内面色:明一横。器面調整:外面・ヘラーナゲ。内面・ヘラーナゲ一横。外面の凸帯文は上下をへらで削り、作り出している。	5トレンチ 緑灰色 砂層覆土 V層
			18	口縁部	37.4 — —	凸帯 文	角。緩やかに湾曲し、外反。やや泥質。焼成:やや良い。混入物:白。少量。細かい。外面色:明一赤。内面色:暗一茶黄。器面調整:外面・ヘラーナゲ。内面・踵一ユビ一押一横一ヘラーナゲ。凸。曲線。凸断面は三角形。途切れて始まる。	5トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台252
			19	口縁部	— — —	凸帯 文	角。内湾。やや砂質。焼成:やや良い。混入物:白・赤粒。少量。細かい。外面色:明一黄。内面色:明一黄。器面調整:外面・ユビ・ヘラーナゲ。主線。鞍状凸帯。	5トレンチ 北5~南5 灰褐色(貝クズ混) IV層b 台978
			20	口縁部	27.0 — —	刺突 文	舌。やや外反。やや砂質。焼成:やや良い。混入物:石英・白・赤。少量。細かい。外面色:暗一茶。内面色:明一黄。器調整:外面・丁寧・ヘラーナゲ。胴下には縦。内面・ヘラーナゲ一横。	5トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b

註:観察事項の項(①口縁部断面、②形制、③胎土、④焼成、⑤混入物、⑥混入量、⑦粒度、⑧器色、⑨器面調整、⑩器厚)の順で表記

表 3-2 土器口縁部・胴部観察一覧

第幾版	No.	図番号	部位	口径(cm) 胴径(cm) 底径(cm)	分類 (大)	分類 (小)	観察一覧	出土地 台帳番号	
第20版	土器	3	21	口縁部	— — —	—	刺突文	角丸。直口。やや泥質。焼成:良好。混入物:白・角閃石。少量。細かい。外面色:暗一茶。内面:明一黄。丁寧一ナデ。ヘラーナデ一横。1123と同一か、孔4mm。	5トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台2091
			22	口縁部	20.2 — —	—	刺突文	丸。直口。泥質。焼成:やや良好。外面色:暗茶。内面色:暗赤。器面調整:外面・内面・丁寧一ユビ。竹管文。	5トレンチ 南5~10 白砂層 IV層c 台1160
			23	口縁部	— — —	—	刺突文 十沈線文	角。直口。やや泥質。焼成:良好。混入物:角閃石。少量。細かい。外面色:暗一茶赤。内面色:暗一茶赤。器面調整:外面・ヘラーナデ一横。内面・ヘラーナデ一横。沈線文一齧歯、2条。1132と同一個体。	6トレンチ 黒褐色 砂層 IV層b 台992
			24	口縁部	— — —	—	刺突文 十沈線文	角。直口。やや泥質。焼成:良好。混入物:石英。少量。細かい。外面色:暗一茶赤。内面色:暗一茶赤。器面調整:外面・ヘラーナデ一横。内面・ヘラーナデ一横。幅広沈線文一齧歯一2条、口唇一刺突。	6トレンチ 黒褐色 砂層 IV層b 台461
			25	口縁部	— — —	—	沈線文	舌。外反。やや砂質。焼成:やや良好。混入物:石英・白・角閃石。黒一多量一細かい。石英・白一少量一細かい。外面色:明一茶赤。内面色:暗一黒茶。器面調整:外面・丁寧一ナデ。内面・ヘラーナデ。外面一2条と3本、幅広沈線文一横位、深い。	5トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台329/用紙307
			26	口縁部	— — —	I 弥生	沈線文	舌。外反。やや泥質。焼成:やや良好。混入物:白。少量。細かい。外面色:暗一茶。内面色:暗一黒橙。器面調整:外面・ヘラーナデ。幅広沈線文一表張状2条。内面・沈線文一4条(ラフ)。ヘラーナデ。有孔一三角形。(8mm稍円)。竹。焼成前に穿孔。	5トレンチ 黄褐色 と下層との漸移層 IV層d
			27	口縁部	— — —	—	沈線文	舌。外反。やや泥質。焼成:やや悪い。外面色:明一橙。内面:明一橙。器面調整:外面・内面・ヘラーナデ。幅広沈線文一曲、裏一凹線。	6トレンチ 灰白色 貝クズ~灰褐色(貝クズ混) IV層c 台854
			28	胴部	— — —	—	沈線文	稜線。緩やかに湾曲。やや泥質。焼成:やや良好。混入物:石英。少量。細かい。外面色:暗一黒橙。内面色:暗一橙。器面調整:外面・内面・ヘラーナデ一横。幅広沈線文、ラフな曲線を描く。	5トレンチ 北5~南5 淡黒褐色砂層 IV層b 台656
			29	胴部	— — —	—	沈線文	砂質。焼成:やや良好。混入物:石英、透明粒。多量。細かい。外面色:明橙。内面色:暗茶。器面調整:外面・ヘラーナデ一縦。外面・ヘラーナデ一横顯著。沈線文一ラフな面図で、横位と齧歯文が見られる。	5トレンチ 南10~20 黒褐色砂層 IV層b 台2527
			30	胴部	— — —	—	沈線文	3mmの粒。焼成:良好。混入物:石英。少量。細かい。外面色:暗一茶赤。内面色:暗一茶赤。サンドイッチ状。器面調整:外面・灘。内面・ヘラー一横。有孔一4mm。	5トレンチ 南10~20 黒褐色砂層下部 IV層b 台326
第21版	土器	4	31	口縁部	22.4 — —	—	沈線文	丸。外反。やや泥質。焼成:やや悪い。混入物:黄シルト質粘土。多量。やや粗い。外面色:暗一茶。内面色:暗一茶。器面調整:外面・ヘラーナデ。内面・ヘラーナデ(幅25mm)が顯著。混和材を引きずる。	5トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b
			32	口縁部	— — —	—	沈線文	舌。外反。泥質。焼成:やや良好。混入物:石英・白(角閃石)。少量。細かい。外面色:暗一黒赤。内面色:暗一黒赤。器面調整:外面・内面・ヘラーナデ。幅広沈線文一波状。	5トレンチ 南10~20 黒褐色砂層 IV層b 台255
			33	胴部	— — —	—	沈線文	やや泥質。焼成:やや良好。混入物:石英・貝・角閃石。少量。やや細かい。外面色:暗一茶赤。内面色:暗一茶赤。器面調整:外面・ヘラーナデ。内外・幅広、波状、2条。	5トレンチ 北5~南5 白砂 IV層c 台1317
			34	胴部	— — —	—	沈線文	やや泥質。焼成:やや良好。混入物:石英・白。少量。やや細かい。外面色:暗一橙。内面色:暗一橙。器面調整:外面・ヘラーナデ。内面・ユビ一押。ヘラーナデ。幅広沈線文一波。	5トレンチ 南10~20 黒褐色砂層下部 IV層b 台326
			35	口縁部	29.4 — —	—	沈線文	内湾。やや砂質。焼成:良好。混入物:石英。少量。細かい。外面色:暗一茶黄。内面色:明一茶赤。器面調整:外面・ヘラーナデ一横。内面・ユビ一ヘラーナデ一横。	5トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台279
			36	口縁部	— — —	—	沈線文	丸。直口。泥質。焼成:悪い。混入物:粘板粒。少量。やや細かい。外面色:暗一茶。内面色:暗一茶。器面調整:内面・ヘラーナデ。沈線文一波状、孔6mm。	5トレンチ 南10~20 黒褐色砂層下部 IV層b 台326
			37	口縁部	25.6 — —	—	沈線文	舌。内湾。やや泥質。焼成:やや良い。混入物:石英(角閃石)。やや多い。細かい。外面色:明一赤黄。内面色:暗一黄。器面調整:外面・ヘラーナデ一横。幅広沈線文。	5トレンチ 南10~20 黒褐色砂層 IV層b 台2527
			38	口縁部	— — —	—	沈線文	舌。外反。やや泥質。焼成:良好。混入物:石英。少量。やや粗い。外面色:明一橙。内面色:明一橙。器面調整:外面・ヘラーナデ。内面・ハケ一ナデ。沈線文一不規則。浜原原。	5トレンチ 北5~南5 黒褐色砂層 IV層b 台2912
第22版	土器	5	39	口縁部	21.8 — —	—	I	角。内湾。玉縁。強い。やや砂質。焼成:やや良好。黄粘土粒・角閃石。多量。細かい。外面色:明橙。内面色:明橙。器面調整:外面・内面・丁寧一ユビ。玉縁一沈線か「く」。阿波連下層。	5トレンチ 南28~ 灰白色砂層 IV層c 台340
			40	口縁部	29.4 — —	—	II	直口。内湾削形。胴部でやや膨らむ。砂質。焼成:やや良好。混入物:角閃石。多量。細かい。外面色:明一赤。内面色:明一赤。器面調整:外面・丁寧一ユビ(斜)。内面・ヘラーナデ一横、顯著。	5トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台246

註:観察事項の項(①口縁部断面、②形態、③胎土、④焼成、⑤混入物、⑥混入量、⑦粒径、⑧器色、⑨器面調整、⑩器厚)の順で表記

表 3-3 土器口縁部・胴部観察一覧

図版	No.	図番号	部位	口径(cm) 胴径(cm) 底径(cm)	分類 (大)	分類 (小)	観察一覧	出土地 台帳番号	
第 22 図 (図版 11)	土 器	5	41	口縁部	26.6 — —	II	a	角。直口。「ハ」字状に開く。砂質。焼成:やや悪い。混入物:角閃石・透。多量。外面色:暗一赤。内面色:明一橙。器面調整:外面・ハケ。内面・ヘラーナデ。	5 トレンチ 南28~ 黒褐色砂層 IV層b 台279
			42	口縁部	— — —	II	a	角。直口。砂質。焼成:やや悪い。混入物:角閃石・透。多量。細かい。外面色:明一黄。内面色:明一橙黄。器面調整:外面・ハケナデ。内面・ユビ、顕著、裏面に積み残あり。	5 トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台245
			43	口縁部	— — —	II	a	角一玉。直口。口縁で僅かに外反。砂質。焼成:やや良好。混入物:角閃石。少量。細かい。外面色:明一橙。器面調整:外面・ハケ。内面・ユビ(横)。浜風原。	5 トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台2091
			44	口縁部	— — —	II	a	角。外反。砂質。焼成:良好。混入物:白小。多量。細かい。外面色:明一橙。内面色:明一橙。器面調整:外面・ナデ。内面・ユビ(縦)。浜風原。	5 トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台317
			45	口縁部	26.8 — —	II	b	丸。外反。やや泥質。焼成:良好。混入物:角閃石・透。少量。やや細かい。外面色:明一橙。内面色:明一灰。器面調整:外面・ハケナデ。内面・ハケナデ斜。積み残。	5 トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台279
第 23 図 (図版 12)	土 器	6	46	口縁部	34.4 — —	III	a	丸。舌。外反。やや泥質。焼成:やや良好。混入物:石英。少量。細かい。外面色:暗一茶赤黄。内面色:暗一茶褐。器面調整:外面・内面・はげている。	5 トレンチ 黄褐色砂層 と下層との漸移層 IV層b 台2523
			47	口縁部	18.2 — —	—	—	舌。外反。やや砂質。焼成:良好。混入物:角閃石・透。多量。粗い。外面色:明一黄。内面色:明一黄。器面調整:外面・丁寧・ユビナデ。内面・丁寧・ヘラ。	5 トレンチ 南10~20 灰褐色砂層(マンガン) IV層b 台983
			48	口縁部	21.0 — —	III	b	舌。外反。泥質。焼成:やや良好。混入物:石英・チャート。やや少量。細かい。外面色:明一橙。内面色:明一橙。器面調整:外面・ヘラーナデ縦。内面・ユビヘラーナデ横。傾。上]ゆるやかに溝曲。口唇一うち側へラで調整。	5 トレンチ 南10~20 白砂層 IV層c 台904
			49	口縁部	15.5 — —	III	b	舌。外反。泥質。焼成:良好。混入物:赤。やや少量。やや粗い。外面色:明一橙。内面色:明一橙。器面調整:外面・内面・丁寧・ユビ。	5 トレンチ 南10~20 黄褐色砂層 IV層b 台241
			50	口縁部	13.3 — —	III	c	玉。内湾。砂質。焼成:やや良好。混入物:石英(透)。やや多い。やや粗い。外面色:明一黄。内面色:明一黄。器面調整:外面・ユビヘラーナデ斜。内面・ユビ。	5 トレンチ 南28~ 黒褐色砂層 IV層b 台229
			51	口縁部	26.4 — —	III	a	丸。「く」。やや泥質。焼成:良好。混入物:白。少量。細かい。外面色:明一茶赤。内面色:暗一茶。器面調整:外面・雑一ハケ調下部は縦位。内面・ハケナデ横。	5 トレンチ 北5~南5 灰褐色(貝クズ混) IV層b 台1066
			52	口縁部	38.2 — —	IV	a	角。外反。やや泥質。黄褐色粘土質。焼成:良好。混入物:角閃石。やや多量。細かい。外面色:暗一黄。内面色:暗一黄。器面調整:外面・口縁一ユビナデ。胴一ヘラーナデ。内面・ヘラーナデ。弥生系か。	5 トレンチ 南28~ 灰白色砂層 IV層c 台323
			53	口縁部	— — —	IV	c	丸。外反・内。砂質。焼成:良好。混入物:少量。細かい。外面色:明一赤。内面色:明一橙。器面調整:外面・ナデ。内面・ユビ斜。	5 トレンチ 南28~ 黒褐色砂層 IV層b 台229
			54	口縁部	24.2 — —	IV	b	丸・舌。外反。やや砂質。焼成:やや良好。混入物:角閃石。外面色:明一赤。内面色:明一赤。器面調整:外面・ヘラーナデ縦。内面・ヘラーナデ横。	5 トレンチ 南28~ 黄褐色と下層との漸移層 IV層d 台215
			55	口縁部	17.2 — —	IV	d	丸。外反。やや泥質。焼成:やや悪い。混入物:石英・赤。少量。石英一細かい。赤一粗い。外面色:暗一茶。内面色:暗一茶。器面調整:外面・内面・ヘラーナデ。	5 トレンチ 北5~南5 灰白色砂層 IV層c 台1123
第 24 図 (図版 13)	土 器	7	56	口縁部	26.2 — —	IV	d	丸。外反。砂質。焼成:良好。混入物:石英。少量。やや粗い。外面色:明一橙。内面色:明一橙。器面調整:外面・内面・ヘラーナデ。	5 トレンチ 南10~20 黒褐色砂層下部 IV層b 台326
			57	口縁部	24.2 — —	IV	d	丸。外反。やや泥質。焼成:良好。混入物:やや多い。細かい。外面色:明一黄。内面色:明一赤。器面調整:外面・ヘラーナデ斜。内面・ユビ(縦)。	5 トレンチ 黄褐色と 下層との漸移層 IV層d 台2060
			58	口縁部	36.0 — —	IV	b	丸。外反。やや泥質。焼成:良好。混入物:黄粘土粒。少量。粗い。外面色:明一橙。内面色:明一橙。器面調整:外面・内面・丁寧・ユビ。	5 トレンチ 南10~20 黒褐色砂層 IV層b
			59	胴部	29.2 — —	—	—	やや泥質。焼成:やや良好。混入物:角閃石。やや少量。細かい。外面色:明一茶。内面色:暗一黄。器面調整:外面・ヘラーナデ横縦。内面・ヘラーナデ横。	5 トレンチ 暗褐色砂質土層 IV層c 台2046
			60	口縁部	18.6 — —	IV	e	舌。外反。砂質。焼成:良好。混入物:石英。多量。やや粗い。外面色:暗一橙一茶。内面色:暗黄褐色。器面調整:外面・丁寧・ハケナデ。内面・やや雑一指頭圧痕。	5 トレンチ 北5~南5 灰褐色(貝クズ混) IV層b
			61	口縁部	26.2 — —	IV	e	舌。外反。やや砂質。焼成:良好。混入物:少量。細かい。外面色:明一橙。内面色:暗一橙。器面調整:外面・ユビ。内面・ハケ。	5 トレンチ 北5~南5 灰褐色砂層(貝片混) IV層b 台1006

註:観察事項の項(①口縁部断面、②形態、③胎土、④焼成、⑤混入物、⑥混入量、⑦粒度、⑧器色、⑨器面調整、⑩器厚)の順で表記

表 3-4 土器口縁部・胴部観察一覧

図版 No.	図 番号	部 位	口径(cm) 胴径(cm) 底径(cm)	分類 (大)	分類 (小)	観察一覧	出土地 台帳番号
第 25 図 器 (図 版 14)	62	口縁部	— — —	V	a	舌。直口逆「ハ」字状。砂質。焼成:やや良好。混入物:石英、やや少量。細かい。外面色:暗一赤～茶。内面色:暗一褐。器面調整:外面・ヘラナデー縦。器面調整:外面・ヘラナデー顕著斜。口唇は指でつまみ、不定。	5 トレンチ 黄褐色粘質土層下部 IV層b
	63	口縁部	— — —	V	a	舌。直口。やや砂質。焼成:良好。混入物:透。やや少量。細かい。外面色:明一茶。内面色:暗一灰。器面調整:外面・ヘラナデー縦。内面・ヘラナデー。	5 トレンチ 南20～28 黄褐色と下層との漸移層 IV層b 台211
	64	口縁部	33.4 — —	V	a	舌。やや内傾。やや泥質。焼成:やや良好。混入物:石英(角閃石)。やや少量。細かい。外面色:暗一茶赤。内面色:暗一黒茶。器面調整:外面・ユビヘラー押ナデー横。内面・ユビヘラー押ナデー横。	5 トレンチ 南28～黒褐色砂層下部 IV層b 台350
	65	口縁部	29.6 — —	V	b	舌。内傾。砂質。焼成:良好。混入物:石英。やや少量。細かい。外面色:暗一褐。内面色:暗一褐。器面調整:外面・指ナデ。内面・ヘラナデー。幅広一沈線文、横。	6 トレンチ 灰褐色貝クズ IV層b 台2402
	66	口縁部	28.0 — —	V	b	舌。内傾。泥質。焼成:良好。混入物:角閃石。少量。細かい。外面色:明一褐。内面色:明一褐。器面調整:ヘラナデー。内面・ヘラナデー横。	6 トレンチ 黒褐色砂層(茶混) IV層b 台694
第 26 図 器 (図 版 15)	67	胴部	— — —	V	c	やや泥質。焼成:良好。混入物:角閃石。少量。細かい。外面色:暗一黄。内面色:暗一黄。器面調整:外面・ヘラナデー。	5 トレンチ 北5～南5 黄褐色砂層 IV層b 台1064
	68	口縁部	30.0 — —	VI	a	舌。外反。砂質。焼成:良好。混入物:石英黄褐色粘土粒。少量。やや粗い。外面色:暗一赤。内面色:明一赤茶。器面調整:外面・ユビヘラー。内面・指頭玉痕、ユビ。	6 トレンチ 黒褐色砂層(茶混) IV層b 台998
	69	口縁部	— — —	VI	a	舌。外反。やや泥質。焼成:良好。混入物:角閃石・赤。多量。細かい。外面色:暗一茶赤。内面色:明一黄。器面調整:外面・ヘラナデー。内面・ハケナデー。顕著。	5 トレンチ 南20～28 黒褐色砂層 IV層b 台2402
	70	口縁部	28.6 — —	VI	a	角・舌。反。やや砂質。焼成:やや良好。外面色:暗一茶赤。内面色:明一黄。器面調整:外面・ハケナデー横。内面・ユビヘラー押ナデー横。	5 トレンチ 南28～黒褐色砂層 IV層b 台301
	71	口縁部	19.0 — —	VI	c	舌。直口。やや泥質。焼成:良好。混入物:赤粒。外面色:明一茶赤。内面色:明一茶赤。器面調整:外面・内面・ヘラナデー。	5 トレンチ 北5～南5 茶褐色(粘土) IV層b 台2181
第 27 図 器 (図 版 16)	72	口縁部	28.7 — —	VI	b	丸。直口。やや泥質。焼成:良好。混入物:赤・黄粘土粒。少量。細かい。外面色:明一褐。内面色:明一灰。器面調整:外面・コピ(縦)。内面・ヘラナデー斜。針。	5 トレンチ 南28～黄褐色と下層との漸移層 IV層d 台2025
	73	口縁部	32.8 — —	VI	b	丸。直一不揃。砂質。焼成:良好。混入物:石英。やや多量。細かい。外面色:明一赤。内面色:明一褐。器面調整:外面・ユビ(縦)。内面・ユビ(斜)。	6 トレンチ 白砂層 IV層c 台1026
	74	口縁部	16.8 — —	VI	c	丸。直。やや泥質。焼成:良好。混入物:透明・赤粒。少量。細かい。外面色:明一褐。内面色:明一褐。器面調整:外面・内面・ユビナデー。	6 トレンチ 黒褐色茶混じり IV層b 台998
	75	口縁部	17.7 — —	VI	d	舌。内傾。泥質。焼成:やや良好。外面色:暗一褐。内面色:暗一褐。器面調整:外面・ユビヘラー押ナデー横。内面・ヘラナデー横。	6 トレンチ 茶褐色砂層 IV層b 台717
	76	口縁部	— — —	VI	d	角・舌。内傾。やや砂質。焼成:やや良好。混入物:石英・角閃石。石英一少一粗い。黒一やや多量一細かい。外面色:明一茶赤。内面色:明一茶赤。器面調整:外面・内面・ユビヘラーナデー。	5 トレンチ 南5～10 黒褐色粘粘土混 IV層b 台496
第 28 図 器 (図 版 17)	77	口縁部	17.8 — —	VI	d	舌。内傾。やや泥質。焼成:良好。外面色:明褐。内面色:明黄。器面調整:外面・雑一ハケ斜。内面・丁軍一ハケ横。ハゲ幅2mm。	5 トレンチ 南10～20 黒褐色砂層 IV層b
	78	口縁部	25.2 — —	VI	d	角。内傾。やや泥質。焼成:やや良好。混入物:白・角閃石。やや少量。細かい。外面色:暗一赤。内面色:明一茶。器面調整:外面・内面・ヘラナデー。	5 トレンチ 北5～南5 黒褐色(バミス)～淡黒褐色 IV層b 台583
	79	口縁部	26.4 — —	VI	b	丸。内傾。泥質。焼成:良好。混入物:石英。少量。細かい。外面色:明一黄。内面色:明一黄。器面調整:外面・ユビ。内面・コピ・ハケ横。	5 トレンチ 北5～南5 灰白色砂層 IV層c 台1130
	80	口縁部	37.2 — —	VI	b	丸。内傾。砂質。焼成:良好。混入物:石英。少量。やや粗い。外面色:明一褐。内面色:明一赤。器面調整:外面・ユビ粗面縦。内面・ユビナデー横。内傾。明橙褐色。	5 トレンチ 北5～南5 黒褐色砂層 IV層b 台2912
	81	口縁部	26.0 — —	VI	e	丸。直口。やや泥質。焼成:やや良好。混入物:石英。やや少量。細かい。外面色:暗一赤。内面色:暗一赤。器面調整:外面・ヘラナデー斜ズリ横一縦。内面・ヘラナデー。	5 トレンチ 北5～南5 灰褐色(貝クズ) IV層b 台1328
82	口縁部	— — —	VI	e	舌。直口。やや砂質。焼成:やや良好。混入物:石英・白。少量。細かい。外面色:明一黄。内面色:明一黄。器面調整:外面・ヘラナデー斜ズリ横。	5 トレンチ 北5～南5 黒褐色砂層 IV層b 台1243	

註: 観察事項の項 ①口縁部断面、②形態、③胎土、④焼成、⑤混入物、⑥混入量、⑦粒度、⑧器色、⑨器面調整、⑩器厚の順で表記

げ。東壁断面実測。

- 4月23日 5トレンチ（北5～南5m）西中 灰白色砂層掘り下げ、貝輪・土器一括、取り上げ。灰白色粘質土層範囲確認。北東 白砂（黄混）土器取り上げ、側からイノシシ下顎骨検出。北ビット掘り下げ（樹痕）が残る。
- 4月24日 5トレンチ（北5～南5m）西中 灰白色粘質の掘り下げ（自然面）。西中 灰白色砂層の掘り下げ。北 白砂（黄褐色混）の掘り下げ。北 ビット状、周辺掘り下げ。
- 4月25日 5トレンチ（北5～南5m）中 灰白混粘質の掘り下げ。（北5～南5m）北 白砂（黄混）の掘り下げ。（北5～南5m）北東より貝輪検出。（北5～南5m）南 白砂掘り下げ。
- 4月26日 5トレンチ（北5～南5m）白砂層より貝輪検出。（北5～南5m）赤褐色砂層（粗）2cmずつ掘り下げ。
- 4月27日 5トレンチ（北5～南5m）白砂下層掘り下げ。イノシシ下顎骨、頭蓋骨、四肢骨など検出。東壁断面実測。
- 5月2日 5トレンチ（北5～南5m）西壁断面実測。

第三節 層序

本遺跡の東側調査区は、1・2トレンチはもともと微高地を成していたと見られる。基地建設の際に平坦にするために削り出して整地したと思われる。1・2トレンチの堆積状況は類似し、3トレンチは北西側の微高地から緩やかに南へ傾斜し、平坦地を形成していたと思われる。

西側調査区は、1・2トレンチから続く微高地が5トレンチの北側及び4トレンチまで延びるとおもわれる。そこから南西側に平坦地を形成している。5トレンチの南側では、北東側から流れるナルカー（奈留川）の河川跡が検出された。包含層は北東側の微高地からナルカーの河川跡に囲まれた範囲で確認された。

A. 1・2トレンチ

I層：客土

米軍基地建設の際に整地され、上層部は橙褐色土、中層部は暗茶褐色土、下層部は橙褐色混礫土で構成されている。下層部の橙褐色混礫土は微高地を削り出した際の埋土と思われる。

II層a：旧表土（戦前の耕作土）

2トレンチの北東角に堆積し、北側に広がる様相を呈している。1トレンチでは確認できないことから、もともとの微高地北東側に堆積していたと思われる。その下部に薄く灰褐色土（II層類似）が堆積する。沖縄産陶器・本土産陶磁器などが出土する。

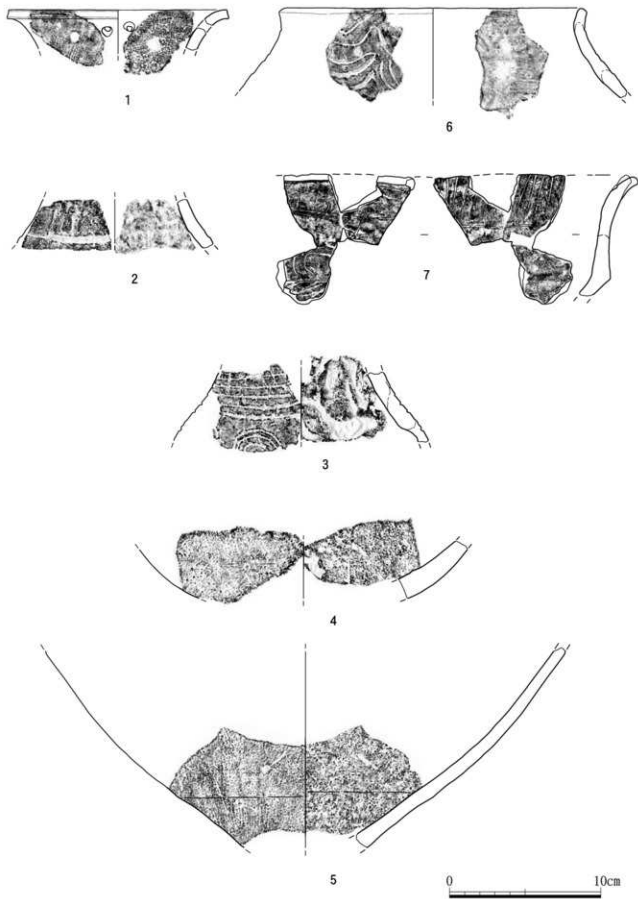
VI層：地山

石灰岩の露頭部が所々見られ、それを赤土（VI層a）が覆う。

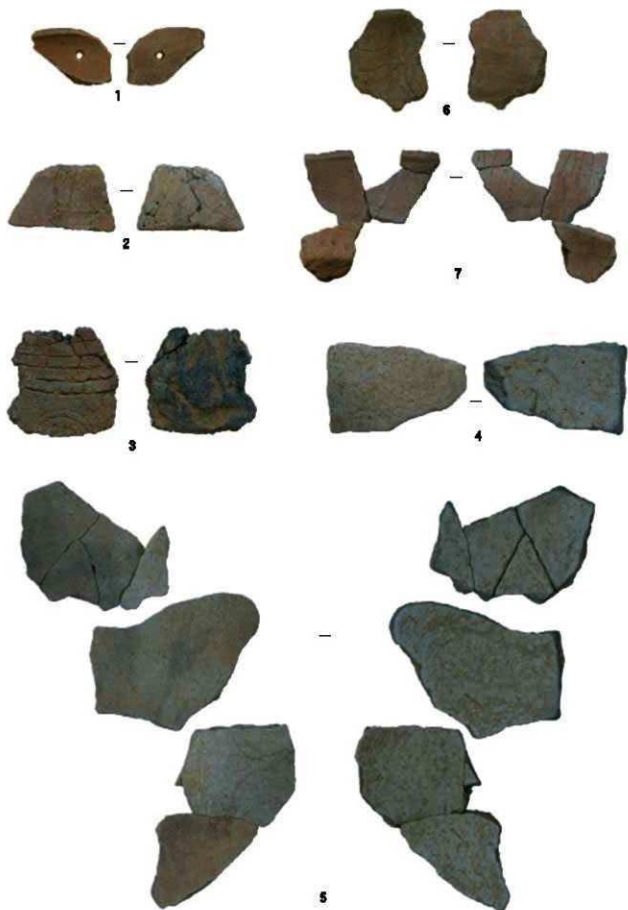
表 3-5 土器口縁部・胴部観察一覧

第幾図版	No.	図番号	部位	口径(cm) 胴径(cm) 底径(cm)	分類 (大)	分類 (小)	観察一覧	出土地 台帳番号	
第28図 (図版17)	土器	11	83	口縁部	36.2 — —	VI	e	外反「く」。砂質。焼成:やや良好。混入物:赤粒。少量。細かい。外面色:暗一橙。内面色:暗一橙。器面調整:外面・ヘラナダエ口縁は斜、胴部は縦位。内面・ヘラナダエ縦、胴部は横かも。	6 トレンチ 茶褐色砂層 IV層b 台597
			84	口縁部	— — —	VI	e	舌。外反:直。やや泥質。焼成:悪い。混入物:石英・白。やや多量。細かい。混入物:暗一黒赤。内面色:暗一黒赤。器面調整:外面・雑・ハケナダエ縦。内面・丁穿・ヘラナダエ横。	5 トレンチ 北5~南5 白砂(黄褐色混) IV層c 台1261
			85	口縁部	— — —	VII	a	舌。外反。やや砂質。焼成:やや良好。混入物:白。少量。細かい。外面色:暗一茶。内面色:明一茶赤。器面調整:外面。内面・ユビエ押・ヘラナダエ。	5 トレンチ 南20~28 黒褐色砂層 IV層b 台307
第29図 (図版18)	土器	12	86	口縁部	45.6 — 1.7	VI	f	舌。外反。砂質。焼成:良好。混入物:石英。多量。粗い。外面色:暗赤。内面色:暗赤。器面調整:外面・ヘラ縦。内面・ヘラナダエ横。	5 トレンチ 北5~南5 黒褐色砂層 IV層b 台1233
			87	口縁部	50.6 — —	VI	g	舌。直口。やや泥質。焼成:やや良好。混入物:石英・角閃石。やや少量。細かい。外面色:暗一茶赤。内面色:暗一茶赤。器面調整:外面。内面ヘラナダエ横。	5 トレンチ 南5~10 IV層b 台2302
第30図 (図版19)	土器	13	88	口縁部	24.0 — —	V	b	舌。直口。砂質。焼成:良好。混入物:赤粒。少量。粗い。外面色:暗一橙。内面色:暗一橙。器面調整:外面・ユビエナダ。内面・ハケナダエ横。	6 トレンチ 白砂層 IV層c 台1041
			89	口縁部 ~底部	27.4 — 7.4	III	b	丸。「く」の字湾曲して外反。やや泥質。混入物:砂粒。細かい。焼成:やや良好。外面色:暗一黄褐。内面色:暗一灰黄。器面調整:外面・丁穿ユビエナダ。内面・丁穿・ハケナダエ横。平底。胴部に穿孔。	5 トレンチ 南10~20 V層 台968
第31図 (図版20)	土器	14	90	胴部	— — —	—	—	砂質。焼成:やや良好。混入物:透明粒、角閃石。多量。外面色:明一黄。内面色:暗一灰。器面調整:外面。内面・悪い。弥生系	3 トレンチ 灰白色粗粒砂層 IV層b 台438
			91	口縁部	27.6 — —	—	—	舌。外反。やや砂質。焼成:やや良好。混入物:白。少量。細かい。外面色:暗一赤。内面色:暗一赤。器面調整:外面。内面・ユビエ押・ヘラナダエ。文様か凸はがれ。	3 トレンチ 黒褐色細粒砂質土層 IV層b 台444
			92	口縁部	11.0 — —	—	—	角。外反。やや泥質。焼成:やや悪い。混入物:石英。やや少量。細かい。暗一黄。暗一黄。器面調整:外面・文様。内面・ユビエ押。有文一沈線文、鋸歯状。	4 トレンチ 褐色砂質土層 IV層a 台447
			93	口縁部	— — —	—	—	角。外反。やや泥質。焼成:やや悪い。混入物:石英(角閃石)。やや少量。外面色:暗一茶。内面色:暗一橙。器面調整:外面・ユビエ押。内面・ヘラナダエ。	4 トレンチ 暗褐色砂質土層 IV層a 台2013
			94	口縁部	12.8 — —	—	—	角。外反。やや砂質。焼成:やや良好。混入物:白。やや多量。細かい。外面色:明一黄。内面色:明一茶。器面調整:外面。内面ユビエヘラナダエ。	4 トレンチ 黒褐色砂層 IV層b 台64
			95	口縁部	9.8 — —	—	—	角。外反。泥質。焼成:やや良好。混入物:石英・白・貝。やや多量。細かい。外面色:暗一茶。内面色:暗一黄。器面調整:外面・ユビエヘラナダエ。	4 トレンチ 黒褐色土層 IV層a 台446
			96	口縁部	— — —	—	—	角。外反。泥質。焼成:悪い。混入物:石英。やや少量。外面色:暗一茶。内面色:暗一茶。器面調整:外面・ユビエ押・ヘラナダエ。「く」字かもローリングかも。	4 トレンチ 不明 台2689
			97	底部	— — —	B	不	尖底・乳房状。やや泥質。焼成:やや悪い。混入物:石英・白。やや少量。細かい。外面色:暗一茶。内面色:暗一黒。	4 トレンチ 褐色砂質土層 IV層a 台451
			98	底部	— — —	B	不	尖底。砂質。焼成:良好。混入物:石英。少量。細かい。外面色:明一灰茶。内面色:明一赤橙。器面調整:外面・ユビ。内面・丁穿・ユビ。	4 トレンチ 褐色砂質土層 IV層a 台451
			99	底部	— — 6.2	E	a	くびれ平底。やや泥質。焼成:やや悪い。混入物:白。少量。細かい。外面色:暗一橙。内面色:暗一黄。	4 トレンチ 褐色砂質土層 IV層a 台451
			100	底部	— — —	E	a	くびれ平底。砂質。焼成:良好。混入物:石英・透。多量。やや粗い。外面色:明一橙。内面色:明一橙。器面調整:外面・ユビエ縦。	4 トレンチ 不明 台2719
			101	底部	— — 7	E	a	くびれ平底。砂質。焼成:良好。混入物:光・透。細かい。外面色:明一黄。内面色:明一黄。	4 トレンチ 暗褐色砂質土層 IV層a 台2013
			102	底部	— — —	E	a	くびれ平底。やや泥質。焼成:やや悪い。混入物:石英。少量。やや粗い。外面色:明一黄。内面色:明一黄。	4 トレンチ 黒褐色細粒砂質土層 IV層a 台446

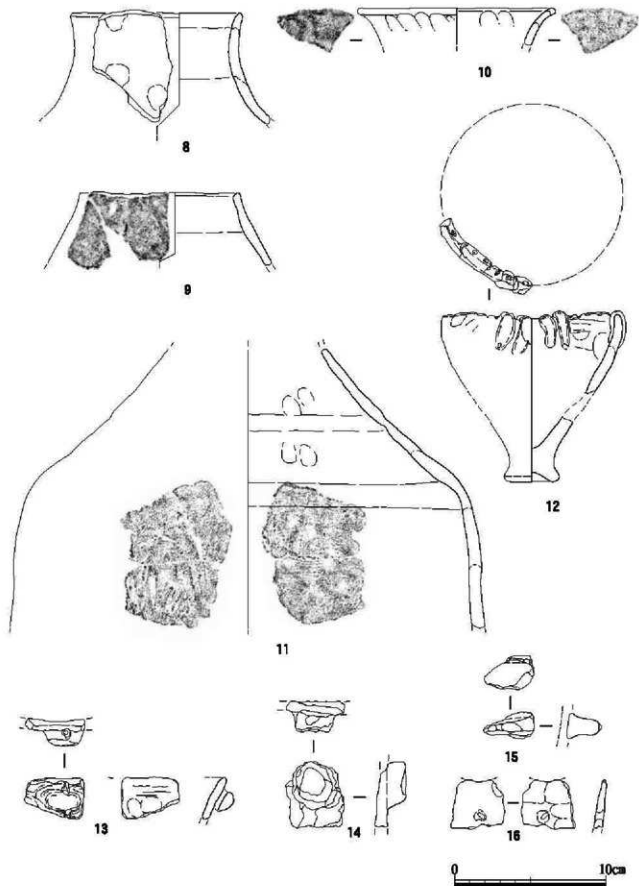
註:観察事項の項(①口縁部断面、②形制、③胎土、④焼成、⑤混入物、⑥混入量、⑦粒度、⑧器色、⑨器面調整、⑩器厚)の順で表記



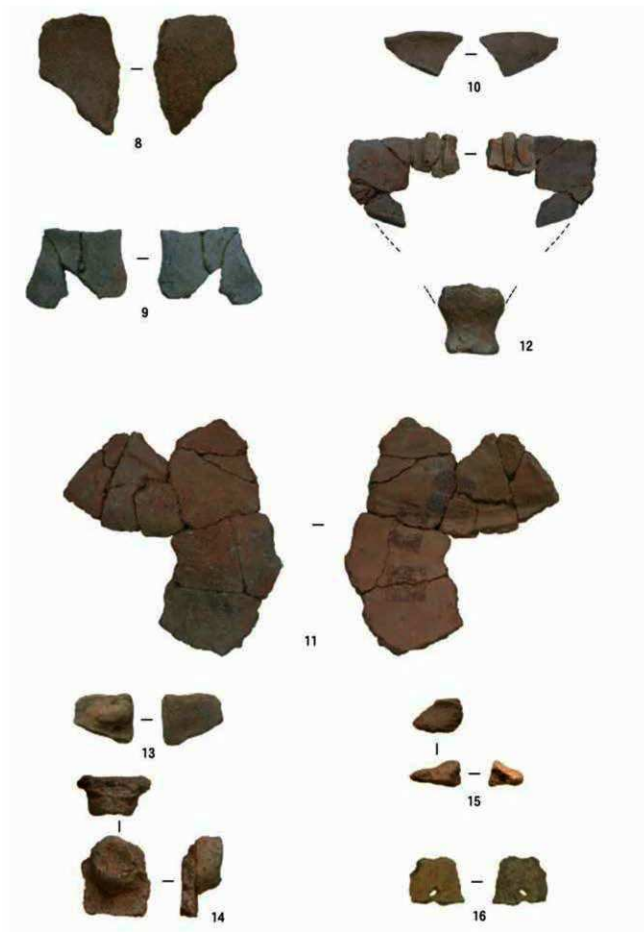
第18圖 土器 1 (口縁部)



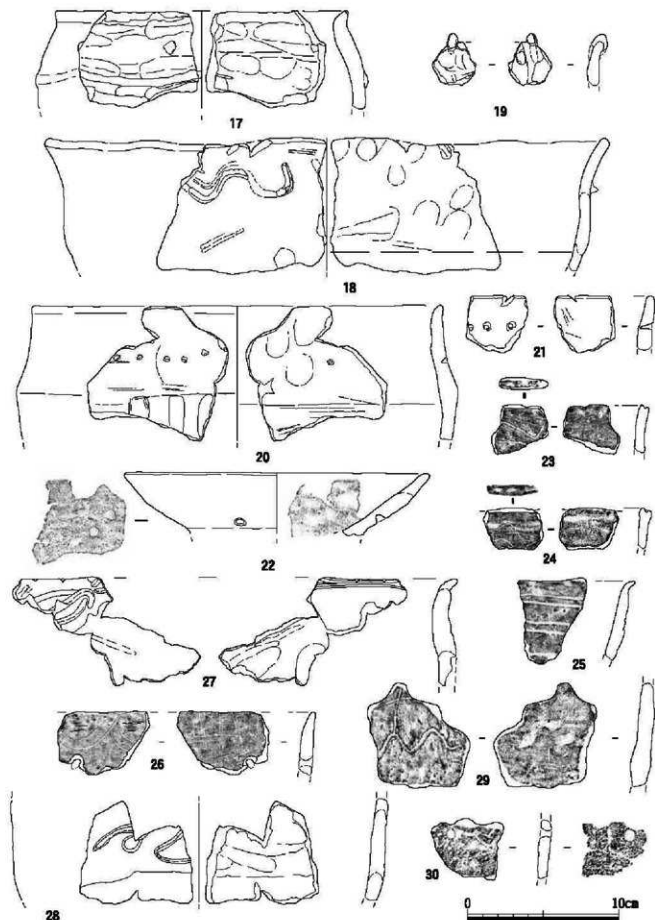
図版 7 土器 1 (口縁部)



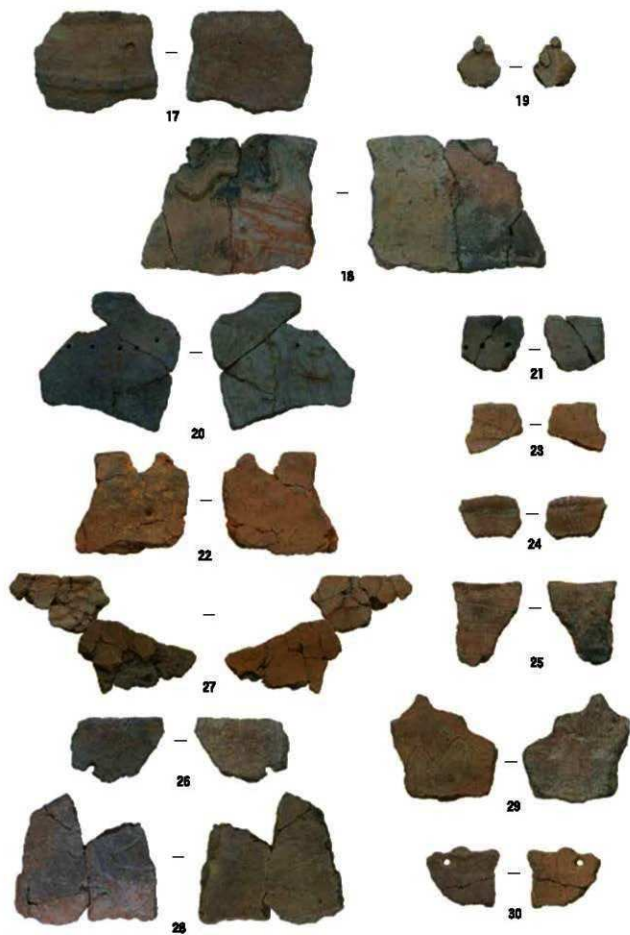
第19圖 土器 2 (口縁部)



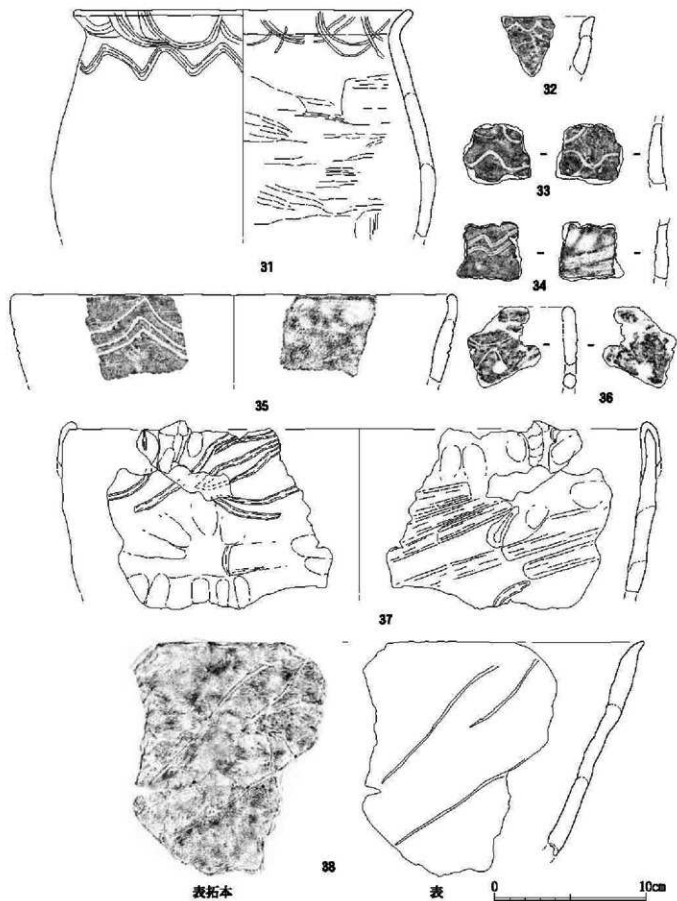
図版 8 土器 2 (口縁部)



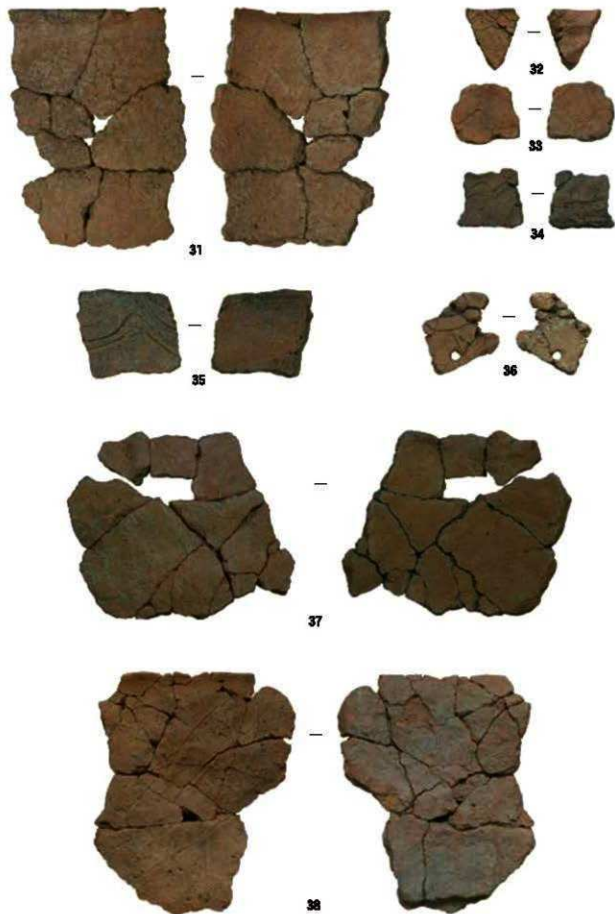
第20圖 土器 3 (口縁部)



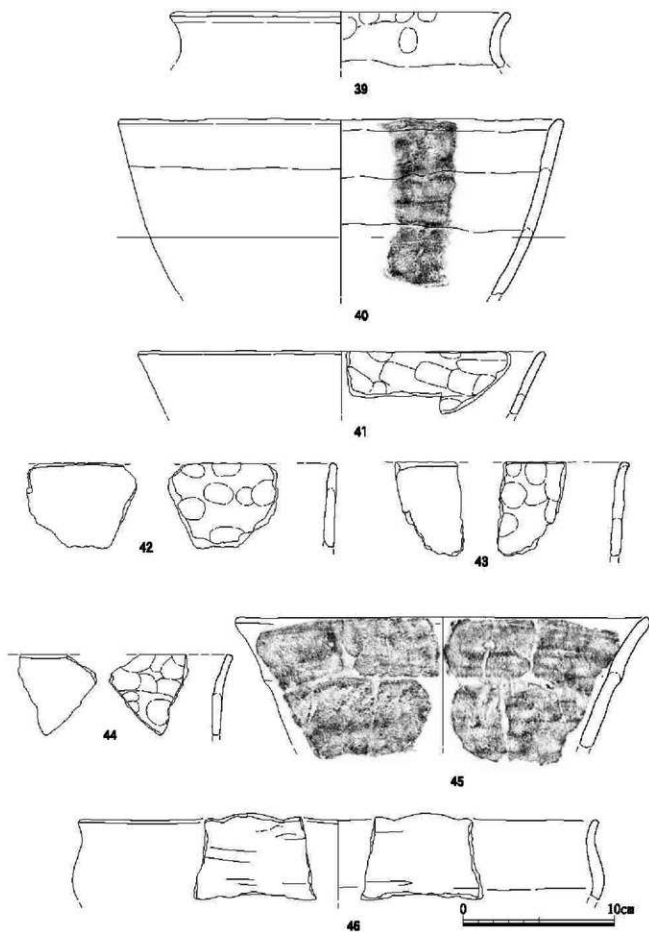
図版 9 土器 3 (口縁部)



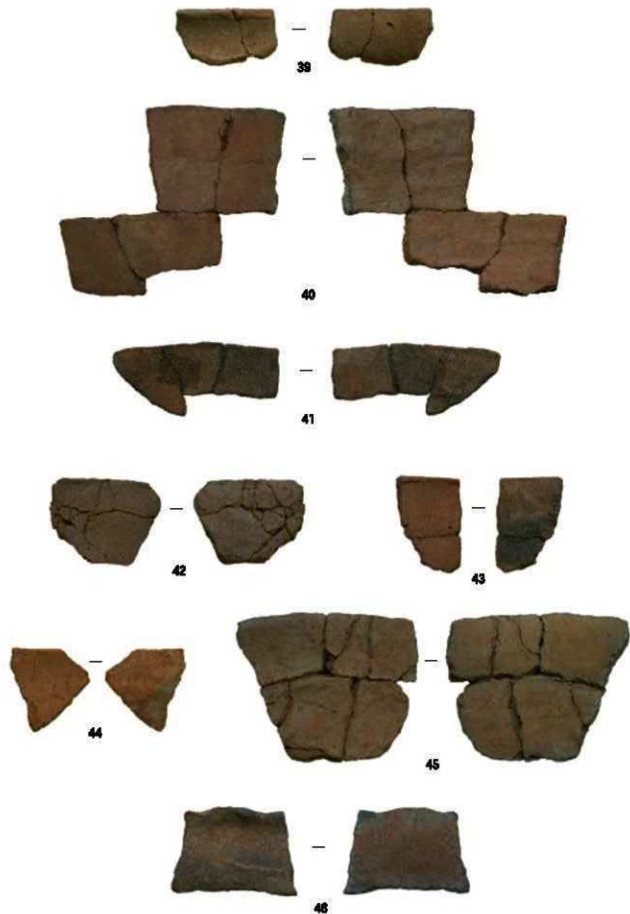
第21圖 土器 4 (口縁部)



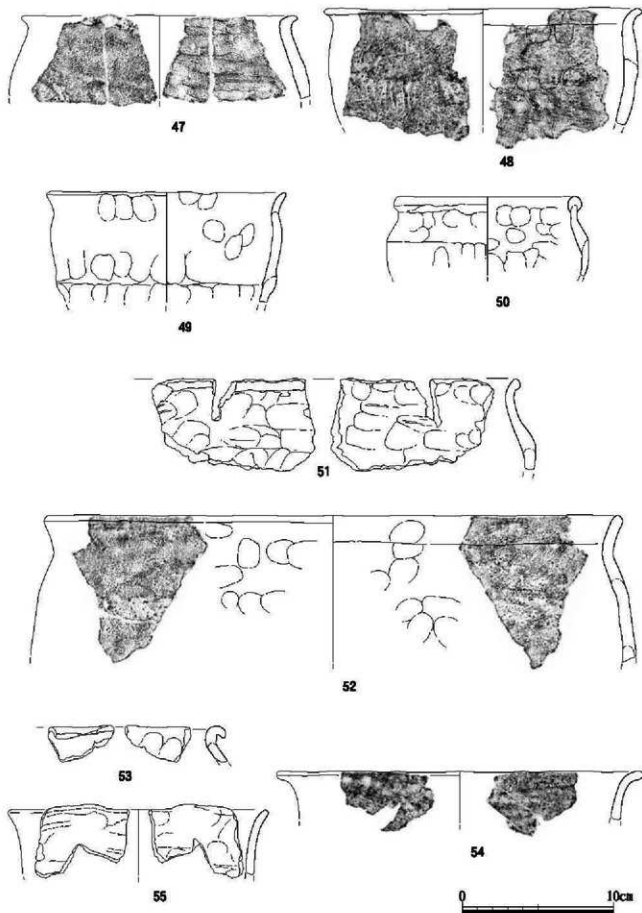
図版 10 土器 4 (口縁部)



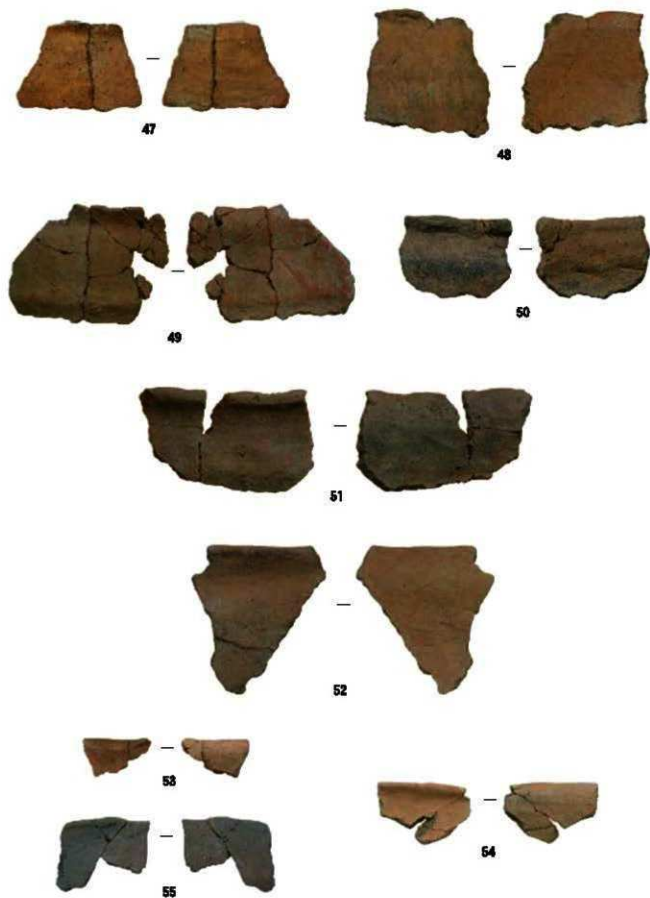
第22圖 土器 5 (口縁部)



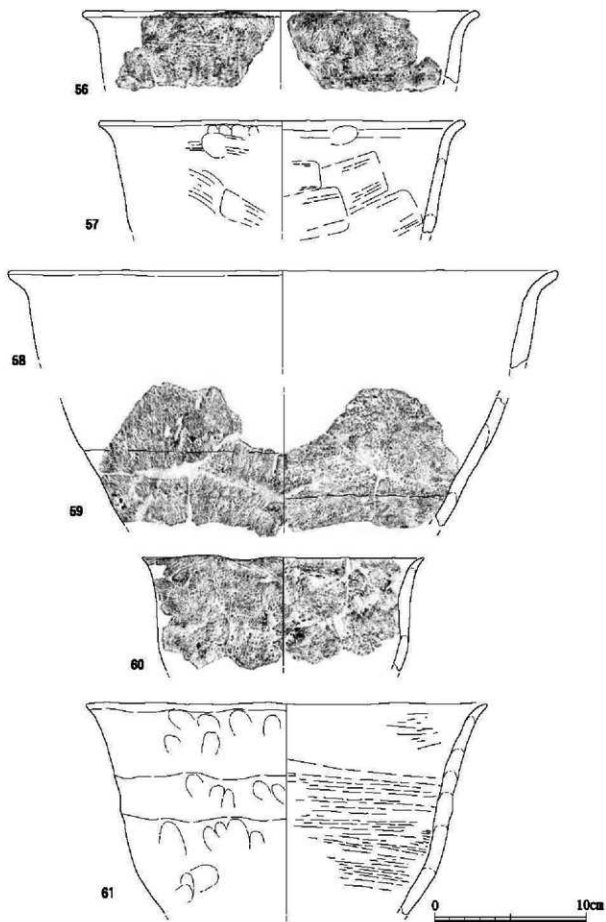
圖版 11 土器 5 (口緣部)



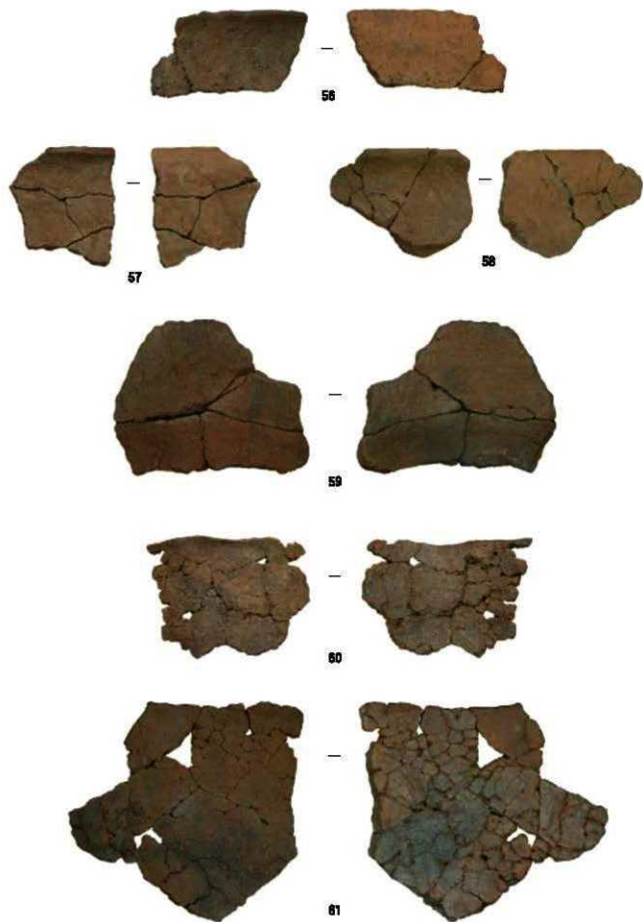
第23圖 土器 6 (口縁部)



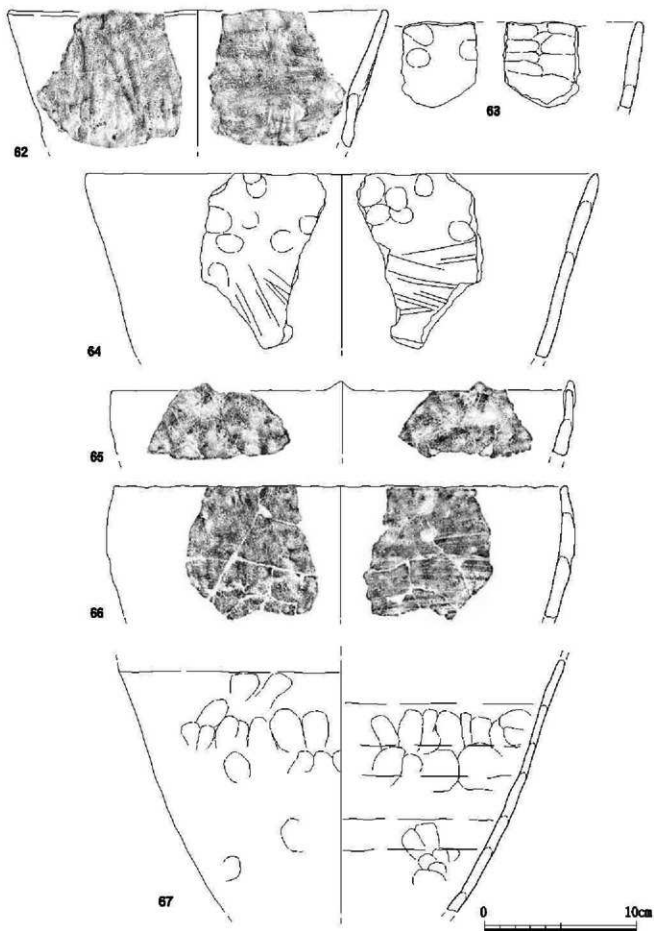
図版12 土器6 (口縁部)



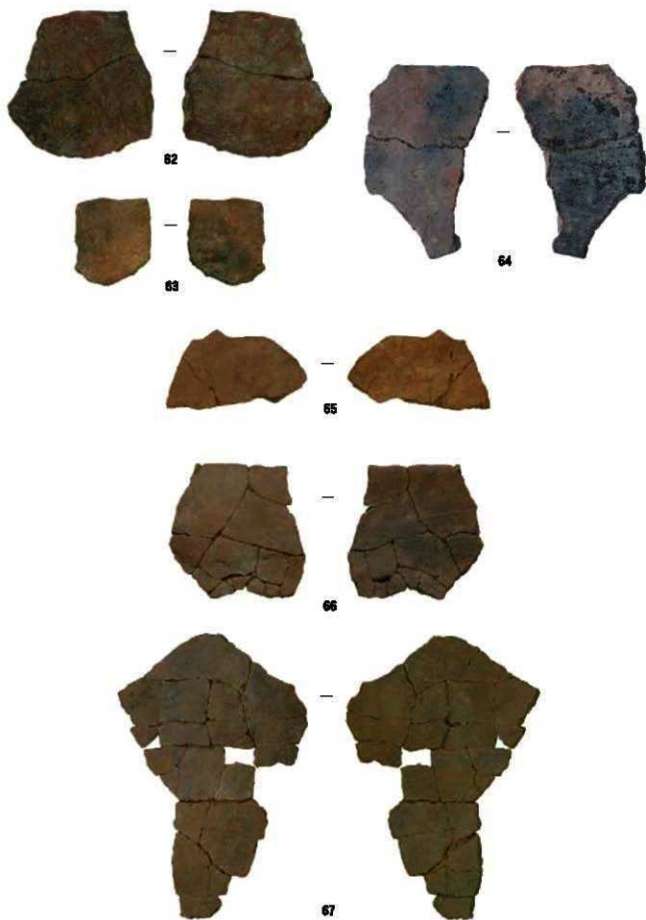
第24図 土器 7 (口縁部)



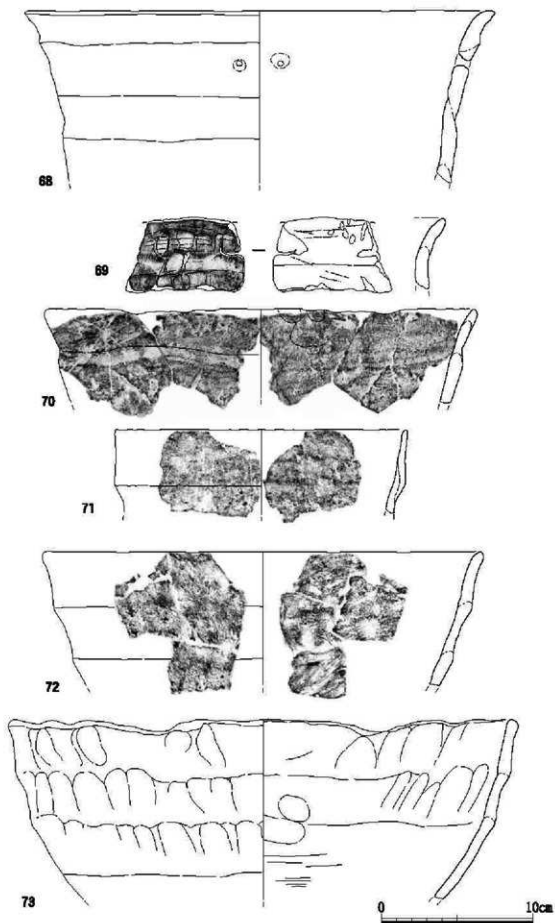
図版13 土器7 (口縁部)



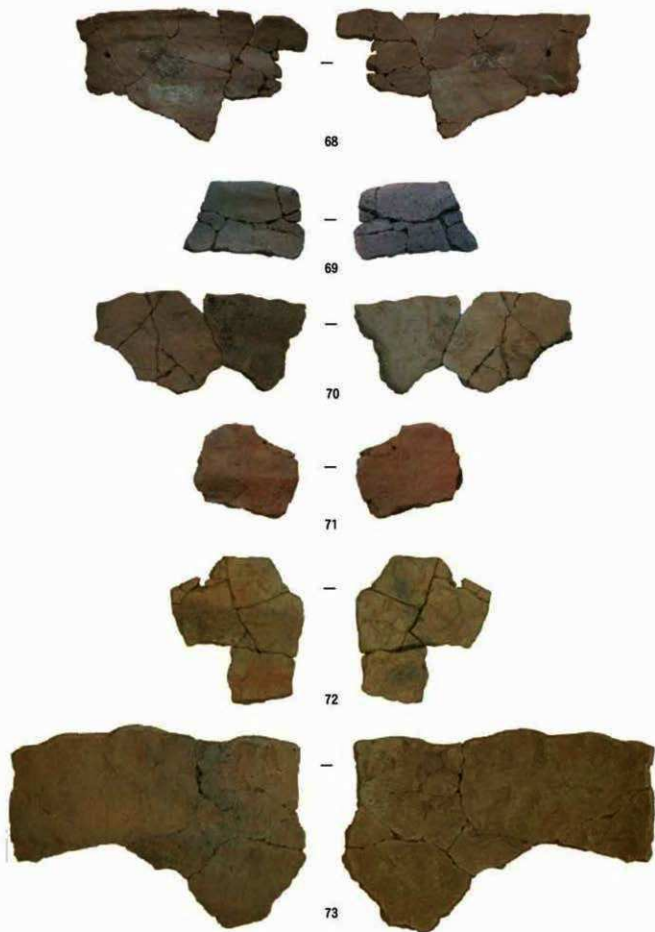
第25図 土器 8 (口縁部)



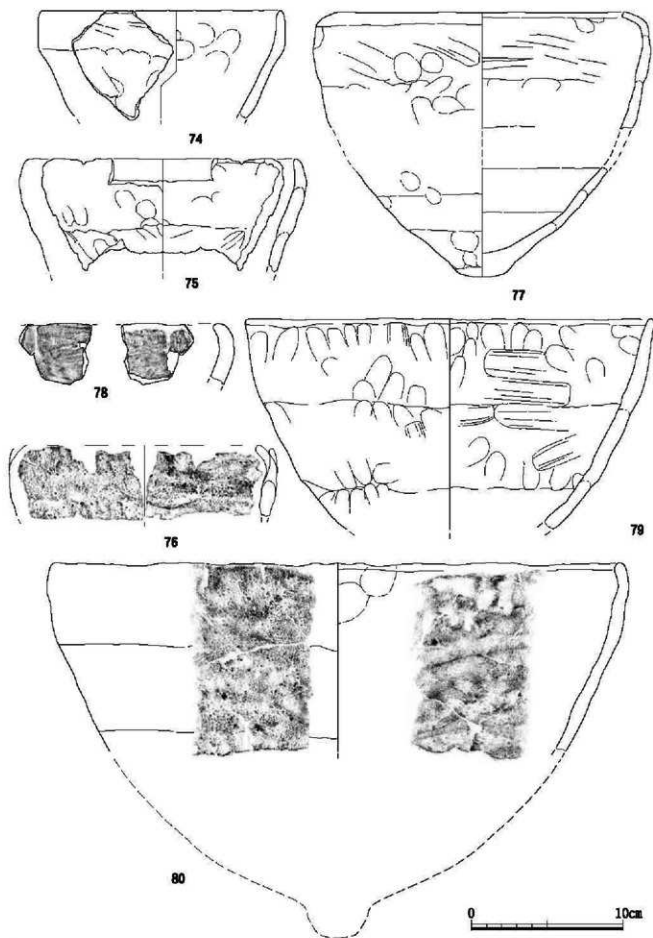
図版 14 土器 8 (口縁部)



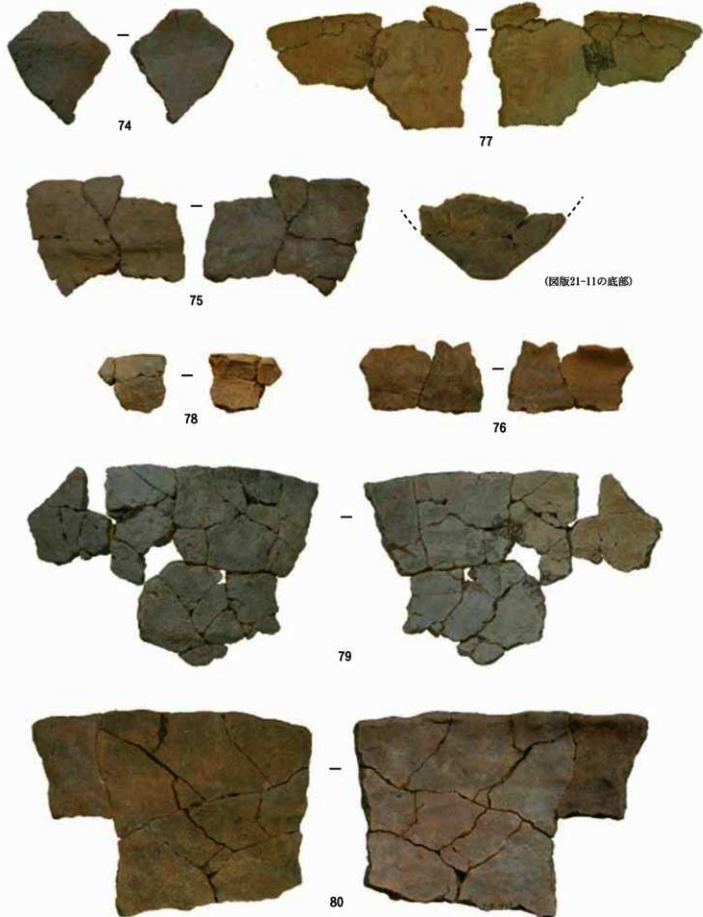
第26圖 土器 9 (口縁部)



図版 15 土器 9 (口縁部)

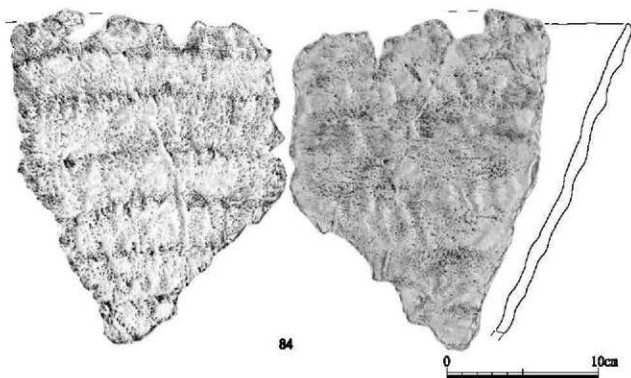
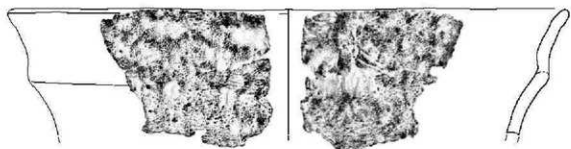
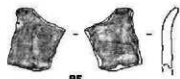
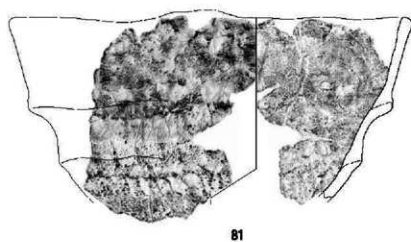


第27図 土器10 (口縁部)

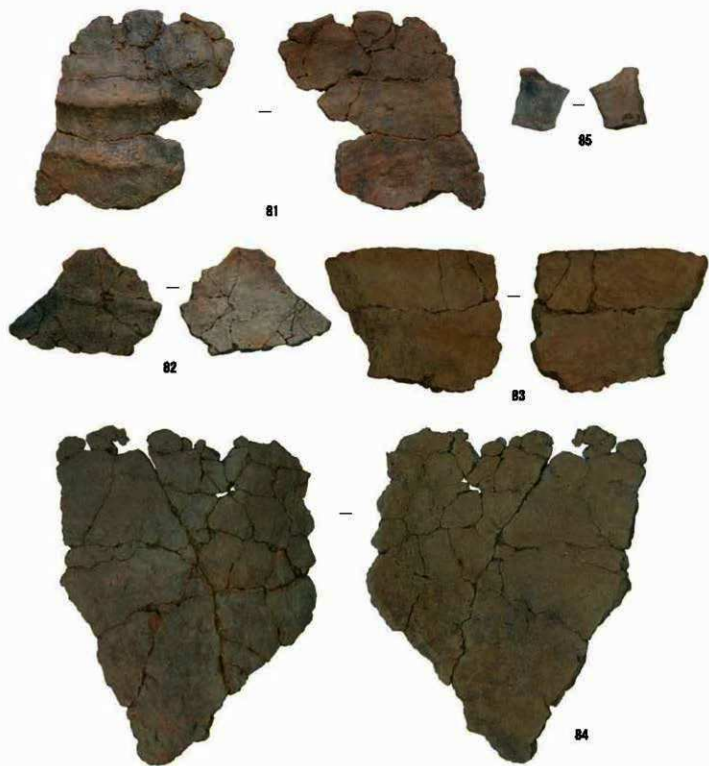


(図版21-11の底部)

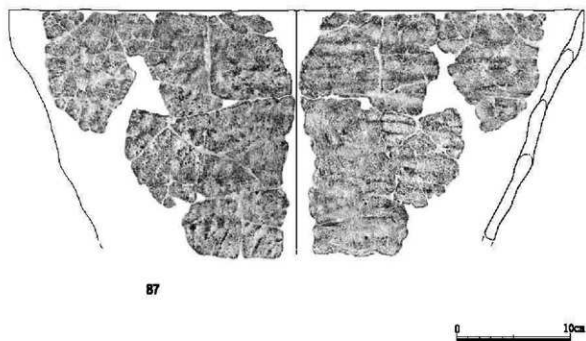
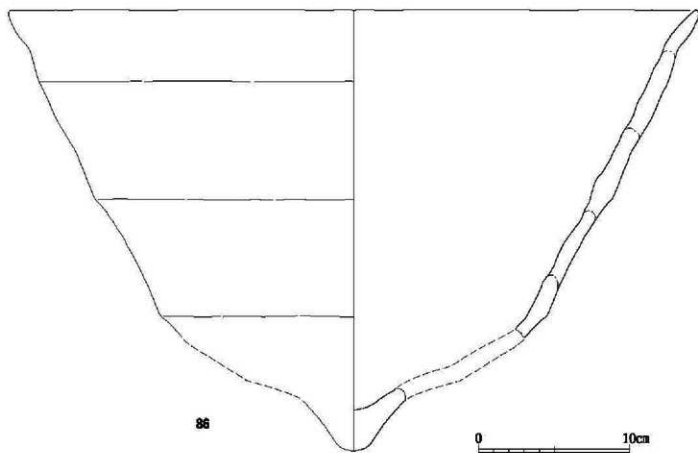
図版16 土器10 (口縁部)



第28圖 土器11 (口縁部)



図版 17 土器 11 (口縁部)



第29図 土器12 (口縁部)



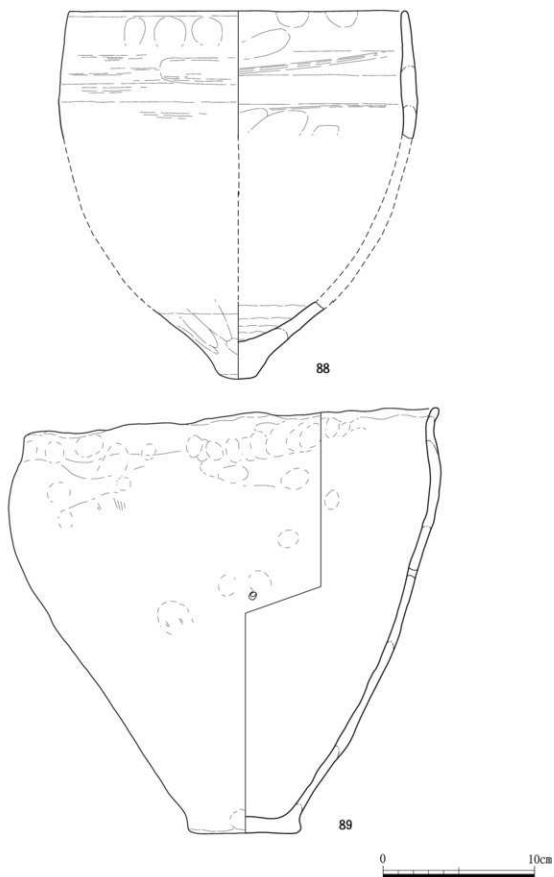
86



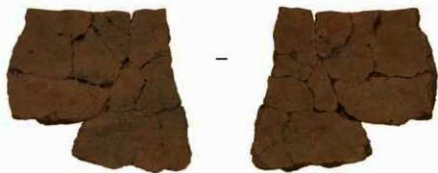
87



図版 18 土器 12 (口縁部)



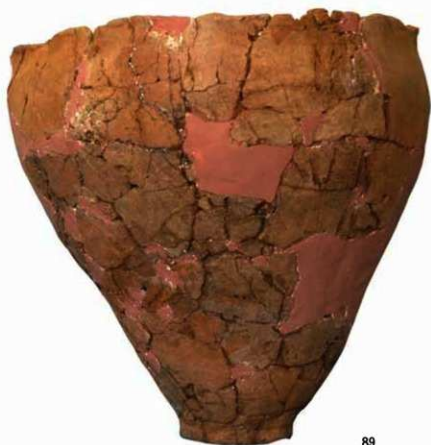
第30圖 土器13 (復元土器)



88

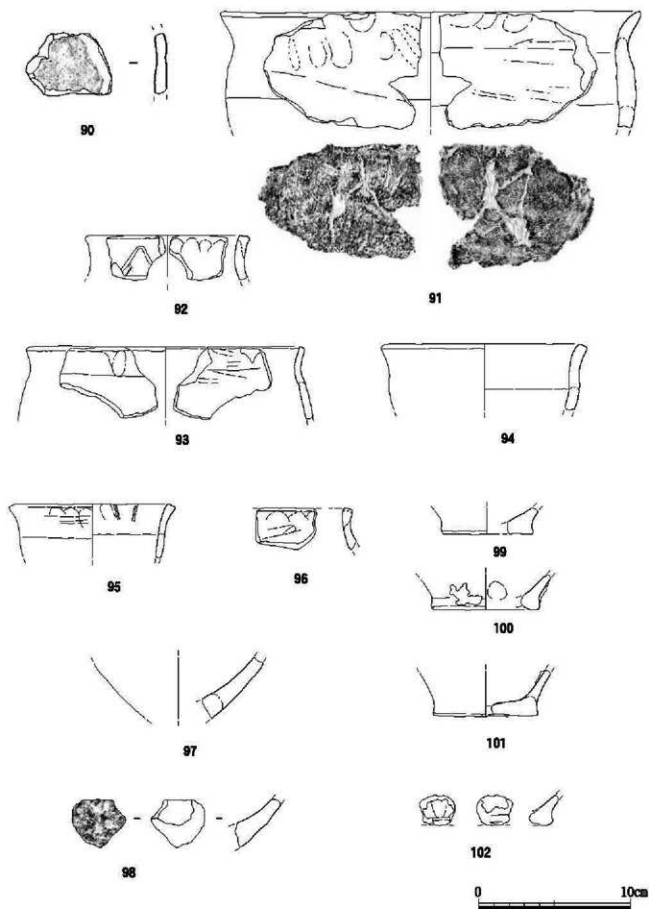


図版21-9の底部



89

図版 19 土器13 (復元土器)



第31図 土器14 (3・4トレンチ)



90



92



93



95



96



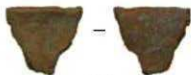
97



98



91



94



99



100



101



102

図版20 土器14 (3・4トレンチ)

表4 土器底部分類別出土量

出土地		種類	A類					B類					C類		D類		E類					不明		小計	グリッド別 合計		
			Aa	Ab	Ac	Ad	A不	Ba	Bb	Bc	Bd	Be	B不	Ca	Cb	Da	Db	Ea	Eb	Ec	Ed	Ee	Ef			不明	不明
4トレンチ		褐色砂質土層															1	2							3	6	
		黒褐色細粒砂質土層																2									2
		不明																1									1
5トレンチ	北5～南5	漸移層 III層 b			1				2																	3	58
		黒褐色砂層 IV層 b			5	3	3		2	3		3	1	9		1		1	1						1	33	
		黄褐色砂層 IV層 c							1	1				2												4	
		灰白色砂層 IV層 c			1	4				1	1	1	2	2		1										13	
		白砂層 IV層 c										2		1									1			5	
	南5～10	漸移層			1	1				2	2	1	2													9	31
		黒褐色砂層 (バミス) IV層 b			4		1	1		1		2	1	1	2	1	1			1	1			1		18	
		淡黒褐色砂層 IV層 c					1						1													2	
		白砂層 IV層 c												1							1					2	
	南10～20	漸移層 (黄褐色粘質土層)			1	2		1		2	1	2					1									10	36
		黒褐色砂層 IV層 b		1	2	2	3			1	4	3	1	2		2	1	1								23	
		白砂層 IV層 c												1							1					2	
		緑灰色砂層 V層																						1		1	
		攪乱層														1										1	
	南20～28	漸移層 (黄褐色粘質土層)		1	1			1		1	1		3	1		3		1								13	21
黒褐色砂層 IV層 b				2	1				1	1	1									1					8		
漸移層 (黄褐色粘質土層)								3	2			2													7		
南28～	黒褐色砂層 IV層 b				1				1		1	2	1												6	14	
	不明								1																1		
南側	石列																								1	3	
	砂利層								1																1		
	黄褐色粘質土層										1	1													2		
	暗灰色砂層 IV層 b													1	1										2		
	明緑灰色細粒砂質土層									1															1		
	明緑灰色細粒砂質土層																								1		
西側	黒褐色砂層 IV層 b																							1	1	1	
	ピーチロック直上																		1						1		
5・6トレンチ	拡張	黒褐色粘質土層			1																				1	1	
6トレンチ		黒褐色砂層 IV層 b		1	1	2			1	2		2	6	1												16	19
		黄褐色砂層 IV層 c			1																					1	
		白砂層 IV層 c				1	1																			2	
不明	不明	漸移層																			1				1	3	
		黒褐色砂層 IV層 b																							1		
		不明													1										1		
小計			1	13	20	13	7	12	22	15	13	5	36	5	7	2	5	6	7	1	3	2	1	2	198		
種類別合計			54					103					12		7		20					2		198			

かけて段をつけながら内湾させる。

・ eタイプ (図81～84)

直口口縁で、「ハ」字状に開く器厚は均一でない。

図81～84は外面が隆帯文状を呈する土器で図81は昆布貝塚の粗隆文土器（高宮廣衛1993）、図84は嘉門貝塚（1-3-b第24図1）、図83は「く」屈曲し、外反気味。図81は直口で断面は口唇部に膨らみ丸味を帯びる。外面の隆帯文はより明瞭で、器面調整は縦位のヘラナデが明瞭である。図82はやや内向気味で、断面が舌状を呈する。図84は大振りの土器で、内外面に粘土積み痕が残る。外面の方が隆帯文は強い。

・ fタイプ (図86)

口径が60cmの大きいものもので、口縁部はやや外反し、断面が舌状を呈するものである。(図86) 粘土紐帯が明瞭で、口縁部は「ハ」字状に開く。器厚は粘土帯の繫目で厚くなるため、器厚は8～1cm前後と均一でない。

底部は乳房状尖底と考えられる。器色は内外面とも暗赤褐色を呈し、器面調整は内外面ともヘラナデで調整され、外面は縦位に、内面は横位に施されている。砂質で砂粒を大量混入する。5トレンチ北5～南5で一括で出土。

・ gタイプ (図87)

口径50.6cmでfタイプと同じく大きい土器である。口縁部は段を付けて内彎する。口唇は舌状を呈する。胴部は厚さ9mm前後で厚手で、器面調整は内外面とも横位のヘラナデで図86よりは丁寧な仕上がりである。

5トレンチ南5～10のピット隣IV層b（第13図）最下部で出土。

Ⅶ類：(第28図85・第31図)

器厚が約6mm前後の薄手で、均一の土器でいわゆるくびれ平底の特徴を有する。口縁部が外反し、断面が丸味を帯びるものをaタイプ、断面が角を呈するものをbタイプ、断面が逆「L」字に近いものをcタイプとした。aタイプ3点、bタイプ4点、cタイプ1点の計9点と少ない。そのうち、6点が4トレンチの出土で、層別にはIV層aで1点、IV層bで2点、不明3点である。

・ aタイプ (図85)

図85は口縁部が舌状で外反するもので、器厚5mmとほぼ均一の薄手である。器面調整は外面はユビナデ、内面はヘラナデ、胎土に少量の白色粒が確認される。胎土は細かい。

・ bタイプ (図92～95)

口縁部が最大胴径より大きい図94、95と口縁部より最大胴径が大きく、胴上部で緩やかに屈曲する図92と93がある。いずれも口縁部は角をなし、胴部の厚さが均一なもので、くびれ平底の特徴をもつものである。

・ cタイプ 口縁部断面が逆「L」字状のものが出土したが、小破片のため、集計のみにとどめた。

Ⅷ類：グスク土器

グスク土器と思われるものが、4トレンチで出土したが、小破片の為、図化は省略した。また、グスク時代の包含層(Ⅲ層a)や柱穴でも土器片が出土した(表2)が、今回は検討できなかった。本報告で詳細な検討したい。

＜底部の分類＞

丸・尖底 (A類)、乳房状尖底 (B類)、平底 (C類)、脚台 (D類)、くびれ平底 (E類) に大きく分けられ、さらに胴部への立ち上がり、底厚により、各々の細分を試みた。

底部に近い破片で、分類可能な破片についてもできるだけ分類を試み、表4に示したように198点確認できた。

A類 (丸・尖底)

出土数は54点で出土総数の27.27%である。これらはa～dに細分した。cが26点と最も多い。

・aタイプ (図1)

立ち上がりが緩やか、丸底、底厚はさほど厚くない。器面調整は良い。底厚が0.8mm、やや泥質で、暗橙褐色と呈し、器面調整は丁寧である。石英・白(貝)を若干含む。

・bタイプ (図2・3)

立ち上がりがやや鋭角気味に胴部に移行するいわゆる尖底である。

・cタイプ (図4・8・11)

大振りでは底面は丸く、外面は雑に仕上げている。器面調整は外面が雑で、内面が丁寧に仕上げられていることからB類に近い。図8は内面がヘラナデで丁寧に調整される。底厚は器厚に比べて厚い。底径は2.7cm、内外面とも暗赤褐色を呈し、器面調整は外面が雑にハケで縦位にナデ、内面は幅10mmのハケで丁寧に横位に調整する。やや泥質で、胎土に透明粒を混入する。

図19は胴部にゆるやかに立ち上がるもので、底厚1.8cmとやや薄い。

図10は底部近くで、胴部を開くものである。内外面とも明橙～黄褐色を呈し、器面はユビで外面が雑、内面が丁寧に仕上げている。泥質で焼成は良い。赤色粒を混入する。器面調整や胎土から図29と同一個体と思われる。

・dタイプ (図9・11・17・18)

底面が平らで、胴部にかけて鋭角気味に立ち上がり、器面調整は内外ヘラナデが主で、内面は丁寧に仕上げている。

図9は胴部にゆるやかに開く、底径2.5cm、厚手の底部である。内外面とも明赤褐色、内外面ともヘラナデで調整される。6トレンチIV層c(白砂層)No.18で出土。近くから出土した口縁(図88)はやや内傾で、内外面が横位にハケナデを施す。同一個体と考えられる。

図11は底面がやや平ら気味で、胴部を開く。積み痕が明瞭に残り、積み幅は40mmで、外面はヨコナデで雑に仕上げ、内面はハケで丁寧に仕上げている。5トレンチ獣骨集中部のIV層cで出土。

図17鋭角に立ち上がる。底厚2.2cmを測る。図18はやや泥質で、焼成はやや良く、赤色粒を混入、6トレンチIV層b。

底面が平らになる。底径は2cm弱である。

B類 (乳房状尖底)

出土総数103点で、全体の52.02%と最も多い。大きさ及び底面の形状により、a～fに細分した。細分の中ではb類が多い。

・aタイプ (図5)

小振りな底部で典型的な乳房状尖底。大当原式土器の底部と思われる。図5は薄手で、底径1.4cm、胴部にくびれ、さらに胴中で外面に段をなし、開くようである。内外面とも明茶褐色を呈する。器面は内外面ともヘラナデ、泥質で、混和材に白色粒(貝?)を少量含む。5トレンチ5～10IV層bの出土

- ・ bタイプ (図6・7)

底厚は厚く、胴部にくびれて開くものである。外面は雑に仕上げられている。

図6は底径は2.1cmを測り、内外面とも明黄褐色、内部は明灰色のサンドイッチ状を呈する。器面調整は内外面ともヘラナデで、泥質である。

図7は底径2.6cm、外面はヘラナデ、内面はユビナデで調整される。5トレンチIV層bの出土。

- ・ cタイプ

底面はやや平らで(IIc)で、胴部にかけて、くびれる点でIdと異なる。大と小がある。

- ・ dタイプ (図12~15)

底面をユビで押し上げたものである。

図13はユビで押し上げ胴部を開く。底径2.3cm、外面は明橙褐色、内面は明灰褐色、器面調整は雑でヘラナデ、泥質、焼成は良い。口縁部2個と一括で出土5トレンチJ層隣の茶褐色砂層(IV層b)。

図15は尖底1点、丸底1点、脚台2点とまとめて出土している。

- ・ eタイプ (図16・20)

底厚は2.5cm前後と厚く、胴部は段上状に開くタイプである。

図16は底径4.3cm、泥質で暗赤褐色、暗灰色、内外面ともヘラナデであるが、内面は丁寧に調整され、多量混入する。

図20は5トレンチIV層bの出土。胴部が段をなし、器厚も6mmと薄いことから、第32図5のような深鉢を呈すると思われる。形は特異なタイプである。

C類 (平底)

出土総数12点で、全体の6.06%で、底面の形状によりabに細分した。

- ・ aタイプ (図21~23)

底は平らで、胴部を開くタイプである。

図22は底径2.9cm、内外面明茶褐色、外面はヘラかユビでナデが施されている。焼成は悪く、角閃石を多量含む。5トレンチIV層b。II類(浜屋原式土器)の底部と考えられる。

- ・ bタイプ (図24・25・27~30)

平底であるが、中央は上げ底気味になる。

図25は底面に葉痕が残り、形状から単葉のようである。中央部は凹み、紐状粘土を縁に巻き付けた為にできたものである。

図28は底径3.6cmで胴部へやや開き気味になる。胎土に黄褐色の粘土粒を混入する。

- ・ cタイプ (図31)

基本的には平底とするが、胴部の途中からアサガオ状に開き、口縁部にいたるものである。底径3.6cmを測るもので、やや泥質で、胎土に石英や黄褐色粘土粒を含む。底面が平らで胴部と厚さがほぼ同じで、胴部で段をなし、口縁部にかけて開く。

- ・ dタイプ (図24~30)

やや上げ底気味の底部である。

D類 (脚台)

出土総数7点と3.54%と最も少ない。大きさにより細分した。

- ・ aタイプ (図32)

底面が中空をなすもので器面調整及び焼成も非常に良い。スセン當式土器(新里2000)の底部

とされるもの。

底径 5 cm、砂質で焼成やや良好で、赤色粒を混入。

・ bタイプ (図33)

小振りの底部で、図12に示したような小形土器の底部と考えられる。

E類 (くびれ平底)

出土総数20点で全体の10.1%の出土でくびれの具合でa～fに細分した。

・ aタイプ (図38)

いわゆるくびれ平底で、底面は砂粒でザラザラする。器面は内外面ともユビで調整され、赤色粒を混入し、器色は茶褐色を呈する。泥質。図38は径6.0cm、底厚は10mm、器厚は7mmとやや薄手である。

・ bタイプ (図35・39)

器厚が7～10mmと厚手の底部で、底面は不安定、くびれるが底縁は丸味を帯びる。胴部にかけては開き気味で、平底に近いが、乳房状尖底の変形とも考えられる。

図35は底部6.0cm、内外面とも明茶褐色、石英・角閃石・赤色粒を多量混入することから5トレンチ石皿付近で出土。混入物などから口縁部Ⅰ・Ⅱ類の底部の可能性が高い。

図39は器面調整は丁寧で、両面ともヘラで調整される。やや泥質、焼成は良い。底径7.3cmを測る。口縁部Ⅵ類の底部と想定される。

・ cタイプ (図41)

外面の縦位にハケナデが顕著に施される。底径5.6cmを測る。器厚5mm、角閃石を混入、搬入土器の可能性もある。器色は明灰～橙色。5トレンチ北側ビーチロック直上で出土。

・ dタイプ (図42～44)

底面の縁に粘土紐を付け、上げ底状にしたもの。くびれはやや弱い。図42は底面形は略方形を呈する。内底面は尖り気味。図43は内底面は平らになる。図44は底径10cmと大きい。図42は尖底に近い。

・ eタイプ (図45)

底径2.4cmで、小形土器の底部と考えられる。

第33図に示したのは3・4トレンチで出土したものをまとめた。以下、トレンチごとに略述する。

< 3トレンチ >

本トレンチ出土の土器は白砂層で胴部2点、砂利層・川跡の攪乱層で口縁部1点、胴部8点(重量44.1g)。Ⅳ層bで胴部8点、灰白色細粒砂層で口縁部4点、胴部29点(247.6g)、黒褐色砂質土層で胴部10点(88.9g)と少ない。

図91は口縁部で緩やかな「く」字状に屈曲し外反する。外面に凸帯文がはがれ痕(破線部分)が見られる。凸帯文は斜めに二条が2カ所見られる。胎土はアバタを呈し、泥質で器厚9mmと厚手である。無文口縁のⅢ類aに分類される。

図90は厚手の胴部で、胎土に角閃石、透明の鉱物を多量混入する。外面の明灰褐色を呈し、器面も細かい。内面は暗灰色を呈し、器面も剥落する。沖縄諸島に出土する弥生式土器の特長を示す。3トレンチ灰白色粗粒砂層の出土。

表 5-1 土器底部觀察一覧

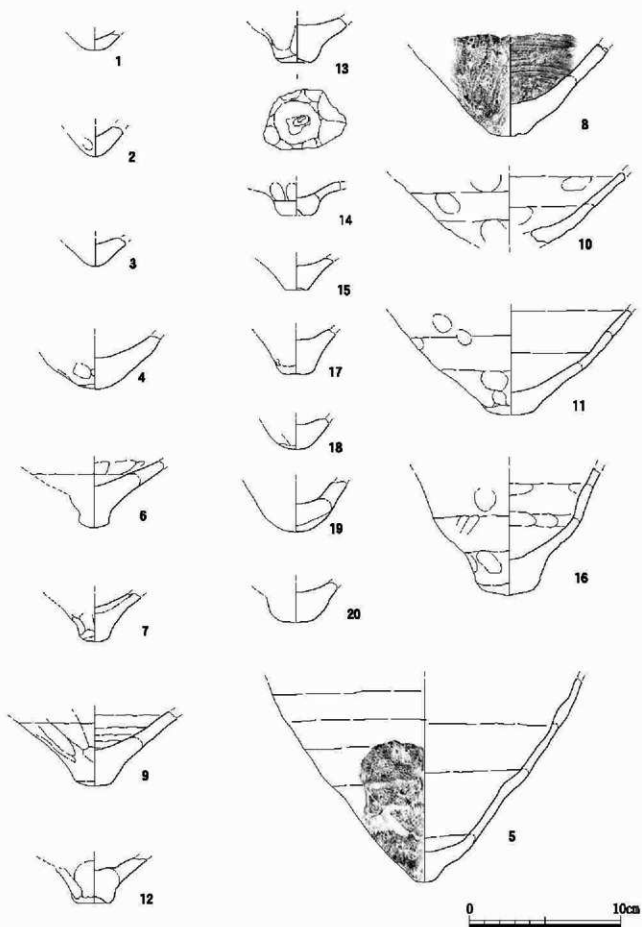
番号	分類	底径 (cm)	観 察 一 覧	出土遺物 台帳番号
1	Aa	8.0	やや泥質。焼成良好。混入物：石英・白（貝）。少量。細かい。外面色：暗橙褐色。内面色：暗橙褐色。器面調整：外面・ヘラーナデ 内面・なし	5 トレンチ 南側 10~20北 黒褐色砂層 IV層b 台241
2	Ab	0.4	砂質。焼成良好。混入物：石英。少量。細かい。外面色：明橙褐色。内面色：明橙褐色。器面調整：外面・ユビ 内面・ユビ	6 トレンチ 南東 黄褐色砂 (白砂混) IV層c 台999-c
3	Ab	1.0	砂質。焼成良好。混入物：石英。多量。粗い。外面色：明赤褐色。内面色：暗灰褐色。器面調整：外面・ユビ 内面・ユビ・ナデ	5 トレンチ 南側 5~10 黒褐色砂層 IV層b 台2529
4	Ac	1.0	やや泥質。焼成良好。混入物：角閃石。少量。細かい。外面色：明黄褐色・内面色：暗黒褐色。	5 トレンチ 南側 10~20 黄褐色粘質土層 IV層b 台161
5	Ba	1.4	やや泥質。焼成良好。混入物：白（貝）。少量。細かい。外面色：明茶褐色。内面色：明茶褐色。器面調整：外面・ヘラーナデ 内面・ヘラーナデ	5 トレンチ 南側 5~10南西 黒褐色砂層 IV層b 台2161
6	Bb	2.0	泥質。焼成良好。混入物：透。少量。粗い。外面色：明黄褐色。内面色：明橙黄褐色。器面調整：内外面・ヘラーナデ	5 トレンチ 南側 10~20 黒褐色砂層 IV層b 台173
7	Bb	2.6	やや泥質。焼成良好。混入物：石英。少量。細かい。外面色：暗茶褐色。内面色：暗黒褐色。器面調整：外面・ユビ・ナデ 内面・なし	5 トレンチ 南側 10~20 黒褐色砂層 IV層b 台2098
8	Ac	2.6	砂質。焼成良好。混入物：光（透）。少量。細かい。外面色：暗赤褐色。内面色：暗赤褐色。器面調整：外面・ハケ（縦） 内面・ハケ（縦）	6 トレンチ 白砂Na12 IV層c 台1041
9	Ad	2.5	砂質。焼成良好。混入物：石英。少量。細かい。外面色：明赤褐色。内面色：明赤褐色。器面調整：内外面・ヘラーナデ	6 トレンチ 白砂Na18 IV層c 台1041
10	Ac	—	砂質。焼成良好。混入物：赤粒。少量。粗い。外面色：明橙褐色。内面色：明黄褐色。器面調整：外面・ユビ 内面・ユビ	5 トレンチ 北5~南5中 灰褐色砂層（貝片混） IV層c 台1105
11	Ac	3.2	砂質。焼成良好。混入物：赤粒。少量。粗い。外面色：明灰褐色。内面色：明橙褐色。器面調整：外面・ユビ（縦） 内面・ユビ（縦）	5 トレンチ 北5~南5中 灰白色砂層 IV層c 台1200
12	Bd	1.8	砂質。焼成良好。混入物：石英。少量。細かい。外面色：明橙褐色。内面色：明灰褐色。器面調整：外面・ユビ（縦）	5 トレンチ 南側 10~20 黄褐色と下層との漸移層 IV層d 台2062
13	Bd	2.2	泥質。焼成良好。混入物：石英。少量。細かい。外面色：明橙褐色。内面色：明橙褐色。器面調整：外面・ユビ	5 トレンチ 北5~南5貝層隣 茶褐色砂層 IV層b 台2185
14	Bd	1.9	泥質。焼成良好。混入物：赤粒。少量。細かい。外面色：明黄褐色。内面色：明灰褐色。器面調整：外面・ユビ（縦）	5 トレンチ 南側 10~20北 黄褐色粘質土層 IV層b 台161
15	Ad	1.2	やや泥質。焼成良好。混入物：石英。少量。細かい。外面色：暗赤褐色。内面色：明黒褐色。器面調整：外面・ヘラー・押・ナデ（縦） 内面・ヘラー・押・ナデ（縦）	5 トレンチ 10~20北 茶褐色砂層 IV層b 台705a
16	Be	4.3	やや泥質。焼成良好。混入物：石英。多量。粗い。外面色：暗赤褐色。内面色：明黒褐色。器面調整：外面・ヘラーナデ 内面・ヘラーナデ	5 トレンチ 南西5~10 淡黒褐色砂層 IV層b 台2196
17	Ad	2.2	やや泥質。焼成良好。混入物：石英・白。少量。細かい。外面色：暗茶褐色。内面色：暗黒・茶褐色。器面調整：外面・ヘラーナデ 内面・ユビ	6 トレンチ 北西貝層 黒褐色砂層 IV層b 台2226
18	Ad	0.8	やや泥質。焼成良好。混入物：白（貝）。少量。細かい。外面色：暗赤褐色。内面色：暗赤褐色。器面調整：外面・ヘラー・押・ナデ（縦） 内面・不明	6 トレンチ 北西貝層 黒褐色砂層 IV層b 台2226
19	Ac	1.0	砂質。焼成良好。混入物：石英。少量。細かい。外面色：明茶褐色。内面色：明灰褐色。器面調整：外面・ユビ 内面・ユビ	5 トレンチ 10~20 黒褐色（茶） IV層b 台2333
20	Be	2.0	泥質。焼成良好。混入物：石英。少量。細かい。外面色：明橙褐色。内面色：明灰褐色。器面調整：外面・ヘラーナデ 内面・ユビ	5 トレンチ 5~10 黒褐色砂 層粘土混 IV層b 台2135
21	Ca	3.8	やや泥質。焼成悪い。混入物：白。少量。細かい。外面色：暗茶褐色。内面色：明黄褐色。器面調整：外内面・なし	5 トレンチ 5~10 黒褐色砂 層粘土混 IV層b 台2136

註：観察事項の項（①口縁断面、②形制、③胎土、④焼成、⑤混入物、⑥混入量、⑦粒度、⑧器色、⑨器面調整、⑩器厚）の順で表記

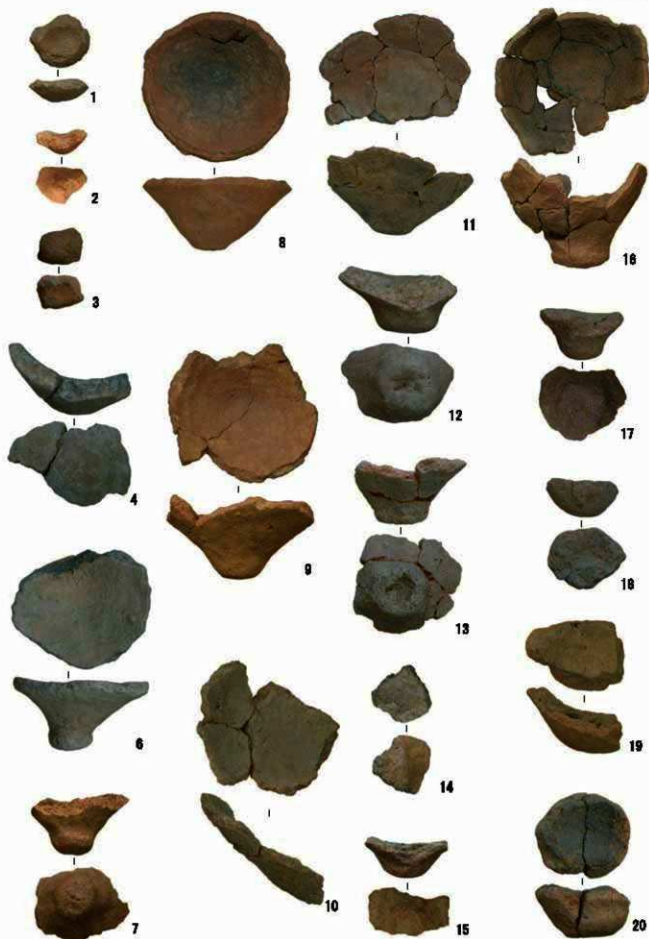
表 5-2 土器底部観察一覧

番号	分類	底径 (cm)	観 察 一 覧	出土遺物 台帳番号
22	Ca	2.8	砂質。悪い。混入物：角閃石・透。多量。細かい。外面色：明茶褐色。内面 色：明橙・黄褐色。器面調整：外面・ユビ 内面・ユビ	5 トレンチ 南28〜黒褐色砂 層 IV層b 台2742
23	Ca	3.8	砂質。焼成悪い。混入物：透。多量。細かい。外面色：暗赤褐色。内面 色：明赤褐色。器面調整：外面・ユビ	5 トレンチ 南側南〜暗灰色 砂層 (上部) IV層c 台2023
24	Cb	2.3	やや泥質。焼成悪い。混入物：石英・白 (貝)。少量。細かい。外面色：明橙褐色。 内面色：明橙褐色。器面調整：外面・ユビ押。ヘラーケズリ横 内面・不明	5 トレンチ 南10〜20 黒褐色砂層 IV層b 台2095
25	Cb	4.0	砂質。焼成良好。混入物：赤粒。多量。粗い。外面色：明橙褐色。内面 色：明灰褐色。器面調整：外面・ユビ 内面・ユビ	5 トレンチ 北5〜南5北 茶褐色砂層 (貝片混) IV層b 台1036
26	Cb	3.6	やや泥質。焼成良好。混入物：石英・白。多量。粗い。外面色：暗茶褐色。 内面色：暗茶褐色。器面調整：外面・ヘラーユビ縦 内面・ヘラーユビ縦	5 トレンチ 北5〜南5東中 灰白色砂層 IV層c 台1140
27	Cb	2.8	やや泥質。焼成悪い。混入物：磁鉄鉱？。少量。細かい。外面色：暗赤褐色。 内面色：暗赤褐色。器面調整：外内面・なし	5 トレンチ 南10〜20北 黒褐色砂層 IV層b 台241
28	Cb	3.6	砂質。焼成良好。混入物：石英・白。少量。細かい。外面色：暗茶褐色。内面 色：暗黒褐色。器面調整：外内面・なし	5 トレンチ 南5〜10 黒褐色砂層 IV層b 台2529
29	Cb	5.0	砂質。焼成悪い。混入物：石英。少量。細かい。外面色：明黄褐色。内面 色：明灰褐色。器面調整：外面・ユビ 内面・ユビ	盛土 不明 台1334
30	Cb	5.0	砂質。焼成良好。混入物：石英。多量。細かい。外面色：明橙褐色 内面・ 明赤褐色。器面調整：外面・ユビ 内面・ユビ	5 トレンチ 南20〜28灰褐色 (複乱) IV層d 台1190
31	Da	3.6	やや泥質。焼成良好。混入物：石英。多量。細かい。外面色：明橙褐色。内 面色：明黒褐色。器面調整：外面・ヘラー押一ナデ横 内面・ヘラーナデ	5 トレンチ 南10〜20下部不 明 台2094
32	Da	5.0	砂質。焼成良好。混入物：赤粒。少量。粗い。外面色：明橙褐色。内面 色：明灰褐色。器面調整：外面・ハケ	5 トレンチ 南側北東貝層① 暗灰色砂層 IV層b 台120
33	Db	3.8	砂質。焼成良好。混入物：石英・白。少量。細かい。外面色：明赤褐色。内面 色：明赤褐色。器面調整：外面・ユビヘラーナデ 内面・なし	5 トレンチ 南10〜20黄褐色 粘質土層 III層b 台161
34	Ea	8.4	泥質。焼成良好。混入物：赤粒。少量。細かい。外面色：明黄褐色。内面 色：明黄褐色。器面調整：外面・ユビ	6 トレンチ 北 黒褐色砂層 (黄褐色粘土混じり) IV層b 台2847
35	Eb	6.0	砂質。焼成良好。混入物：石英。多量。細かい。外面色：明茶褐色。内面 色：明茶褐色。器面調整：外内面・ユビ	5 トレンチ 南20〜28 石直付近 黒褐色砂層 IV層b 台253
36	Eb	—	泥質。焼成良好。混入物：赤粒。少量。粗い。外面色：赤褐色。内面 色：明灰褐色。	6 トレンチ 漸移層 IV層d 台2778
37	Eb	4.6	砂質。焼成良好。混入物：石英。多量。粗い。外面色：明黄褐色。	5 トレンチ 南側黄褐色 IV層b 台2039
38	Ea	6.0	泥質。焼成良好。混入物：赤粒。多量。粗い。外面色：茶黄顔。内面 色：茶。器面調整：外面・ユビ	5 トレンチ 北5〜南5北東 貝層① IV層b 台1227
39	Eb	—	砂質。焼成良好。混入物：石英。外面色：明黄褐色。内面 色：明赤褐色。器面調整：外面・ユビ (縦) 内面・	5 トレンチ 北5〜南5貝層 ③黒褐色砂層 IV層b 台614
40	Eb	5.6	砂質。焼成良好。混入物：石英。少量。細かい。外面色：明黄褐色。内面 色：明橙黄褐色。器面調整：外内面・ユビ	5 トレンチ 西側盛土黒褐色 砂層 IV層b 台2134
41	Ec	5.6	泥質。焼成悪い。混入物：角閃石。少量。細かい。外面色：明灰褐色。内面 色：明橙褐色。器面調整：外面・ハケ (縦)	5 トレンチ 北側ビーチロ ック直上 II層 台2711
42	Ed	4.8	砂質。焼成良好。混入物：石英。多量。細かい。外面色：明橙褐色。内面 色：明灰褐色。器面調整：外内面・ユビ (縦)	6 トレンチ 茶褐色砂層 IV層b 台610
43	Ed	7.2	やや泥質。焼成悪い。混入物：石英・白 (貝)。多量。細かい。外面色：暗茶 褐色。内面色：暗茶褐色。器面調整：外内面・なし	5 トレンチ 10〜20 白砂 IV層c 台1185
44	Ed	10.0	泥質。焼成良好。混入物：石英・白。多量。粗い。外面色：明橙褐色。内面 色：明橙褐色。器面調整：外面・ユビ	5 トレンチ 10〜20 白砂 IV層c 台1160
45	Ee	2.4	やや泥質。焼成悪い。混入物：石英。多量。細かい。外面色：暗黄褐色。内 面色：暗黒黄褐色。器面調整：外面・ヘラーナデ 内面・なし	5 トレンチ 5〜10貝層①下部 灰褐色 (貝クズ混) IV層c 台1047a

註：観察事項の項 (①口縁部断面、②形制、③胎土、④焼成、⑤混入物、⑥混入量、⑦粒度、⑧器色、⑨器面調整、⑩器厚) の順で表記



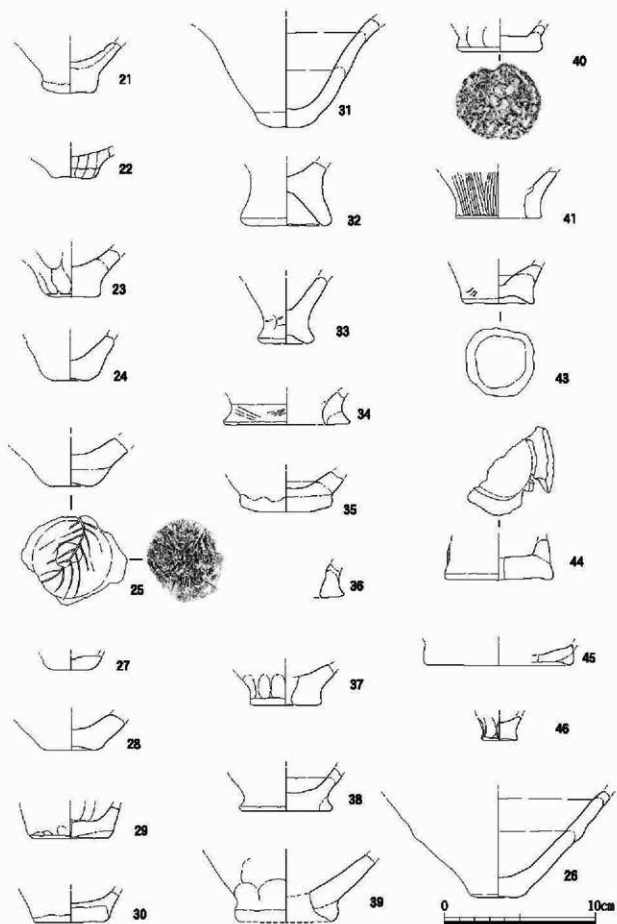
第32圖 土器 1 (底部)



图版21 土器 1 (底部)



图版22 土器 2



第33圖 土器 2 (底部)



図版23 土器 3 (底部)

<4レンチ>

本トレンチ出土の土器は口縁部9点(1072g)、胴部268点、(1568g)底部9点、(125.5g)で、層別には暗褐色砂質土層は胴部4点(43g)、褐色砂質土層は口縁部2点、(胴部54g)、底部4点。黒褐色土層では胴部5点。黒褐色細粒砂質土層では口縁部1点、胴部32点、底部1点。それ以外に出土不明で口縁部6点(68g)、胴部182点、(981g)底部3点(40.7g)である。

主な土器は第31図に示した。本トレンチ出土の土器は外面に有機質の膜で被われ、砂質で、暗黄褐色を呈する点で5・6トレンチ出土土器とは様相を異にする。5トレンチが黒～茶褐色砂層の出土に対し、4トレンチは褐色砂質土層で出土するため、後世に起因するものと思われる。

図示した口縁は5点で、いずれも口縁部は角を呈し、口径も5トレンチに比べて小振りである。図92は有文で、外面に幅広の沈線で鋸歯文を施すものである。口縁は角を呈し、外反気味である。口径11.1cmを測る。内外面とも暗黄褐色を呈し、内面はユビナデを呈する。石英を少量混入4トレンチ褐色砂質土層の出土。口縁はⅦbに分類される。図93は器厚が5mmと薄手で、やや外反し、口縁部断面は角状を呈する。口径17.5cmを測る。口縁1点、底部1点と共伴して出土。図94は前者より厚めの土器で、口縁部は緩やかに外反し、角状を呈する。口径12.86cmと小振りである。

図95はやや外反し、口唇は膨らむが、口縁断面は角を呈する。口径9.8cmと小振りである。4トレンチ黒褐色土層の出土。

底部は6点出土した。

図97・98は尖底の底部近く、図99～102はくびれ平底である。

図97と98は尖底あるいは乳房状尖底の底部近くでB類不明で、前者は暗茶～黒褐色、後者は明茶色～橙色を呈し、混和材に石英や白色粒、褐色砂質土層で出土。口縁部2点、底部(尖底)と共伴して出土。

図99～102くびれ平底(Ea)に分類される。図99は底面から胴部にかけて開き気味で、図101は底面から胴部にかけて立ち気味である。いずれも外面に有機質の物質が付着し、砂質で黄褐色を呈する。褐色砂質土層で出土。

<まとめ>

以上、土器について略述した。

貝塚後期の土器は無文が主体の土器であるが、器面調整および器厚の特徴的で、バリエーションにとんでいる。

I類～Ⅲ類・Ⅶ類は器面調整が丁寧でそれにより器厚もほぼ均一である。

Ⅳ類～Ⅵ類はヘラやユビナデで調整がなされ、特に外面の器面調整は雑である。内面はハケで調整され、外面に比べて良い。

器面調整の良いI類～Ⅲ類についてみるとI類の阿波連浦貝塚Ⅵ層タイプで出土量も5点で、南20～28、南28～のⅣ層c・dで得られている。

Ⅱ類の浜屋原式土器に相当するものは14点で南20～28で8点、南28～で1点得られ、出土層はⅣ層bとⅣ層c、Ⅲ層cで得られた。

Ⅱ類aとしたのは浜屋原式土器より近い形で、bタイプは胴部が若干張り(図40)、口縁は外反し、積み痕が明瞭に見られる。器面調整の丁寧なⅡa類から胴部の張るⅡb類・積み痕の明瞭なⅡc類の変遷が考えられる。Ⅱa類とⅡb類は5トレンチ南20～28で出土している。

Ⅲ類は「く」字状に屈曲し、aタイプは口径と最大胴径は同じ、bタイプは口径が最大胴径より大きいもので、類例は嘉門貝塚Aの(1991、第21図1)がある。

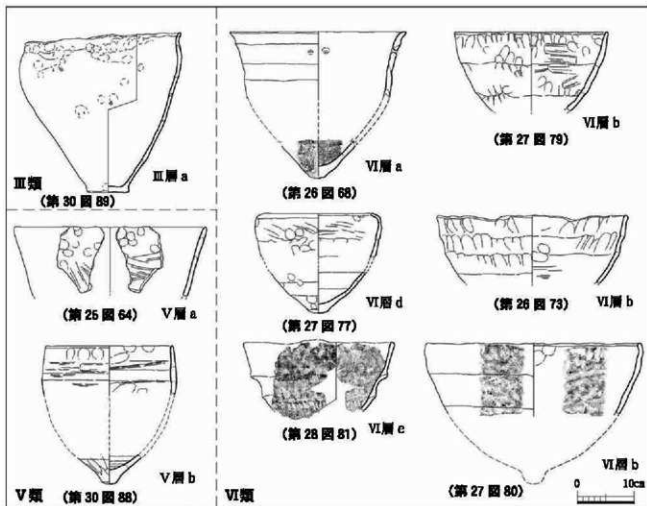
「く」状の屈曲は晩期の土器の影響を受けたものと思われる。弥生系土器に類するもの(図17・18・20・28)がある。

中でも図89は口縁部から底部までである保存の良い土器で器面調整が内外面とも良く、口唇に粘土を加えて、「く」字状に屈曲させたもので出土層位も南10～20の緑灰色層(V層)で上限の土器と位置づけられる。

Ⅳ類は外反口縁で大きいタイプと小さいタイプ、特に図60のように口唇部分をヘラで調整するのは特徴的である。

器面調整の粗いⅤ類～Ⅵ類は本遺跡の主体土器で6トレンチ・5トレンチ北5～南5・南5～10に多いようである。Ⅳe類としたものは昆布貝塚粗隆文土器に類似し、高宮廣衛(1993)によると縄文晩期終末に位置づけ、大当原貝塚上層グループに先行とするものとしている。中には内外面の器面が凹凸が明瞭で器面が薄いタイプで大当原式土器に近いもの(図5と85)があるが、相対的に土器の作りは大当原式土器より丁寧である。

いずれにしても今回の試掘調査で、山手の3トレンチで少量ではあるが、弥生系土器が出土。4トレンチではくびれ平底が多く得られ、5トレンチ北5～南5、6トレンチでは貝塚後期の尖底・乳房状尖底土器の出土量が最も多く、各々の試掘トレンチで土器の様相が変わるようである。



第34図 主な復元土器(Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ類)

5・6 トレンチの主体をなす土器は口縁部も外反、内湾、直口などバリエーションがあるが、これらは厚手で、器厚は均一でなく、器面調整が外面は雑でヘラナデを中心とし、内面は主にヘラナデで丁寧に調整するという共通する。これらは粘土紐帯の稜が明瞭でないもの（V類）と明瞭なもの（VI類）とがある。第34図に図上復元したものとまとめみた。

類例は嘉門貝塚A（1991）、アカジャンガー貝塚（2004）、津堅貝塚（1961・2005）、新城下原遺跡（2006）平敷屋トウバル遺跡（1996）などの土器に見られる。5・6 トレンチで主体をなすV・VI類（小堀原タイプ）は大当原式土器の先行タイプ（高宮1993・片桐2006）と思われる。VII類はくびれ平底になると思われる口縁であるが、アカジャンガー式土器かフェンサ下層式土器かは明瞭でない。

<引用・参考文献>

- ・ 高元政秀「津堅貝塚発掘概報」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会 1961年
- ・ 宮城伸一・東富美和「津堅貝塚－中城港湾（アギ浜地区）港湾改修事業に伴う緊急発掘調査報告書」『勝連町の文化財 第23集』勝連町教育委員会 2005年
- ・ 名嘉真武夫・安里嗣淳ほか『伊江島ナガラ西貝塚緊急発掘調査報告書 概報篇・自然遺物篇』伊江村文化財調査報告書 第8集 伊江村教育委員会 1979年
- ・ 金武正紀・宮城利旭・比嘉春美「宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚 発掘調査報告」1980年
- ・ 松川章・安里進・下地安広「嘉門貝塚A－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ－」『浦添市文化財調査報告書』第18集 浦添市教育委員会 1991年
- ・ 高宮廣衛「昆布貝塚表採の粗隆文土器」『沖縄縄文土器研究序説』p273-293 第一書房 1993年
- ・ 島袋洋・金城亀信・上原静 他『平敷屋トウバル遺跡－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書 第125集 1996年
- ・ 高宮廣衛・中村恵・知花一正・山城安生・玉城京子・山城直子・西久保敦美「渡嘉敷村阿波連貝塚発掘調査報告書」『沖国大考古』第12号 沖縄国際大学文学部考古学研究室 1999年
- ・ 上原静・宮城奈緒・秋本真孝・徳嶺里江・仲村毅・長濱健起「具志川市アカジャンガー貝塚発掘調査概報・与勝半島（離島）所在の遺跡分布調査概報」『沖国大考古』第13号 沖縄国際大学文学部考古学研究室 2004年
- ・ 片桐千亜紀・久貝苏嗣・崎原恒寿・金子浩昌・高宮広土・島袋春美・(株)古環境研究所・(株)バリノ新城下原第二遺跡『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第35集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006年
- ・ 新里貴之「スセン式土器」『琉球・東アジアの人と文化』上巻 高宮廣衛古稀記念論集刊行会 2000年

B. 貝製品

本遺跡出土の貝製品は装飾と考えられるもの貝玉2点、巻き貝製品1点、貝輪3点の計6点、実用品と考えられる二枚貝有孔製品6点、貝匙2点、ホラガイ有孔製品2点の計10点が出土している。総計16点の出土で、貝塚後期には出土量は少ない方である。

a. 装飾品

イ. 貝玉 (第35図1)

2点出土した。

いずれもマガキガイの殻頂部を用いたものである。

図1の孔は全体に摩耗する。他に殻頂部分を打ち割りして穿孔したものが出土した。

ロ. 巻き貝製品 (第35図2)

1点出土した。マクラガイを用いたもので、殻頂を打ち割りで穿孔したものである。貝の色は残るが、全体的に摩耗する。6トレンチ黄褐色砂層の出土である。

ハ. 貝輪 (第35図3・4・5)

オオベッコウガサ製で2点、メンガイ類1点の計3点の出土。いずれも5トレンチ (北5～南5) の出土である。

図2は完形で内縁は丸味を帯び、貝色が残る。

図4はメンガイ類の殻頂部分を破損する貝輪である。内縁に研磨が顕著に見られるものである。

b. 実用品

イ. 二枚貝有孔製品

シャコガイ1点、メンガイ類3点、カワラガイ2点の計6点である。

シャコガイ (第35図11) は9cm×6cmと大きい方である。表面は摩耗、孔は内殻→外殻、やや風化気味である。この状況から自然の可能性も否定できない。

メンガイ類は3個出土した。(第35図8・9・10)

図10は腹縁を摩耗し、図11は貝殻全体を摩耗、図12は大きく破損、自然の可能性も考えられる。大きさは3点とも異なる。

カワラガイは (第35図8・9) 2点出土した。図8の孔は径5mm前後と小さく加工の丁寧で、網の錘よりは装飾的な様相が高い。図9の孔はやや中にあり、腹縁は破損する。

ロ. 貝匙

ヤコウガイを用いたもので、破損品が2点出土した。

図5は大形の貝匙でヤコウガイの背面を利用したものである。外殻はアバタが見られ、貝の螺肋をかなり削り整えたもので、5トレンチ (北5～南5) 貝層②下部、灰褐色 (貝クズ) (IV層c) の出土である。

図6は小形の貝匙で、ほぼ完形に近い。ヤコウガイの腹面を利用したもので、貝殻にはアバタが確認できる。5トレンチ (南5～10) 北西、灰白色砂層 (IV層c) の出土である。

ハ. ホラガイ有孔製品 (第36図)

2点出土、他に疑わしいものが1点出土。

図14は1孔タイプ、図15タイプは2孔タイプである。いずれも殻頂は丸味を呈する。前者の方

が殻は小さい。

図14は6トレンチ白砂、図15は5トレンチ（北5～南5）南、灰白色砂層（IV層）の出土である。

c. まとめ

貝製品は5・6トレンチの貝塚後期の時期に出土。

類例の遺跡としては清水貝塚やナガラ西・東貝塚があげられるが、本遺跡の貝製品はこれらの遺跡に比べて出土量が少ないようである。

二枚貝有孔製品のカワラガイは大原第一貝塚（1980）では人骨と共伴して出土しており、網の錘以外の用途の可能性も考えられる。

ヤコウガイ貝匙は背面と腹面を利用したものがあるが、腹面を利用したものはヤッチのガンマ（2001）、宜野湾市古墓、与那国古墓（2004）など近世の墓で出土している。本遺跡は最古の例といえる。

<参考文献>

当真嗣一・上原静ほか『大原貝塚-久米島大原貝塚発掘調査報告-』沖縄県文化財調査報告書 第32集 沖縄県教育委員会 1980年

西銘章・藤崎京・城間肇ほか『ヤッチのガンマ・カンジン原古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第6集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年

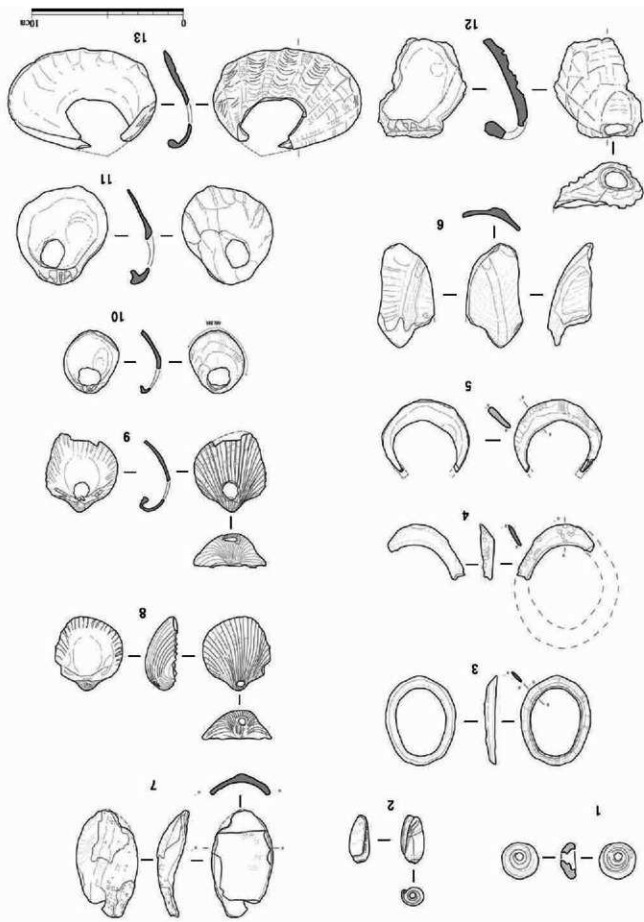
西銘章・片桐千亜紀・青山奈緒・土肥直美『与那国嘉田地区古墓群-嘉田地区は場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第21集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004年

表6 貝製品出土量

トレンチ	層序	装飾品				実用品				合計	
		貝小玉		貝輪		貝匙	二枚貝有孔		有孔製品		
		マガキガイ	マクラガイ	オオベッコウガサ	メンガイ		カワラガイ	メンガイ			ヒメジャコ
6トレンチ	灰褐色（貝クズ）IV層c	1								1	
	褐色砂層（貝片混）IV層b	1	1				1			3	
	白砂IV層c								1	1	
5トレンチ（北5～南5）	灰白色砂層IV層c				1				1	2	
	白砂（黄褐色混）IV層c			1						1	
	黄褐色砂層IV層c			1				1		2	
	貝層②下部 灰褐色（貝クズ）IV層c					1	1	1		3	
	貝層①IV層c							1		1	
5トレンチ（南5～10）	灰白色砂層IV層c					1				1	
5トレンチ 北側	不明						1			1	
合計		2	1	2	1	2	2	3	1	2	16

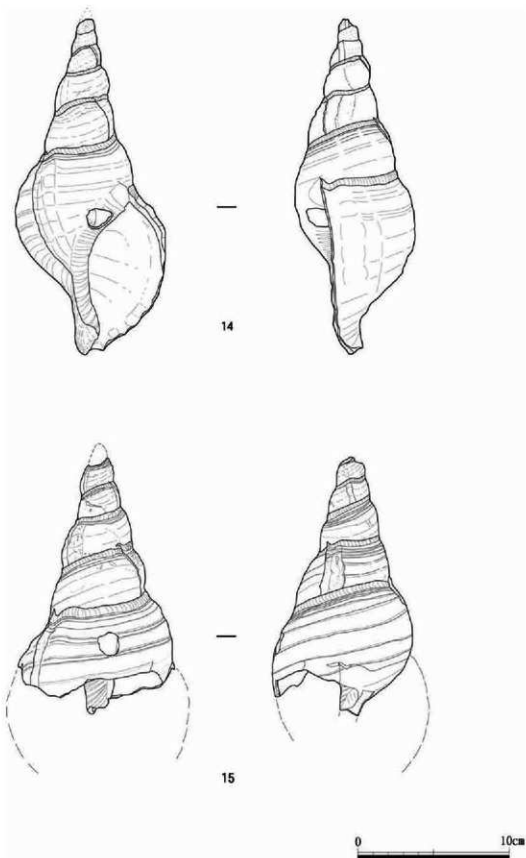
表 7 貝製品観察一覧

第35 園(園版24)	第36 園(園版25)	番号	製品名	左右	種類	完形 破損	縦殻長 (mm)	横殻長 (mm)	重量 (g)	孔縦 (mm)	孔横 (mm)	孔	観察事項	出土地 台帳番号
		1	貝小玉	—	マガキガイ	完	23	24	3.65	5	5.5	殻頂	表:殻頂摩耗,裏: 縁-摩耗。アバタ、 やや風化。	6トレンチ灰褐色 (貝クズ)(IV層c) 台974
		2	巻貝 製品	—	マクラガイ	完	30	15.1	4.02	3	4	殻頂・中	孔:打割。色残。 摩耗。	6トレンチ黄褐色 砂層(IV層b) 台1012
		3	貝輪	—	オオベツ コウガサ	完	59	46	5.18	45	33		内縁を加工-丸味。 表:貝色残。	5トレンチ(北5~ 南5)南西、黄褐色 砂層(IV層c) 台1296
		4	貝輪	—	オオベツ コウガサ	破	53	10	4.01	—	—		表面:一部研磨有。 下縁に、貝色残。	5トレンチ(北5~ 南5)北東、白砂 (黄褐色泥)(IV層c) 台1282
		5	貝輪	右	メンガイ	完	48	57	10.27	—	—		内縁:研磨及び摩 耗。貝残。	5トレンチ(北5~ 南5)西中、灰白 色砂層(IV層c) 台1260
		6	貝匙	背面	ヤコウガイ	破	71	46	22.47	—	—		背面利用。表面: 外表残。アバタ有 り。螺肋顯著に研 磨。周縁-研磨。	5トレンチ(北5~ 南5)貝層②下部、 灰褐色(貝クズ) (IV層c)台1008-a
		7	貝匙	—	ヤコウガイ	破	66	45	19.52	—	—		腹面利用。周縁打 割。表裏面とも部 分的に外殻残る。	5トレンチ(南5~ 10)北西、灰白色 砂層(IV層c) 台1159
		8	二枚貝 有孔	左	カワラガイ	完	49	45	10.95	4	5.5	殻頂・中	孔:内→外、楕円、 丁寧に調整。腹縁: 中央破損。	5トレンチ北側 (不明) 台1
		9	二枚貝 有孔	右	カワラガイ	完	50.1	48	13.61	12	9	上・中	孔:内→外、楕円。 孔の上縁剥離。孔 の調整は丁寧。	5トレンチ(北5~ 南5)東、灰褐色 (貝クズ泥)(IV層c) 台1225
		10	二枚貝 有孔	左	メンガイ	完	42	36	5.18	14	15	上・中	孔:内→外、円形、 丁寧に加工。殻摩 耗。	6トレンチ東側、 褐色砂層(貝片泥) (IV層b) 台810
		11	二枚貝 有孔	左	メンガイ	完	65	60	20.21	19	16	上・左	孔:外→内、楕円。 殻:やや風化、摩 耗。	5トレンチ(北5~ 南5)北東貝層①、 灰褐色砂層(貝片泥) (IV層c) 台1240
		12	二枚貝 有孔	右	メンガイ	破	67	58	35.22	8	15	殻頂・中	孔:内→外、円形。 表面:アバタ。	5トレンチ(北5~ 南5)西中、灰褐 色(貝クズ)(IV層c) 台1321
		13	二枚貝 有孔	左	ヒメジャコ	破	98	61	46.93	—	—	殻頂・中	表面:摩耗。孔: 内→外、楕円。殻: やや風化。	5トレンチ(北5~ 南5)南西、黄褐 色砂層(IV層b) 台1118
		14	有孔 製品	—	ホラガイ	完	225	100.5	135.00	20	15	腹面1孔 タイプ	孔:外→内、殻頂 丸味。	6トレンチ、白砂 (IV層c) 台1076
		15	有孔 製品	—	ホラガイ	破	—	—	200.00	16	14	腹面2孔 タイプ	孔:外→内、不定 形。殻口破損。殻 頂丸味。アバタ有 り。	5トレンチ(北5~ 南5)南、灰白色 砂層(IV層c) 台1134

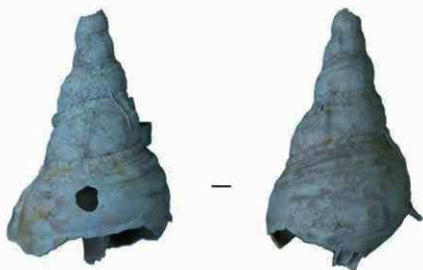
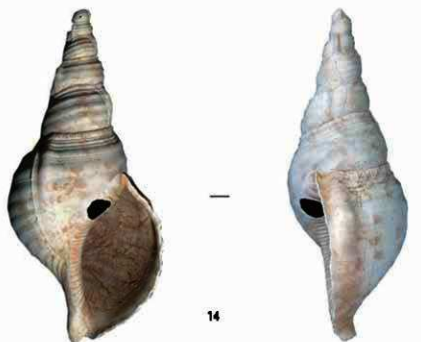




図版24 貝製品 1



第36図 貝製品 2 (ホラガイ)



図版25 貝製品 2 (ホラガイ)

C. 石器

今回の調査では16点の資料が得られた。ここでは、確認できた器種は石斧、敲石、凹み石、磨石、石皿、石球、サンゴ製品である。石器の素材としては、変成岩などの輝緑岩、堆積岩などのシルト岩、石灰岩、砂岩、黒色千枚岩、サンゴ石灰岩が使用されている。図化したものの詳細は観察表で述べる。

a. 石斧

石斧は2点出土し、共に研磨が施された半磨製石斧である。石質は輝緑岩で、刃部が確認できるものは1点のみである。図1は半磨製石斧の両凸刃でバチ形である。図2は頭部のみ半磨製石斧であり、刃部が破損しているため不明である。

b. 敲石

敲石は7点出土し、全て円礫を利用したものである。形状は楕円形、球形、隅丸方形である。石質は、図3～5は楕円形、図6は球形、図7～9は隅丸方形である。

c. 凹み石

凹み石は1点出土した。円礫を使用し、形状は楕円形である(図10)。

d. 磨石

磨石は1点出土した。円礫を使用し、形状は楕円形である(図11)。

e. 石皿

石皿は3点出土した。円礫を使用し、形状は図12・13は隅丸方形、図14は不明である。

f. 石球

石球は1点出土した。円礫を使用し、形状は球形である(図15)。

g. サンゴ製品

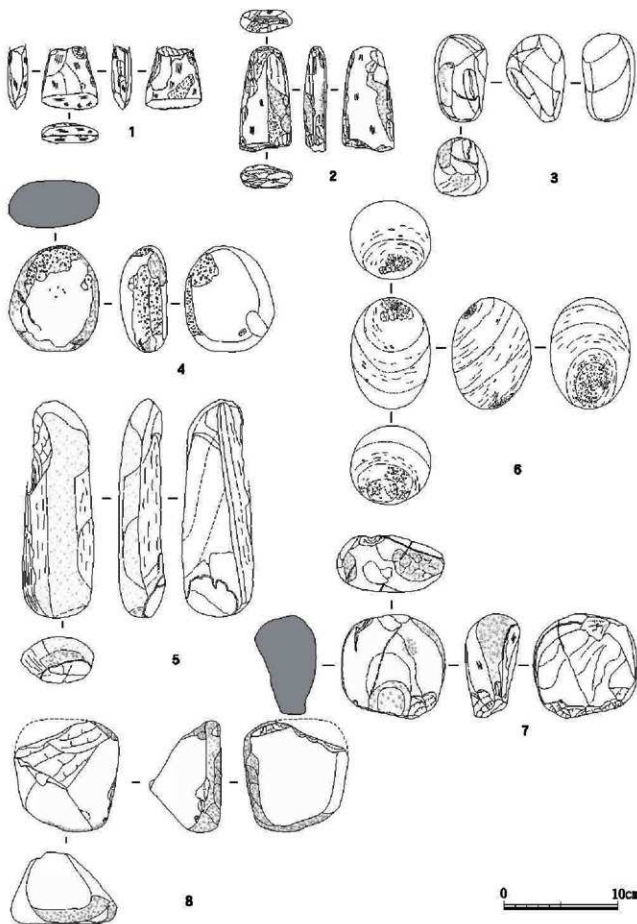
本品は近世のサンゴ石製の厨子と同種の加工し易い石質で、1点得られた(図16)。約12cm×10cmの楕円形を呈する。裏面を水平に研磨し、板状に加工したものである。側面も研磨加工されたものであるが、用途は不明。5トレンチ北5～南5の灰白色白砂層で出土。

小結

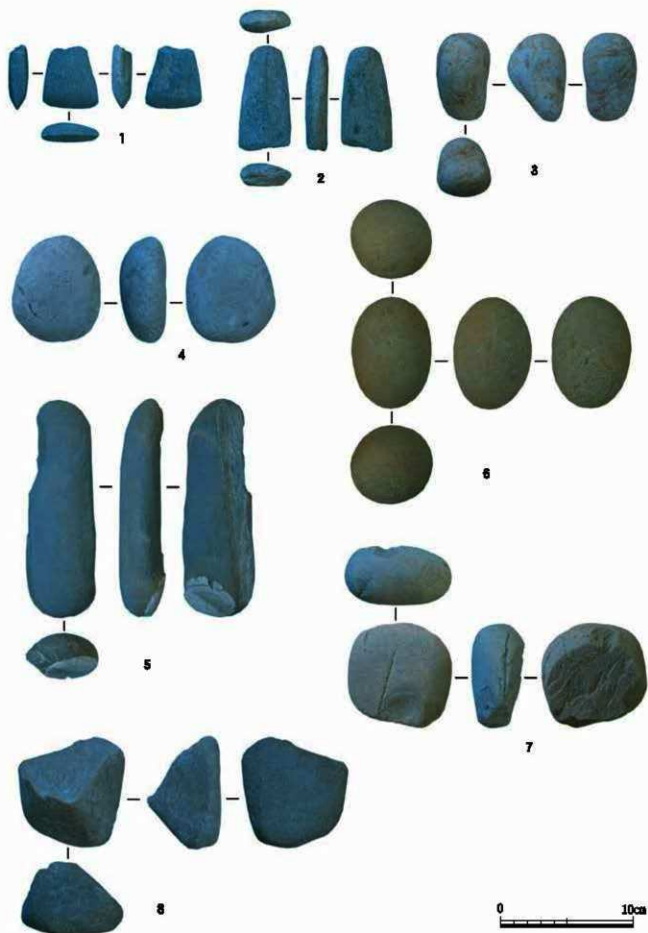
トレンチ毎に見ると5トレンチが11点と最も多く出土している。その内訳は、敲石6点、凹み石1点、磨石1点、石皿3点と食料加工に用いられたと思われる石器類がまとめて出土しており、5トレンチに当時の生活基盤があったと考えられる。

表 8 石器観察一覧

番 号	器種	分類 (大)	分類 (小)	残存	縦(cm) 横(cm) 厚(cm) 重量(g)	石質	観察事項	出土地
第 37 区 (図版 26)	1	石斧	半磨	両刃	刃部	輝緑岩	平面はバチ形、断面は鎌状。刃縁は両凸刃で偏刃である。表裏側面に研磨が施されている。	8トレンチ 暗灰褐色(スミ) (Ⅲ層 b) No.29 台1075-c
	2	石斧	半磨	不明	頭部	輝緑岩	平面は半楕円形、断面は板状。表裏面に研磨が施されており、打ち割り痕の跡も見られる。	8トレンチ 黄褐色(カワニナ) (Ⅲ層 a) No.24 台1075-k
	3	蔽石	円礫	楕円形	完形	シルト岩	平断面共に楕円形。左側面下面に若干の蔽打痕が見られる。	5トレンチ南(南25 ～)西壁側黄褐色と 打痕との漸移層 (Ⅳ層 d) 台211-a
	4	蔽石	円礫	楕円形	完形	砂質石灰岩	平断面共に楕円形。全面に蔽打痕が見られる。	5トレンチ(北5～ 南5) 東中灰白色砂層 (Ⅳ層 c) 台2870
	5	蔽石	円礫	楕円形	完形	片状砂岩	平面は楕円形、断面は棒状。平面左上部分を打ち割っており、下面には蔽打痕が見られる。	5トレンチ(北5～ 南5)北白砂(黄) (Ⅳ層 c) 台1282-a
	6	蔽石	円礫	球形	完形	片状砂岩	平断面共に球形。上下面に蔽打痕が見られ、全面には磨痕も見られる。	5トレンチ(南20～28) 南黒褐色の覆石 (Ⅳ層 d) 台839-a
	7	蔽石	円礫	隅丸 方形	完形	砂岩	平面は隅丸方形、断面は半楕円形。表面下部に凹み、表裏面には打ち割り痕が見られる。また、上面と右側面には蔽打痕が見られる。	5トレンチ(北5～ 南5) 貝層③淡黒褐色砂層 (Ⅳ層 b) 台614-a
	8	蔽石	円礫	隅丸 方形	破損	砂岩	平面は隅丸方形、断面は三角状、裏右側面下面に蔽打痕が見られる。	5トレンチ(北5～ 南5) 西灰白色砂層(Ⅳ層 c) 台1246
第 38 区 (図版 27)	9	蔽石	円礫	隅丸 方形	完形	輝緑岩	平面は隅丸方形、断面は板状。表下右側面に蔽打痕が見られる。また、全面に打ち割り痕も見られる。	5・6トレンチ拡張部 に蔽打痕が見られる。また、全面に打ち割 り痕も見られる。
	10	凹み石	円礫	楕円形	完形	片状砂岩	平断面共に楕円形。表裏面に凹みがあり、表裏側面には蔽打痕が見られる。上面の蔽打痕が一番強い。	5トレンチ南側 黒褐色砂層(Ⅳ層 b) 台2066
	11	磨石	円礫	楕円形	完形	砂岩	平断面共に楕円形。裏面は若干窪みがあり、右側面には僅かながら蔽打痕が見られる。	5トレンチ(北5～ 南5)東貝層③とな り灰褐色(貝クズ混) (Ⅳ層 b) 台978-a
	12	石皿	円礫	隅丸 方形	完形	輝緑岩	平面は隅丸方形、断面は楕円形。表裏下右側面に打ち割り痕が見られる。	5トレンチ(南20～28) 黒褐色砂層(Ⅳ層 b) 台884-a
	13	石皿	円礫	方形	破損	黒色千枚岩	平面は台形、断面は板状。破損のため全体形は不明。蔽打痕、打ち割り痕、磨痕等の人工的な要素は見当たらない。	5トレンチ(北5～ 南5) 貝層②淡黒褐色砂層 (Ⅳ層 b) 台1017
14	石皿	円礫	不明	破損	礫質砂岩	平面は不明、断面は板状。破損のため全体形は不明。蔽打痕、打ち割り痕、磨痕等の人工的な要素は見当たらない。自然石をそのまま使用している。	5トレンチ(南20～28) 緑灰色(V層) 台883-b	
第 39 区 (図版 28)	15	石球	円礫	球形	完形	細粒 砂岩	平断面共に球形。上下面に蔽打痕が見られる。	6トレンチ南西 灰白マンガン骨No.29 に伴う(Ⅳ層 c) 台1077-b
	16	サンゴ 製品	板状	楕円	完形	サンゴ 石灰岩	平面は楕円。断面は厚さ3.5cmの板状裏面は水平に研磨、側面も部分的に研磨、表面は中央部凹む。用途不明か。	5トレンチ(北5～ 南5) 灰白色砂層(Ⅳ層 c) 台2632

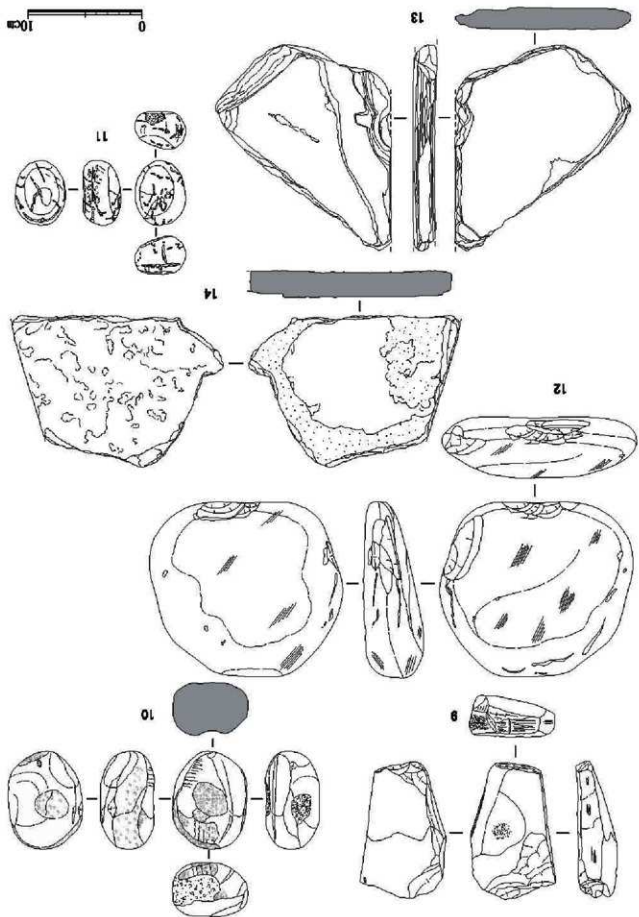


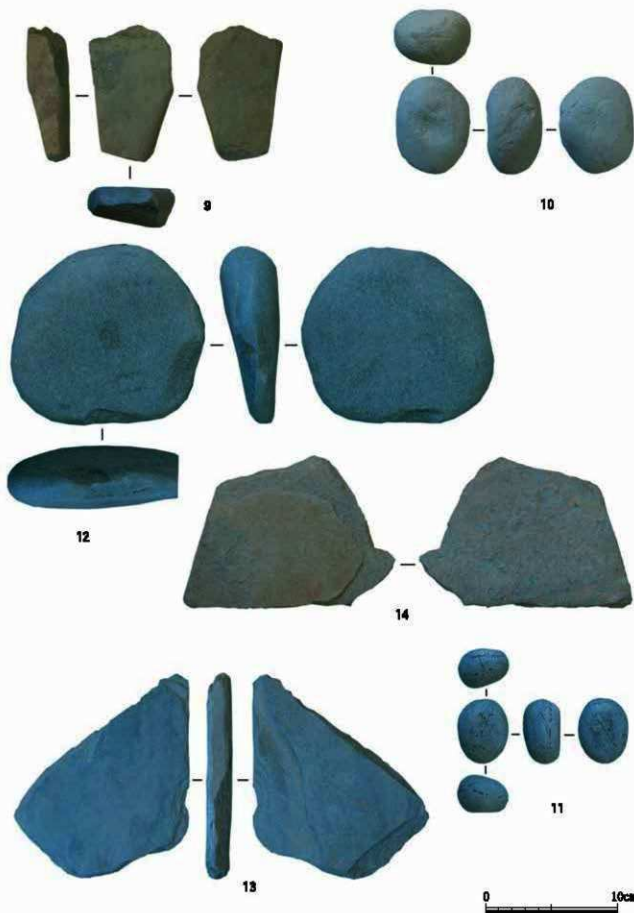
第37圖 石器 1 (石斧・敲石)



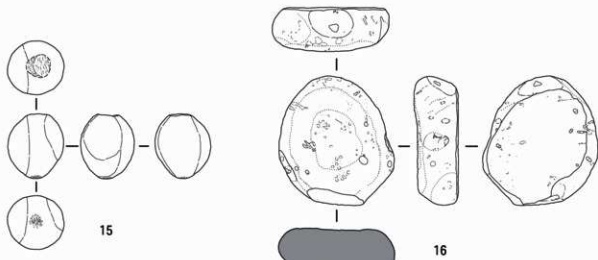
图版26 石器 1 (石斧·敲石)

第38圖 石器 2 (敲石・凹形石・磨石・石皿)

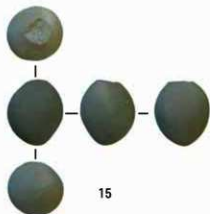




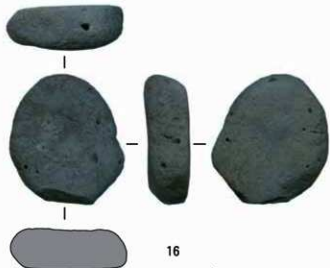
図版27 石器 2 (敲石・凹み石・磨石・石皿)



第39図 石器3 (石球・サンゴ石)



図版28 石器3 (石球・サンゴ石)



0 10cm

表9 石器出土量

出土地		器種	石斧		巖石		回み石		磨石		石皿		石球	サンゴ製品	層別計	グリッド別計	トレンチ別計
			両	不	円	球	円	円	円	円	方	網					
5 トレンチ	北5～南5	淡黒褐色砂層 (IV層 b)													2	7	12
		灰白色砂層 (IV層 c)			1	1								1	3		
		白砂 (黄) 層 (IV層 c)			1										1		
	南20～28	灰褐色 (貝クズ混) (IV層 b)							1						1	3	
		黒褐色の攪乱 (IV層 d)				1									1		
		黒褐色砂層 (IV層 b)									1				1		
南25～南側	緑灰色砂層 (V層)										1			1	1		
	西壁強黄褐色と下層との漸移層 (IV層 d)			1										1			
5・6 トレンチ	拡張部分	黒褐色砂層 (IV層 b)					1							1	1		
6 トレンチ	南西	溝状イコウ内 P 6 (III層 a)			1									1	1	1	
8 トレンチ		灰白マンガ骨№29に伴う (IV層 c)											1		1	1	1
		黄褐色 (カワニナ) №24 (III層 a)												1	1	2	2
		暗灰褐色 (スミ) №29 (III層 b)		1										1			
小計			1	1	4	1	2	1	1	1	1	1	1	1	16		
合計			2		7		1	1	1	3		1	1				

D. チャート製品

本遺跡で出土したチャート製品は第40図（図版29）に示した1点のみである。主面となる正面図から観察すると、右と左、両側そして左下方3方向からの細かい打割調整によりほぼ45度程度の刃をつくり出している。加工を施した打割のなかに使用痕も認められ、衝撃を受けた際の濁りの見られる箇所と新しく生じた欠損の部分も確認できる。横断面はほぼ三角形の形状を呈している。最長7.6cm、幅4.4cm、厚み2.7cm、重量は94.5gである。

色調は若干、灰色がかった緑青色を呈す。厚みがあり、全体に半透明であるが母岩から剥ぎ取った際に、結晶化せず不純物の混ざる部分もみられる。

用途としては、スクレイパーと考えられる。4トレンチからの出土で層序は不明である。

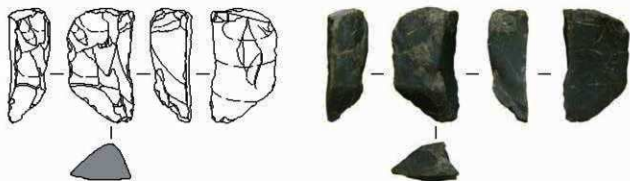
チャートは本遺跡周辺及び中部地域では産出されない為、出土した製品以外のチャート片も含め表10に出土一覧を示した。

表10 チャート製品出土一覧

図・図版番号	トレンチ	層 序	重さ (g)	備 考
第40図・図版29	4トレンチ	不明	94.5	スクレイパー
図版30-1	6トレンチ	茶褐色砂層 (IV層 b)	0.04	チャート片
# -2	5トレンチ (北5～南5)	白砂層 (IV層 c)	0.19	チャート片
# -3	5トレンチ (北5～南5)	灰白色砂層 (IV層 c)	0.46	チャート片
# -4	3トレンチ	黒褐色細粒砂質土層 (IV層 b)	1.18	チャート片
# -5	6トレンチ	漸移層 (灰白色粘質層) (IV層 b)	1.43	チャート片
# -6	3トレンチ	盛土 (不明)	1.14	チャート片
# -7	3トレンチ	盛土 (不明)	1.39	チャート片
# -8	5トレンチ (北側)	暗褐色細粒砂質土層 (IV層 c)	9.14	チャート片
# -9	5トレンチ (北側溝付近)	暗褐色細粒砂質土層 (IV層 c)	11.52	チャート片
# -10	3トレンチ	黒褐色細粒砂質土層 (IV層 b)	9.51	チャート片
# -11	3トレンチ	黒褐色細粒砂質土層 (IV層 b)	15.72	チャート片
# -12	5トレンチ (北側)	暗褐色細粒砂質土層 (IV層 c)	1.94	チャート片
# -13	5トレンチ (北5～南5)	灰白色層 (IV層 c)	0.71	チャート片
# -14	4トレンチ	盛土	136.00	チャート片
# -15	不明	表採	100.89	チャート片
# -16	8トレンチ	暗灰 (炭) No. I (III層 b)	32.16	チャート片
# -17	3トレンチ	黒褐色細粒砂質土層 (IV層 b)	34.1	チャート片
# -18	試掘1	暗灰色砂層 (IV層 b)	17.44	チャート片

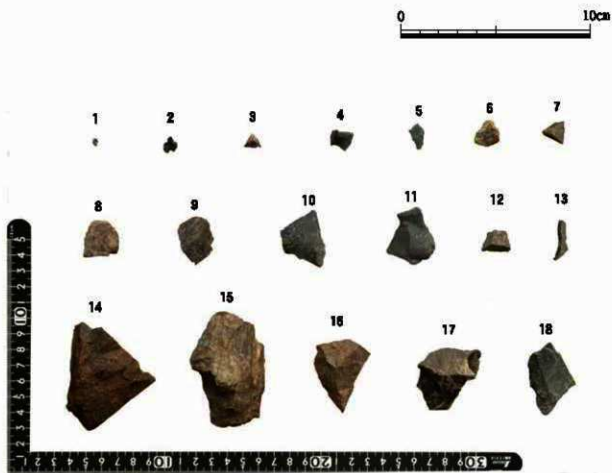
<参考文献>

- 北谷町教育委員会『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査-伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業-』北谷町文化財調査報告書 第23集 2005年
- 北谷町教育委員会『伊礼原遺跡-伊礼原B遺跡ほか発掘調査-』北谷町文化財調査報告書 第26集 2007年
- 北谷町教育委員会『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡-キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～14)-』北谷町文化財調査報告書 第27集 2008年
- 北谷町教育委員会『伊礼原D遺跡-キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～13年度)-』北谷町文化財調査報告書 第28集 2008年



第40図 チャート製品

図版29 チャート製品



図版30 チャート

第五節 グスク時代

1. 遺 構

グスク時代と思われる遺構は、標高4.0～3.3mの琉球石灰岩丘陵縁部から沖積世層に展開する。主な遺構は多数のピット群である。本文では平成11・12年度の範囲確認調査によるピットは「P」に番号、平成17年度からの本調査によるピットは「SP」に番号で記している。遺構は掘立柱建物址の他に、溝状遺構、自然流路や土墳墓も確認できた。遺物としては白磁碗（玉縁碗が多い）・滑石製品・カムイヤキなどが見られるため、時期としては11世紀後半～13世紀頃と考えている。同時期と思われる遺構が見られる本島内の遺跡を表13にまとめた。

A 掘立柱建物址

掘立柱建物は大きく分けると、柱穴の直径が30cm前後で柱間が150cm以下のものと、柱穴の直径が35cm以上で柱間180cm以上のものの2タイプがある。前者はそのまま掘立柱建物址1～7として扱うが、後者は高床式建物址1～4として扱う。

・掘立柱建物址1（第42図）

長軸はやや北西から南東方向で11.8m、短軸4.92m。周囲に27本のピット。径20～40cm。深さ25～45cm。掘立柱建物2と切り合うが、新旧不明。東側の短軸で、不定形のシミ状のものが確認できたが、柱穴を見つけることはできなかった。

・掘立柱建物址2（第43図）

長軸はやや東西方向で10.12m、短軸7.0m。周囲に16本のピット。径25～50cm。深さ10～45cm。掘立柱建物1と切り合うが、新旧不明。

・掘立柱建物址3（第44図）

長軸は北西から南東方向で7.2m、短軸3.2m。周囲に22本のピット。中柱2本。径20～45cm。深さ10～50cm。溝状遺構3に切られる。中柱の間に焼土（炉跡）が確認できた。

・掘立柱建物址4（第45図）

長軸はやや東西方向で5.8m、短軸3.25m。周囲に20本のピット。径17～55cm。深さ15～55cm。長軸は調査区外に伸びる可能性も考えている。

・掘立柱建物址5（第46図）

長軸はやや北西から南東方向で6.7m、短軸4.8m。周囲に36本のピット。径20～45cm。深さ20～35cm。掘立柱建物6に切られる。高床式建物4とセットと考えている。柱穴の南西側に焼土や炭が入る不定形のシミあったが建物との関係は不明。

・掘立柱建物址6（第47図）

長軸は北西から南東方向で7.5m、短軸3.8m。周囲に22本のピット。径10～75cm。深さ10～50cm。北側の長軸は試掘穴により削平されているが、試掘時に柱穴が確認されていた。掘立柱建物5を切る。

・掘立柱建物址7（第48図）

長軸は北西から南東方向で7.8m、短軸3.5m。周囲に29本のピット。中柱2本。径30～50cm。深さ18～35cm。掘立柱建物6に切られる。

B 高床式建物址

今回高床式建物として扱うものは柱穴が大きめで深いものもあり、高床式の倉庫の可能性もあるが、読谷村教育委員会の仲宗根求氏の御教示により、アシャギなどの別の用途も想定している¹⁾。

・高床式建物址 1 (第49図)

長軸は東西方向で3m、短軸2.2mの四本柱である。柱穴の直径は40～84cm、深さは20～48cmである。P144は近現代の溝状遺構に切られている。

・高床式建物址 2 (第49図)

長軸はやや東西方向で2.68m、短軸2.2mの四本柱である。柱穴の直径は36～48cm、深さ45～62cmである。高床式建物址3と平行に並ぶ。

・高床式建物址 3 (第50図)

長軸やや東西方向で1.8m、短軸1.8mの四本柱と考えている。柱穴の直径は36～56cm、深さは38～63cmである。高床式建物址2と平行に並ぶが、2よりひとまわり小さい。

・高床式建物址 4 (第50図)

四本柱の可能性もあったが、本調査で長軸はやや北西から南東方向3.8m、短軸1.8mの六本柱となった。柱穴の直径は40～68cm、深さは44～48cmである。P44は近現代の溝状遺構に切られている。掘立柱建物5とセットと考える。

C 炉址

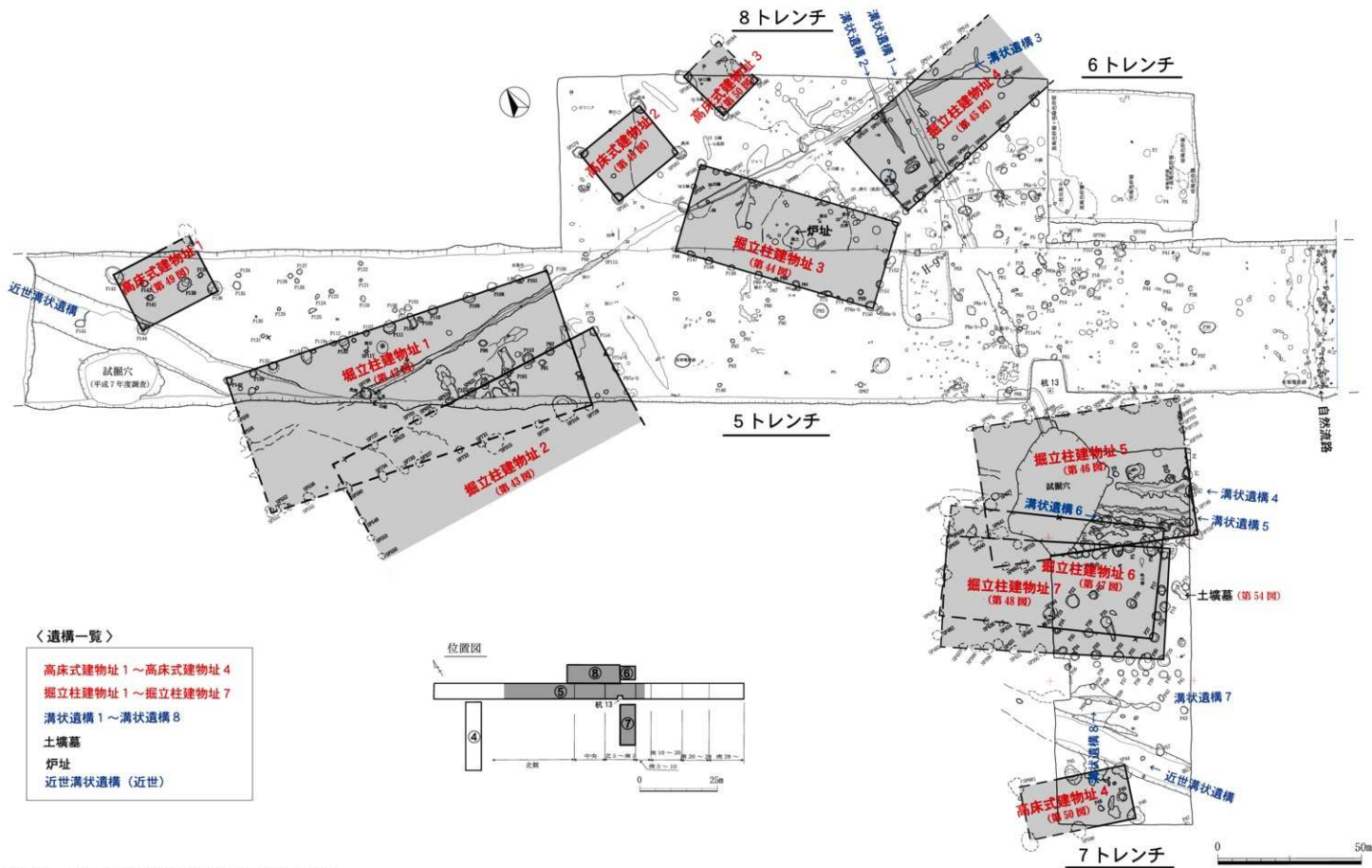
掘立柱建物址3(第44図)で確認され、平面形状は不定形で、長軸80cm、短軸70cm。周囲の柱穴との関係や深さは不明確である。

<註・参考文献>

註1：仲宗根 求 「グスク時代の掘立柱建物跡について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要 第27号』読谷村立歴史民俗資料館 2003年

表13の参考文献

- ・仲宗根 求 「グスク時代開始期の掘立柱建物についての一考察」『グスク文化を考える』2004年
- ・盛本 勲 「グスク時代の幕開け 文物と農耕をめぐって」『日琉交易の黎明』谷川健一 2008年
- ・沖縄県教育委員会 『北谷町 砂辺サーク原遺跡－北谷浄水場への導入管敷設工事に伴う緊急発掘調査報告－』沖縄県文化財調査報告書 第81集 1987年
- ・沖縄県・読谷村教育委員会 『吹出原遺跡－個人住宅建築に伴う緊急発掘調査報告書－』読谷村文化財調査報告書 第9集 1990年
- ・沖縄県埋蔵文化財センター 『伊佐前原第一遺跡－宜野湾北中城線(伊佐～普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書 第4集 2001年
- ・沖縄県埋蔵文化財センター 『後兼久原遺跡－米軍送油管移設に係る緊急発掘調査報告書－』沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書 第22集 2004年



〈遺構一覧〉

- 高床式建物址 1～高床式建物址 4
- 掘立柱建物址 1～掘立柱建物址 7
- 溝状遺構 1～溝状遺構 8
- 土墳墓
- 炉址
- 近世溝状遺構 (近世)

第41図 グスク時代の遺構とピット群 (平面図)

表11-1 掘立柱建物址プラン一覧

掘立柱建物址	トレンチ	ビットNo.	グリッド	平面形状	断面形状	長辺幅 (cm)	短辺長さ (cm)	深さ (cm)	遺物有無	備考					
掘立柱建物址 1	5 トレンチ		北側	P100	不定形	U	32	30	46						
				P101	円形	U	33	27	32	石器?・炭					
				P104	楕円形	U	55	26	46	軽石・炭					
				P107	円形	U	23	22	22	羽口 (第65図1)					
				P108	円形	U	33	29	25	炭					
				P109	円形	U	42	36	35	炭					
				P110	円形	U	32	31	32	軽石・炭・鉄滓 (第66図1)					
				P111	円形	二段状	46	42	43.5	貝・炭・羽口 (第65図2)					
				P112, a, b	楕円形	二段状	47	34	25	骨・炭					
				P113	楕円形	二段状	56	37	43	炭					
				P133	円形	U	30	30	35	炭					
				P139	円形	U	27	25	29						
				P140	不定形	U	29	28	27.5	石器?					
				掘立柱建物址 2	5 トレンチ		北側	P77, a, b	不定形	逆台形	35	28	8		
P82	楕円形	U	20					14	32						
P97	楕円形	不定形	48					30	31.5						
P153	楕円形	U	27					10	31						
P154	円形	U	32					31	44						
P161	円形	U	23					23	21						
P161	円形	U	23					23	21						
掘立柱建物址 3	5 トレンチ		中央付近	P75	楕円形	不定形	50	19	34	土器					
				P76	円形	不定形	25	22	33.5						
				P84	不定形	逆台形	34	23	16.5						
				P86	不定形	U	22	19	22.5	軽石					
				P89	不定形	U	28	23	23.5						
				P96	不定形	U	25	14	44						
				P147	楕円形	U	27	21	21						
				P148	円形	U	27	24	12	軽石					
				P149	不定形	U	24	20	35						
				P150	楕円形	U	43	32	35						
				P151	円形	U	27	26	29						
				P152, a, b	不定形	逆台形	37	39	22						
				掘立柱建物址 5	7 トレンチ			P1	不定形	すり鉢	75	47	17	石器?・炭	
P1	不定形	すり鉢	75					47	18						
P2	楕円形	不定形	58					16	17		溝状遺構内				
P4	不定形	U	27					18	28						
P5	円形	U	43					39	36	貝・炭	掘立柱建物址 7 と重なる				
P5	円形	U	43					39	35		掘立柱建物址 7 と重なる				
P6	楕円形	U	48					38	32	焼土・炭・レキ	掘立柱建物址 7 と重なる				
P6	楕円形	U	48					38	32		掘立柱建物址 7 と重なる				
P7	楕円形	二段状	35					21	18.5	羽口(第65図3) 白磁・炭・貝・土器					
P13	不定形	不定形	76					20	22		掘立柱建物址 7 と重なる				
P13	不定形	不定形	76					20	23		掘立柱建物址 7 と重なる				
P13	不定形	U	76					20	7	焼土・炭・土器	掘立柱建物址 7 と重なる				
P14	不定形	二段状	52					不可	10	焼土・炭					
P50	不定形	二段状	39					16	23						
P61	不定形	U	73					32	20	炭					
掘立柱建物址 6	7 トレンチ							P11	円形	U	40	38	27	貝・炭・白磁	
								P12	円形	U	40	34	48	貝・炭・羽口	
				P17	楕円形	U	34	28	18	炭					
				P17	楕円形	逆台形	34	28	18						
				P19	円形	U	36	35	44.5	炭・レキ					
				P24	円形	U	23	20	13						
				P26	円形	逆台形	32	31	15	炭					
				P27	円形	U	33	32	22						
				P51	不定形	逆台形	64	47	26	石皿・焼土	掘立柱建物址 7 と重なる				
				P51	不定形	二段状	64	47	32	焼土	掘立柱建物址 7 と重なる				
				P52	不定形	U	35	30	35	貝・炭・土器					

表11-2 掘立柱建物址プラン一覧

掘立柱建物址	トレンチ	ピット№	グリッド	平面形状	断面形状	長辺幅 (cm)	短辺長さ (cm)	深さ (cm)	遺物有無	備考
掘立柱建物址 7	7 トレンチ	P5		円形	U	43	39	36	貝・炭	掘立柱建物址 5 と重なる
		P5		円形	U	43	39	35		掘立柱建物址 5 と重なる
		P6		楕円形	U	48	38	32	焼土・炭・レキ	掘立柱建物址 5 と重なる
		P6		楕円形	U	48	38	32		掘立柱建物址 5 と重なる
		P13		不定形	不定形	76	20	23		掘立柱建物址 5 と重なる
		P13		不定形	U	76	20	7	焼土・炭・土器	掘立柱建物址 5 と重なる
		P13		不定形	不定形	76	20	22		掘立柱建物址 5 と重なる
		P18		不定形	U	36	36	27	炭	
		P22		不定形	U	46	44	34	炭・カムイヤキ (第57図 8・21)	
		P29		円形	U	44	39	39	炭・滑石 (第59図 12)・貝・骨・土器	
		P30		不定形	逆台形	58	56	27	貝・炭・土器	
		P30		不定形	U	58	56	47		
		P31		不定形	U	32	28	29	炭	
		P32		不定形	二段状	42	36	26.5	炭・貝	
		P33		円形	U	36	32	16		
		P34		円形	U	32	29	20		
		P35		不定形	U	54	30	23	炭	
		P35		不定形	W	54	30	26.5		
		P35		不定形	U	54	30	26.5		
		P51		不定形	逆台形	64	47	26	石皿・焼土	掘立柱建物址 6 と重なる
P51	不定形	二段状	64	47	32	焼土	掘立柱建物址 6 と重なる			
P59	不定形	U	45	不可	29	焼土・土器				

註：「掘立柱建物址 4 プラン」のピット計測一覧は本調査の報告書で示す。

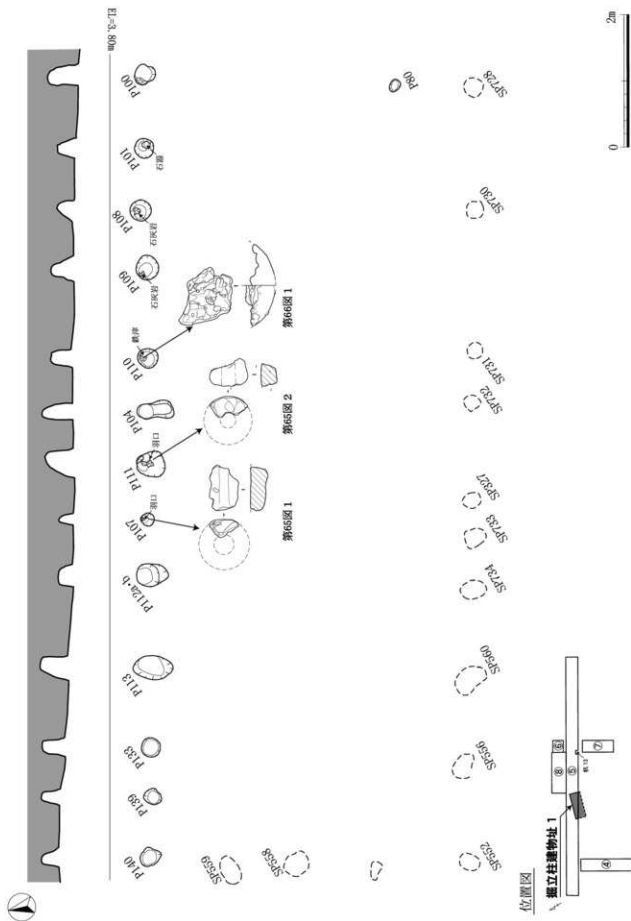
表12 高床式建物址プラン一覧

掘立柱建物址	トレンチ	ピット№	グリッド	平面形状	断面形状	長辺幅 (cm)	短辺長さ (cm)	深さ (cm)	遺物有無	備考
高床式建物址 1	5 トレンチ	P136	北側	円形	U	50	50	47.5	炭	
		P143		円形	すり鉢	61	56	19	炭	
		P144		円形	U	40	38	35		
高床式建物址 4	7 トレンチ	P44		不定形	U	55	38	47	焼土・炭・軽石	
		P45		円形	U	66	56	44	炭	
		P46		円形	U	61	61	41	炭	

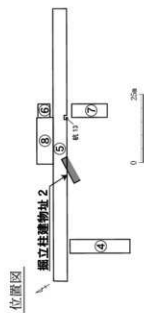
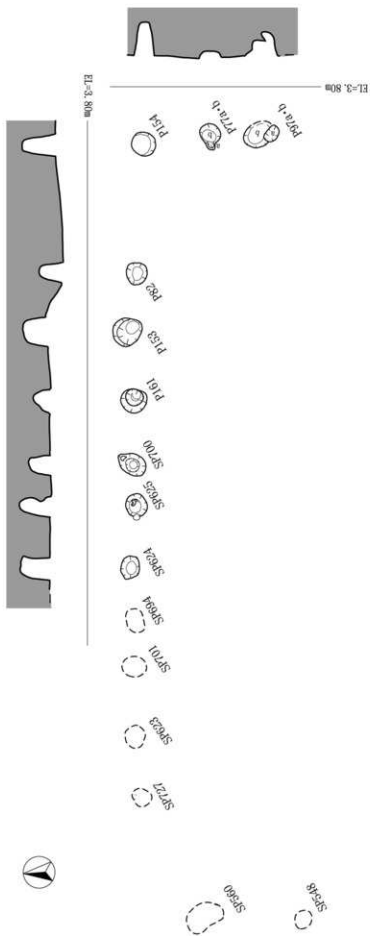
註：「高床式建物址 2・3 プラン」のピット計測一覧は本調査の報告書で示す。

表13 本島内の遺跡一覧

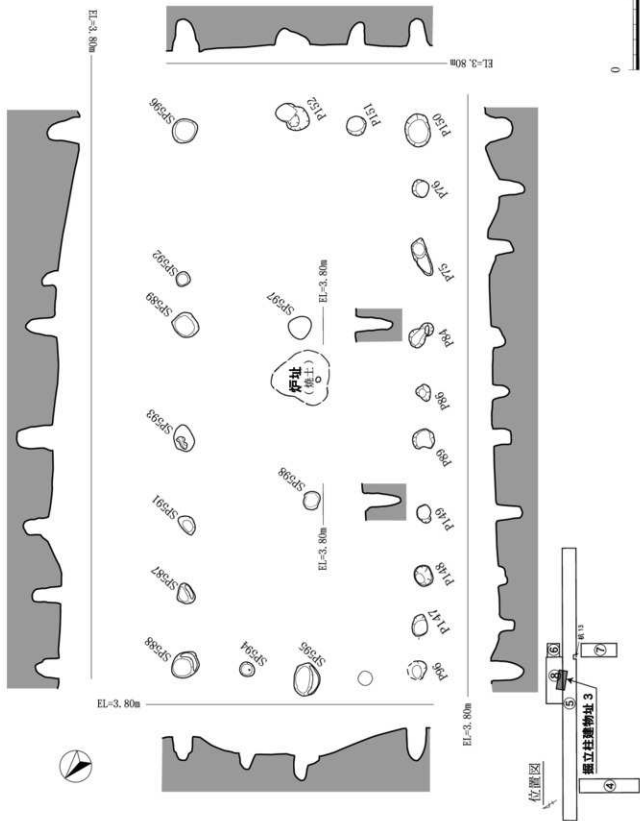
市町村名	遺跡名	調査主体	発行年
沖繩市	馬上原遺跡	沖繩市教育委員会	2000年
恩納村	熱田貝塚	沖繩県教育委員会	1978年
宜野湾市	伊佐前原第一遺跡	沖繩県立埋蔵文化財センター	1998年
宜野湾市	真志喜石川第一遺跡	宜野湾市教育委員会	2000年
玉城村	志堅原遺跡	玉城村教育委員会	2002年
北谷町	後兼久原遺跡	北谷町教育委員会	2003年
北谷町	後兼久原遺跡	沖繩県立埋蔵文化財センター	2004年
北谷町	砂辺サーク原遺跡	沖繩県教育委員会	1987年
豊見城市	伊良波東遺跡	豊見城市教育委員会	1987年
読谷村	楚辺ウガンヒラー北方遺跡	読谷村教育委員会	2004年
読谷村	タシーモー北方遺跡	読谷村教育委員会	2001年
読谷村	吹出原遺跡	読谷村教育委員会	1990年



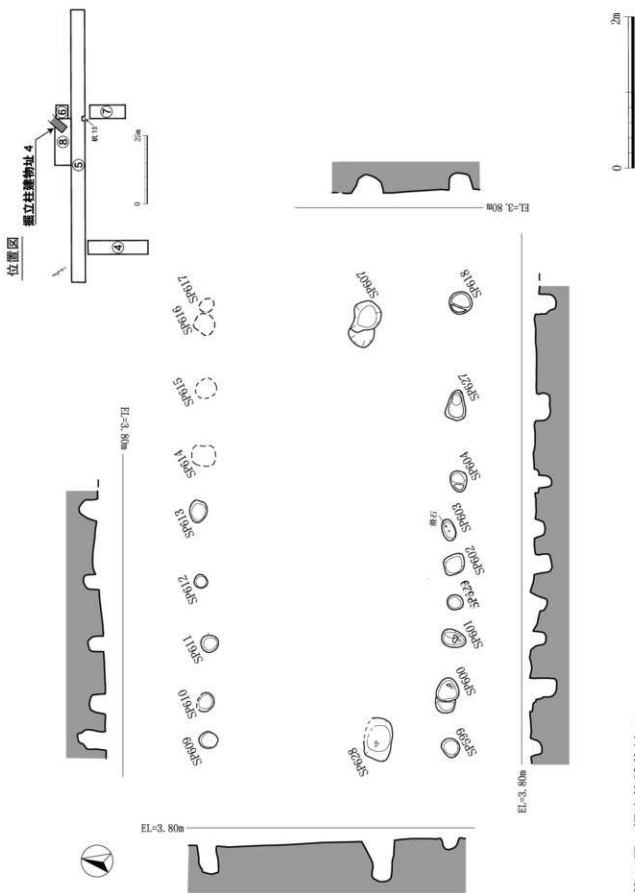
第42図 掘立柱建物址 1

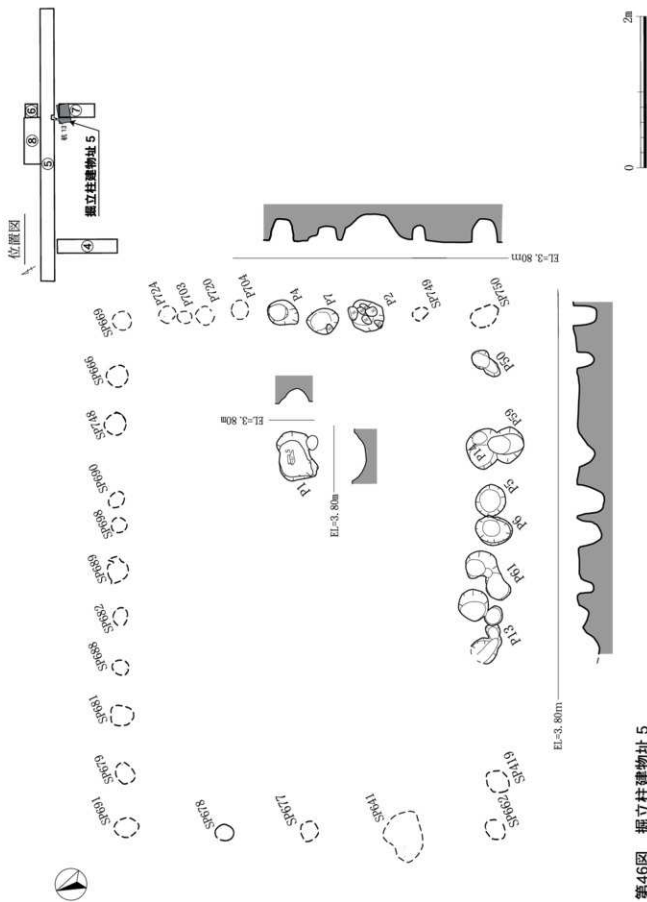


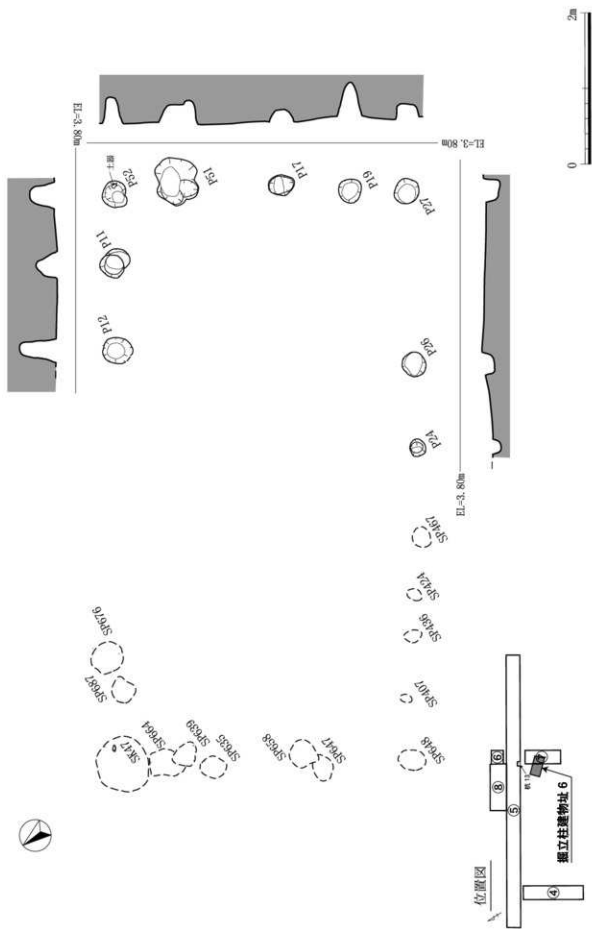
第43図 掘立柱建物址 2



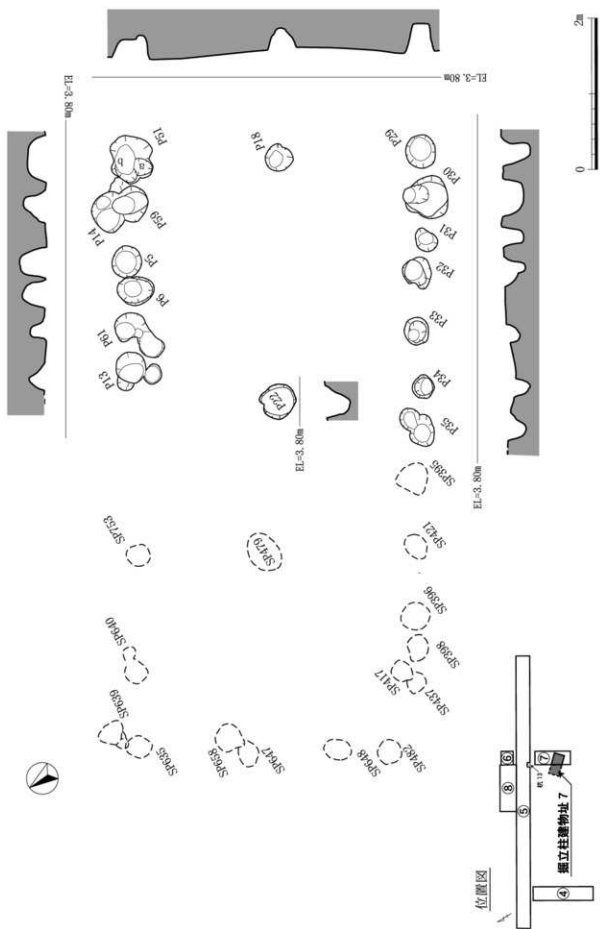
第44図 掘立柱建物址 3





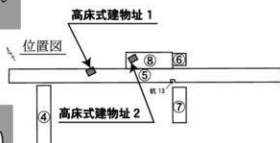
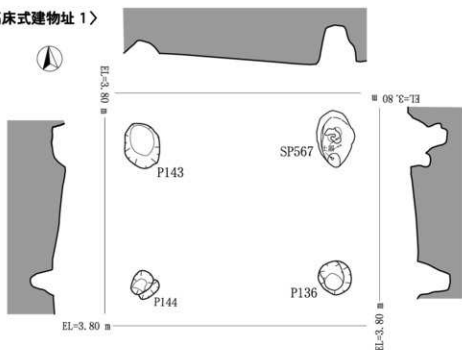


第47図 掘立柱建物址 6

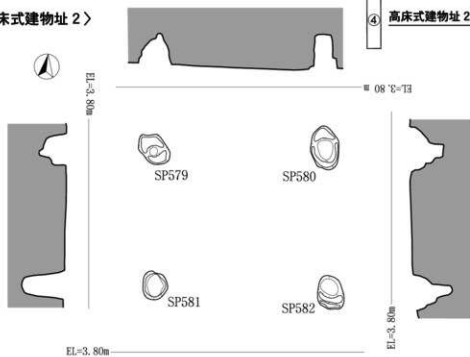


第48図 掘立柱建物址 7

〈高床式建物址 1〉

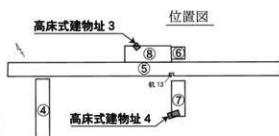
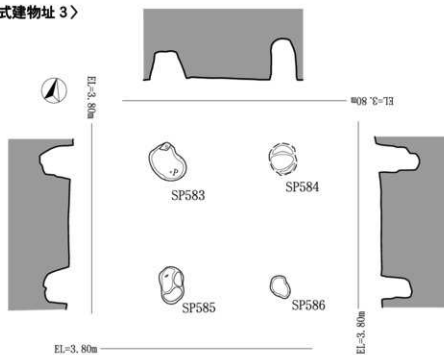


〈高床式建物址 2〉

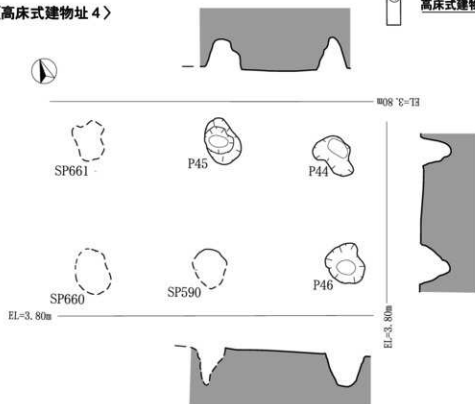


第49図 高床式建物址 1・2

〈高床式建物址 3〉



〈高床式建物址 4〉



第50図 高床式建物址 3・4

D 溝状遺構

5・7・8トレンチで8本の遺構を確認、遺物としては白磁、カムイヤキ、羽口が出土した。(表14)

・溝状遺構 1

5・8トレンチで確認。長さ15.4m、幅50cm、深さ20~28cm。溝状遺構2と平行で、溝状遺構3を切る。

・溝状遺構 2

5・8トレンチで確認。長さ2.8m、幅13cm、深さ5~7cm。溝状遺構1と平行で、溝状遺構3を切る。

・溝状遺構 3

5・8トレンチで確認。長さ23m、幅25cm、深さ12~28cm。掘立柱建物址3を切る。溝状遺構1・2に切られる。

・溝状遺構 4

7トレンチで確認。長さ2.6m、幅87cm、深さ5~23cm。掘立柱建物址5を切る。掘立柱建物址6を囲うように巡るため、雨だれ跡の可能性も考えている。

・溝状遺構 5

7トレンチで確認。長さ3m、幅63cm、深さ12~30cm。掘立柱建物址7を囲うように巡るため、雨だれ跡の可能性も考えている。

・溝状遺構 6

7トレンチで確認。長さ3.3m、幅13cm、深さ5cm。

・溝状遺構 7

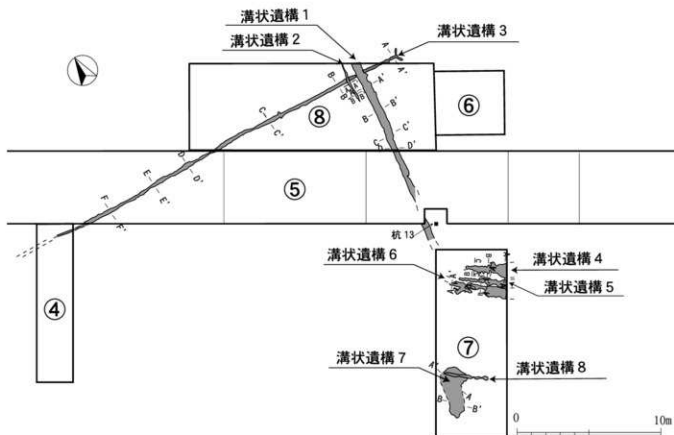
7トレンチで確認。長さ3m、幅13cm、深さ30cm。

・溝状遺構 8

7トレンチで確認。長さ50cm、幅5cm、深さは不明。断面図は確認できなかった。

表14 溝状遺構出土遺物

出土地	遺物	部位
7トレンチ	白磁	胴部
	カムイヤキ	口縁
5トレンチ	砂質土層 (Ⅲ層a)	カムイヤキ
		羽口
		羽口



第51図 溝状遺構配置図



圖版31 溝狀遺構 1 檢出狀況

圖版32 溝狀遺構 3 檢出狀況

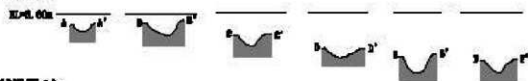
〈溝狀遺構 1〉



〈溝狀遺構 2〉



〈溝狀遺構 3〉



〈溝狀遺構 4〉



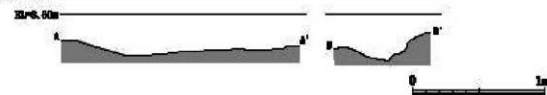
〈溝狀遺構 5〉



〈溝狀遺構 6〉



〈溝狀遺構 7〉



第52圖 溝狀遺構断面図

E 自然流路

5 トレンチで確認。長さ5m、幅1.2m。礫が多く確認されたが、人為的に積んでいる様子ではなかった。本調査によって、北東から南西方向に流れていることと、少なくとも2回流れていることがわかった。礫の間から白磁や滑石製品、土器、貝などが出土している。

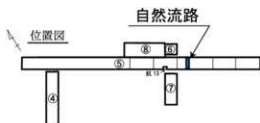
表15 自然流路出土遺物

5 トレンチ	出土地	遺物		部位
		砂利層 (Ⅲ層 a)	白磁	カムイヤキ
	黄褐色砂利層最下部	滑石製石鍋	土器	乳房状尖底
	砂利層 (Ⅲ層 b)	不明	石材片	—

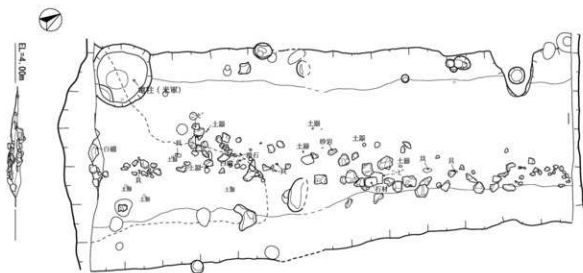
註：調査時は「石列」として扱ったので遺物台帳でも「石列」として表記。



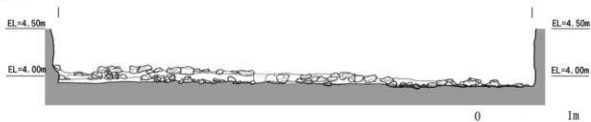
図版33 自然流路（礫）検出状況



<平面図>



<断面図>



第53図 自然流路（平面・断面図）

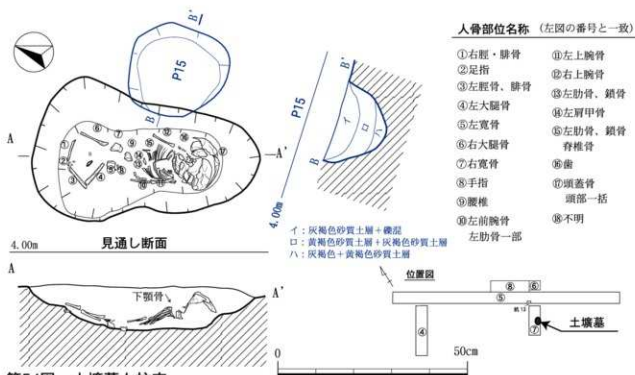
F. 土墳墓

7トレンチの南壁中央付近、標高3.90mで検出された。検出面において、P15の埋土はこの土墳墓の埋土に切られることがわかった。平面形状はひょうたん形で長軸60cm、短軸27.5～37.5cm。断面形状は二段掘りの隅丸逆台形で、深さは10.5cmである。棺材は確認できなかったが、頭位が南の乳児人骨が確認され、琉球大学の土肥直美先生に鑑定を依頼した。人骨についての詳細は第四章第1節に記す。なお本町が調査した後兼久原遺跡で幼児人骨の土墳墓が確認されている。こちらは頭位が北西の伏臥屈葬であり、四歳程度の幼児（性別不明）との所見を頂いた¹⁾。

<註・参考文献>

註1：北谷町教育委員会 『後兼久原遺跡―庁舎建設に係る文化財発掘調査報告―』北谷町文化財調査報告書 第21集 2003年

瀬戸哲也 「グスク時代の土墳墓・石組墓―発掘資料から―」『紀要 沖縄埋文研究1』沖縄県埋蔵文化財センター 2003年



第54図 土墳墓と柱穴

表16 土墳墓・人骨(幼児骨)比較表

	小堀原遺跡	後兼久原遺跡
長軸方向	南-北	北西-南東
長軸 (cm)	60	83
短軸方向	東-西	南西-北東
短軸 (cm)	27.5~37.5	39
深さ (cm)	10.5	14
標高 (m)	3.9	4.3
平面形状	ひょうたん形	隅円形
断面形状	二段掘の隅丸逆台形	隅丸逆台形
頭位	南 (*南西)	北西
埋葬姿勢	仰臥屈肢葬	伏臥屈葬
遺物	なし	カムイヤキ
時期	11c~13c	11c後半~13c
棺材	確認できていない	確認できていない
備考	本調査により乳児人骨の墓は三基となった。	体を押さえるように襦が置かれていた。

(*) 内は範囲確認調査時の方位



図版34 人骨検出状況

G. ピット群

確認されたピットは5トレンチ157点、6トレンチで5点、8トレンチで7点、7トレンチ61点である。また、ピット群を確認できなかったのは1トレンチ、2トレンチ、3トレンチ、4トレンチである。表17-1～5に各トレンチごとにピット検出一覧を示した。

ピットの大きさは長軸、短軸、および深さを示し、実測図より読み取れる平面形および断面形を掲載した。その中で、プランの設定が可能なものは備考にプランの番号を「掘立柱建物址」、「高床式建物址」と表記した。また、図面が確認できなかったのは「平面図なし」、「断面図なし」と表記。

また、それぞれのピットから出土した遺物は遺物台帳や実測図から書き入れた。平成12年の試掘調査のピットは「P000」、平成17年からの調査でプランの確認で使用したピットは「SPOO」と区別した。これらの表は第41図のピット番号と一致する。

表17-1 ピット計測一覧

トレンチ	ピット No.	グリッド	平面形状	断面形状	長辺幅 (cm)	短辺長さ (cm)	深さ (cm)	プラン	遺物有無	備考
5トレンチ	P5	-	-	-	-	-	-		土器	平面・断面図なし
	P6	北5～南5	楕円形	U	24	19	12			
	P7,a,b	北5～南5	不定形	二段状	42	28	16		土器	
	P8	北5～南5	楕円形	二段状	31	29	12		土器	
	P9,a,b,c	北5～南5	楕円形	U	29	22	9		貝・土器	
	P10	北5～南5	円形	不定形	25	25	10.5		羽口	
	P11,a,b	北5～南5	円形	不定形	34	16	14.5		炭	
	P12		円形	U	30	29	27.5		土器	
	P13		円形	U	21	20	28		貝・獣骨	
	P14		円形	U	22	20	10			
	P15		円形	U	26	25	16		軽石・土器	
	P16		不定形	U	28	24	16		貝・土器	
	P17		円形	U	27	25	25.5		土器	
	P18		円形	U	30	29	41		貝・土器	
	P19		円形	U	14	12	18			
	P20		楕円形	U	35	16	7		土器	
	P21	円形	U	20	16	9				
	P21c,d	南5～10	円形	W	20	16	3			
	P22		不定形	U	18	6	16			
	P23		円形	U	8	8	11			
	P24,a,b		楕円形	W	26	10	16			
	P24,b,c	楕円形	W	26	10	5				
	P25	-	-	U	-	-	20			平面図なし
	P26	-	-	U	-	-	6.5			平面図なし
	P27,a,b	南5～10	円形	不定形	40	39	16			
	P27,a,c		円形	不定形	40	39	3			
	P28	-	-	U	-	-	5			平面図なし
	P29,a,b	南5～10	楕円形	不定形	22	20	3			
	P30		円形	U	18	16	4			
	P31	-	-	U	-	-	3.5			平面図なし
	P32	-	-	U	-	-	6.5			平面図なし
	P33,a,b	南5～10	円形	不定形	24	23	10			
	P34		円形	U	26	24	17		軽石	
	P35		-	-	U	-	-	4		土器
	P36,a,b	南5～10	楕円形	U	55	35	25.5		軽石・土器	
	P37		楕円形	U	23	18	11		軽石・土器	
	P38	北5～南5	円形	U	19	18	13		軽石・土器	
	P39	-	-	不定形	-	-	3			平面図なし

表17-2 ビット計測一覧

トレンチ	ビット No.	グリッド	平面 形状	断面 形状	長辺 幅(cm)	短辺 長さ(cm)	深さ (cm)	プラン	遺物有無	備 考	
5 ト レ ン チ	P40	南5～10	円形	U	40	24	23		土器		
	P41	北5～南5	楕円形	U	9	9	3			平面図なし	
	P42		-	不定形	-	-	4				
	P43,a,b		楕円形	不定形	43	32	22		軽石・貝・土器		
	P44		円形	U	17	14	13				
	P45		楕円形	U	22	8	2.5				
	P46		円形	U	18	17	14		軽石・土器		
	P47		円形	U	16	16	10		軽石		
	P48		円形	U	17	8	20				
	P49		円形	U	17	8	21				
	P50		-	-	U	-	-	4			平面図なし
	P51,a,b		北5～南5	楕円形	不定形	35	26	42			A-A'
	P51	楕円形		U	35	26	40			B-B'	
	P52	-	-	U	-	-	2			平面図なし	
	P53	-	-	U	-	-	2.5			平面図なし	
	P54	-	-	U	-	-	18			平面図なし	
	P55	北5～南5	楕円形	すり鉢	26	14	6.5				
	P56		円形	U	28	25	23				
	P57		円形	U	15.5	15	16		軽石・土器		
	P58		円形	-	18	16	-		軽石	断面図なし	
	P59		楕円形	すり鉢	16	12	4				
	P60,a,b,c		北5～南5	円形	不定形	34	18	23		軽石	A-A'
	P60,a,b,c	円形		逆台形	34	18	2.5			B-B'	
	P61	円形		U	30	29	23		軽石・土器		
	P62,a,b	楕円形		不定形	23	10	13.5		軽石		
	P63	円形	U	12	11	2					
	P64	円形	U	15	14	10					
	P65	円形	-	22	21	-		軽石	断面図なし		
	P66	円形	U	23	23	10		軽石			
	P67	円形	逆台形	19	18	6					
	P68,a,b	中央付近	楕円形	不定形	27	19	8				
	P69		円形	U	18	17	24				
	P70,a,b	-	-	U	-	-	13			平面図なし	
	P71	-	-	すり鉢	-	-	2		軽石	平面図なし	
	P72	-	-	逆台形	-	-	3.5			平面図なし	
	P73	中央付近	不可	-	25	7	-			断面図なし	
	P74		円形	すり鉢	11	11	5				
	P75		楕円形	不定形	50	19	34		掘立柱建物址 3	土器	
	P76		円形	不定形	25	22	33.5		掘立柱建物址 3		
	P77,a,b		北側	不定形	逆台形	35	28	8		掘立柱建物址 2	
	P78		-	-	不定形	-	-	11			平面図なし
	P79	北側	円形	すり鉢	23	21	6				
	P80		円形	U	30	29	18				
P81	円形		U	23	20	19					
P82	楕円形		U	20	14	32		掘立柱建物址 2			
P83	円形	すり鉢	53	52	5						
P84	不定形	逆台形	34	23	16.5		掘立柱建物址 3				
P85	楕円形	すり鉢	14	7.5	3						
P86	不定形	U	22	19	22.5		掘立柱建物址 3	軽石			
P87	円形	U	20	15	13.5						
P88	中央付近	円形	U	12.5	12	11					
P89		不定形	U	28	23	23.5		掘立柱建物址 3			
P90		楕円形	逆台形	22	13	5					
P91		円形	U	16	16	6.5					
P92		円形	U	15	14	11.5					
P93		円形	U	15	13	20					

表17-3 ビット計測一覧

トレンチ	ビット No.	グリッド	平面 形状	断面 形状	長辺 幅(cm)	短辺 長さ(cm)	深さ (cm)	プラン	遺物有無	備 考
5 ト レ ン チ	P94	中央付近	円形	U	16	16	5.5			
	P95		円形	U	14	12	9			
	P96		不定形	U	25	14	44	掘立柱建物址 3		
	P97		楕円形	不定形	48	30	31.5	掘立柱建物址 2		
	P98		円形	U	28	22	15			
	P99		楕円形	すり鉢	20	14	6			
	P100		不定形	U	32	30	46	掘立柱建物址 1		
	P101		円形	U	33	27	32	掘立柱建物址 1	石器?・炭	
	P102		円形	-	30	30	-			断面図なし
	P103		楕円形	U	19	15	8			
	P104		楕円形	U	55	26	46	掘立柱建物址 1	軽石・炭	
	P105	円形	逆台形	24	22	11.5				
	P106	円形	逆台形	17	17	4.5				
	P107	円形	U	23	22	22	掘立柱建物址 1	羽口 (第65図 1)		
	P108	円形	U	33	29	25	掘立柱建物址 1	炭		
	P109	円形	U	42	36	35	掘立柱建物址 1	炭		
	P110	円形	U	32	31	32	掘立柱建物址 1	軽石・炭・鉄滓 (第66図 1)		
	P111	円形	二段状	46	42	43.5	掘立柱建物址 1	貝・炭・羽口 (第65図 2)		
	P112,a,b	楕円形	二段状	47	34	25	掘立柱建物址 1	骨・炭		
	P113	楕円形	二段状	56	37	43	掘立柱建物址 1	炭		
	P114	円形	すり鉢	20	19	8				
	P115	円形	すり鉢	24	18	7				
	P116	-	-	すり鉢	-	-	12		炭	平面図なし
	P117	円形	U	13	12	12.5			炭・滑石	
	P118	円形	逆台形	15	13	5.5				
	P119,a,b	楕円形	不定形	24	17	17				
	SP120	円形	U	20	18	12				
	SP121	円形	U	12	10	14				
	P122	円形	U	16	14	6.5				
	P123	円形	U	16	16	10				
	P124	楕円形	U	17	16	10.5				
	P125	楕円形	すり鉢	27	17	5				
	P126	円形	U	18	16	12				
	P127	円形	U	20	19	16				
	P128	円形	U	18	17	11				
	P129	円形	U	13	12	12.5				
	P130	円形	U	7	7	9				
	P131	円形	U	15	14	8.5				
	P132	楕円形	U	20	12	14				
	P133	円形	U	30	30	35	掘立柱建物址 1	炭		
	P134	円形	U	19	16	24			軽石・炭	
	P135	円形	不定形	28	26	3				
	P136	円形	U	50	50	47.5	高床式建物址 1	炭		
	P137	楕円形	逆台形	18	16	7				
	P138	楕円形	逆台形	48	44	10				
P139	円形	U	27	25	29	掘立柱建物址 1				
P140	不定形	U	29	28	27.5	掘立柱建物址 1	石器?			
P141	円形	すり鉢	23	20	5					
P142	円形	U	25	24	21.5			炭		
P143	円形	すり鉢	61	56	19	高床式建物址 1	炭			
P144	円形	U	40	38	35	高床式建物址 1				
P145	楕円形	すり鉢	33	26	6					

表17-4 ビット計測一覧

トレンチ	ビット No.	グリッド	平面 形状	断面 形状	長辺 幅(cm)	短辺 長さ(cm)	深さ (cm)	プラン	遺物有無	備 考	
5 ト レ ン チ	P146	中央付近	円形	U	15	13	8				
	P147		楕円形	U	27	21	21	掘立柱建物址 3			
	P148		円形	U	27	24	12	掘立柱建物址 3	軽石		
	P149		円形	U	24	20	35	掘立柱建物址 3			
	P150		楕円形	U	43	32	35	掘立柱建物址 3			
	P151		円形	U	27	26	29	掘立柱建物址 3			
	P152,a,b		楕円形	逆台形	37	39	22	掘立柱建物址 3			
	P153		北側	楕円形	U	27	10	31	掘立柱建物址 2		
	P154			円形	U	32	31	44	掘立柱建物址 2		
	P155			北5～南5	円形	逆台形	28	26	6		軽石
	P156,a,b	南5～10	楕円形	U	54	36	17				
	P157	北5～南5	円形	逆台形	25	19	27		軽石		
	P158	南5～10	円形	U	18	17	11				
	P159	-	-	-	-	-	-		軽石	平面・断面図なし	
	P160	-	-	-	-	-	-		軽石	平面・断面図なし	
	P161	北側	円形	U	23	23	21	掘立柱建物址 2			
6 ト レ ン チ	P1		楕円形	-	14	12	-			断面なし	
	P2		円形	-	26	24	-			断面なし	
	P3		円形	-	32	25	-			断面なし	
	P4		円形	-	26	22	-			断面なし	
	P5		円形	-	23	21	-			断面なし	
7 ト レ ン チ	P1		楕円形	すり鉢	75	47	17	掘立柱建物址 5	石器?・炭	A-A'	
	P1		楕円形	すり鉢	75	47	18	掘立柱建物址 5		B-B'	
	P2		楕円形	不定形	58	16	17	掘立柱建物址 5		溝状遺構内	
	P3		円形	不定形	26	16	13.5		炭	溝状遺構内	
	P4		円形	U	27	18	28	掘立柱建物址 5			
	P5		円形	U	43	39	36	掘立柱建物址 5 掘立柱建物址 7	貝・炭	A-A'	
	P5		円形	U	43	39	35	掘立柱建物址 5 掘立柱建物址 7		B-B'	
	P6		楕円形	U	48	38	32	掘立柱建物址 5 掘立柱建物址 7	焼土・炭・レキ	A-A'	
	P6		楕円形	U	48	38	32	掘立柱建物址 5 掘立柱建物址 7		B-B'	
	P7		楕円形	二段状	35	21	18.5	掘立柱建物址 5	羽口・白磁・炭・貝・土器		
	P8		楕円形	U	18	13	13		炭		
	P9		円形	U	20	20	15.5		炭		
	P10		-	-	-	-	-			平面・断面図なし	
	P11		円形	U	40	38	27	掘立柱建物址 6	貝・炭・白磁		
	P12		円形	U	40	34	48	掘立柱建物址 6	貝・炭・羽口		
	P13		不定形	不定形	76	20	23	掘立柱建物址 5 掘立柱建物址 7		A-A'	
	P13		不定形	U	76	20	7	掘立柱建物址 5 掘立柱建物址 7	焼土・炭・土器	B-B'	
	P13		不定形	不定形	76	20	22	掘立柱建物址 5 掘立柱建物址 7		B-B'	
	P14		不定形	二段状	52	不可	10	掘立柱建物址 5	焼土・炭		
	P15		円形	逆台形	26	25	13				
	P16		楕円形	U	73	29	13		貝	幼児人骨 土壇墓	
	P17		円形	U	34	28	18	掘立柱建物址 6	炭	A-A'	
P17		円形	逆台形	34	28	18	掘立柱建物址 6		B-B'		
P18		円形	U	36	36	27	掘立柱建物址 7	炭			
P19		円形	U	36	35	44.5	掘立柱建物址 6	炭・レキ			
P20		円形	U	34	34	22		炭	A-A'		
P20		円形	逆台形	34	34	22			B-B'		
P21		円形	逆三角	30	30	17		炭			
P22		円形	U	46	44	34	掘立柱建物址 7	炭・カムイヤキ (第57図-B・21)			

表17-5 ビット計測一覧

トレンチ	ビット No.	グリッド	平面 形状	断面 形状	長辺 幅(cm)	短辺 長さ(cm)	深さ (cm)	プラン	遺物有無	備 考		
ア ト レ ン チ	P23		楕円形	U	37	7	29		炭・カムイヤキ (第56図10)			
	P24		円形	U	23	20	13	掘立柱建物址 6				
	P25		不定形	不定形	90	40	50		炭			
	P26		円形	逆台形	32	31	15	掘立柱建物址 6	炭			
	P27		円形	U	33	32	22	掘立柱建物址 6				
	P28		円形	U	29	26	10		炭			
	P29		円形	U	44	39	39	掘立柱建物址 7	掘立柱建物址 7	炭・滑石(第59図12)・ 貝・骨・土器		
	P30		不定形	逆台形	58	56	27	掘立柱建物址 7				
	P30		不定形	U	58	56	47	掘立柱建物址 7				
	P31		不定形	U	32	28	29	掘立柱建物址 7		炭		
	P32		不定形	二段状	42	36	26.5	掘立柱建物址 7		炭・貝		
	P33		円形	U	36	32	16	掘立柱建物址 7				
	P34		円形	U	32	29	20	掘立柱建物址 7				
	P35		不定形	U	54	30	23	掘立柱建物址 7		炭	A-A'	
	P35		不定形	W	54	30	26.5	掘立柱建物址 7			A-A'	
	P35		不定形	U	54	30	26.5	掘立柱建物址 7			B-B'	
	P36		円形	すり鉢	25	19	8					
	P37		円形	U	21	20	19					
	P38		円形	逆台形	24	22	9					
	P39		円形	逆台形	20	19	9					
	P40		円形	逆台形	30	26	2.5					
	P41		円形	U	26	22	11				A-A'	
	P41		円形	逆台形	26	22	10.5				B-B'	
	P42		楕円形	U	23	18	12					
	P43		円形	U	25	24	26.5			炭		
	P44		不定形	U	55	38	47	高床式建物址 4		焼土・炭・軽石	A-A'	
	P44		不定形	U	55	38	45	高床式建物址 4		軽石	B-B'	
	P45		円形	U	66	56	44	高床式建物址 4		炭		
	P46		円形	U	61	61	41	高床式建物址 4		炭		
	P47		不定形	逆台形	15	9	7					
	P48		円形	U	21	20	24					
	P49		円形	逆台形	28	26	13					
	P50		楕円形	二段状	39	16	23	掘立柱建物址 5				
	P51		不定形	逆台形	64	47	26	掘立柱建物址 6		石皿・焼土	A-A'	
								掘立柱建物址 7				
	P51		不定形	二段状	64	47	32	掘立柱建物址 6		焼土	B-B'	
								掘立柱建物址 7				
	P52		不定形	U	35	30	35	掘立柱建物址 6		貝・炭・土器	A-A'	
	P52		円形	U	35	30	33				B-B'	
	P53		円形	U	32	30	26			炭		
	P54		円形	U	24	24	18.5					
	P55		-	U	-	-	20			炭・カムイヤキ(第56 図11)・滑石(第58図 2)・土器	平面図なし	
	P56		円形	U	24	8	23					
	P57		楕円形	逆台形	40	20	14					
	P58		円形	すり鉢	19	19	9			炭		
	P59		不定形	U	45	不可	29	掘立柱建物址 7		焼土・土器		
	P60		円形	U	24	20	15.5					
	P61		不定形	U	73	32	20	掘立柱建物址 5		炭		
	B ト レ ン チ		P1	5・6 トレンチ 拡張部	円形	U	27	24	17		炭	
			P2		楕円形	U	43	26	30		土器・炭	
P3		楕円形	U		32	24	32					
P4		不定形	不定形		43	42	18		軽石	B-B'		
P4		不定形	W		43	42	8.5			A-A'		
P5		円形	-		21	20	-		土器	断面図なし		
P6		楕円形	二段状		38	30	26		炭化物・石器 (第38図9)			
P7	円形	U	22	21	22.5							

2. 出土遺物

グスク時代の出土遺物はカムイヤキ、滑石製品および二次加工品、白磁、鍛冶関連の羽口、鉄滓、焼土などが出土した。

いずれも出土量は1コンテナ弱か数点と少ない。脊椎動物、貝類遺体の出土も少ない。

以下、各遺物について報告する。

A. カムイヤキ

本遺跡のカムイヤキは総数29点出土している。器種は壺と皿で、部位別の出土は口縁部6点、胴部22点、底部1点である。いずれも破片で、そのうち図化できるもの24点を第56図と第57図(図版35・図版36)に図示した。表18に層序別器種分類出土量を示し、個々の遺物に関しては観察一覧を表19に記述した。分類は器形及び口縁形態で、下記の分類のとおりに行った。

器種及び口縁部の形態分類

I類-皿 — a・口縁部が底部に向かって内に傾き、浅くなる(第56図-1・図版35-1)

II類-壺

- a・口縁部が頸部の径と等しい(第56図-2・図版35-2)
- b・口縁部が頸部の径よりもややひろく(第56図-3・図版35-3)
- c・口縁部がかなり外反し、肥厚する(第56図-4・図版35-4)
- d・口縁部が浅く外反し、短頸(第56図-5・図版35-5)
- e・口縁部、口唇が厚手、長頸壺に属し直口する(第56図-6・図版35-6)

第55図 口縁形態のタイプ別模式図



表18 カムイヤキ出土量

出土地	層序	形態・部位	壺						胴部	底部	小計
			口縁部								
			I-a	II-a	II-b	II-c	II-d	II-e			
3トレンチ	盛土							1		1	
4トレンチ	⑧ II層				1			1		2	
	砂利層 III層 a							2		2	
	暗褐色細粒砂質土層 III層 a						1			1	
5トレンチ	暗褐色砂質土層 III層 b							1	1	2	
	灰褐色粘質土層 III層 a							1		1	
	層序不明		1					2		3	
	黒褐色砂質土層 III層 a					1				1	
	灰褐色砂質土層 III層 a			1						1	
	暗褐色灰混土層 III層 b							2		2	
7トレンチ	ピット22 III層 a							2		2	
	ピット23 III層 a							1		1	
	ピット55 III層 a							1		1	
	暗褐色細粒砂質土層 III層 b							1		1	
	層序不明							4		4	
	灰褐色粘質土層 II層 b							1		1	
8トレンチ	暗灰褐色粘質土層 II層 b	1						1		2	
	黄褐色細粒砂層 III層 a							1		1	
	小計		1	1	1	1	1	1	1	7	
	合計		1	1	1	1	1	1	22	1	29

註：頸部・肩部は胴部に含めた。

表19-1 カムイヤキ観察一覧

第56区	番	器種	分類	口径 胴径 底径 (cm)	素地・焼成	文様・器面調整・その他の特徴	出土地 台帳番号
第56区 (区原35)	1	皿	I-a	15.0 — —	厚みは、口縁部で4.5mm、胴部の先端部で約9mm。底部の形態は不明。胴部から口縁部にかけて逆ハの字に広がり、口縁1.2cmのところまで立ち上がる。表面・内面、素地の中心部まで焼成はきわめて悪い。	残存資料は口縁部から胴部にかけて若干のねじれがみられる。器面全体に横位の轆轤痕が確認できる。	8トレンチ 暗灰褐色粘質土層Ⅱ層b 台2665
	2	壺	II-a	13.2 — —	口縁の立ち上がりは真つぐで、肩部から胴部にかけて若干張るものと推測される。器色は灰青色を呈し表面・内面、素地の中心部まで焼成は良好。素地に黒色粒と白色粒が確認できる。	口縁部の内面には轆轤痕が顕著に認められる。	7トレンチ 東壁 黒褐色砂質土層Ⅲ層a 台72-a
	3	壺	II-b	13.0 — —	口縁の反りは、ゆるく外側に張り出す。頸部から肩部にかけて、なだらかに下りる。器色は表面・内面とも灰青色で、わずかに白っぽい。素地の中心部まで焼成は良好。素地に黒色粒と白色粒が確認できる。	器面調整は外面・内面ともに轆轤痕が認められる。口縁部から頸部に向かって内面にすばむ。	7トレンチ 漬灰遺構 灰褐色粘質土層Ⅲ層a 台334-a
	4	壺	II-c	12.4 — —	肥厚帯の内側は屈曲し、わずかに平坦面をつくる。器色の表面・内面は灰青色を呈す。素地の中心部は赤茶褐色で、白色粒が確認できる。	口縁部が大きく外反し、肥厚帯をなす。器面全体に横位の轆轤痕が認められる。	4トレンチ⑤ Ⅱ層 台21-a
	5	壺	II-d	15.0 — —	破片の為、肩部から下の形状は不明。口縁から頸部に向かって内側に締まる。表面・内面、素地の中心部まで灰青色を呈し、焼成は良好。白色粒を多く含む。	口縁部が大きく外反し、口唇部にかけて肥厚する。残存資料は破片だが、表裏面に横の轆轤痕が確認できる。	5トレンチ 北側 層序不明 台1-a
	6	長頸壺	II-e	— — —	口唇の幅は平坦に置かれる。器色は全体に白っぽい灰青色を呈す。素地の中心部まで焼成は一定し、白色粒に加え黒色粒も若干含まれる。	表裏面とも大きく破損し、小破片のため器面の状態、器形は正確に把握できない。内面に浅い轆轤痕がみられる。	5トレンチ 暗褐色細粒砂質土層Ⅲ層a 台82-a
	7	壺	胴部	— 14.9 —	頸部から胴部にかけての破片。素地は内外面の灰色に対し中心部は赤茶褐色を呈す。	表面に文様は確認できない。内面には、叩き目痕が一段、浅くみられる。	5トレンチ 石列砂利層Ⅲ層a 台58-a
	8	壺	胴部	— 10.7 —	頸部のみ資料。器色は表裏面とも青灰色で、素地の中心部は赤褐色を呈す。素地に白色粒を含み顕著である。焼成は良く硬い。	頸部表面の最もくびれの強い部分に一箇所段差のはっきりした条線がみられる。表面には轆轤痕が認められる。	7トレンチ ピット.22 Ⅲ層a 台2820
	9	壺	胴部	— 11.9 —	器色は表裏面が暗灰色を呈し、素地の中心部は赤味の強い赤褐色の部分が多くみられる。焼成は良好で白色粒を多く含む。	頸部から、肩部にかけての破片で、傾きの程度と張りは強い。表裏面ともに轆轤痕が見られる。	5トレンチ 北側ピーチロック北 層序不明 台2686
	10	壺	胴部	— 16.8 —	壺の肩部と思われる。素地は白色粒を含み断面、裏面に多くみられる。焼成は良く、硬度もある。器色は、表裏面とも青灰色で、素地は赤褐色を呈す。	表面に文様はみられない。内面には轆轤痕が若干、確認できる。	7トレンチ ピット.23 Ⅲ層a 台2667
	11	壺	胴部	— 17.4 —	器形は胴部が張り、肩部から頸部にかけてすばむ。器色は表面が赤味がかった灰褐色である。素地の中心部は赤味の強い色調で、内面は灰色を呈す。白色の粒を多く含む。	肩部上の付近に器面調整の痕がみられ、内面にはへら削りの痕が窺える。	7トレンチ ピット.55 Ⅲ層a 台2668
	12	壺	胴部	— 31.2 —	胴部の最も張りのつよい部分である。厚みは破片の上下で差はない。胴径は出土資料の中で最も大きい。焼成は良く、色調は表裏面が青灰色で、素地の中心部が暗めの茶褐色である。	表面はへら削りによる調整の上にはっきりとした叩き目痕が見られる。内面にも横位のへら削り痕が認められ、上部に斜方向の調整痕も、浅く確認できる。	5トレンチ 石列下部 砂利層Ⅲ層a 台48-a
	13	壺	胴部	— — —	胴径は計測不可。やや扁平な資料で、厚みは一定している。表面・内面、素地ともに赤茶気た色調で本来の灰色の色調はみられない。	表面は胴のカーブにそって器面調整の痕がわずかに確認できるが、明瞭ではない。内面は、横方向にへら削りの痕がはっきりとみられ、明瞭。	7トレンチ 南壁 層序不明 台7-b
	14	壺	胴部	— — —	胴径は計測不可。最も厚みのある部分は肩部のあたりと思われる。器色は表面・内面とも灰色を呈し、素地の中心部は茶褐色。	胴部から肩部にかけて内側に傾き、肩が張る。表面は横方向に叩き目が確認でき、内面は横方向のへら削りと叩き目が一段認められる。	7トレンチ 清掃 層序不明 台70-a

表19-2 カムイヤキ観察一覧

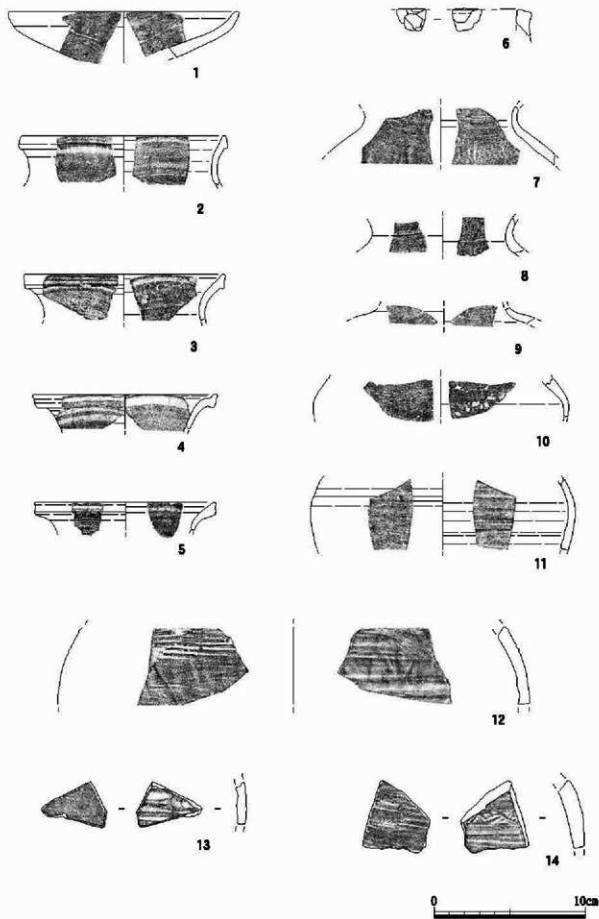
第 57 号 国 庫 (国 庫 36)	番 号	器 種	分 類	口径 胴径 底径 (cm)	素地・焼成	文様・器面調整・その他の特徴	出土地 台帳番号
第 57 号 国 庫 (国 庫 36)	15	壺	胴部	— 23.5	素地、内面とも灰色を呈す。断面の素地中心部は濃い茶褐色がかかった色調を呈す。厚みに極端な変化は全く一定している。	表面には、肩部付近にヘラなどで跡がみられる。内面は、横方向にヘラ削りが見られ下部に格子目の叩き痕が一段、認められる。	3トレンチ 盛土 台63-a
	16	壺	胴部	— 28.4	胴部資料で胴径は大きい。表面は薄く赤焼けた色が確認できるが内面、素地ともに灰色を呈し焼成は一定している。	表面、内面ともに叩き目痕がみられるが、内面は特に顕著で叩き目があらゆる方向から画されている。	8トレンチ 暗灰褐色粘質土層 Ⅱ層 b 台2664
	17	壺	胴部	— —	色調は表裏面ともに白っぽい灰色を呈す。素地の中心部は濃い茶褐色。素地は白色粒を多量に含み、顕著である。焼成は、均等に良い。	表面は横方向、平行状の叩き目の痕が明確に甌える。内面には器面調整の痕が確認できる。	5トレンチ 北側 層序不明 台1-a
	18	壺	胴部	— 16.1	壺の胴下部と思われる。破片の厚みに変化はない。胴部から底部に至る部位で内側に向かって傾く。表面、内面、素地ともに灰色を呈し焼成は一定している。	表面に文様は確認できない。内面にはヘラ削り痕が顕著にみられる。	7トレンチ 暗褐色粘砂質土層 Ⅲ層 b 台2830
	19	壺	胴部	— 18.0	薄手の資料で、厚みに変化はない。表面、内面ともに灰色を呈し素地の中心部は赤褐色を呈す。	表面には胴の中央に浅い段があり、段を境に斜めの叩き目がみられる。内面には轆轤痕が見られる。	7トレンチ 暗褐色炭混土層 Ⅲ層 b 台346-b
	20	壺	胴部	— 18.3	胴下部の破片である。破片は下部に向かって厚くなる。焼成は良く表裏面とも灰色を呈し、素地の中心部は赤茶色を呈す。	表面に二段、斜め方向の叩き痕がみられる。内面は、はっきりとしたヘラ削りと叩き目が見られる。	7トレンチ 暗褐色炭混土層 Ⅲ層 b 台335-c
	21	壺	胴部	— 22.0	外面、内面ともに灰青色を呈し素地の中心部は茶褐色の部分が厚くみられる。素地に白色粒を多く含む。	外面の下部に横方向へ段を有する。素地の中心部に歪みによる地成の隙のひび割れが見られる。内面には、扇状の叩き目と轆轤痕が確認できる。	7トレンチ ビット.22 Ⅲ層 a 台2820
	22	壺	胴部	— 21.0	壺の破片で残存資料はわずかである。表面、内面ともに灰青色を呈し、素地の中心部は茶褐色の部分が多い。	表面の隅に文様は確認できるが、明瞭でない。手触りでは浅い段が破片の上部と中央あたりに認められる。内面は横位の線条痕と、叩き目が確認できる。	5トレンチ 北側溝付近 暗褐色砂質土層 Ⅲ層 b 台91-a
	23	壺	胴部	— 21.6	表面、内面ともに灰青色を呈し、素地中心部は茶褐色を示す。	表面には浅い線条痕が見られる。裏面はヘラ削りと浅い叩き目が確認できる。	5トレンチ 南 側ビット付近 溝状遺構 灰緑 茶色土層 Ⅲ層 a 台295-d
	24	壺	底部	— 9.7	底面の厚みは6mm。胴部の残存部、端で5mmを呈す。表面の色調は赤味の強い茶褐色。素地はさらに全面赤味を帯びる。内面の色調は灰色を呈す。	表面は器面調整の痕がはっきりと確認できる。内面は、二段の叩きのあとヘラ削りを施した痕が認められる。	5トレンチ 暗褐色砂質土層 Ⅲ層 b 台92-a

頭部の資料は口縁部よりさらに3点と少なく、頭の最もくびれの強い部分で、それぞれの径はほぼ同じであった。肩部は肩の張らないものと、大きく張り出すもの、推測では壺の大と小と思われる。胴部は、部位別で点数は多いが小破片で図の復元及び胴径の計測値は参考に示した。

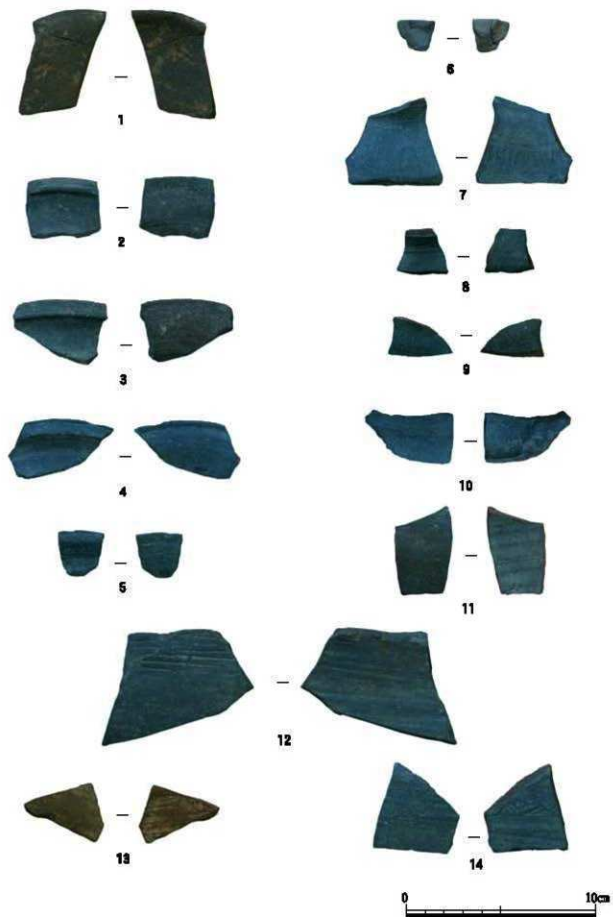
表18は、層序別器種分類出土状況であるが、カムイヤキの出土するトレンチは3～5トレンチと、7、8トレンチに限られる。5、7、8トレンチからは表のとおり個別の層序から出土しており、層序別にみて集中して多く出土する層はない。

小結

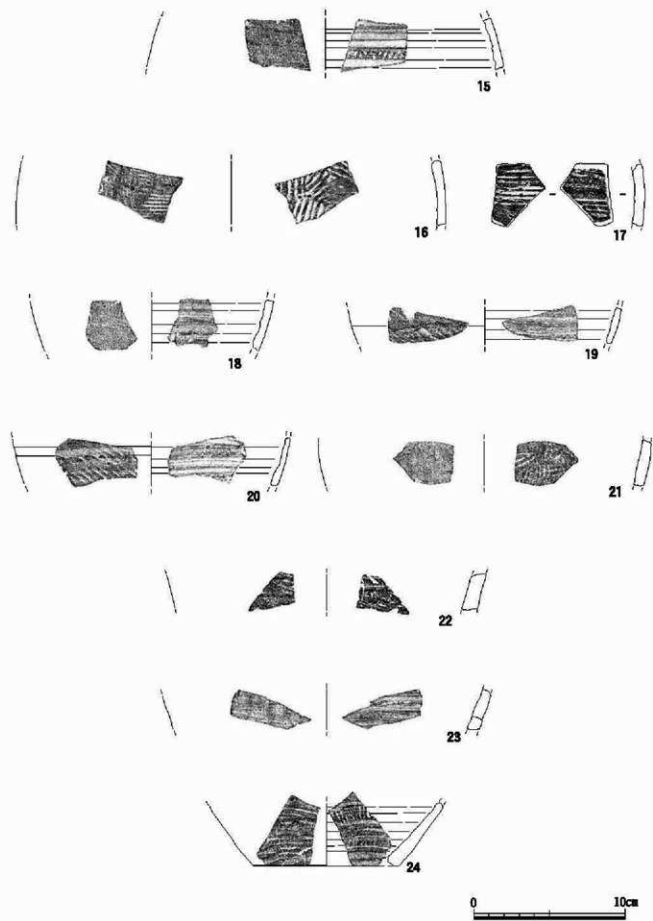
これまで記述したカムイヤキの資料についてできる限り分類を行ったが、そのほとんどが壺の口縁部と胴部の破片である。皿は1点のみの出土で、銘苅原遺跡で類似する皿が出土している。



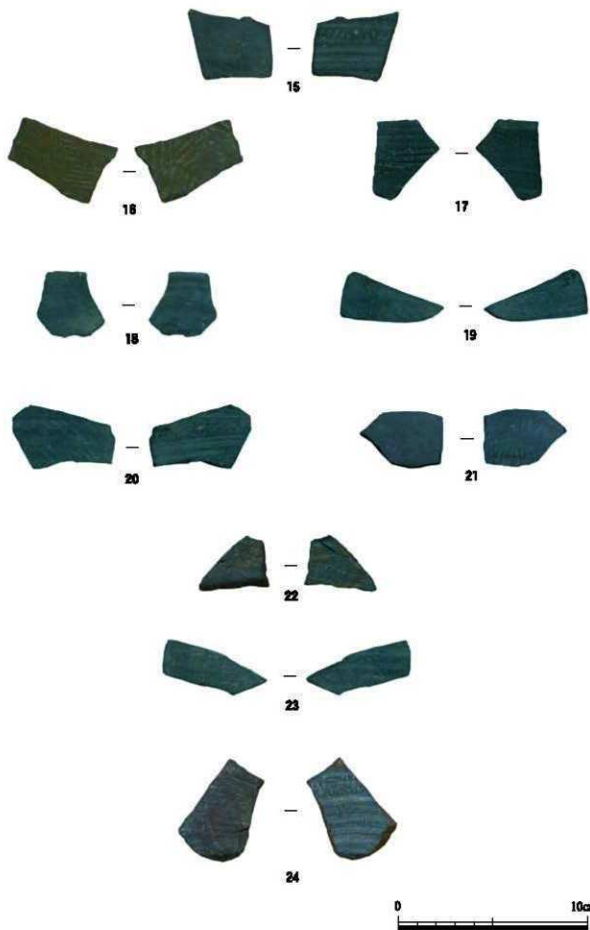
第56図 カムイヤキ 1



図版35 カムイヤキ 1



第57図 カミイヤキ 2



図版36 カムイヤキ 2

壺の口縁部は、5点の出土であるが、そのうち口縁部の資料(第56図6)は、長頸の壺あるいは鉢の口縁部と思われる。その他の口縁部は傾きの程度に応じて、それぞれタイプ分けしたが結果的に1点1タイプの分類となった。口縁部の資料が少なく、タイプ別の出土量では特徴的な傾向はみられない。以下、気づいた点について述べる。

焼成 — 本遺跡出土のカムイヤキ全体の焼成は出土点数のうち25点は焼きがよく硬質な印象を受ける。しかし、器形が皿のものは泥質な感触であった。

色調 — 色調はほとんど表裏面とも青灰色を呈し、素地の中心部は赤茶褐色および茶褐色とのコントラストで、焼成の悪いものに限り全体が茶褐色である。焼成の悪いものと色調の関係は比例すると推測される。

素地 — 素地は白色粒を含むことがカムイヤキの特徴であるが、多少の差はあるものの全ての資料に白色粒は含まれる。

文様 — 文様はカムイヤキにみられる胴上部に施された波状沈線文の文様はなく無文のものと思われる。

器面調整 — 器面調整はどの資料も丁寧に施され、叩き目とへら削りの痕が認められる。轆轤痕も顕著にみられるが、泥質で焼成の悪いものは(第56図1)器面調整の痕があまり窺えない。

<引用・参考文献>

- 新東晃一・青崎和憲 『カムイヤキ古窯跡群 I - 昭和59年度重要遺跡確認調査 -』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 (3) 鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会 1985年
- 座間味政光・大城剛 『喜屋武グスク公園計画に係る遺跡詳細範囲確認調査概要 -』沖縄県志志市教育委員会 1988年
- 金武正紀・城間千栄子 『ヒヤジョー毛遺跡 - 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告 I -』第26集 那覇市教育委員会 那覇市文化財調査報告書 1994年
- 大西智和 『南島須恵器の問題点』『南日本文化』第29号抜刷 鹿児島短期大学附属南日本文化研究所 平成8年9月発行
- 金武正紀・島弘 他 『銘苅原遺跡 - 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告 IV -』那覇市文化財調査報告書 第35集 那覇市教育委員会 1997年
- 山里昌次 『大里城跡 - 都市公園計画に係る緊急確認発掘調査報告書 (1) -』大里村文化財調査報告書 第3集 沖縄県大里村教育委員会 1998年
- 山里昌次 『大里城跡 - 都市公園計画に係る緊急確認発掘調査報告書 (2) -』大里村文化財調査報告書 第4集 沖縄県大里村教育委員会 2001年3月
- 島袋洋・島袋春美・田里一寿 『天界寺跡 (I) - 首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査 -』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群 - 県営かんがい排水事業 (カンジン地区) に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 -』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第6集 2001年
- 山城安生・東門研治 『後兼久原遺跡 - 庁舎建設に係わる文化財発掘調査報告 -』北谷町文化財調査報告書 第21集 沖縄県 北谷町教育委員会 2003年
- 池田栄史 『類須恵器と貝塚時代後期 - 貝塚後期文化 -』考古資料大観 第12巻 小学館 2004年
- 鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会 『カムイヤキ古窯跡群 IV - 平成13年度から平成16年度 カムイヤキ古窯跡群発掘調査等事業 -』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 (12) 2005年
- 新里亮人 『カムイヤキとカムイヤキ古窯跡群』東アジアの古代文化 130号 編集: 古代学研究所 大和書房 2007年

B 滑石製品

滑石は総数53点出土している(表20)。5トレンチで28点と最も多く、次いで8トレンチの16点、7トレンチの7点、4トレンチの2点となっている。このような状況を見てみると5トレンチの中央付近に集中して出土している。重量を量てみると(第60図)、総重量892.99gで、トレンチ別で見てみると7トレンチで386.44gあり、大型の資料が多く出土していることが分かる。次いで、5トレンチの331.12g、8トレンチの158.84g、4トレンチの16.59gであった。

滑石は石鍋とその二次製品に分けることができる。

a. 石鍋(第58図1~8)

図1は口縁部資料で口唇部が僅かに残る。外面は不鮮明であるがノミによる調整痕が残る。

7トレンチ、清掃時出土。15.37g。

図2~4は胴部資料である。図2及び図4は有孔製品である。図2は中央部に1ヶ所、割れ面に2ヶ所見られる。外面は黒色を有する。7トレンチ、ビットNo.55より出土、71.94g。図4は割れ面に1ヶ所見られる。8トレンチ、Ⅲ層a出土28.22g。図3は外面の半分が剥落している。外面は黒色である。7トレンチ、Ⅲ層a出土19.03g。

図5・6は底部資料である。図5は底部からの立ち上がり部は面取りされやや丸みを帯びる。外面は縦位に左側から右方向にノミによる調整痕が明瞭に残る。底径11.6cmを測る。5トレンチ石列付近、Ⅲ層a出土、46.51g。図6は底部より逆「八」の字状に立ち上がる。5トレンチ北側溝付近、Ⅲ層a出土、35.32g。

図7は蓋と考えられる資料である。径17.6cmを測る。端部は内外面より丸みを帯びるように削りやや稜を有する。外面は擦痕が残る。5トレンチ北側溝付近、Ⅲ層a出土、70.48g。

図8は把手資料である。把手は円形で付け根に浅い抉りが廻り摘み状を呈する。把手に縦位に孔を有する。5トレンチ石列、Ⅲ層a出土、9.43g。

b. 二次製品(第58図9~11・第59図12~19)

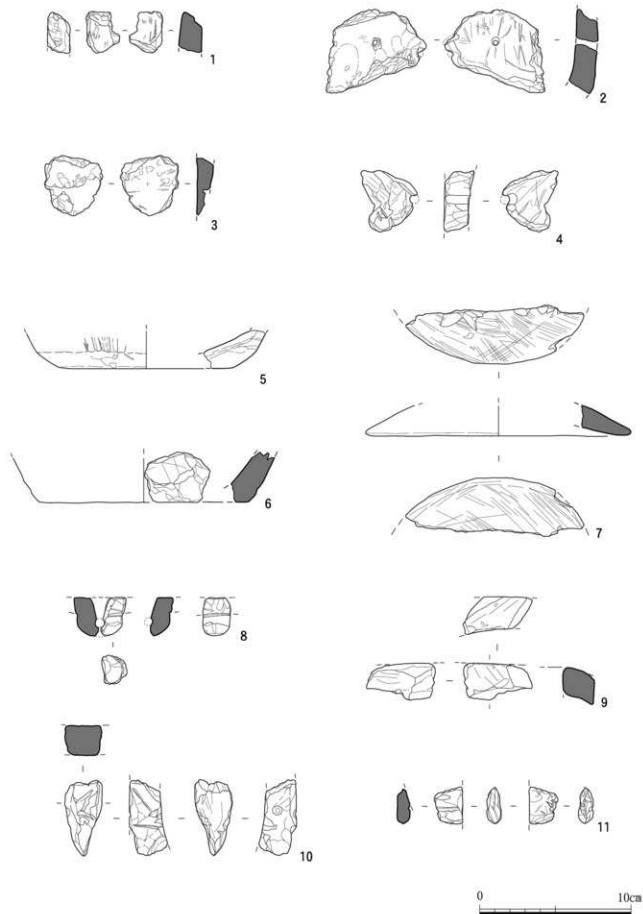
図9~11は同一個体で、図10と図11は接合可能である。口縁部資料である。いずれも割れ面に削り痕が見られる。全て8トレンチ、Ⅲ層a出土、図9は30.78g、図10は33.8g、図11は6.03g。

図12は底部資料である。割れ面に削り痕が見られる。孔が2点見られ、1点は内面に孔周辺が剥離していることから外面から穿ったことが分かる。穿孔は製品時か二次加工時のどちらが先かは判然としない。内面に黒色粒が見られる。外面は黒色である。7トレンチ、ビットNo.29より出土、Ⅲ層a、268g。

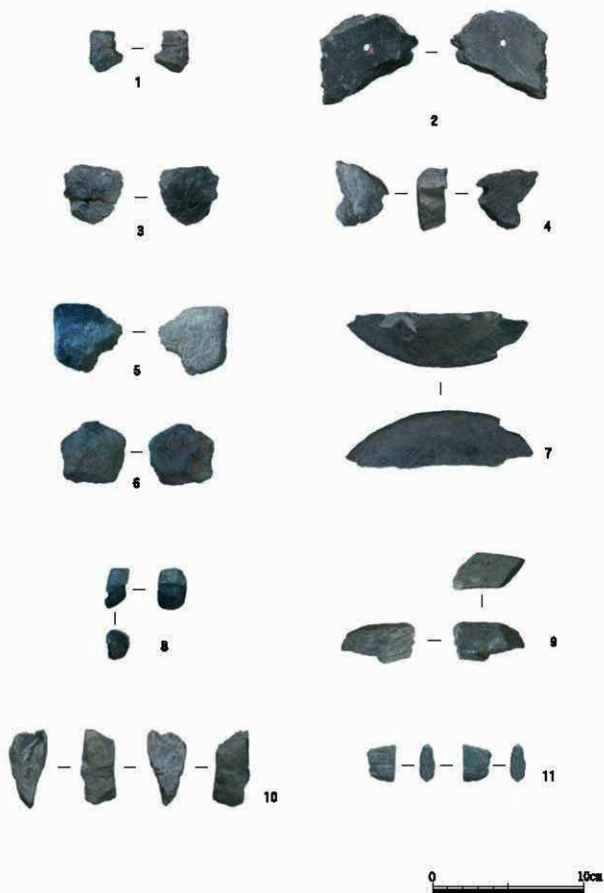
図13~17は口縁部資料である。いずれも割れ面に削り痕が見られる。図17の内面に短沈線の削り痕が縦位や斜位に見られる。図16は内面に円形状の窪みが見られる。外面は口縁下部に縦位にノミ痕が明瞭に残る。図13は4トレンチ、層は不明、14.56g。図14は5トレンチ、Ⅲ層a、30.9g。図15は器色が褐色である。5トレンチ北側溝付近、層不明、20.16g。

図16は5トレンチ北側、Ⅲ層a、58.31g。図17は5トレンチ北側溝付近、層不明、13.06g。

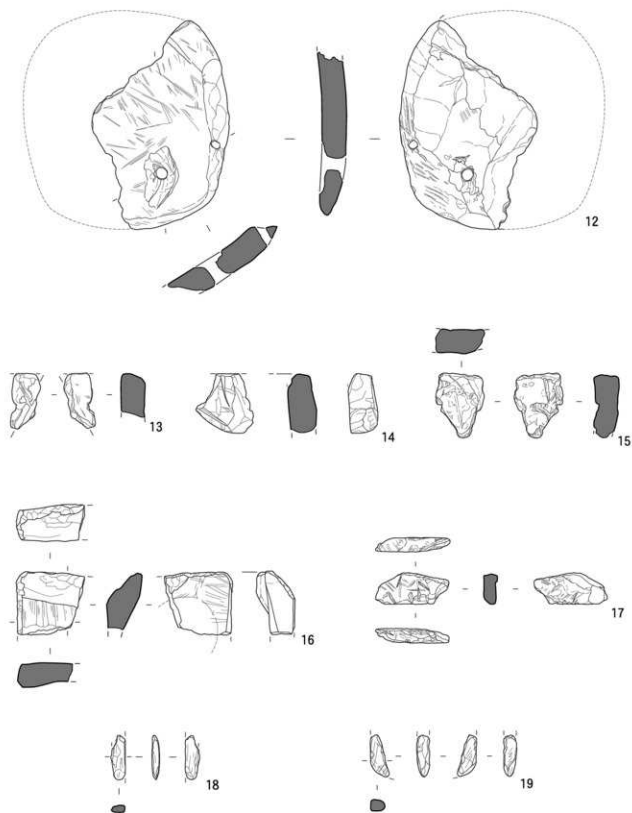
図18・19は胴部資料と思われる。いずれも全体的に削り痕が見られ、小型の鑿状を呈する。図18は4トレンチ、層は不明、2.03g。図19は8トレンチ、Ⅱ層b、3.54g。



第58図 滑石製品 1



图版37 滑石製品 1



第59図 滑石製品 2

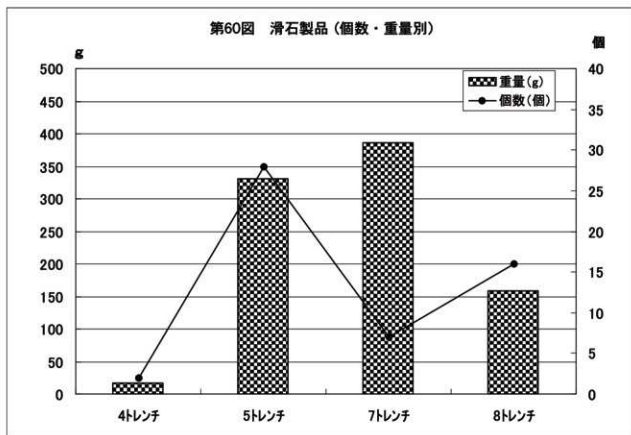


図版38 滑石製品 2

表20 滑石製品出土量

出土地			器種	石 鍋					二次製品			合計	別トレンチ	
				口縁	耳	胴部	蓋	底部	有孔	口縁	胴			破片
4トレンチ		不明	Ⅲ層a							1	1		2	2
5トレンチ	北側溝付近	暗褐色砂質土層	Ⅲ層a	2		4	1	2				7	16	28
	北側	灰褐色砂質土層P17							1				1	
	石列・付近	砂利層・ 暗褐色細粒砂質土層			1			1					2	
	南20～	暗オリーブ灰色粘質層							1				1	
	南側溝東側	黄褐色砂利層最下部		1								1		
北側溝付近	不明	不明							1		3	7		
7トレンチ		暗褐色炭混層	Ⅲ層a			3							3	7
		灰褐色・ビット				1		1					2	
		暗褐色細粒砂質土層				1							1	
		不明	不明	1								1		
8トレンチ		灰褐色砂質土層(砂=泥)	Ⅱ層b			6				1	1	8	16	
		暗灰褐色	Ⅲ層a	1	1	2		1				5		
		黄褐色細粒砂層							2		1	3		
合 計				5	2	20	1	3	2	6	2	12	53	53

第60図 滑石製品 (個数・重量別)



C. 白磁

白磁は総数54点出土しており、全て破片である。器種別に見ると碗が47点、皿が2点、不明が5点である。部位別には口縁部が27点、胴部が21点、底部が6点出土している。ここでは、特徴があるものを図化し小破片は割愛した。碗及び皿は、さらに器形の若干違いによって第①類、第②類、第③類に分け、それぞれの形態により細分類した。

a. 碗 (第61図1～18・第62図19～23・26～31)

イ. 口縁部

口縁部は23点図化した。「玉縁」は18点、「直口」は2点、「外反」は3点である。

第①類：玉縁

玉縁口縁部片は18点図化した。玉縁口縁部の肥厚帯の厚さ6.0mmを境以下を「1」、以上を「2」とし、肥厚帯下を篋で整形してあるものを「A」、削り取ってあるものを「B」に分けた。

図化したものの中で1-Aは2点、1-Bは6点、2-Aは4点、2-Bは6点である。

1：肥厚帯が6.0mm以下

A. 整形有り

図1・2がこれにあたる。図1は森田分類のⅢ類に属し、図2は森田分類Ⅳ類に属す^(註1)。

B. 削り取り

図3～8がこれにあたる。図3～7は森田Ⅲ類、図8は森田Ⅳ類に属す。

2：肥厚帯が6.0mm以上

A. 整形有り

図9～12がこれにあたる。図9は森田Ⅲ類、図10・11は森田Ⅳ類、図12は肥厚帯が平坦で、軸が薄い。

B. 削り取り

図13～18がこれにあたる。図13は森田Ⅱ類、図14～18は森田Ⅳ類に属す。

第②類：直口

直口口縁部片は2点出土した。図19・図22がこれにあたる。

第③類：外反

外反口縁碗は3点出土した。図23は体部外面に櫛目文を施し、図20・21は体部外面に轆轤痕が見られる。森田Ⅴ類に属す。^(註1)

ロ. 胴部

胴部片は16点出土した。図26～28は全て腰部で軸が露胎している。全て森田Ⅳ類に属す。

ハ. 底部

底部片は6点出土した。図29～31は全て高台が「ハ」の字状に開き、高台削りが浅くなっていることから森田Ⅲ類に属すと思われる。

b. 皿 (第62図24・25)

イ. 口縁部

第④類：外反

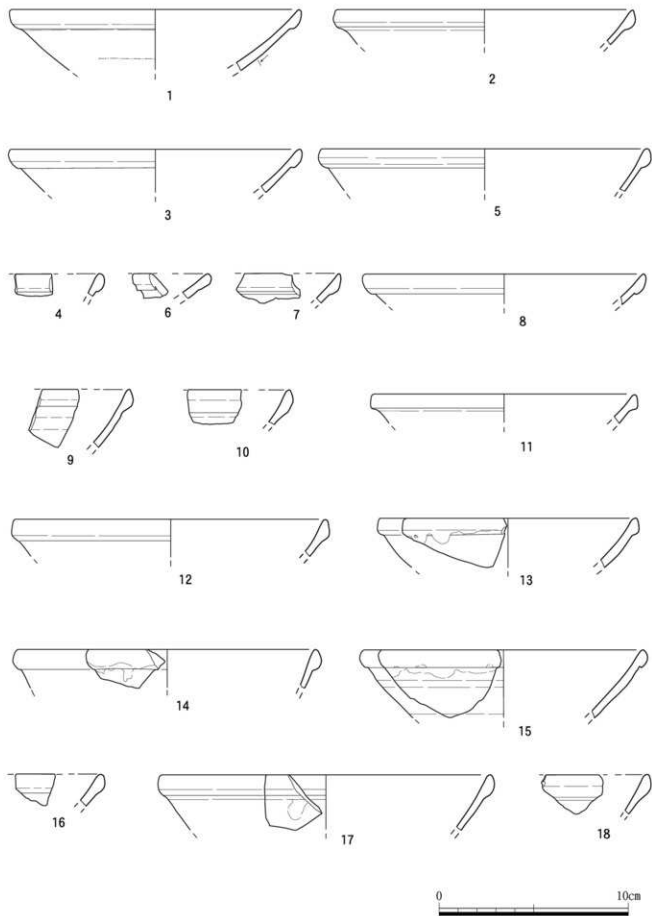
外反口縁皿は2点出土した。図25は森田分類の皿Ⅳ類に属し、図24は森田皿Ⅴ類に属す。

表21-1 白磁観察一覽

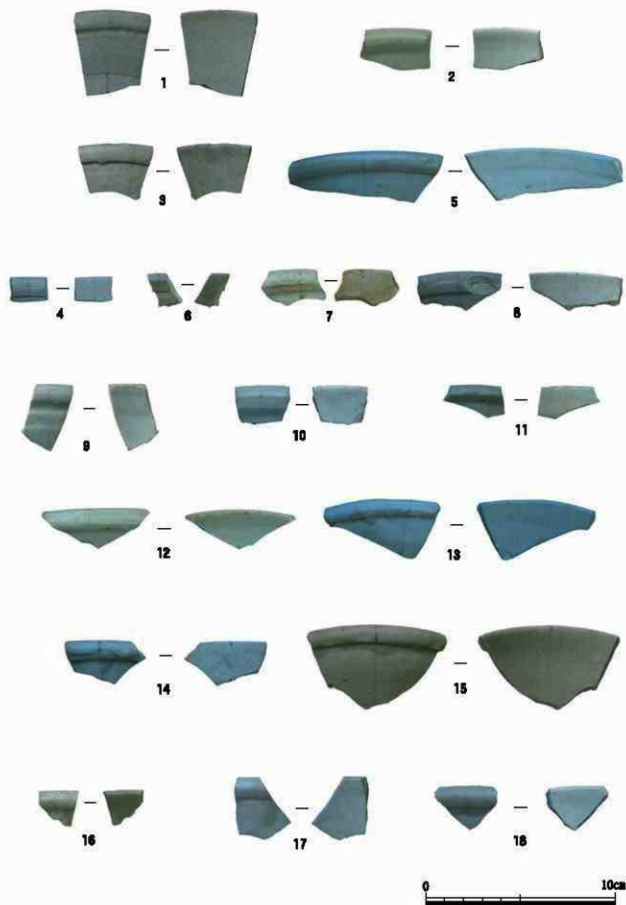
首因図版	番号	名称	残存箇所	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	観察事項	出土地 台帳番号
第 61 図 (図版39)	1	玉縁口縁碗	口縁部	1-A	15.2 — —	灰白色 微粒子	灰白色	有り	玉縁口縁碗。肥厚の幅10.2mm、厚さ5.2mm、器厚3.4～5.0mm、重量12.91g。肥厚帯下縁を鑑で整形している。釉薬が口縁部先端から30mmの所までしかかかっていない。12世紀中頃～後半。	5 トレンチ南5～10 清掃中(不明) 台262
	2	玉縁口縁碗	口縁部		15.7 — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	玉縁口縁碗。肥厚の幅11mm、厚さ5.8mm、器厚2.8mm、重量5.99g。肥厚帯下縁を鑑で整形している。釉は薄く満遍なく掛かっている。12世紀中頃～後半。	5 トレンチ北側溝付近 黄色泥じり暗褐色粘質土層(Ⅲ層a) 台90-a
	3	玉縁口縁碗	口縁部	1-B	15.3 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	有り	玉縁口縁碗。肥厚の幅10.5mm、厚さ5.2mm、器厚3.8mm、重量7.38g。肥厚帯下縁を鑑で削り取っている。削り取られた溝に釉薬が溜まっている。	8 トレンチ 暗灰褐色粘質層 (Ⅲ層a) 台1075-q
	4	玉縁口縁碗	口縁部		— — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	玉縁口縁碗。肥厚の幅10mm、厚さ5.6mm、器厚3.2mm、重量2.58g。肥厚帯下縁を鑑で削り取る。釉は薄い。	8 トレンチ 灰褐色(Ⅲ層a) 台1075-j
	5	玉縁口縁碗	口縁部		17.2 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	無し	玉縁口縁碗。肥厚の幅10.9mm、厚さ5.9mm、器厚2.9mm、重量15.69g。肥厚帯下縁を鑑で削り取っている。器面はなでらかで、丁寧に調整されている。器壁は薄く、焼成は良い。12世紀中頃～後半。	5 トレンチ 南側溝 砂利層(Ⅲ層a) 台83-a
	6	玉縁口縁碗	口縁部		— — —	灰白色 微粒子	灰オリーブ色	無し	玉縁口縁碗。肥厚の幅9.1mm、厚さ5.3mm、器厚4.5mm、重量1.54g。肥厚帯下縁を鑑で削り取っており、溝になっている。また、肥厚帯頭頂部は平らに整形されている。釉は薄い。12世紀中頃～後半。	7 トレンチ 黒褐色土層(下部) (Ⅲ層a) 台7-c
	7	玉縁口縁碗	口縁部	— — —	白色 微粒子	灰白色	有り	玉縁口縁碗。肥厚の幅11.7mm、厚さ5.5mm、器厚3.4～3.6mm、重量4.23g。肥厚帯下縁を鑑で削り取っている。釉は薄い。	5 トレンチ北側溝付近 暗褐色砂質土層 漸移層(黄泥) (Ⅲ層b) 台91-a	
	8	玉縁口縁碗	口縁部	14.7 — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	玉縁口縁碗。肥厚の幅11mm、厚さ5.5mm、器厚3.4mm、重量5.78g。肥厚帯下縁を鑑で削り取っており、溝になっている。釉は薄い。	8 トレンチ 黄(カワニナ) (Ⅲ層a) 台1075-o	
	9	玉縁口縁碗	口縁部	2-A	— — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	玉縁口縁碗。肥厚の幅11.8mm、厚さ6.0mm、器厚3.2～3.7mm、重量5.66g。肥厚帯下縁を鑑で整形している。肥厚帯から体部にかけて、襷を二本有し、段になっている。釉は薄く満遍なく掛かっている。12世紀中頃～後半。	5 トレンチ北側溝付近 暗褐色細粒砂質土層 直上(Ⅲ層a) 台82-a
	10	玉縁口縁碗	口縁部		— — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	玉縁口縁碗。肥厚の幅15.1mm、厚さ6.5mm、器厚3.5mm、重量6.35g。肥厚帯下縁を鑑で整形している。また、肥厚帯頭頂部は平らに整形されている。釉は薄い。	8 トレンチ 暗灰褐色(Ⅲ層a) 台1075-e
	11	玉縁口縁碗	口縁部		13.8 — —	灰白色 微粒子	灰白色	有り	玉縁口縁碗。肥厚の幅8.5mm、厚さ6.2mm、器厚3.9mm、重量3.65g。肥厚帯下縁を鑑で整形しており、三角突帯状を呈している。釉は薄い。	8 トレンチ 黄緑粒砂(灰褐色泥) (Ⅲ層a) 台1075-w
	12	玉縁口縁碗	口縁部	16.4 — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	玉縁口縁碗。肥厚の幅11.2mm、厚さ6.1mm、器厚3.4mm、重量7.49g。肥厚帯下縁を鑑で整形している。釉は薄い。	5 トレンチ北側溝付近 暗褐色砂質土層 漸移層 (黄泥)(Ⅲ層a) 台91-a	
	13	玉縁口縁碗	口縁部	2-B	13.6 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	無し	玉縁口縁碗。肥厚の幅9.0mm、厚さ7.1mm、器厚4.9mm、重量13.58g。肥厚帯下縁を鑑で削り取っている。器面は指圧調整痕が見られ、釉薬が厚く肥厚帯下縁を覆っている。粗雑な印象を受ける。12世紀中頃～後半。	5 トレンチ東壁 暗褐色細粒砂質土層 (Ⅲ層a) 台50-a
	14	玉縁口縁碗	口縁部		15.6 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	無し	玉縁口縁碗。肥厚の幅10mm、厚さ6.9mm、器厚2.8mm、重量6.50g。肥厚帯下縁を鑑で削り取っている。口唇部の釉薬が厚く肥厚帯を覆っている。12世紀中頃～後半。	5 トレンチ中央北側 暗褐色炭泥じり (Ⅲ層a) 台86-a
	15	玉縁口縁碗	口縁部		14.7 — —	淡黄白色 微粒子	淡黄白色	有り	玉縁口縁碗。肥厚の幅10.2mm、厚さ6.1mm、器厚3.7～5.0mm、重量20.69g。肥厚帯下縁を鑑で削り取っている。肥厚帯に厚く釉がかかっている。	7 トレンチ 暗褐色炭泥じり (Ⅲ層a) 台335-b
	16	玉縁口縁碗	口縁部		— — —	灰白色 微粒子	灰白色	有り	玉縁口縁碗。肥厚の幅9.0mm、厚さ7.0mm、器厚3.9mm、重量2.87g。肥厚帯下縁を鑑で削り取っている。溝に釉薬が溜まって、なでらかになっている。12世紀中頃～後半。	5 トレンチ北側 暗褐色細粒砂質土層 直上(Ⅲ層a) 台82-a

表21-2 白磁観察一覧

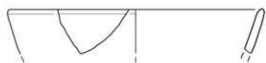
第4区 図版	番 号	名 称	残 存 箇 所	分 類	口 径 底 径 器 高 (cm)	素 地	釉 色	貫 入	観 察 事 項	出 土 地 台 帳 番 号
第11区 (図版39)	17	玉縁口縁碗	口縁部	2-B	17.4 — —	灰白色 微粒子	灰白色	有り	玉縁口縁碗。肥厚の幅10.5mm、厚さ6.2mm、器厚3.1mm、重量5.81g。肥厚帯下縁を篋で削り取り窪みを有する。窪みに釉薬が溜まっており、なでらかになっている。肥厚帯下部に軸ぬれが見られる。12世紀中頃～後半。	8トレンチ 黄(カワニナ) (Ⅲ層a)
	18	口縁碗	口縁部		— — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	玉縁口縁碗。肥厚の幅11mm、厚さ6.1mm、器厚3.0～4.5mm、重量5.04g。肥厚帯下縁を篋で削り取り窪みを有する。窪みに釉薬が溜まっており、肥厚帯頭頂部から、なでらかに傾斜している。	8トレンチ 灰白色 カワニナ(Ⅲ層a) 台1075-p
第12区 (図版40)	19	内灣口縁碗	口縁部	口縁部	13.4 — —	灰白色 微粒子	灰白色	有り	内灣口縁碗。器厚3.4～3.9mm、重量4.43g。軸は薄い。	8トレンチ 暗灰褐色粘質土層 (Ⅲ層a) 台1075-r
	20	直口口縁碗	口縁部		15.1 — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	薄手の外反口縁碗である。軸は薄い。器厚3.0～3.5mm、重量10.90g。	8トレンチ 暗灰褐色(Ⅲ層a) 台1075-j
	21	外反口縁碗	口縁部		15.4 — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	薄手の外反口縁碗である。軸は薄く、腰部は露胎している。器厚2.7～4.2mm、重量12.97g。外面に蝸輪痕が残る。頸部から胴部にかけて厚くなっていく。	8トレンチ 灰褐色(Ⅲ層a) 台1075-j
	22	外反口縁碗	口縁部	口縁部	— — —	灰白色 微粒子	灰白色	有り	薄手の直口口縁碗。軸は薄い。器厚3.0mm、重量2.26g。口縁部は篋で整形されている。	8トレンチ 灰褐色砂 質土層 カワニナ混じ り(Ⅲ層a) 台2662
	23	外反口縁碗	口縁部		18.2 — —	灰白色 微粒子	灰白色	有り	薄手の外反口縁碗である。軸は薄く均一に掛けられている。体部外面に柿目文を施し、体部内面には一条の横線を施す。器厚3.7～5.2mm、重量7.80g。	8トレンチ 暗灰褐色粘質土層 (Ⅲ層a) 台1075-r
	24	外反口縁皿	口縁部		10.7 — —	灰白色 微粒子	灰白色	有り	軸は薄い。胎土は粗い。器厚3.0～3.9mm、重量3.37g。	5トレンチ北側溝付近 暗褐色粘質土層上 (Ⅲ層a) 台85-a
	25	外反口縁皿	口縁部		13.2 — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	薄手の外反皿。軸は薄く、胎土は粗い。器厚5.0～6.0mm、重量11.93g。体部から口縁部にかけて器内が薄くなる。口縁部を篋で削られており、端部は丸い。また、胎土部の内面に沈線状の段を有する。13世紀初め。	7トレンチ西 溝状遺構内(Ⅲ層a) 暗褐色炭混じり (Ⅲ層a) 台346-a
	26	胴 部	— — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	体部外面は軸が薄く、腰部は露胎している。器厚は4.0～5.0mm、重量4.66g。腰部から高台にかけて厚くなっていく。体部内面は施釉されており、1本の圓線が廻っている。	8トレンチ 灰褐色(カワニナ) (Ⅲ層a) 台1075-v		
	27		— — —	灰白色 微粒子	灰色	無し	軸は薄く、体部外面に1本の圓線が廻っている。その線を境に腰部は露胎している。器厚は3.2～4.8mm、重量4.02g。高台にかけて厚くなっていく。	5トレンチ北側(不明) 台1		
	28		— — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	軸は薄く、体部は約1cm軸が掛かっており、後は露胎している。器厚は3.5～6.4mm、重量4.74g。高台にかけて厚くなっていく。	7トレンチ 溝状遺構内(Ⅲ層a) 台334-b		
	29	底 部	— — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	高台脇から、内面にかけて薄く軸が掛かっている。高台は「ハ」の字状に開き、高台削りが浅い。高台の厚さは9.5mm、高台から外底までの高さは約2mmである。底の厚さは5.8mm、底径は7.6cm。	4トレンチ 不明(Ⅲ層a) 台25		
30	— — —		灰白色 微粒子	灰色	無し	腰部から体部にかけてカンナ削りが施されており、その上に軸が掛かっている。外底から腰部にかけては露胎している。高台は「ハ」の字状に開き、高台削りが浅い。12世紀中頃～後半。高台の厚さは10.8mm、底径は7.0cm、重量14.95g。	8トレンチ 暗灰褐色(ピット) (Ⅲ層a) 台1075-u			
31	— — —		灰白色 微粒子	灰白色	無し	外底から腰部に掛けて露胎しており、胴部から内底には薄く軸が掛かっている。高台は「ハ」の字状に開き、高台削りが浅い。12世紀中頃～後半。高台の厚さは9.5mm、高台から外底までの高さは約2mmである。底の厚さは8.6mm、底径は7.2cm。重量24.88g。	5トレンチ北側 溝付近暗褐色(Ⅲ層a) 台101-b			



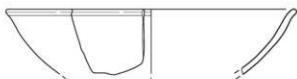
第61圖 白磁 1



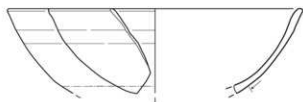
図版39 白磁 1



19



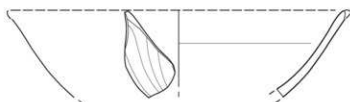
20



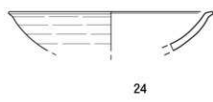
21



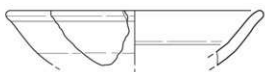
22



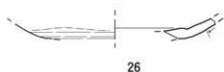
23



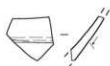
24



25



26



27



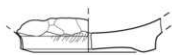
28



29



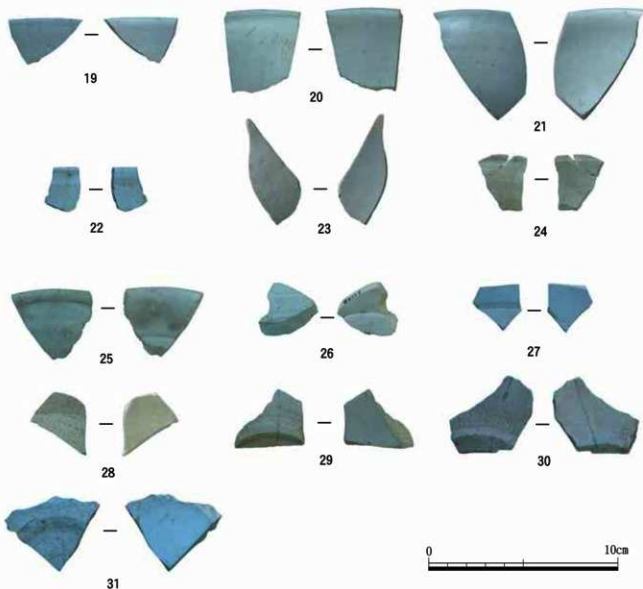
30



31



第62圖 白磁 2



図版40 白磁 2

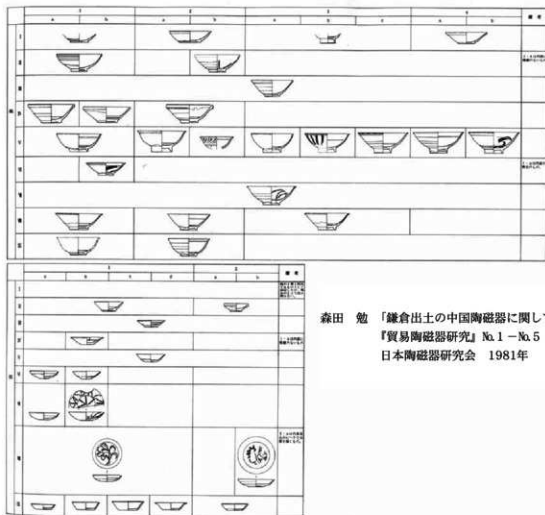
表22 白磁出土量

出土地	器種	碗				胴部	底部	皿		不明 胴部	層序 別計	グリッド 別計
		口縁 玉縁	口縁 内湾	口縁 直口	口縁 外反			口縁部 外反	胴部			
3トレンチ					1					1	1	
4トレンチ		1			2	1				4	4	
5トレンチ	盛土・表土(1層)	1			5					6		
	北側溝付近暗褐色砂質土層漸移層 Ⅲ層 a	3								3		
	北側溝付近暗褐色細粒砂質土層直上 Ⅲ層 a	3						1	1	5		
	北側溝付近暗褐色粘質土層 Ⅲ層 a						1		1	2		
	中央北側暗褐色炭混じり層	1								1		
南側溝・石列 砂利層	1				1				2			
7トレンチ	黒褐色土層(下部)Ⅱ層	1			1	1				2		
	暗褐色炭混じり	1						1		1		
	溝状遺構内灰褐色 Ⅲ層 a				1					3		
8トレンチ	溝状遺構内灰褐色 Ⅲ層 a								2	2		
	灰褐色砂質土層カワニナ混じり Ⅱ層	2				1	1		1	5		
	灰褐色粘質土層 Ⅲ層 a	4	1	1	3	4	2			15	21	
	黄細粒砂(灰褐色混じり)	1								1		
不明	灰白色(カワニナ)Ⅱ層	1								1	1	
	小計	20	1	1	3	16	6	2	5			
	器種別計			25		16	6	2	5		54	
	合計				47			2	5			

小結

本遺跡から出土した白磁は玉縁口縁碗が主体を示し、次いで、外反口縁碗、直口口縁碗となっている。玉縁口縁碗は、森田氏の太宰府編年¹¹⁾によると、その肥厚帯の厚さからⅡ～Ⅳ類に分類できた。また、篋で肥厚帯下を削り取るものが多い。外反口縁碗では、3点とも同じ8トレンチから出土していた。櫛目文が施されているものもあることから、森田Ⅴ類に分類できる。本遺跡から出土した白磁は、12世紀中頃～後半のものと思われる。同じような遺物は銘苜原遺跡¹²⁾、ヒヤジョー毛遺跡¹³⁾にも見られる。

第63図 白磁分類図 (森田 1981)



森田 勉 「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」
『貿易陶磁器研究』 No.1-No.5
日本陶磁器研究会 1981年

<引用文献>

- 註1. 森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978年
- 註2. 金武正紀・島弘・玉城安明・仲宗根啓・城間千栄子・山城直子『銘苜原遺跡—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅳ』那覇市文化財調査報告書 第35集 那覇市教育委員会 1997年
- 註3. 金武正紀・城間千栄子『ヒヤジョー毛遺跡—那覇新都心土地区画整理に伴う緊急発掘調査報告Ⅰ—』那覇市文化財調査報告書 第26集 那覇市教育委員会 1994年

D. 羽口・鉄滓・焼土

a. 羽口 (第65図1～3)

今回の調査では75点 (680.4g) の資料が得られた。この内特徴的な3点を図示した。出土したトレンチは4～8トレンチである。個数、重量共に最も多いのは5トレンチで溝状遺構付近から出土したものが占めている。完全形を留めるものは無く全て破片である。図1～3は全て胴部で、図1は輻側の端部であると考えられる。これらの破片から推定すると、棒状のものに粘土を巻き付け成形した円筒状のものである、と考えられる。胎土には5mm以下の石英とみられる透明または白色の微粒子が見られる。外面は丁寧にナデが施されている。

表23 羽口出土量

トレンチ	個数	重量 (g)
4	1	2.1
5	48	349.1
6	10	210.2
7	7	89.5
8	7	16
不明	2	13.5
計	75	680.4

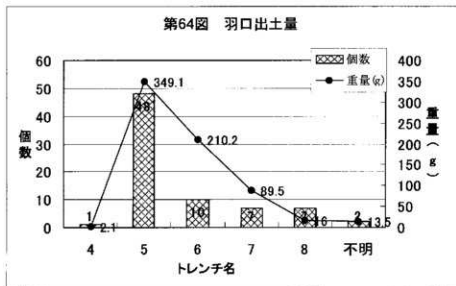
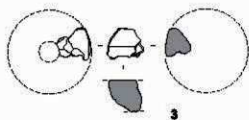
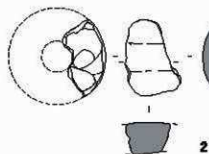
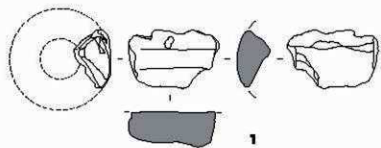


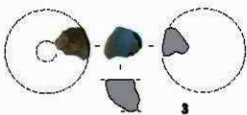
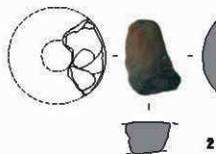
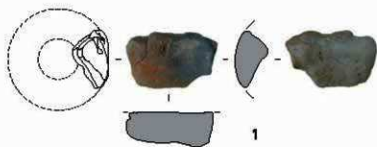
表24 羽口観察一覧

第65図版 (図版41)	番号	部位	外径 風道孔径 (cm)	観察事項	出土地 台帳番号
第65 図版 (図版41)	1	胴部	9 3.6	外面はナデ調整が見られる。風道孔の面は摩耗しており、脆い。外面は暗褐色と赤褐色を呈しており、強く焼け硬質。内面は灰褐色。石英を含む。 重量97.81g。厚さ2.7cm。	5トレンチ ビット 107 (Ⅲ層 a) 台2656
	2		8.6 2.7	外面はナデ調整が見られる。風道孔の面には斜めに細擦痕が入り、風道孔が斜めに向かっている。摩耗しており、脆い。外面は暗褐色と赤褐色を呈しており、アバタが見られる。強く焼け硬質。内面は灰褐色。石英を含む。 重量83.85g。厚さ2.7cm。	5トレンチ ビット 111 (Ⅲ層 a) 台2657
	3		7.3 1.8	外面はナデ調整が見られる。風道孔の面は摩耗しており、脆い。外面は暗褐色と赤褐色を呈しており、強く焼け硬質。内面は灰褐色。石英を含む。 重量14.95g。厚さ2.7cm。	7トレンチ ビット 7 (Ⅲ層 a) 台2654



第65圖 羽口

0 10cm



圖版41 羽口

0 10cm

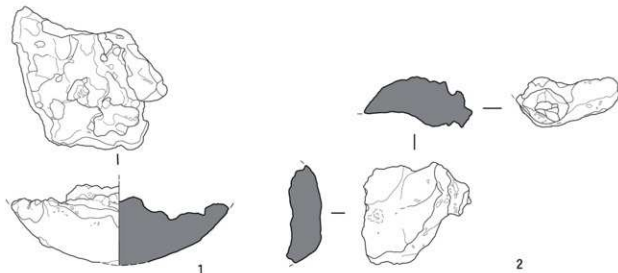
b. 鉄滓 (第66図1・2)

今回の調査では4点得られた。図1は、丸底の底部片のように見える。表面には高熱で焼かれ溶解したと考えられるような無数のアバタ状の細気孔が見られ、2も同じように見られる。

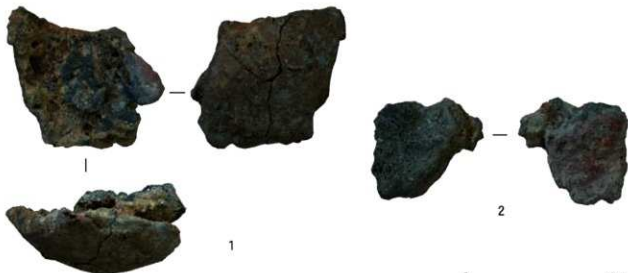
詳細は観察一覽で述べる。他に6トレンチから2点得られており、それぞれ17.7gで黒褐色砂層貝層南東、0.59gで茶褐色砂層から出土している。

表25 鉄滓観察一覽

第図 図版	番号	部位	観 察 事 項	出 土 地 台帳番号
第 66 図 (図 版 42)	1	底	丸底の底部片で、内外面共に無数の細気孔が見られる。内面は溶解して固まった跡がある。胎土には5mm以下の石英を含む。外面は褐色、内面は黒褐色と赤褐色を呈す。厚さ1.2~2.8cm、底径5.8cm、重量400g。掘立柱建物址1	5トレンチ Pit-110 台2659
	2	-	内外面共に無数の細気孔が見られる。表面には溶解して固まった跡がある。また、細粒砂が表面に付着している。5mm以下の石英を含む。表面は暗褐色と黄褐色を呈す。内面は赤褐色。厚さ1.3~2.5cm、重量98.49g。	8トレンチ 灰白色粘質 Ⅲ層 a (カワナ) No. 24北 台1075-a



第66図 鉄滓



図版42 鉄滓

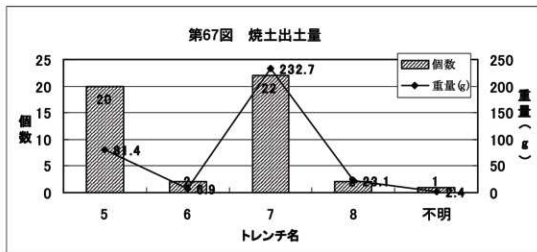


c. 焼土

今回の調査では47点 (346.5g) の資料が得られた。出土したトレンチは5～8トレンチで、数量で見ると7トレンチが22個と最も多く僅差で5トレンチが続く。重量では7トレンチが232.7gで、これに続く5トレンチの81.4gの約3倍の量がこのトレンチで出土していることがわかる。全体量の7割が7トレンチで得られており、その多くがピット内から出土していることから、このピットに関わる遺物と考えられる。また、このトレンチから得られた焼土には表面に縦横に擦痕が見られるものがあり、中にはヘラで削り取ったと考えられる痕や面取りがされているものもあるが、その用途は判然としない。

表26 焼土出土量

トレンチ	個数	重量 (g)
5	20	81.4
6	2	6.9
7	22	232.7
8	2	23.1
不明	1	2.4
計	47	346.5



第六節 近・現代

1. 遺構

5トレンチと7トレンチで戦前の溝状遺構が確認された。5トレンチ断面で奈留川跡（ナルカー）と思われる層も確認されているが、詳細は本調査の報告書で触れたい。

A. 溝状遺構

範囲確認調査でわかった長さは16.1m、幅1.2～1.6m、深さ18～24cm。全体的に断面形状は逆台形であるが、西側は傾斜が急で、東側は傾斜がゆるやかである。層序や出土遺物（クロム青磁など）から、明治以降に埋没したと考えられる。なお本調査により、5トレンチと7トレンチの溝状遺構は同一のものであることがわかった。

表27 近世溝状遺構出土遺物

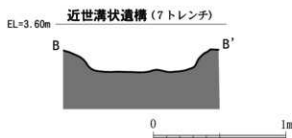
出土地	遺物		部位
5トレンチ	II層	沖繩産施釉鉢	胴部
		陶質土器	火印 底部
	クロム青磁	小碗	胴部
	不明	褐釉陶器	壺



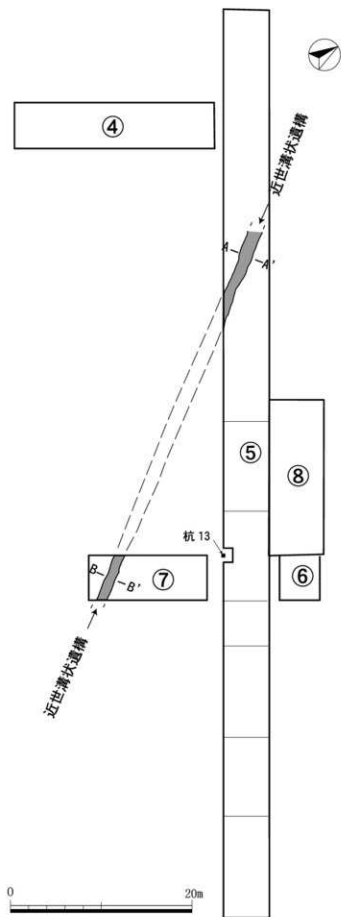
図版43 近世溝状遺構検出状況
(5トレンチ)



図版44 近世溝状遺構検出状況
(7トレンチ)



第68図 近世溝状遺構 (横断面)



第69図 近世溝状遺構の位置

2. 出土遺物

主に旧表土（Ⅱ層）の出土である。

青磁、染付、褐釉陶器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、陶質土器、本土産陶磁器、瓦、円盤状製品が出土しているが、出土量は少ない。

A. 青磁

本遺跡からは3点出土した。第70図1は直口口縁部で5トレンチ北側の盛土（Ⅰ層）、第70図2は底部で4トレンチ混雑層（Ⅰ層）から出土した。



第70図 青磁

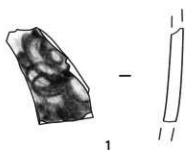


図版45 青磁



B. 染付

本遺跡からは2点出土した。1点は小破片で第71図1と同じものと思われる。2点とも胴部片で4トレンチ赤褐色礫層（米軍による攪乱）Ⅰ層から出土した。



第71図 染付

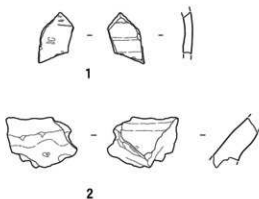


図版46 染付



C. 褐釉陶器

本遺跡からは2点出土した。第72図1・2とも壺の胴部片である。それぞれ5トレンチの北側と北側溝付近、暗褐色砂質土層（Ⅱ層）で出土した。



第72図 褐釉陶器



図版47 褐釉陶器



表28 青磁・染付・褐釉陶器出土量

出土地 トレンチ	層序	種類	青磁			染付		褐釉陶器		層序別計	トレンチ 別計
			碗		鉢	碗	壺	層序別計	トレンチ 別計		
			口縁部	底部	胴部	胴部	胴部				
4トレンチ	混雑層 Ⅰ層			1					1		
	赤褐色礫層（米軍による攪乱）Ⅰ層				2	2			2	3	
5トレンチ	北側						1		1		
	北側盛土 Ⅰ層	1							1		
	北側溝付近暗褐色砂質土層 Ⅱ層						1		1	3	
器種別計			1	1	1	2	2			6	
合計				3		2	2				

表29 青磁・染付・褐釉陶器観察一覧

第図 図版	番号	器種	分類	残存 箇所	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	観察事項	出土地 台帳番号
第70図 (図版45)	1	青磁	碗	口縁部	— — —	灰白色 粗粒子	灰オリーブ	有り	直口口縁部。口唇部は舌状を呈す。器厚4.3~3.3mm。重量2.04g。	5トレンチ北側盛土 Ⅰ層 台97
	2		碗	底部	— — 4.8	灰色 粗粒子	緑灰	有り	高台内、壺付、内底の軸は剥がれており、僅かに高台脇に軸が見られる。高台内に轆轤痕が見られる。器厚7.7mm。重量52.74g。	4トレンチ混雑層 Ⅱ層 台437
(図版71 46図)	1	染付	碗	胴部	— — —	灰白色 粗粒子	灰白	—	外面に花文を施す。器厚3.0~3.5mm。重量2.52g。	4トレンチ赤褐色礫 層（米軍による攪乱） Ⅰ層 台2729
第72図 (図版47)	1	褐釉 陶器	壺	胴部	— — —	灰白色 粗粒子	灰オリーブ	—	裏面に轆轤痕が見られる。軸は剥がれており、僅かに見られる程度である。器厚5.2mm。重量4.81g。	5トレンチ北側溝付 近暗褐色砂質土層 Ⅱ層 台104
	2		壺	胴部	— — —	灰赤色 粗粒子	黒褐色	有り	器厚12.2~13.5mmで、下部に向かい緩やかに厚みを増す。重量24.19g。	5トレンチ北側 Ⅰ層 台1-a

D. 沖繩産施釉陶器

沖繩産施釉陶器の器種は、碗26点、小碗5点、壺2点、鍋1点、鉢5点、水注2点、酒注1点、猪口1点、蓋1点、器種不明1点の総数45点の出土である。

表30で出土地別にみると、4トレンチ15点、5トレンチ24点、6トレンチ1点、7トレンチ2点、8トレンチ3点である。このうち4トレンチのⅡ層から碗7点、小碗1点、器種不明1点、5トレンチのⅡ層からは碗2点、猪口1点、7トレンチで鉢2点、8トレンチで鍋1点が出土し、その他は1層（攪乱・表採）、不明である。

沖繩産施釉陶器では、口縁部から底部にかけての形状が残る欠損品は小碗のみで、その他は破片である。残存率の高いものと特徴的なものを取り上げて報告する。第73図、図版48に図示した。

a. 碗（第73図1～6・10）

碗は口縁部、胴部、底部破片のみであるが、これらに見られる器形は、高台脇に僅かな段を有し口縁部に向けて僅かに丸みを帯びながら直線的に開くとみられるもので、フィガキー（方言名）と称される口縁部から腰部付近まで2～3回に分けて施釉し、高台や高台脇などは露胎させる方法で灰釉や鉄釉を施すもの。腰部がやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部でやや外反または直状となると見られるもので、白化粧後に透明釉を施すものがあり、口縁部が外反となるものに呉須と鉛釉での施文が見られる。また、胴部破片では外面に鉄釉、内面は灰釉の掛け分け、口縁部小破片では口唇部外面から内面に白化粧を施し、外面に鉄釉、内面は透明釉を施すものがある。

図は、高台脇に僅かな段を有し口縁部に向けて、僅かに丸みを帯びながら直線的に開くとみられる底部破片。フィガキーで腰部付近まで灰釉を施すもの。灰釉の発色は良くない。見込みは露胎。高台脇での推定径7.6cm、器壁の厚さは破片上部で約4mm、4トレンチ西側の出土、Ⅱ層（黒褐色砂質土層）

図2・3は、白化粧後に透明釉を施す碗の口縁部。同図2は有文碗の口縁部破片。口縁形態はやや外反する。文様は、鉛釉による丸文の周囲に呉須による小さい丸文を巡らす花弁文である。推定口径14.6cm、器壁の厚さは約4mm、4トレンチの出土、Ⅱ層（細分層6層）。同図3は、碗の口縁部小破片で文様は見られない。口縁の形態は、やや外反し口縁下約1cmの部分に稜を有する。この稜の部分の素地を断面で見ると僅かに段が見られる。外面には付着物、内面には白化粧土が柔らかいうちに触れたと思われる楕円状の痕跡が見られる。推定口径12.4cm、器壁の厚さ約4mm。5トレンチ北の出土、層序不明。

図4は、白化粧後に透明釉を施す碗の底部破片。腰部がやや丸みを帯びて立ち上がるもので、畳付けは露胎で研磨が見られる。蛇の目釉剥ぎが施され、この部分にはアルミナの付着が見られる。高台内には、焼成時のひび割れが見られる。底径5.2cm、4トレンチ出土、層序不明。

図5は、高台脇に僅かな段を有し口縁部に向けて直線的に開くとみられる碗の底部破片。フィガキーで腰部付近まで黒釉を施すが、腰部付近で釉溜まりとなり、内面には滴状に垂れた釉が見られる。見込みの中央部には、蛇の目を呈するように施されたと思われる丸文が鉄釉で施され、見込みから胴部への立ち上がり部分には、細く巡る線状の凹部分に鉄釉が見られる。底径6.5cm、器壁の厚さは破片上部で約5mm。5トレンチ北側出土、層序不明。

図10は、口縁部小破片。口唇部外面から内面に白化粧を施し、外面と口唇部内面に鉄釉、内面は透明釉を施す掛け分けである。器壁の厚さは約3mm。5トレンチ盛土の出土。

図6は、胴部破片、腰部付近である。外面に鉄釉、内面に灰釉を掛け分けて施す。内面には幅約1cmの鉄釉による圓線が見られる。腰部付近の径は約10cm、器壁の厚さは約3mm。5トレンチ南側東壁清掃中の出土、層序不明。

b. 小碗 (第73図7・8)

小碗は、腰部がやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部でやや外反または直状となるもので、胴部に面取りが施されるものと施されないものがある。いずれも白化粧後に透明釉を施すものである。見込みには蛇の目釉剥ぎが施され、高台にはアルミナの付着が見られる。

図7は、口縁部から底部にかけての形状が残る欠損品。胴部に面取りが施される。見込みには蛇の目釉剥ぎが施されるが、透明釉のみを剥ぐ。外面や高台内の白化粧にひび割れが見られる。推定口径7.8cm、器高4.3cm、底径3.2cm。5トレンチ北側より2番目出土、I層（灰褐色シルト及び客土）。

図8は、底部破片。腰部の残存状況から面取りは施されていないと見られる。見込みには蛇の目釉剥ぎが施されるが、鉋が引っ掛かったことによると見られる部分的な白化粧土の剥がれた痕が見られる。高台内の白化粧にひび割れが見られる。底径3.8cm。器壁の厚さは破片上部で約4mm。5トレンチ北側出土、層序不明。

c. 鍋 (第73図11)

鍋は図11のみである。口縁部小破片。器形は張り出した胴部が窄まると見られるもので、口縁部断面形態が「く」の字状を呈するもの。口唇から外面は鉄釉、内面は口唇下から「く」の字状の断面形態の頂部にあたる範囲には施釉されず、それ以下の胴部に鉄釉が見られるが光沢は無い。8トレンチ出土II層（黄褐色土層）。

d. 鉢 (第73図12)

鉢は、断面形態が逆L字状を呈するもので、口唇部が下がるものとやや反り上がり口唇が僅かに直状するものが見られる。前者は掛け分け、後者は白化粧に透明釉が施され、口縁上面の平坦部に2条の圏線の間を呉須による小さい丸文を施すものがある。

図12は、口縁部小破片。断面形態が逆L字状を呈する。この逆L字状の屈曲部が口縁頂部となり口唇部はそれよりやや下がるものである。口唇部から内面は白化粧が施されるが、口縁部の傾斜する面から外面には黒釉、内面は透明釉が施され、外面には白化粧は施されない。推定口径22.2cm、器壁の厚さは約6mmである。5トレンチ南側、盛土表採。

e. 壺 (第73図9)

壺は、胴部破片と底部破片である。黒釉を内外面に施すものである。

図9は、黒釉が施された壺の底部破片。器形は高台脇から直線的に胴部へ膨らむものと見られる。施釉は、外面では高台から高台脇は露胎であるが、釉溜まり状の釉垂れが高台まで及び、高台内底面から高台の内側面は、アルミナを施していたと見られる畳付けから2mm上側の範囲は施釉されない。高台の露胎している範囲は、手触りが滑らかな部分が多く磨きが施されていると見られる。高台内底面も施釉されるがムラがあり外面に比して淡い色調を呈する。見込みには、重ね焼きの際のアルミナが直径約4.5cmの円形が残る。その周囲に見られる石灰質の付着物は、一部アルミナを覆っていることから焼成後と見られる。

内面には轆轤痕による稜線が見られる。本品の破損部のうち、高台側へ緩やかに弧状に窪む箇所は、器壁の中央部に境に外面側に傾斜する面を有しており摩滅が見られることから二次利用が行われたと思われる。推定底径10.2cm、高台の高さは8mm。5トレンチ南側、盛土表採。

f. 蓋 (第73図14)

蓋は、水注の蓋の破片である。

図14は、水注の蓋破片。全体に白化粧を施し裏面以外は透明釉を施す。蓋上面には線彫りで円

の中に放射状に6枚の細長い葉を描く葉文、その線彫り部分からはみ出した状態で呉須が施される。つまみ付近の位置に孔を有する。孔は直径約5mm。上面側からの穿孔と見られる。孔内部は上面から見える範囲まで白化粧と透明釉が及ぶ。蓋の推定直径は9cm、「き」（蓋がずれるのを防止するために裏面側に突出してする部分）の残存部での推定最大径は7.6mm。5トレンチ南側の出土、層序不明。

g. 水注（第73図15）

水注は、口縁部破片である。

図15は、水注の口縁部破片。器形は、張り出した胴部から口縁部へ緩やかに窄まり短頸状に立ち上がる。口唇部の断面形は、内外面に面取りが施された略舌状を呈する。蓋と接する部分は白化粧のみ、それ以外は白化粧後に透明釉を施す。外面に施される文様は、胴部から口唇部へ屈曲して立ち上がる部分に横位の2条の線彫り、横位の線彫りに直行する2条の縦位の線彫りにより区画された範囲内に網目状の線彫りが施され、線彫り部分に呉須、呉須の隙間に鈎釉、取手や注ぎ口の貼付け周辺に鈎釉が施される。推定口径6.2cm。器壁の厚さは約5mm、1層（4トレンチ赤褐色レキ層米軍による攪乱出土）。

h. 猪口（第73図13）

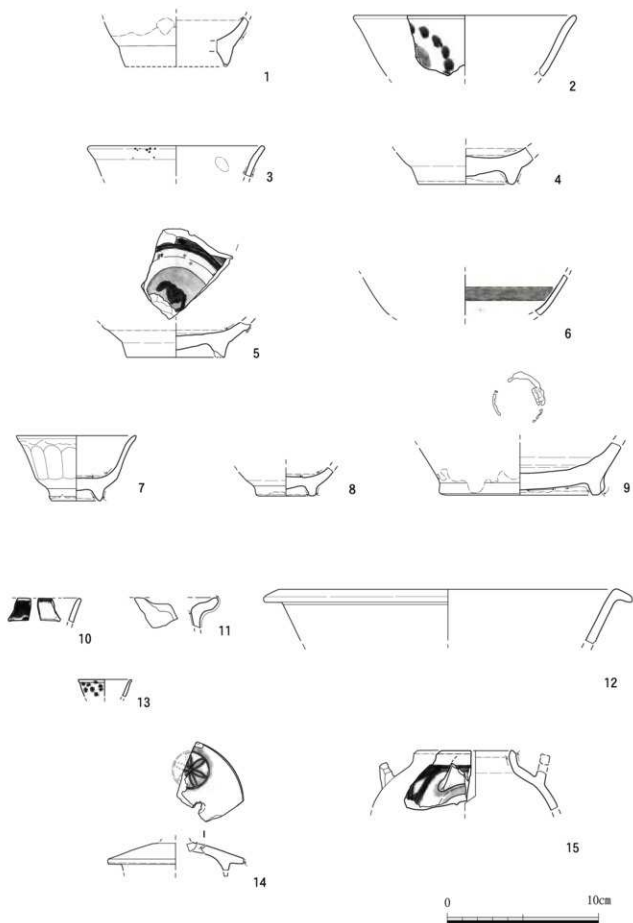
猪口は、口縁部小破片である。

図13は、猪口の口縁部小破片。器形は緩やかに丸みを帯びた胴部が口縁部で外反し口唇部が玉縁状を呈する。素地に透明釉を施すもので、施文は外面のみで、玉縁状の口唇直下から鉄釉による烈点文を施す。同文様の直径は約2mm。推定口径4.5cm。5トレンチ南側、川の最下部の出土、暗オリープ灰色粘質土層。

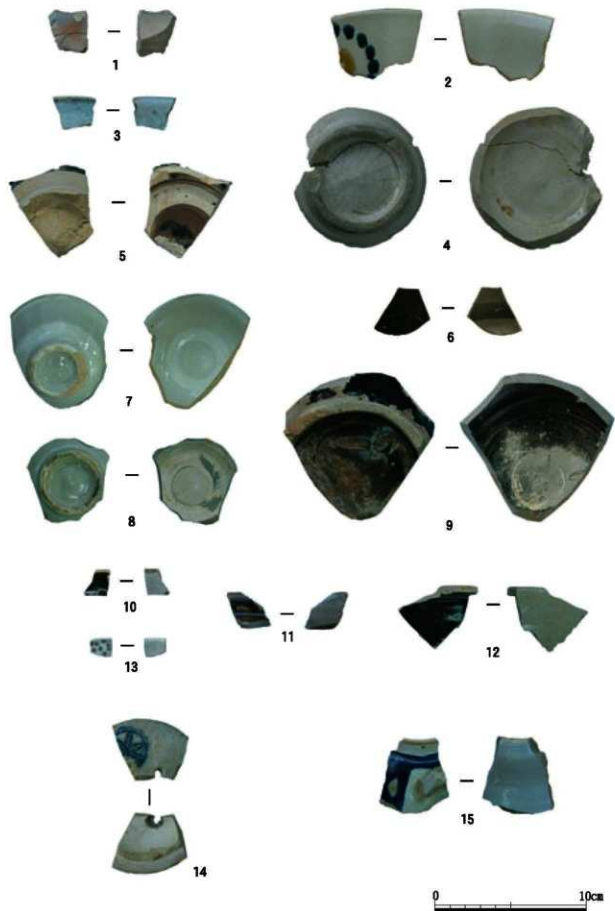
表30 沖繩産施釉陶器出土量

出土地	部種・部形・釉薬	施文										小計	合計											
		白+透		黒+白+透		黒+透		赤		緑				水注		猪口		蓋		部種不明				
		口縁部 外反 無文	胴部 無文	口縁部 外反 無文	胴部 無文	口縁部 外反 無文	胴部 無文	口縁部 外反 無文	胴部 無文	口縁部 外反 無文	胴部 無文			口縁部 外反 無文	胴部 無文	口縁部 外反 無文	胴部 無文	口縁部 外反 無文	胴部 無文	口縁部 外反 無文	胴部 無文	口縁部 外反 無文	胴部 無文	
4トレンチ	攪乱 1層		2																		5			
	① 皿部 a								1													1		
	② 皿部 a	1																				1		
	③ 皿部 a					1																1		
	④ 皿部 a																					1		
	⑤ 皿部 a																					1		
	⑥ 皿部 a					1																1		
原産土層 2層					1																1			
4トレンチ西側	黒褐色砂質土層 2層	1																			1		2	
4トレンチ	不明								1													1		
5トレンチ南	2層		1																			1		
5トレンチ中央坑	攪乱 1層									1												1		
5トレンチ北	不明			1	2																	3		
5トレンチ北側 上り2層目	攪乱 1層				1																	1		
5トレンチ北側南	不明		2																			2		
5トレンチ南側	表層 1層		1											1								1		
5トレンチ南側	不明																					1		
5トレンチ南側盛土	表層 1層																					1		
5トレンチ南側東側	不明																					1		
5トレンチ南側	川の最下部(暗オリープ灰色粘質土層) 2層		1																			1		
5トレンチ盛土	不明					1																1		
6トレンチ	不明																					1		
7トレンチ	床面 2層														2							2		
8トレンチ	黄褐色土層 2層																					3		
計		1	2	4	11	2	2	2	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	45	
合計															26								45	

※凡例：白＝白化粧、黒＝黒釉、透＝透明釉



第73図 沖縄産施釉陶器



図版48 沖縄産施釉陶器

E. 沖繩産無釉陶器

沖繩産無釉陶器の器種は、壺6点、甕3点、水甕5点、播鉢1点、火炉1点、器種不明5点の総数21点が出土している。

表31に示した出土地点で見ると、4トレンチで6点、5トレンチは14点であるが北側で10点、南側で4点と北側が多い。7トレンチは1点の出土である。

層序別では4トレンチのⅡ層、細分層⑤で壺、⑦で壺・甕、⑧で播鉢、⑨で器種不明で、この小破片には窯印の「十」？が施されたものである。5トレンチ北側では壺、甕、水甕、火炉、器種不明、同トレンチ南側で水甕が出土している。

残存率の高いものと特徴的なものを取り上げて報告する。第75図、図版50に図示した。

第75図1は、壺の胴部から頸部にかけての破片。外面には小さな気泡状の小瘤が見られ頂部に穴があるものも見られる。外面は暗褐色、内面は茶褐色を呈する。頸部の推定口径は約12cmである。器壁の厚さは約6mm。4トレンチ細分層⑦、のⅡ層で出土。

同図2は、壺の底部破片。器面調整は外面は丁寧で、底部縁では縦方向のナデが見られ、底面の外側付近には指圧痕が見られる。内面では見込みから立ち上がるところに強い稜をもつ轆轤痕が見られる。外面は褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土には石灰質粒が僅かに見られる。底径11.8cm、器壁の厚さは約7mm、5トレンチ南側の出土で層序不明。

同図3は、火炉の底部破片。底面には直径約1.9cmの脚が付くが欠損している。器面調整は胴部、底面ともに丁寧であるが内面は外面に比べると丁寧ではない。胴部外面上部には泥釉、そこからの泥釉の釉垂れがあり、内面にも泥釉の釉垂れが見られる。見込みには器壁からやや内側に調整痕による強い稜が見られる。外面は暗茶褐色、内面は暗灰色を呈し、断面では茶褐色と暗褐色を呈する土が練りこまれたように互層状を呈する。器壁の厚さは底部付近で約1.3cm、破片上部で約1cm、底径約14cm。5トレンチ北側ビーチロック北のⅡ層で出土。

同図4は、水甕の胴部破片。外面には5条1対の波状文が2条施され、その下位にはヘラによる圏線がみられる。外面は茶褐色で上部の一部が褐色、内面は暗黒褐色を呈する。器壁の厚さは約1cm。5トレンチ南側の出土で層序不明。

同図5は、甕の胴部破片で底部付近である。外面は下部にヘラによる稜が見られるが比較的丁寧に器面調整が施され、内面は稜を残す轆轤痕が下部に見られる。外面、内面、断面ともに胎土に石灰質粒が僅かに見られる。外面は暗褐色、内面は暗灰色を呈する。底部付近での推定胴径は約34.6cm。器壁の厚さは底部付近で約2cm、破片上部では約1.3cm。5トレンチ南側出土で層序不明。

同図6は、甕の底部破片。器面調整は土粒の付着や傷が見られるが比較的丁寧である。底面には胴部との接合時のナデ痕が見られる。胴部の底面付近は面取状を呈する横方向へのナデが施され、胎土には断面で僅かに石灰質粒が見られる。外面は暗褐色、内面は暗褐色を呈する。器壁の厚さは底部付近で約2cm、破片上部で約1cm、底径約16.8cm。5トレンチ北側の出土で層序不明。

表31 沖縄産無釉陶器出土量

種 類 出土地・層序		壺		甕		水甕	火炉	権鉢	器種不明	小 計	合 計	
		胴部	底部	口縁部	胴部	底部	胴部	底部	胴部			胴部
		有文	有文	有文	有文	有文	有文	有文	有文			有文
4 トレンチ		⑥II層	2							2	6	
		⑦II層	1			1				2		
		⑧II層							1	1		
		⑨II層								1		
5 トレンチ	北側	不明					1			1	14	
		ピーチ ロック北 II層	1			1	1	1		1		5
			1							1		
	南側	不明		1			2			3		
							1			1		
7 トレンチ				1					1	1		
小 計		5	1	1	1	1	5	1	1	5	21	
合 計		6		3		5	1	1	5	21	21	

F. 陶質土器

陶質土器は、火炉の底部破片 1 点のみである。

出土地点は 5 トレンチ北側溝（第 68 図）の出土で、層序不明。第 74 図、図版 49 に示した。

器形は、高台脇が僅かに窪み、胴部へ膨らむ。器壁の厚さは底部付近で約 1 cm、破片上部で約 8 mm。推定底径は 10 cm、高台は約 4 mm と低い。

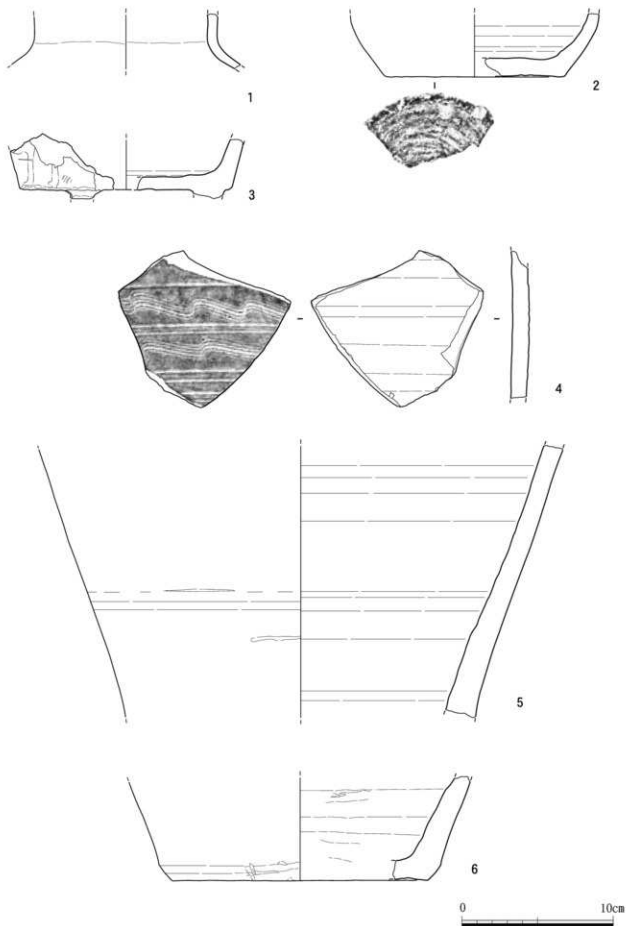


第74図 陶質土器

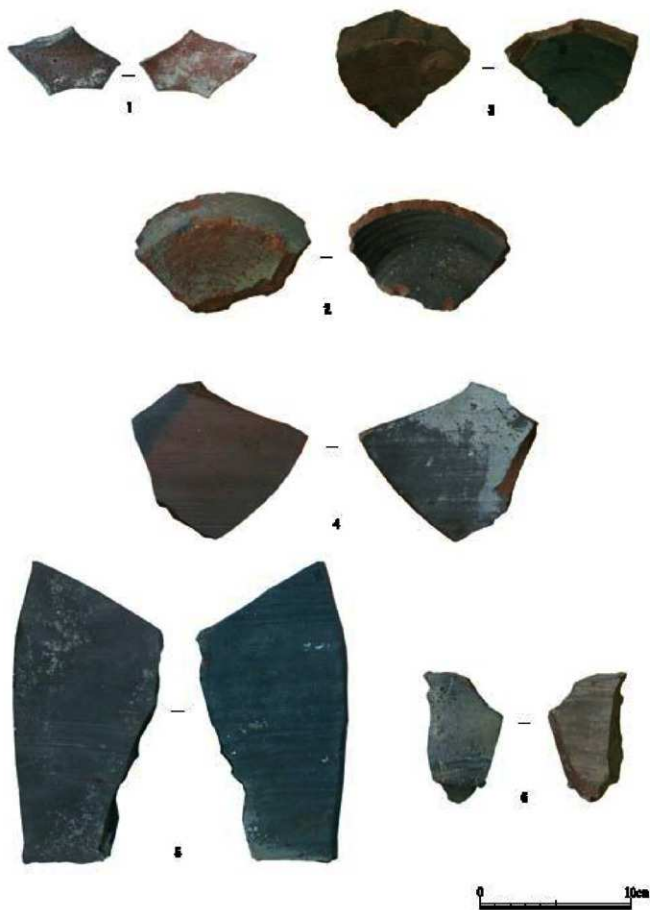


図版49 陶質土器





第75図 沖縄産無釉陶器



図版50 沖縄産無釉陶器

G. 本土産磁器

本土産磁器の器種は、碗、小碗、器種不明で、各5点で総数15点の出土である。

碗には型紙摺りや手書きによる施文と見られるもの、小碗では銅版転写を施すもの、袂りや飛鉤などによる施文があり、後者はクロム青磁に見られる。

表32に示した出土地点を見ると4トレンチ6点、5トレンチ7点、8トレンチ2点の出土である。層別で見ると4トレンチでは、細分層②、③、⑥、⑫のⅡ層、黒褐色粘質土層からの出土で、小碗（銅版転写、クロム青磁）、器種不明のものが出土し、5トレンチでは表採や客土、層不明で碗（型紙摺り）、小碗（銅版転写）、器種不明である。8トレンチでは黄褐色土層aから碗（型紙摺り）が出土している。

残存率の高いものと特徴的なものを取り上げて報告する。第76図、図版51に図示した。

第76図1は、型紙摺りが施される碗の口縁部。口縁は端反りである。文様は、外面では型紙の境目が見られ、内面は口縁下の圏線による区画内に文様を配する。方言で「スンカンマカイ」と称されるものである。推定口径12.5cm。5トレンチ南側盛土、表採。

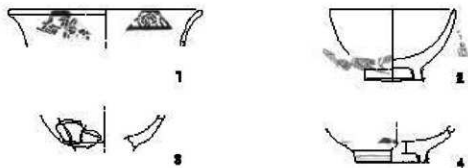
同図2は口縁直口の小碗で、菊葉文と見られる文様が施され、その反対側に「口山口（印）」の文字が見られる。壺付けは露胎。口径8cm、底径3.6cm、器高4.7cm。出土地点は4トレンチ、細分層⑥のⅡ層。

同図3は、腰折れの小碗の胴部破片。胴部外面には、腰部から口縁部に向かう袂りが間隔をあけて施されており、腰部で幅広の袂りは口縁部にむけて幅を狭める。淡い青緑色を呈するクロム青磁である。出土地点は4トレンチ西側、黒褐色粘質土層。

同図4は、碗の底部。呉須による文様があり、胴下部で1条の圏線と別の文様の一部が見られ、高台脇で2条、高台内で1条の圏線が施される。壺み付けには目砂が僅かに付着。肥前の可能性が高い。底径4.5cm。出土地点は5トレンチ北、層序不明。

表32 本土産磁器出土量

種 類		碗			小碗			器種不明			小計	合計
		型紙刷り		肥前?	クロム青磁		銅版転写					
		口縁部	胴部	底部	胴部	口~底	底部	胴部	無文	底面		
		有文	有文	有文	有文	有文	有文	有文	無文	有文(型紙刷り)		
出土地点・層序		端反	直状		袂り	飛鉤						
		4トレンチ	②Ⅱ層								1	
③Ⅱ層						1					1	
⑥Ⅱ層							1				1	
⑫Ⅱ層									1		1	
黒褐色粘質土層									1		1	
西側				1							1	
5トレンチ	北	不明		1							1	
	北側	ピーチロック北Ⅱ層							1		1	
		不明					1				1	
		灰褐色シルト及び客土			1							1
	南側盛土	表採	1								1	
南側	不明							1		1		
8トレンチ		黄褐色土層a	1	1							2	
小計			1	1	2	1	1	1	1	3	1	15
合計				5							15	15



第76圖 本土産磁器



図版51 本土産磁器



H. 瓦 (第77図 1~2・図版52)

今回の調査では11点の資料が得られた。出土地は4トレンチと5トレンチに跨っており、5トレンチの南側に多く出土している。層序が不明なものが多く確認できるものは攪乱層や黄褐色粘質土出土のもので、このことから近世以降の比較的新しい時代のものだとわかる。この内の2点を図示した。2点とも平瓦の破片である。以下に詳細を述べる。

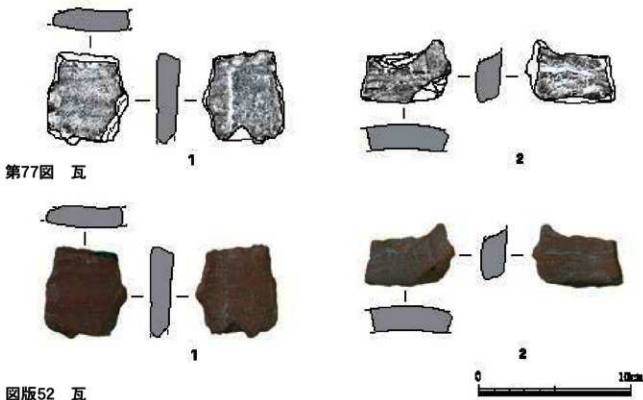
第77図1は上縁にあたる。現況のサイズは長さ6.1cm、幅5.4cm、厚さ1.2~1.5cmである。表面は指ナデ調整が施されている。また、打割調整が施されており、円盤状製品の可能性があるがここでは瓦として扱う。裏面には布目が見られる。色調は赤褐色、表面右上には黒色を帯びる。5トレンチ南側川の最下部(暗オリーブ灰色粘質土層の上部の攪乱層)から出土した。

第77図2は下縁にあたる。現況のサイズは長さ3.5cm、幅5.5cm、厚さ1.4~1.7cmである。表面右上に篋で削り取った痕がある。裏面には布目は見られない。色調は橙褐色である。出土地は4トレンチである。

I. 円盤状製品 (第78図 1~3・図版53)

今回の調査では3点の資料が得られた。沖縄産の施釉・無釉陶器を使用しており、日用品を加工した製品である。大きさは3.6cmの小型のものから6.5cm、7.9cmの大型なものが確認できた。

素材は、伊礼原D遺跡、伊礼原E遺跡に見られるような近世の沖縄産陶器を使用しており、本遺跡に隣接する後兼久原遺跡ではカムイヤキや中国産褐釉陶器を使用していることから、後兼久原遺跡より時代が新しいものと考えられる。また、これらの遺跡では、青磁や白磁等の中国産陶磁器、本土産陶磁器などの搬入遺物を使用しているが本遺跡では得られないことから、近世以降の本遺跡の生



活状況を垣間見ることができる。出土地も茶褐色砂質土と黄褐色粘質土層と近世の層から出土している。ここでは、3点の概略を述べ、詳細は観察表に示す。

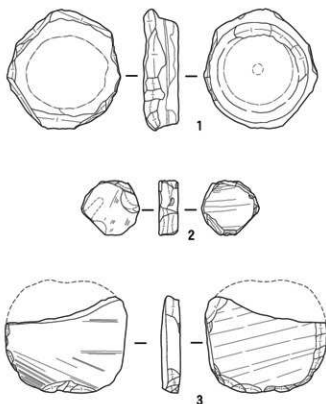
第78図1は沖縄産褐釉陶器碗の底部を使用しており一部高台が破損している。2トレンチ東壁茶褐色砂質土（やや灰色、腐植土を含む）から出土。

第78図2は沖縄産無釉陶器の器種不明の胴部を使用しており小型である。5トレンチ南側溝付近試掘穴清掃中から出土。

第78図3は沖縄産無釉陶器の壺か鉢の胴部を使用している。5トレンチ南側から出土。

表33 円盤状製品観察一覧

第図版	番号	素材	長さ (cm) 厚さ (cm) 重量 (g)	観察事項	出土地 台帳番号
第78 図 (図版53)	1	沖縄産 施釉陶器	7.9 2.0 82.5	碗の底部を加工したと思われる。表面には貫入、打割調整が見られる。調整が雑な為方形に近い。表裏面ともに灰褐色。	2トレンチ東壁茶褐色砂質土（やや灰色、腐植土を含む） (II層) 台27-a
	2	沖縄産 無釉陶器	3.6 1.3 23.9	胴部を加工したものであるが、器種は不明。裏面に轆轤痕、打割調整痕が見られ、方形に近い円形を呈す。外面は赤褐色、裏面は明赤褐色。	5トレンチ南側溝付近試掘穴 清掃中（層不明） 台2024
	3	沖縄産 無釉陶器	6.5 1.0 69.6	壺若しくは鉢の胴部を加工したものであると考える。裏面には、轆轤痕と打割調整痕が見られる。破損しているが、これも方形に近い円形を呈す。表面は茶褐色、裏面は赤褐色。	5トレンチ南側（層不明） 台5



第78図 円盤状製品



図版53 円盤状製品



第四章 科学的分析

第一節 小堀原遺跡出土の人骨

土肥 直美 (琉球大学医学部 准教授)

1 はじめに

沖縄県北谷町小堀原遺跡から出土した未成人骨について報告する。人骨は、平成11～13年度に行われた北谷町教育委員会の発掘調査において出土したもので、所属年代は考古学的所見から12～13世紀のグスク時代（中世）と考えられている。グスク時代の墓지는発見例そのものが少ない上に、共同墓地を形成する貝塚時代とは異なり、規模も小さく土壇墓が多い。今回出土した人骨は未成人骨1体のみであるが、グスク時代の葬墓制を知る上で貴重な事例になると思われる。

2 人骨の出土状況

人骨は7トレンチ南壁近くで、左右の膝を外側に軽く開いた仰臥屈肢葬の状態で見出された。保存状態が悪かったため、骨は周りの土と一緒に取り上げた後に洗浄し、細部の調査を行った。人骨の保存部位を第79図に示している。

3 出土人骨の所見

年齢の推定：

未成人骨の年齢推定は歯の萌出と形成の程度を基準にした Ubelaker (1989)¹¹⁾ に従った。検出された歯の歯式を以下に示す。また、歯の形成状況を第80図に示す。歯冠の形成が完了していない未萌出の乳歯が、すべて遊離した状態で検出された。これらを Ubelaker の基準と照合した結果、本人骨の年齢は誕生して間もない乳児（生後6ヶ月以内）と推定された。

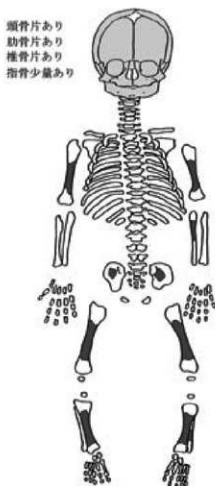
(m ²)	(m ¹)	(c)	(i ²)	(i ¹)	(i ¹)	(i ²)	(c)		(m ²)
(m ₂)	(m ₁)	(c)	(i ₂)	(i ₁)	(i ₁)	(i ₂)	(c)	(m ₁)	(m ₂)

4 グスク時代の乳児埋葬

グスク時代の乳児埋葬例はうるま市具志川グスク²⁾、石垣市蔵元跡³⁾、石垣市登野城遺跡⁴⁾などで報告されている。具志川グスクではⅡ地区とⅢ地区の造成土中から新生児と推定される4体以上の埋葬人骨が出土している。具志川グスクは乳児骨のみの埋葬という点が特徴で、しかもほとんどが蹲るような姿勢の伏臥位（うつぶせ）であった。周産期（出産時）の子供の死に対する何らかの特別な習俗があった可能性も考えられる。一方、八重山のグスク時代遺跡からも乳児を含む多くの未成人骨が出土している。蔵元跡遺跡からは、小堀原とほぼ同年齢（生後6ヶ月から9ヶ月程度）の乳児骨4体（10体中）が、同様に仰臥屈肢位で出土している。また、登野城遺跡では、出土人骨67体中の約87%が未成人、さらにその未成人の約83%が乳児という、乳児死亡の割合が極端に高い例が報告されている。登野城遺跡の乳児のうち出生直後と推定された人骨は伏臥位が多く、6ヶ月以上になると仰臥位の埋葬や石積の埋葬施設をもつものがあつた。本例も含めて、グスク時代の墓制・葬制、特に子供の死の扱いを考える上で興味深い。

<引用文献>

- 1) Ubelaker (1989) Human skeletal remains:Excavation, Anelysis, Interpretation. Washington, DC: Taraxacum.
- 2) うるま市教育委員会 (2006)「具志川グスクⅠ-発掘調査概報-」うるま市文化財調査報告書 第4集.
- 3) 土肥直美・北條真子 (1997) 八重山蔵元跡遺跡出土の人骨.「蔵元跡発掘調査報告書」石垣市文化財調査報告書 第21集. 石垣市教育委員会, pp. 129-142.
- 4) 土肥直美 (2009) 登野城遺跡出土の人骨. 石垣市教育委員会 (印刷中).



第79図 7トレンチ乳児骨の出土部位



第80図 7トレンチ乳児骨の歯

第二節 小堀原遺跡出土の脊椎動物遺体

樋泉 岳二（早稲田大学）

小堀原遺跡は沖縄県北谷町の海岸平野に立地する沖縄貝塚時代後期からグスク時代の遺跡である。本遺跡では、平成11～13年度に実施された試掘調査において、貝塚時代後期の層準より多数の脊椎動物遺体（骨類）が採集された。ここではこれらの骨類の同定結果を記載し、その特徴について述べる。

1. 資料と方法

分析資料の採集方法は、発掘現場において手で拾い上げられたもの（ピックアップ資料）である。骨類の年代については、共伴した土器類（大当原式土器・くびれ平底土器など）から、大部分は貝塚時代後期のものと推定されるが、後世の資料も若干混じっている可能性がある。ただし、貝塚時代後期層準の上位にはグスク時代の包含層が堆積しているが、確実にグスク時代層準からの出土と判定される骨類はない。

遺体の予備的な同定・データの集計・作表作業は北谷町教育委員会の島袋春美氏、他によって行われ、筆者（樋泉）が同定結果の確認および最終的な図表の編集を行った。以下の記述はそのデータに基づくものである。

2. 結果

脊椎動物遺体群の概要

同定結果を表35～表39に、同定標本数（NISP）と最小個体数（MNI）による組成を表41に示した。脊椎動物遺体全体の組成をみると（第81図）、イノシシが圧倒的に多く、魚類がこれに次ぐ。他にリクガメ類、ウミガメ類、鳥類、ウシ、ジュゴン、イルカ・クジラ類が確認されたが、いずれもごく少ない。

魚類

魚類はブダイ科（イロブダイ属・アオブダイ属）、ベラ科、フエフキダイ科、ハリセンボン科が多い（表35・表41、第83図）。他にギンガメアジ属？・フエダイ科・クロダイ属・コチ科・モンガラカワハギ科が確認されているが、いずれも少数である。

爬虫類・鳥類

爬虫類ではリクガメ類（おそらくリュウキュウヤマガメ）とウミガメ類、鳥類では種の特定困難な長骨骨幹破片がわずかに出土しているのみである（表39）。

哺乳類

哺乳類ではイノシシが大部分を占める（表36-1～表38）。MNIは顎骨・歯では30（成獣26、幼獣4）、四肢骨では10（左上腕骨遠位端）で、顎骨が圧倒的に多い。後述するように、本遺跡では一部の層準・地区においてイノシシの顎骨が集中的な出土状況を示しているようであり、部位組成における顎骨への偏りも、そうした特異な産状を反映したものと考えられる。イノシシの年齢構成については、若獣から成獣までが混在しており、とくに偏りはみられないようである。性比も、雌雄いずれかに偏ることはない。なお、イノシシの下顎骨には形質的な記載を要する資料が含まれ

ているが、現段階では検討と記録が不十分のため、別の機会にゆずる。

イノシシ以外ではウシ、ジュゴン・イルカ・クジラ類が確認されたが、いずれも少数（MNIはすべて1）である（表39）。ウシはおそらく後世の資料の混入かと思われる。

3. 考察

○骨類の分布状況

骨類の地区別・層別の出土数を表34・第82図に示した。

まず、出土骨の大部分を占めるイノシシの分布状況を見ると、層的には白砂層、IV層c（地区によっては灰白色砂層を含む）および黒褐色砂層、IV層b（地区によっては灰褐色～黄褐色砂層を含む）、平面的には5トレンチの北5m～南20mおよび6トレンチからの出土資料が多く、これらの地区・層準に集中している状況が読みとれる。層別・地区別に詳細をみると、白砂層（IV層c）・黒（～灰）褐色砂層（IV層b）のいずれにおいても6トレンチからの出土数が最も多い。一方5トレンチでは、白砂層（IV層c）では北5m～南5m、黒（～灰）褐色砂層（IV層b）では南10～20mが最多であり、層によって分布状況に差があった可能性も考えられる。ただし、現段階では層序および出土状況の詳細情報を得ていないので、上記の点については、それらの詳細を確認した上で改めて検討する必要がある。

興味深いのは6トレンチにおけるイノシシの部位別の分布状況である。すなわち、上顎骨・歯、下顎骨・歯、その他に分けて分布をみると（第82図）、6トレンチの白～灰白色砂層（IV層c）では上下の顎骨・歯が圧倒的に多く、他の部位（四肢骨など）が少ないのに対して、黒（～黄）褐色砂層IV層bでは逆に顎骨・歯がきわめて少なく、対照的な様相を呈する。5トレンチではそうした偏りは不明瞭だが、南5～10mの白砂層IV層cでは顎骨（とくに下顎）が多く、6トレンチ白砂層（IV層c）と類似の様相を呈する。このことから、白砂層（IV層c）においてはイノシシの顎骨をまとめて廃棄または安置・埋納するような行為が行われていた可能性がある。

イノシシ以外についても、魚骨は明らかに5トレンチの北5m～南5m（とくに白砂層IV層c）にまとまっている。また、3トレンチではNISP総数11点と出土数は少ないが、そのうちの6点をウミガメ類と海獣類（ジュゴン、イルカ・クジラ類）が占めており、他とは様相が異なる。このように、本遺跡の貝塚時代後期層準における骨類の出土状況には、種類・部位などによって層位的・平面的な分布の偏りがみられる点の特徴である。

○脊椎動物遺体群の組成の特徴

沖縄の遺跡における出土骨の様相を概観すると、貝塚時代前期～後期には魚骨が圧倒的多数（ピックアップ資料では最小個体数比8割前後）を占め、イノシシがこれに次ぐパターンが一貫して認められる（樋泉2002）。この点は、本遺跡の北西約500mに位置する伊礼原遺跡「砂丘区」（貝塚時代前期～後期中心）の出土骨（樋泉2007）でも同様である。

いっぽう、伊礼原遺跡「砂丘区」の北西約100mに隣接する伊礼原D遺跡の第4トレンチ東側では、貝塚時代後期主体と考えられるにも関わらず、イノシシが圧倒的に多く魚骨が少ない点で、当該時期の一般の様相とは明らかに異なった傾向が確認されている（樋泉2008）。

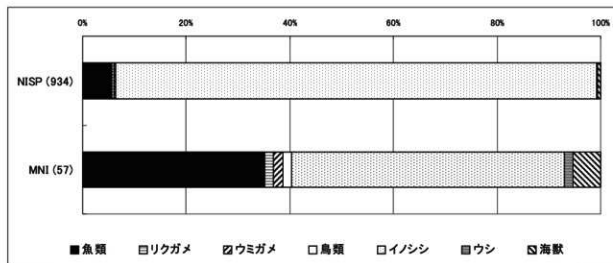
今回の分析結果をこれらと比較すると、イノシシが圧倒的に多く魚骨が少ない点で、明らかに伊礼原D遺跡との類似性が高い。このことから、本遺跡や伊礼原D遺跡第4トレンチ東側は、全体的な生活空間の中で、一部の限られた活動（動物利用に関しては主にイノシシ狩猟）に関わる「場」

として利用されていた可能性を指摘できよう。

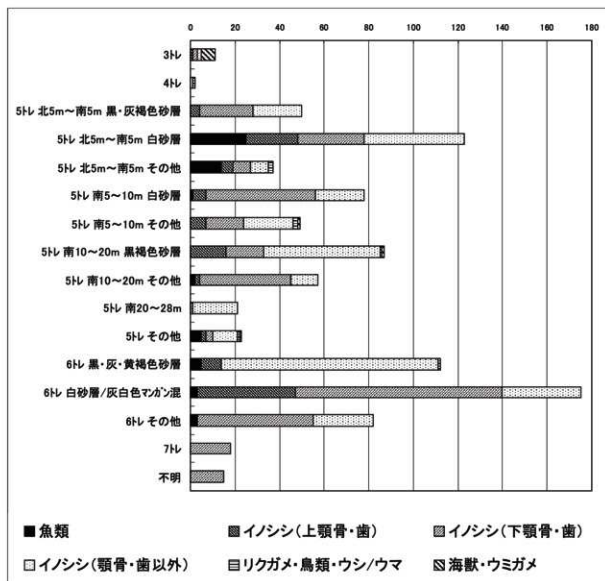
いっぽうで、今回の資料にみられたイノシシの顎への集中傾向は、伊礼原D遺跡では確認されておらず、本遺跡に固有の特徴と考えられる。したがって、本遺跡において行われたイノシシの取り扱いに関しては、単なる解体作業などにとどまらず、祭祀・儀礼などに関わる行為が行われていた可能性も考慮する必要がある。

<引用文献>

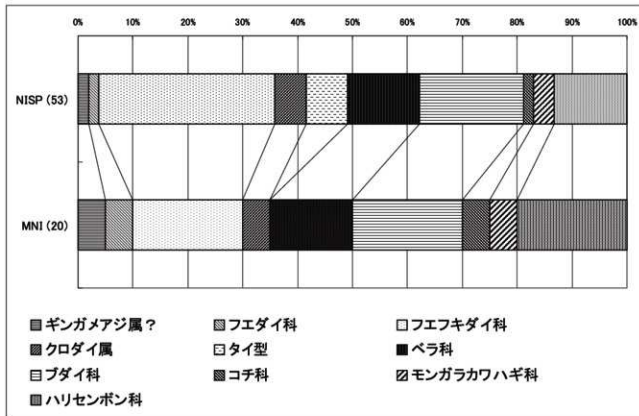
- ・樋泉岳二（2002）「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」、『先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－』（木下尚子編）、熊本大学文学部、pp47-66。
- ・樋泉岳二（2007）「伊礼原遺跡から出土した脊椎動物遺体群」、『伊礼原遺跡－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－』（北谷町教育委員会編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp480-534。
- ・樋泉岳二（2008）「伊礼原D遺跡第3・第4トレンチ出土の脊椎動物遺体群」、『伊礼原D遺跡－キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成10～13年度）－』（北谷町教育委員会編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp184-196。



第81図 小堀原遺跡における脊椎動物遺体全体の組成



第82図 小堀原遺跡における脊椎動物遺体の地区別・層別の出土数分布



第83図 小堀原遺跡における魚類遺体の組成 上：同定標本数 (NISP) 比 下：最小個体数 (MNI) 比

表34 小堀原遺跡における脊椎動物遺体の地区別・層別別の出土数 (NISP)

トレンチ	出土位置	層 準	魚 類	イノシシ			リク ガメ	鳥 類	陸 獣	ウミ ガメ	海 獣
				上顎骨 切歯骨 上顎歯	下顎骨 下顎歯	顎骨・ 歯以外					
3トレンチ	-	-		1	2	2				1	5
4トレンチ	-	-				1			1		
5トレンチ	北5～南5	黒・灰褐色砂層 (IV層 b)	4	24	22						
		白砂層 (IV層 c)	25	23	30	45					
		その他	14	5	8	8	1		1		
	5～10m	白砂層 (IV層 c)	1	6	49	23					
		その他		7	17	22	2				1
		黒褐色砂層 (IV層 b)		16	17	52		1			1
10～20m	その他	2	2	41	12						
20～28m				1	20						
その他			5	2	3	11			1		1
6トレンチ	-	黒・灰・黄褐色砂層 (IV層 b)	5	9	0	97	1				
		白砂層/灰白色マンガン混 (IV層 c)	3	44	94	35					
		その他	3		52	27					
7トレンチ	-	-			18						
不明	-	-			15						
合 計			58	119	371	377	4	1	3	2	7
					867						

表35 小鰓頭遺跡から出土した魚類遺体の同定結果

トレンチ	グリッド	層 準	ギンガノアジノミ	フエフキダイ科		フエフキダイ科		フエフキダイ科		フエフキダイ科		フエフキダイ科		フエフキダイ科		ベラ科	イロブダイ属	アオブダイ属	コモチカマハギ科	ハリセンボン科	種 不 明		
				前上顎骨	前上顎骨	前上顎骨	前上顎骨	前上顎骨	前上顎骨	前上顎骨	前上顎骨	前上顎骨	前上顎骨	前上顎骨	前上顎骨							前上顎骨	前上顎骨
5	北5~南5	黒褐色(バミス)	前上顎骨	左	右																		
		灰・黄褐色(貝クズ)(IV層b)	前上顎骨	左	右	1	1															2	
5	南5~10	白砂層(IV層c)	前上顎骨	左	右	1	1	2	1	1	1	1										2	
		黄褐色砂層(IV層d)	前上顎骨	左	右	1	1	1	1	1	1	1										2	
6	南10~20	赤褐色砂層(粗)	不明																			1	
		白砂(黄泥)(IV層c)	前上顎骨	左	右																	1	
6	北側溝付近	灰白色砂層(IV層c)	前上顎骨	左	右																	1	
		黒褐色粘土混じり(IV層b)	前上顎骨	左	右																	1	
6	ピット溝状遺構	黄褐色(貝クズ)(IV層c)	前上顎骨	左	右																	1	
		不明	不明																			1	
6	-	黒・灰褐色砂層(混目)(IV層b)	前上顎骨	左	右																	2	
		灰白色マンガン(IV層c)	前上顎骨	左	右																	3	
6	-	黄褐色(白砂混)(IV層b)	前上顎骨	左	右																	1	
		粗砂(IV層d)	前上顎骨	左	右																	1	
6	-	不明	不明																			1	
		合計	合計			1	1	4	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計				1	1	4	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

表36-1 小堀原遺跡から出土したイノシシ遺体の同定結果 (歯の詳細は表37・表38を参照)

チレント	出土位置	層準	前頭骨		側頭骨	頭頂骨	後頭骨	頭蓋骨	上顎骨	下顎骨				椎骨			肋骨			肩甲骨			上腕骨			橈骨	
			左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
			前額部		後額部	後頭部	側頭部	上顎部	下顎部		椎骨			肋骨			肩甲骨			上腕骨			橈骨				
			突起		突起	突起	突起	突起	突起		突起			突起			突起			突起			突起				
3トレ	不明	黒褐色細粒砂層質土層 (Ⅲ層 a)																									
4トレ	不明	不明				1																					
5	北5~南5	黒・灰褐色砂層(貝クズ) (IV層 b)																									
		白砂層 (IV層 c)							1	1		1															
		黄・赤褐色砂層 (IV層 c)			1																						
		茶褐色 (粘土) (IV層 d)																									
		不明																									
	南5~10	白砂層 (IV層 c)			1	1																					
		白砂(黄褐色・砂利混) (IV層 c)																									
		黒褐色 (炭灰) (IV層 b)								1		1															
		黒褐色砂層 (IV層 b)																									
	南5~10 試験①	黒褐色 (バミス) (IV層 b)																									
		砂利層 (V層)																									
		黄褐色砂層 (Ⅲ層 c)																									
		白砂層 (IV層 c)																									
6	南5~10 PIT 状遺構	灰褐色砂層(砂利混) (IV層 c)																									
		黄褐色砂層 (IV層 c)																									
	南10~20	白砂層 (IV層 c)																									
		黒褐色砂層 (茶混) (IV層 b)					1	2		1	1																
		茶褐色 (炭灰) (IV層 b)																									
		灰褐色砂(マンガン) (IV層 b)																									
	南10~20 試験②	黄褐色砂層(黒・貝クズ混) (IV層 b)																									
		黄褐色 (下層の赤砂層) (IV層 d)																									
	南20~28	白砂層 (IV層 c)																									
		灰褐色砂利層 (IV層 d)																									
南28	黒褐色砂層 (IV層 b)																										
	灰褐色 (覆乱) (V層)																										
中央	黒褐色砂層 (IV層 b)																										
	黒褐色砂層 (IV層 b)																										
	不明																										
6	Fット	灰白色 (貝クズ) (IV層 c)																									
		黒褐色砂層 (茶混) (IV層 b)																									
		灰白色マンガン	1																								
		黒・灰・黄褐色砂層 (IV層 b)																									
		黄褐色(白砂・貝クズ混) (IV層 c)																									
		灰白色 (貝クズ混) (IV層 c)																									
		黒褐色砂層(粘土混) (IV層 b)																									
		白砂層 (IV層 c)																									
白砂砂利層 (IV層 d)																											
灰白色マンガン (IV層 c)																											
合計		2	1	1	2	5	1	2	1	1	2	1	1	2	2	1	1	2	2	1	1	1	2	2	3		

(次ページへつづく)

表39 小堀原遺跡から出土した脊椎動物遺体
(魚類・イノシシ以外)の同定結果

トレンチ	グリッド	層序	種類	部位	状態	左右	数	備考	
3 トレンチ	不明	黒褐色細粒砂質土層(Ⅲ層a)	ウミガメ類?	甲板?	☆	?	1		
			クジラ類	椎骨		-	1		
			ジュゴン	椎骨	☆	-	1		
			ジュゴン	椎骨		-	1		
			ジュゴン	椎骨		-	1		
			イルカノ 小型クジラ	椎骨	棘突起	-	1		
4H	⑥	不明	ウシ	中足骨		?	1		
5 トレンチ	北5~南5	灰白色砂層 (IV層c)	リクガメ類	上腹板			1		
	北5~南5 貝層⑤下部	灰白色砂層 (IV層c)	ウシ/ウマ	肋骨	s	?	1		
	南5~10 貝層④下部	灰褐色(貝クズ混) (IV層c)	ジュゴン	肋骨	☆	?	1		
	北西⑤~⑩ 貝層①	黒褐色(バミス)~ 淡黒褐色(IV層b)	リクガメ類	棘甲板		?	1		
	南5~10	灰色砂層(IV層b)	リクガメ類	中腹板		L	1		
	南10~20	黒褐色砂層 (IV層b)	ウミガメ類	背/腹甲板	☆	?	1	焼	
	南10~20東	黒褐色砂層 (IV層b)	鳥類・同定 不可	四肢骨	s	?	1	焼	
	北側	不明		ウシ/ウマ	四肢骨	☆	?	1	
				ジュゴン/ クジラ	肋骨	☆	?	1	
	6H	不明	黒褐色砂層(茶色 混じり)(IV層b)	リクガメ類	棘甲板		?	1	

表40 小堀原遺跡における焼骨片の
地区別・層位別重量分布

トレンチ	グリッド	層序	重量(g)	
5 トレンチ	北5~ 南5	灰白色砂(IV層c)	41.8	
		黒褐色砂層(茶混) (IV層b)	155.0	
	南5~10	灰褐色(貝クズ) (IV層c)	獣骨集中 209.8	
		不明(IV層c)	獣骨集中 14.0	
	南5~10	淡黒褐色(IV層b)	(PT)状 5.8	
		黒褐色(茶混) (IV層b)	1.5	
	南10~20	黄褐色砂層(IV層c)	PT状遺構 10.0	
		黒褐色砂層(IV層b)	163.7	
	6 トレンチ	南10~20	貝クズ(茶混) (IV層b)	1.4
			黄褐色粘土層 (IV層d)	3.5
南20~28		黒褐色砂層(IV層b)	18.8	
		南28	黒褐色砂層(IV層b)	41.9
東		黒褐色砂層(IV層b)	30.1	
		茶混じり炭頁 (IV層b)	44.0	
西		黒褐色(茶混) (IV層b)	44.6	
		黄褐色砂層(IV層c)	12.4	
南西		黒褐色砂層(茶混) (IV層b)	72.0	
		南東	黒褐色砂層(炭混) (IV層b)	31.1
中央	灰白色(貝クズ混) (IV層c)	7.9		
	北西	黒褐色砂層貝層 (IV層b)	6.5	
不明	黒褐色砂層(IV層b)	232.0		
	黒褐色砂層(粘土混) (IV層b)	16.2		
合計			1163.9	

表41 小堀原遺跡における脊椎動物遺体の組成(魚類の歯はNISPから除外した)

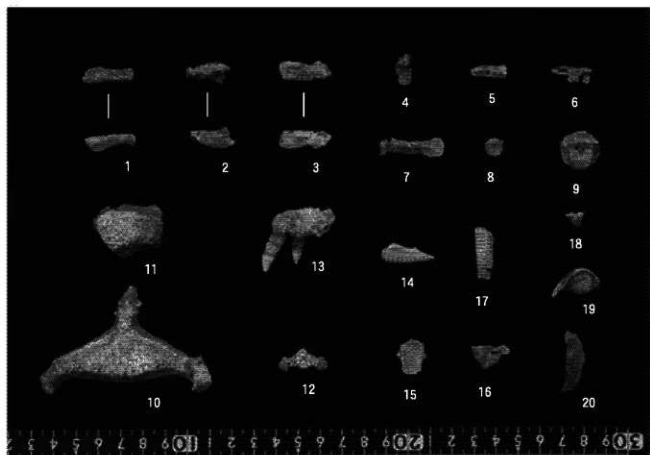
分類群		同定標本数(NISP)	最小個体数(MNI)
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES		
ギンガメアジ属?	<i>Caranx</i>	1	1
フエダイ科	Lutjanidae	1	1
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	<i>Lethrinus cf. L. nebulosus</i>	6	4
フエフキダイ属	<i>Lethrinus</i>	3	-
フエフキダイ科	Lethrinidae	8	-
クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i>	3	1
タイ型	Lethrinidae / Sparidae?	4	-
ペラ科	Labridae	7	3
イロブダイ属	<i>Balmetopon</i>	1	1
アオブダイ属	<i>Scarus</i>	8	3
ブダイ科	Scaridae	1	-
コチ科	Platycephalidae	1	1
モンガラカワハギ科	Balistidae	2	1
ハリセンボン科	Diodontidae	7	4
小計		53	20
爬虫綱	RRPTILIA		
ウミガメ類	Cheloniidae	2	1
リクガメ類(リュウキュウヤマガメ?)	<i>Geoemyda spengleri japonica?</i>	4	1
小計		6	2
鳥綱	AVES		
目不明	Order indet.	1	1
哺乳綱	MAMMALIA		
イノシシ(またはブタ)	<i>Sus serofa</i>	867	30
ウシ	<i>Bos taurus</i>	1	1
ジュゴン	<i>Dugong dugon</i>	4	1
イルカ類	Cetacea (small)	1	1
クジラ類	Cetacea (large)	1	1
小計		874	34
総計		934	57



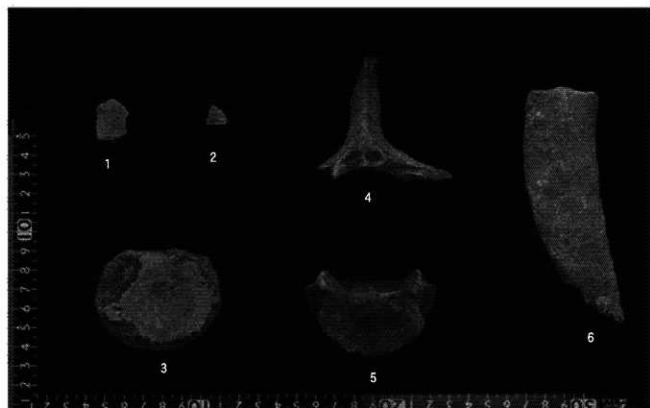
図版54 イノシシ骨 1 前頭骨(R) 2 上顎骨(R+L) 3 下顎骨(R+L) 4・5・6 下顎骨(L)



図版55 イノシシ骨 1・2 肩甲骨(L) 3・4・5 上腕骨(R) 6 上腕骨(L) 7 尺骨(L) 8 橈骨(R) 9 橈骨(L)
10 大腿骨(L) 11 頸骨(L) 12・13 距骨(L) 14 踵骨(R) 15 中節骨 16 基節骨 17 寛骨(R)



図版56 魚骨 1フエダイ(上顎骨) 2クロダイ(主上顎骨) 3クロダイ(上顎骨) 4フエフキダイ属(方骨) 5フエフキダイ属(上顎骨)
6フエフキダイ属(口蓋骨) 7フエフキダイ科(主上顎骨) 8.9フエフキダイ科(第一椎骨) 10ペラ科(下咽頭骨)
11ペラ科(上咽頭骨) 12ペラ科(下咽頭骨) 13ペラ科(上顎骨) 14アオブダイ属(上咽頭骨) 15アオブダイ属(下咽頭骨)
16アオブダイ属(歯骨) 17イロブダイ属(上咽頭骨) 18モンガラカワハギ科(背鰭棘) 19ハリセンボン(歯骨) 20コチ(歯骨)



図版57 カメ・クジラ・ジュゴン 1リクガメ(上腹板) 2リクガメ(縁甲板) 3クジラ(椎骨)
4・5 ジュゴン(椎骨) 6 ジュゴン(肋骨)



図版58 ウシまたはウマ (1 ウシまたはウマ肋骨 2 ウシ中足骨)



図版59 貝類 (巻貝1)

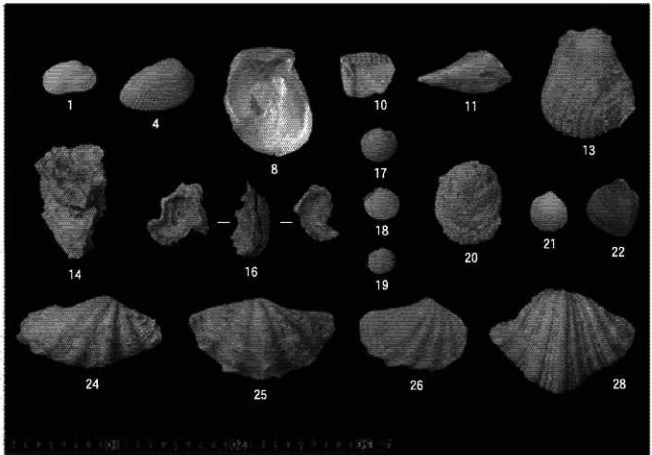


図版60 貝類 (巻貝2)

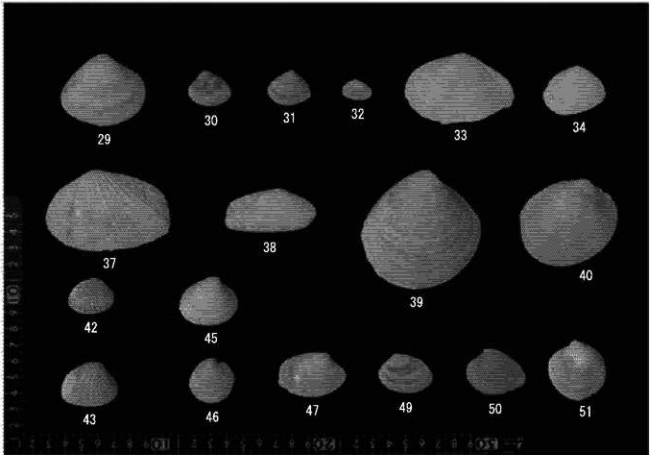


図版61 貝類 (巻貝3)

(R-陸産貝 T-タカラ貝を示す)



図版62 貝類 (二枚貝1)



図版63 貝類 (二枚貝2)

第三節 小堀原遺跡から出土した貝類遺体

黒住 耐二（千葉県立中央博物館）

小堀原（くむいばる）遺跡は、沖縄島中部西海岸の北谷町に位置する貝塚時代後期（弥生時代併行期）の遺跡である。隣接地には、縄文時代前期（貝塚時代早期）の曾畑式土器が大量に出土し、低湿地部で堅果類や籠・櫛等の木製品も認められた貴重な遺跡である伊礼原遺跡や貝塚時代期から近代までの伊礼原B、D、E遺跡、貝塚時代中期から近世の平安山原B遺跡、グスク時代を中心とした時期の後兼久原遺跡等がある。本遺跡は、後兼久原遺跡の北西に位置している。今回、報告者は本遺跡の貝類遺体を検討する機会を与えていただいたので、ここに報告したい。

報告に先立ち、遺跡および遺物の検討の機会を与えて頂いた北谷町教育委員会の方々、多くの貝類遺体の同定や集計でお世話になった島袋春美氏、発掘から整理・集計まで行って頂いた皆様に感謝したい。

材料および方法

小堀原遺跡の貝類遺体は、これまでの調査で発掘中に取り上げられた（ピックアップ法；現場資料）ものであり、土壌サンプルの水洗選別等で得られたものは含まれていない。得られた貝類遺体は、北谷町教育委員会で、種の同定・出土部位とその状態（死殻等）・集計が行われ、報告者は大部分の標本の同定を行った。これらの詳細な集計は、表49～52に示されている。

本遺跡の優占種であった二枚貝類のアラスジケマンでは、主に5トレンチ貝層3から得られた左殻の殻長をmm単位で計測した。

本遺跡では、主体となるIVa層のおよそ大当原式土器期の黒色砂層系とIVb層の大当原式期に先行する土器形式期の灰白色層／白砂層系の包含層（IV層c）が区別されているので、後述する記述の中では、前者を黒色層、後者を白色層と表記しているところもある。

結果および考察

今回確認された貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型を表1に示した。この表には、出土層位を区分できなかった種等も含めてあるが、僅かにグスク時代の遺体が含まれている可能性はあるものの、それ以降のものは含まれていない。その結果、少なくとも海産腹足類23科66種、淡水産腹足類3科5種、陸産腹足類3科7種、海産二枚貝類21科51種の合計、116種が確認された。この種数は、隣接し、一部土壌サンプルの微小種を含んでいる伊礼原遺跡（黒住、2007）や伊礼原D遺跡（黒住、2008a）と比較して、少ないものであった。

この中には、伊礼原遺跡でも指摘した現在の沖縄島では激減している淡水産のベニオカイシマキとヨシカワニナ（黒住、2007）が含まれていた。一方、海産貝類では、現在も沖縄島周辺に生息している種のみであり、分布域を大きく変化させたような種は認められなかった。

1. 種組成および生息場所類型組成

前述した2つの層位を区別して、最少個体数を表44に示した。包含層の識別のできなかった種等は除いた。特徴的なこととして、イノー内・内湾とも、37-38種とかなり多様であったが、他の

類型の種数は10種程度と少なかったことが挙げられる。

これらのうち、各層位で全体の1%を超えるものを優占種とし、生息場所類型ごとの割合を示したのが表3である。本遺跡では河口干潟-マングローブ域のアラスジケマンが極めて多く、黒色層で約70%、白色層で約55%と大半を占めていた。次いで、外洋-サンゴ礁域の潮間帯に生息するイソハマグリが両層とも全体の約10%強であり、イノー内のマガキガイが5%前後、シャコガイ類や内湾性の二枚貝類のスダレハマグリ・カワラガイ等の他の優占種はいずれも3%未満であった。ただ、白色層では、陸産貝類の割合が3%以上と高かった。

この陸産貝類の割合が白色層で約10%と比較的高率だったので、陸貝を除いた海産貝類の割合を表42の()内に示した。最優占種アラスジケマンの割合は、白色層で約65%となるが、黒色層より少なかった。逆に、イノー内の割合は、白色層で黒色層の2倍程度に増加していた。

本遺跡の両層位の生息場所類型組成(図1)を周辺の他遺跡と比較してみると、伊礼原遺跡では、弥生時代併行期に調査個体数は少ないながら、イソハマグリを優占するサンゴ礁の貝類がほとんどを占めていることが(黒住, 2007)、伊礼原D遺跡の貝塚時代後期では、マガキガイが半数以上を占め、イノー内の種が全体の80%を超えていることが(黒住, 2008a)、平安山原B遺跡ではイソハマグリやマガキガイの優占することが(島袋, 2009)、それぞれ報告されている。グスク時代の後兼久原遺跡では、イノーのマガキガイが優占し、カニモリ類等も多い組成が報告されており(黒住, 2003; 片桐, 2004)、小堀原遺跡の組成とは大きく異なっている。

一般的に、貝塚時代後期遺跡の貝類遺体は、サンゴ礁の中・大形貝類が主体となることが以前から知られている(例えば沖縄考古学会, 1978)。そして、時にはリュウキュウヒバリやミドリアオリ等の潮間帯岩礁性の二枚貝類を「ダシ的に」多用すると考えられる遺跡も存在する(黒住, 2002)。本遺跡では、この「ダシ的」利用の2種はほとんど得られず、イソハマグリがその役割を担っていたのではないかと想定される。

このような外洋-サンゴ礁域の貝類遺体主体の遺跡がほとんどである貝塚後期において、小堀原遺跡の河口干潟-マングローブ域のアラスジケマンが優占する遺跡は特異的とも思われる。このようなアラスジケマンの極めて優占し、およそ同時期の遺跡には、金武湾の宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚が知られている(比嘉, 1980)。

貝塚時代の遺跡出土海産貝類遺体は、当然想定されるように、基本的に遺跡前面の海域から採集されたものでほとんどを占めている。今回の小堀原遺跡でアラスジケマンが優占したことから、遺跡周辺に小河川が流入しており、その周辺のみで本種が採集されたと考えられる。前述してきたように、隣接した遺跡では、サンゴ礁の貝類が優占しており、本遺跡集団の貝類採集空間はかなり狭かった可能性が高い。

本遺跡でアラスジケマンの優占することを地震等による地形変化と考えたこともあったが(黒住, 2008b)、その考えは修正しておきたい。

また、下部の白色層でイノー内のものの割合が高く(表42)、黒色層にかけて、僅かではあるが、アラスジケマンの生息できる河口域が拡大した可能性も考えられよう。同様に、下部の白色層で、陸産貝類(特にパンダナマイマイ:表42)の出土量が多かったことは、白色層の方が開けた環境(内湾の砂浜的な環境?)であったと想定される。

2. アラスジケマンのサイズ組成

本遺跡の優占種であったアラスジケマンに関して、5トレンチの左殻完形殻の殻長を計測することによって、その特徴を検討した。第85図には、多数個体が得られた黒色砂層の貝層③の結果を示した(N=1230)。20-48mmの個体が得られ、36-38mmにピークを有する単峰型のおよそ正規分布を示した。個体数は少なかったものの、黒色砂層貝層②と灰白色層/白砂層の両者とも、第85図の範囲内にあった。

アラスジケマンの殻サイズが報告されている沖縄の遺跡には、貝塚時代前・中・後期の今帰仁村/渡喜仁浜原貝塚(池原, 1977)、貝塚早期の石川市/古我地原貝塚(花城, 1987)、グスク時代の今帰仁城跡(黒住, 1991)、貝塚後期の現うるま市/平敷屋トウバル遺跡(島袋, 1996)、貝塚早期から近世の宜野湾市と北谷町/新城下原第二遺跡(島袋, 2006等)で報告されている。

ただ、渡喜仁浜原貝塚では、他と異なり、殻高が示されているので、千葉県立中央博物館に収蔵されている貝塚の資料を含む沖縄産アラスジケマンの殻高-殻長の相関関係を求め、この遺跡の殻長組成を推定した(第86図)。殻高は、殻長=1.2974×殻高-3.2997の回帰式で求められた。

ある程度の個体数が得られているデータを単純に、時間軸で、そのサイズをみると、貝塚早期では30-40mmの個体が全体の3/4を占め(古我地原貝塚:花城, 1987)、前期では28-40mmのものが多く(渡喜仁浜原貝塚:池原, 1977)、後期になると35-40mmのものが大部分を占める本遺跡(第85図)や35mm前後のものが大半の新城下原第二遺跡(島袋, 2006)、29mmと33mmにピークを有する平敷屋トウバル遺跡(島袋, 1996)、26-36mmが中心であった渡喜仁浜原貝塚(池原, 1977)となり、グスク時代では20-32mmの小形個体がほとんどで、ピークの高さが低い今帰仁城跡の例(黒住, 1991)となっている。なお、勝連城跡でも詳細なデータは示されていないが、24mmのものが多く、小型化することが報告されている(島袋, 1996)。グスク本体では小形のものが得られており、食用に小形個体を選択している可能性や高い捕獲圧によるサイズの小型化(黒住, 1991も参照)が想定される。

このように他遺跡と比較すると、小堀原遺跡の本種はかなり大きな個体を選択的に採集していたことがわかる。ただ、今回のものはピックアップ資料であるので、幼貝の見落とされている可能性も十分想定されるが、より小形のイソハマグリもかなり多く得られているので(表44)、幼貝の少なかつたことは明らかであろう。採集時のサイズ選択がかなり意識されていたことは確実であり、アラスジケマンの資源管理(幼貝の保護)が出来ていたことを示していると考えられる。

この大形アラスジケマンの示す資源管理は、小堀原遺跡が周辺の他遺跡との関係の中で、「独立・継続」した遺跡/集落であったことを示していると考えられる。つまり、他遺跡からの「出先場所」であったならば、資源管理を行う必要性が低い(=資源を枯渇させても良い)と想定できよう。この点に関しては、今回全く考慮しなかった他の遺物から、詳細な考古年代や隣接した遺跡間の関係等の検討を経た上で、ある程度、明らかにすることができると思われる。

3. 「貝交易」に用いられる種の出土

今回出土した種の中で注目されるのは、礁斜面に生息するゴホウラやアツソデガイの「貝交易」に利用された種が得られたことであろう。前述のように、小堀原遺跡では干瀬や礁斜面に生息する貝類が極めて少なかったので(表42、第84図)、同様な傾向を示す伊礼原D遺跡でも想定したように(黒住, 2008)、これらの種は小堀原遺跡の集団によって採集されたものではなく、他所から持

ち込まれたものと考えられる。また、大形破片等も今回の同定対象となっているにも関わらず、ほぼ全く得られていないことから、当然、本遺跡で交易品の粗加工等が行われていたとは考えられない。つまり、本遺跡では、ゴホウラ・イモガイ類の採集・集積・粗加工等が行われていなかったと想定される。

上記は単純なことであるが、貝交易に関わっていると想定されるこの時期の遺跡を検討した新里(2001)の類型によれば、小堀原遺跡は「大型巻貝を採取する労働力をもつ集団」の「小集落」に相当する可能性が高いように思われる。このように想定されるものの、この遺跡ではゴホウラ等の生息する礁斜面での貝類採集はほとんど認められなかった(表44、第84図)。貝交易の行われていた貝塚時代後期の遺跡のほとんどは、ゴホウラやアンボンクロザメ類の得られる沖縄諸島西岸の風下側でサンゴ礁の発達した地域に認められる傾向にあり、東海岸の内湾側では稀である(黒住、2002; 新里、2001の図5も参照)。そして、前述のように、この時期の出土貝類遺体は遺跡前面の外洋-サンゴ礁域の種で占められている。新里(2001)の示したネットワークおよび拠点集落等の類型化は理解できるものであり、大半の拠点集落は当然西岸に存在することになる。

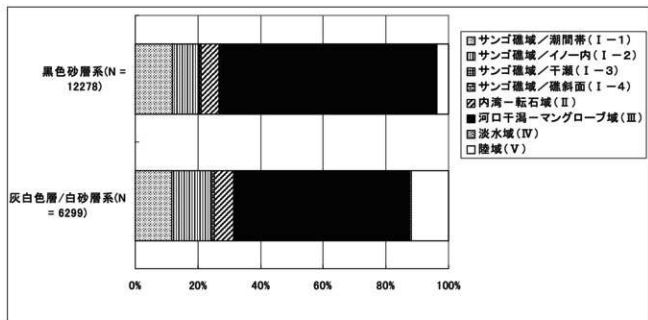
そのような中で、サンゴ礁の発達しない内湾に存在する宇堅貝塚(金武、1980等)の地理的位置は特異的だと考えられる。宇堅貝塚では、現在のサンゴ礁地形未発達というだけではなく、前述したアラスジケマンの優占する貝類遺体組成や貝交易に利用されるゴホウラ・アツソデ・アンボンクロザメ類が集積以外ほとんど出土しておらず、干瀬・礁斜面の種も極めて僅かであった(比嘉、1980)という点である。同じ東海岸の勝連半島先端に位置する平敷屋トバル遺跡では、サンゴ礁地形や外洋-サンゴ礁域の貝類が優占すること(島袋、1996)で、宇堅貝塚と対照的であり、その在り方は西海岸の遺跡と類似する。宇堅貝塚が貝交易の拠点集落であるということは確実であり、交易用の貝類は与勝諸島や浜比嘉島・津堅島等の島嶼から宇堅貝塚に持ち込まれたと考えられる。一度、形成された拠点集落がある期間継続することも当然理解できよう。しかし、なぜ“サンゴ礁域ではない内湾域を、拠点集落として選択したか”が報告者には理解できないのである。選択された要因が、最終的には“良港を形成しやすい地形”に帰結するのかもしれないが、多方面からの検討により明らかにされることを望みたい。

このように考えてみると、同様な時期に宇堅貝塚と同じアラスジケマンの優占する本遺跡の立地・遺物内容等を詳細に隣接遺跡と比較することにより、内湾域選択の問題解決に迫れるのではないかと考えられる。このような視点も本遺跡を理解する上で、重要になってくると思われる。

<引用文献>

- 花城潤子. 1987. 貝類遺存体. In 島袋洋(編). 古我地原貝塚. 沖縄県文化財調査報告書, (84): 327-345, pls.178-180. 沖縄県教育委員会.
- 比嘉春美. 1980. 自然遺物. In 金武正紀(編). 宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚発掘調査報告, pp.17-23, 60-68. 具志川市教育委員会.
- 池原喜美江. 1977. 貝類遺存体. In 渡喜仁浜原貝塚調査団(編). 渡喜仁浜原貝塚調査報告書 [1], 今帰仁村文化財調査報告書, (1), pp.46-63, pls.15-17. 今帰仁村教育委員会.
- 片桐千亜紀(編). 2004. 後兼久原遺跡. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (22): 1-198, 6pls.
- 金武正紀(編). 1980. 宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚発掘調査報告, 94pp., 38pls. 具志川市教育委員会, 沖縄.

- 黒住耐二. 1991. 貝類遺存体. In 金武正紀・宮里末廣・松田朝雄 (編), 今帰仁城跡発掘調査報告書, II, 今帰仁村文化財調査報告書, (14): 340-351. 今帰仁村教育委員会.
- 黒住耐二. 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活. In 木下尚子 (編), 先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp.67-86. 熊本大学文学部.
- 黒住耐二. 2003. 貝類遺体. In 山城安生・島袋春美 (編), 後兼久原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (21): 264-268. 北谷町教育委員会.
- 黒住耐二. 2007. 貝類遺体からみた伊礼原遺跡. In 中村 愿 (編), 伊礼原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (26): 1-573. 北谷町教育委員会.
- 黒住耐二. 2008 a. 伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体. In 東門研治・島袋春美 (編), 伊礼原D遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (28): 168-200. 北谷町教育委員会.
- 黒住耐二. 2008 b. 「琉球列島の環境変化を貝類から探る」『考古学ジャーナル』577 pp.15-20. 沖縄考古学会 (編). 1978. 石器時代の沖縄. 140 pp. 新星図書, 沖縄.
- 島袋春美. 1996. 軟体動物遺体. In 島袋 洋 (編), 平敷屋トウバル遺跡, 沖縄県文化財調査報告書, (125): 161-167, 256-267. 沖縄県教育委員会.
- 島袋春美. 2006. 貝類遺体. In 片桐千亜紀 (編), 新城下原第二遺跡, 沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書, (35): 215-260.
- 島袋春美. 2009. 貝類遺体. In 東門研治・島袋春美 (編), 平安山原B遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (29): 104-114. 北谷町教育委員会.
- 新里貴之. 2001. 物流ネットワークの側面—南西諸島の弥生系遺物を素材として—. 南島考古, (20): 49-66.

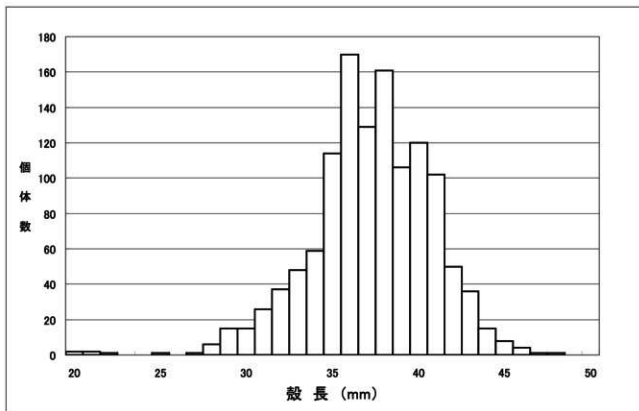


第84図 小堀原遺跡における貝類遺体の生息場所類型組成

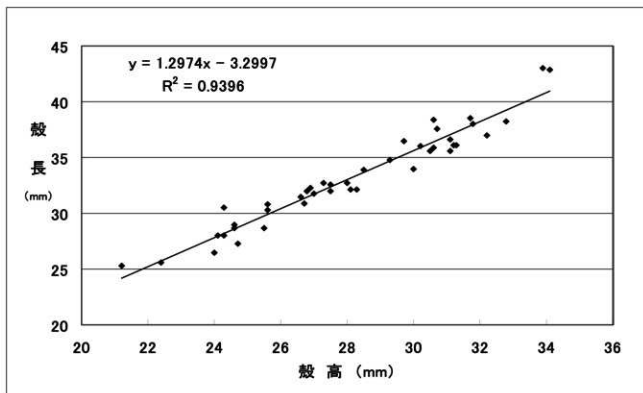
表42 生息場所類型および優占種の割合。

	黒色砂層系 (IV層 b)		灰白色層/白砂層系 (IV層 c)	
外洋-サンゴ礁域/潮間帯 (I-1)	11.91 (12.40)		11.59 (13.24)	
イソハマグリ		10.90 (11.35)		10.93 (12.48)
外洋-サンゴ礁域/イノー内 (I-2)	8.19 (8.53)		12.88 (14.71)	
マガキガイ		4.31 (4.49)		6.88 (7.85)
ヒメジャコ		1.57 (1.64)		2.21 (2.52)
シラナミ類		0.60 (0.63)		1.60 (1.83)
外洋-サンゴ礁域/干瀬 (I-3)	0.44 (0.46)		0.11 (0.13)	
外洋-サンゴ礁域/礁斜面 (I-4)	0.52 (0.54)		0.65 (0.74)	
内湾-転石域 (II)	5.61 (5.84)		6.24 (7.13)	
スダレハマグリ		1.59 (1.66)		1.22 (1.40)
カワラガイ		1.51 (1.57)		1.57 (1.80)
河口干潟-マングローブ域 (III)	69.34 (72.23)		56.08 (64.05)	
アラスジケマンガイ		68.39 (71.23)		55.43 (63.30)
淡水域 (IV)	0.39 (-)		0.51 (-)	
陸域 (V)	3.60 (-)		11.93 (-)	
バンダナマイマイ		1.54 (-)		7.16 (-)
オキナワヤマトニシ		1.23 (-)		3.57 (-)

() 内は海産貝類のみを対象にした場合の%。



第85図 小掘原遺跡のアラスジケマン殻長組成



第86図 沖縄産アラスジケマンの殻高-殻長相関関係

表44 小堀原遺跡のピックアップ法で得られた貝類遺体の組成。

	黒色砂層系	灰白色層 /白砂層系		黒色砂層系	灰白色層 /白砂層系
外洋-サンゴ礁域/潮間帯 (I-1)	1	0	テングガイ	1	1
コシダカアマガイ	3	3	サラサミナシ	2	0
アマオブネ	0	2	カバミナシ	1	0
オオマルアマオブネ	2	0	クロチョウガイ	24	27
ハナピラダカラ	0	3	クロタイラギ	1	0
マダライモ	4	0	シロザル	1	0
サヤガタイモ	6	7	内湾-転石域 (II)		
エガイ	0	1	カンギク	13	24
リュウキュウヒバリ	23	0	オキナワイシダタミ	4	1
ミドリアオリ	1337	688	マルアマオブネ	1	0
イソハマグリ	86	26	リュウキュウミナナ	2	0
リュウキュウナミノコ			ネジマガキ	9	3
外洋-サンゴ礁域/イノ内 (I-2)	1	0	ホウシュノタマ	2	5
オオウラウズ	8	1	シマベッコウハイ	1	0
ニシキウズ	14	12	ミノムシガイ	0	1
オノツノガイ	529	433	クロミナシ	1	2
マガキガイ	1	0	カリガネエガイ	1	0
イボソデガイ	52	47	クロミノエガイ	2	0
クモガイ	1	0	リュウキュウサルボオ	34	20
スイジガイ	4	1	ニセマガキ	1	0
ヤクシマダカラ	2	1	アコヤガイ?	1	2
ホシダカラガイ	1	0	シュモクアオリ	1	0
トミガイ	1	1	ノコギリガキ	1	0
リスガイ	0	1	カブラツキガイ	12	15
ウズラガイ	15	8	ウラツキガイ	1	1
ガンゼキホラ	2	1	リュウキュウザルガイ	22	12
コオニコブシ	4	6	カワラガイ	185	99
イトマキボラ	1	0	リュウキュウバカガイ	5	1
ナガイトマキボラ	7	0	タママキ	18	16
キヌカツギイモ	7	0	ニッコウガイ	0	1
イボシマイモ	1	0	リュウキュウシラトリ	48	43
ヤキイモ	2	0	サメザラモドキ	0	1
アカシマミナシ	0	1	リュウキュウマスオ	14	13
アンボイナ	0	1	マスオガイ	29	24
ゴマフイモ	0	1	ヌノメガイ	10	1
コモシイモ	2	0	ホソスジイナミガイ	3	0
クロザメモドキ	22	5	イオウハマグリ	3	0
アンボンクロザメ	3	5	ユウカダハマグリ	48	27
クロフモドキ	0	1	オイノカガミ	13	5
ナツメガイ	1	0	ヒメアサリ	1	0
カイシアオリ	0	1	リュウキュウアサリ	1	0
ミノガイ	6	14	ヒメリュウキュウアサリ	1	1
メンガイ類	1	1	スダレハマグリ	195	77
シャコガキ?	1	0	ハマグリ類	8	0
ヒメツキガイ	74	101	河口干潟-マングローブ域 (III)		
シラナミ類	193	139	シレナシジミ	80	23
ヒメジャコ	31	18	キバウミナナ	27	18
ヒレジャコ	16	11	マドモチウミナナ	3	0
シャゴウ	1	1	カニノテムシロ	1	0
サメザラガイ			アラスジケマンガイ	8392	3490
外洋-サンゴ礁域/干瀬 (I-3)	22	2	オキシジミ	6	0
チョウセンサザエ	2	0	淡水域 (IV)		
オキニシ	2	0	イガカノコ	1	0
ツノレイシ	3	0	ベニオカイシマキ	1	0
アカイガレイシ	1	0	トウガタカワナ	1	11
オニコブシ	20	4	ヨシカワナ	3	6
ヤナギシボリイモ	0	1	カワナナ	43	15
ハナマルユキ	4	0	陸域 (V)		
リュウキュウアオイ			オキナワヤマタニシ	151	225
外洋-サンゴ礁域/礁斜面 (I-4)	1	1	シュリマイマイ	34	29
ヤコウガイ	3	2	カツレンマイマイ	62	44
ギンタカハマ	30	9	オキナワヤマタカマイマイ	2	1
サラサバテイラ	1	0	パンダナマイマイ	189	451
アツソデガイ	1	1	オキナワウスカワマイマイ	3	1
ホラガイ			イトマンマイマイ	1	0
合計				12278	6299

第四節 小堀原遺跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北谷町に所在する小堀原遺跡は、沖縄本島中部の東シナ海に臨む海岸低地に位置する。周辺の詳細な地形分類については、松田（2007）が隣接する伊礼原遺跡とその周辺の地形分類図を呈示している。小堀原遺跡の位置はこの分類図の範囲からははずれているが、その延長を考えると、小堀原遺跡の位置は、海岸低地の東部に分布する海岸砂丘～後背湿地に相当することが推定される。

発掘調査では、砂丘を形成していたと考えられる砂層の分布域とその間隙を縫うような旧河道、さらにその旧河道を埋積する泥炭層などが確認されている。砂層からは、それぞれ沖縄後期前半期および同後半期（岸本ほか、2000）とされる大当原土器やくびれ平底土器が出土している。本報告では、旧河道を埋積する泥炭層から出土した炭化材や材片の放射性炭素年代測定を行い、遺跡の立地する地形の変遷に関わる年代資料を作成する。

1. 試料

試料は、調査区内で確認あるいは推定された旧河道を埋積する泥炭層より採取された材片3点である。試料名は、No.5、試料番号1、試料番号2とされた。No.5は、調査区中央付近の6トレンチで確認された旧河道斜面上に堆積する泥炭層（黒色砂層）より採取された炭化材であり、顕微鏡による組織観察からヤマグワに同定されている。試料番号1は、調査区北部の3トレンチで確認された旧河道を埋積する泥炭層（黒褐色細粒砂質層）より採取された材片であり、組織観察からイチジク属オオイチヂク節に同定された。試料番号2は、調査区中央付近よりやや東側の5トレンチで確認された旧河道斜面上に堆積する泥炭層（腐植土層）から採取された材片であり、組織観察からクスノキ科に同定された。

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴Cの半減期5,730 ± 40年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すことが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。較正には北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。また、暦年較正は測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表45に示す。No.5は1840 ± 30BP、試料番号1は1,820 ± 30BP、試料番号2は1,960 ± 30BPを示した。表46には暦年較正結果を示す。測定誤差を σ として計算させた結果、No.5の暦年はcalAD130-216、試料番号1の暦年代はcalAD138-229、試料番号2の暦年代はcalAD5-71であった。これらの年代は、現在の弥生時代の年代観 (例えば藤尾(2008) など) からみれば、No.5と試料番号1は弥生時代後期後半、試料番号2は弥生時代後期前半の範囲にそれぞれ相当すると言える。

したがって、調査区で確認された旧河道の形成は弥生時代後期より古い可能性があり、弥生時代後期初頭にはすでに河道の埋積が進行して湿地化し、泥炭層が形成され、その後およそ100年以上も旧河道を埋積する泥炭の形成は継続していたことが推定される。

表45 放射性炭素年代測定結果

試料名	採取位置	採取層位	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
No.5	6トレンチ	黒褐色 砂層	炭化材 (ヤマグワ)	1,840 ± 30	-28.47 ± 0.69	1,900 ± 30	IAAA-72258
試料番号1	3トレンチ	黒褐色細 粒砂質層	木片 (イチジク風オオイタビ節)	1,820 ± 30	-28.76 ± 0.57	1,890 ± 30	IAAA-80817
試料番号2	5トレンチ	腐植土層	植物片 (クスノキ科)	1,960 ± 30	-30.72 ± 0.72	2,060 ± 30	IAAA-80818

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

表46 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No	
		σ	cal AD 130	-	cal AD 216	cal BP 1,820	-			1,734
No.5	1,844±32	2σ	cal AD 85	-	cal AD 239	cal BP 1,865	-	1,711	1.000	IAAA-72258
		σ	cal AD 138	-	cal AD 160	cal BP 1,812	-	1,790	0.282	
試料番号1	1,824±28	σ	cal AD 165	-	cal AD 198	cal BP 1,785	-	1,752	0.417	IAAA-80817
			cal AD 206	-	cal AD 229	cal BP 1,744	-	1,721	0.301	
			cal AD 91	-	cal AD 100	cal BP 1,859	-	1,850	0.012	
		2σ	cal AD 124	-	cal AD 254	cal BP 1,826	-	1,696	0.982	
			cal AD 307	-	cal AD 312	cal BP 1,643	-	1,638	0.006	
			cal AD 5	-	cal AD 71	cal BP 1,945	-	1,879	1.000	
試料番号2	1,962±30	σ	cal BC 40	-	cal AD 86	cal BP 1,990	-	1,864	0.004	IAAA-80818
		2σ	cal AD 106	-	cal AD 119	cal BP 1,844	-	1,831	0.996	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

松田(2007)は、隣接する伊礼原遺跡周辺において、縄文時代前期から現代に至るまでの地形変遷を10段階ほどに分けて述べている。また、年代の基準としては、発掘調査により確認された土器の型式が用いられている。縄文時代後期から晩期および弥生時代相当期には、前浜・後浜の前進が繰り返され、砂丘砂の堆積も進行したとされているが、弥生時代後期のある時期に、後浜背後までの地形が暴浪により侵食されたことが述べられている。その後、弥生時代からグスク時代にかけては、再び前浜・後浜の地形が回復し、汀線が沖側に移動、陸域が広がったとされている。

今回の試料が採取された泥炭層の形成時期は、上述した暴浪による侵食とその後の陸域の拡大時期にほぼ相当すると考えられる。旧河道の形成やその埋積が、これらの地形変化と何らかの関係を持って生じた可能性はあると考えられるが、現時点ではそれを示唆する具体的な資料は得られていない。今後の周辺地区における調査と分析例の蓄積により、今回の年代測定結果も再評価の必要があると考えられる。

<参考文献>

- 藤尾慎一郎 2008 日韓青銅器文化の実年代。春成秀爾・西本豊弘編 新弥生時代のはじまり 第3巻 東アジア青銅器の系譜。雄山閣, 138-147.
- 岸本義彦・西銘 章・宮城弘樹・安座間 充 2000 沖縄編年後期の土器様相について。高宮廣衛先生古希記念論集 琉球・東アジアの人と文化 (上巻)。高宮廣衛先生古希記念論集刊行会, 131-152.
- 松田順一郎 2007 伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地痕跡。北谷町文化財調査報告書 26 伊礼原遺跡-伊礼原B遺跡ほか発掘調査。北谷町教育委員会, 44-60.

第五節 カムイヤキ（須恵器）の蛍光X線分析

三辻 利一（鹿児島国際大学客員教授）

1. 小堀原遺跡（沖縄県北谷町）出土陶器片の蛍光X線分析

南西諸島の遺跡から出土する黒色の陶器片はカムイヤキ陶器である可能性が高い。小堀原遺跡から出土した黒色陶器片がカムイヤキ陶器であるかどうかを蛍光X線分析法で検討した結果を報告する。通常、蛍光X線分析される土器中の元素はK、Ca、Fe、Rb、Sr、Naの6元素である。

分析データは表47に示してある。全分析値は同じ日に測定された岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化された値で表示してある。

通常、K-Ca、Rb-Sr両分布図を作成してデータ解析を始める。全国各地の遺跡出土須恵器が両分布図上で地域差を表すことが実証されたからである。

第87図には今回分析した試料の両分布図を示す。この図にはカムイヤキ産群から出土した多数のカムイヤキ陶器片の分析値を包含するようにして、カムイヤキ領域を描いてある。この領域は定性的にしか領域を示さないが、それでも、比較対照する上には十分約に立つ。もし、今回分析した陶器片がカムイヤキ陶器であれば、カムイヤキ領域に分布するはずである。第87図をみると、2点の須恵器はいずれもカムイヤキ領域をずれて分布しており、カムイヤキ陶器ではない可能性が高い。念のため、カムイヤキ群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値をK、Fe、Rb、Srの4元素の分析値を使って計算した。その値も表47に示してある。カムイヤキ群に帰属するための必要条件、D2（カムイヤキ）<10を満足していないので、カムイヤキ陶器とは判断できない。しかし、Rb-Sr分布図ではカムイヤキ領域に分布しており、Fe量も多く、カムイヤキ陶器の科学特性に類似する。このことから、カムイヤキ陶器でないとは判断し難い。このタイプの胎土を持つ陶器は南西諸島の遺跡からしばしば出土する。何故、このタイプの胎土を持つ陶器片が南西諸島の島々から頻度高く出土するのか不明である。Feも多く、Ca異常値を持つカムイヤキ陶器である可能性もあるが、Caをはずしたマハラノビスの汎距離計算の結果でも、D2（カムイヤキ）<10を満足しない。

このタイプの胎土をもつ陶器がカムイヤキ陶器と判断できるかどうかは難しい問題で、今後の課題である。因みに、今回分析した沖縄本島の遺跡出土陶器片の（カムイヤキ/中岳）間の2群間判別図を第88図に示す。6点、カムイヤキ領域に分布するが、他の多くの陶器片はカムイヤキ領域をずれて、不明領域に分布した。これらの試料が何故、カムイヤキ領域をずれるのかはまだ分かっていない。

表47 小堀原遺跡7トレンチ南壁出土陶器片の分析データ

No		K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D2 (カムイヤキ)	D2 (中岳)	判定結果?
1	19-2420	0.352	0.912	5.44	0.326	0.289	0.203	46.6	160	カムイヤキ?
2	19-2421	0.353	0.924	5.37	0.324	0.302	0.195	49.8	149	カムイヤキ?

2. 沖縄本島の遺跡出土土器の蛍光X線分析

土器の生産と供給の過去を再現する歴史研究の一環として、胎土分析がおこなわれる。

須恵器の場合には生産地である窯跡が残っているので、消費地遺跡から出土する須恵器はどの生産地の製品であるかという視点から分析される。南西諸島では徳之島にカムイヤキ窯跡が発見されているが、それ以外には須恵器の生産地は発見されていない。したがって、南西諸島の遺跡から出土する須恵器はカムイヤキ陶器かどうかということが主要な問題点であった。しかし、最近、鹿児島県薩摩半島の中岳山麓窯群の製品とみられる須恵器が徳之島、種子島、喜界が島の遺跡から検出されており、カムイヤキ陶器が搬入される以前に、薩摩半島から須恵器が広く搬入されていた可能性がでてきた。中岳山麓窯群の製品がどの程度、南西諸島の遺跡に供給されていたのかは今後の重要な研究課題である。

他方、軟質土器は生産地である窯跡は殆ど残っていないので、胎土分析の結果は直接、産地問題には結びつかない。まず、胎土の比較研究ということから始まる。南西諸島の各島々で軟質土器を作っていた可能性があるため、各島々の遺跡出土軟質土器の胎土の比較研究を推進するために、各島々の遺跡出土土器の胎土分析のデータを集積している段階である。とくに、軟質土器は「・・・式土器」と型式分類されている場合が多いので、土器型式と胎土との関係が注目されている。同じ土器型式の土器の胎土が同じであれば、同じところで土器を作っていたことになり、同じ工人によって作られた土器であるということになる。もし胎土が異なれば、土器型式だけが伝播し、別の場所で別の工人によって土器が作られたことになる。土器型式と胎土との関係は十分には分かておらず、まだまだ基礎研究の段階にある。ただ、このデータが集積されれば、土器型式と胎土との関連から、軟質土器の生産と供給問題について何らかの情報が引き出されると期待される。

本報告では読谷村の座喜味グスクはじめ、沖縄本島のいくつかの遺跡から出土した須恵器、軟質土器の分析結果を報告する。

分析結果は表48にまとめられている。全分析値は同じ日に測定された岩石標準試料、JG-1の各元素の蛍光X線強度と使って標準化した値で表示されている。

分析値は通常、K-Ca、Rb-Srの両分布図上にプロットされ、定性的にデータ解読される。

全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから、両分布図上で、須恵器の地域差があることが発見されて以来、この分布図上で定性的なデータ解析が行われることになった。土器のように地域差が小さいもの地域差を比較する場合には、分析データを直、統計計算にかけるのではなく、一旦、図上にプロットして目に見える形で地域差を表示するほうが、研究を進める上で有効である。図形化しないでデータを集積していくと、データはブラックボックス化していく恐れがある。また、全国各地の花崗岩類も両分布図上で地域差を示すことも実験データで示されている。この結果、花崗岩類を構成する主要造岩鉱物の6割を占めるといわれる長石類（カリ長石と斜長石）が地域差の原因であることが推察された。

地質が原因で窯跡出土須恵器にも地域差があることになったと理解されている。

第88図には今回分析した全試料の両分布図を示してある。この図には比較対照のために、カムイヤキ領域を描いてある。カムイヤキ窯跡群から出土した多数のカムイヤキ陶器片の分析値を包含するようにして描いてある。定性的にしか、領域を示さないが、比較対照する上にはこれで十分役に立つ。今回分析した試料の中にはカムイヤキ陶器が含まれておれば、当然、両分布図でカムイヤキ領域に分布するはずである。第88図をみると、今回分析した試料の中には、両分布図でカムイヤ

キ領域に分布する試料は1点もない。ただ、カムイヤキ領域の周辺に数点の試料が分布しており、これらがカムイヤキ陶器であるかどうかの問題となる。

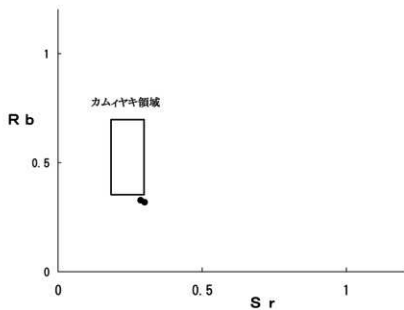
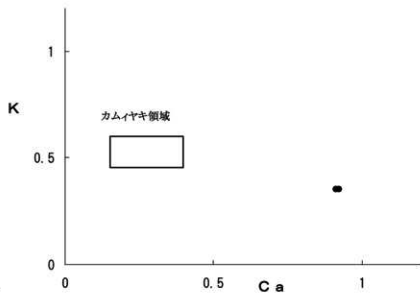
データ解析はまず、両分布図でカムイヤキ領域を大きく逸脱したNo.2、8、9の3点の試料からはじめる。これら3点はカムイヤキ領域を大きくずれて分布しており、カムイヤキ陶器ではなことは明白である。さらに、No.10は表47から、Ca量とSr量が異常に多い土器であるということが分かる。そのため、図にはプロットしなかった。No.10もカムイヤキ陶器ではないことは明白である。したがってこれら4点はカムイヤキ陶器ではない。これら4点は胎土観察からすでに、在地産土器と推定されていたものである。この点で胎土分析の結果と一致した訳である。もう一つ在地土器とみられていたのは、No.6である。

第88図をみると、No.6はNo.1、5とともにカムイヤキ領域の周辺に近接して分布していることがわかる。これら3点の土器の胎土は同じであり、同じ生産地の製品とみられる。問題はこれらがカムイヤキ陶器と判断できるかどうかである。その判断の基準には通常、カムイヤキ陶器群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値 (D^2 で表される) が使われる。マハラノビスの汎距離とは統計学上の距離であり、通常、K、Ca、Rb、Srの長石系因子の分析値を使って計算される。表48にはカムイヤキ群と中岳群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を掲載してある。カムイヤキ陶器はとくにFeが多いという特徴をもつので、K、Fe、Rb、Srの4因子と使って計算した値である。Caを除外したのは、カムイヤキ陶器の場合には、Caに異常値を示す場合がしばしばあることが観測されているからである。カムイヤキ陶器であるためには、カムイヤキ群の重心から、ある一定の距離以内にあることが必要条件である。この一定距離を求めるために、5%の危険率をかけたホテリングのT₂検定にかけられる。今回、その条件は D^2 (カムイヤキ) < 10である。

表48を点検すると、今回分析した試料の中に、この条件を満足する試料は1点もない。したがって、カムイヤキ陶器と判断できる試料は1点もなかったことになる。ただ、No.1、5、6の3点はいずれも、第88図でカムイヤキ領域の周辺に分布しており、この点でカムイヤキ陶器ではないと判断することに躊躇する。実はこのタイプの胎土をもつ土器は南西諸島の遺跡からしばしば出土しており、第89図の沖縄本島の遺跡出土陶器片の(カムイヤキ群/中岳群)間の判別図に示すように、不明領域に分布する。今後、これらがカムイヤキ陶器であるかどうかを判断することが問題となってくる。カムイヤキ陶器の胎土に類似するが、カムイヤキ群への帰属条件を満足しなかったために、ここでは敢えて、不明としておく。

No.3、4、7、11の4点もRb-Sr分布図ではカムイヤキ領域の周辺に分布する。ただ、K-Ca分布図からCaに大きなばらつきがあり、Ca異常を示す胎土である。いずれも、Feが多いという点でカムイヤキ陶器の胎土に類似する。これらもカムイヤキ陶器とは判断できない試料であるが、カムイヤキ陶器である可能性は残されている。

第87図 小堀原遺跡(沖縄県北谷町)出土陶器片の両分布図



第88図 沖縄県内遺跡出土のカムイヤキ・土器の両分布図

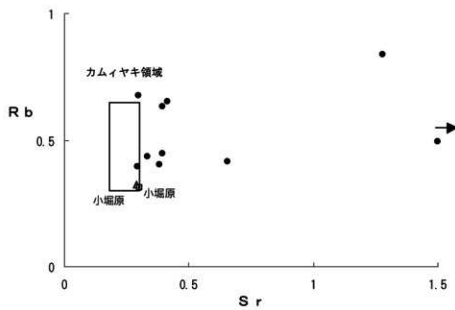
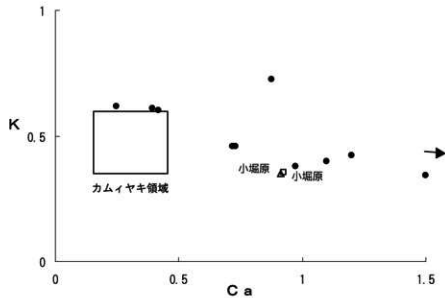
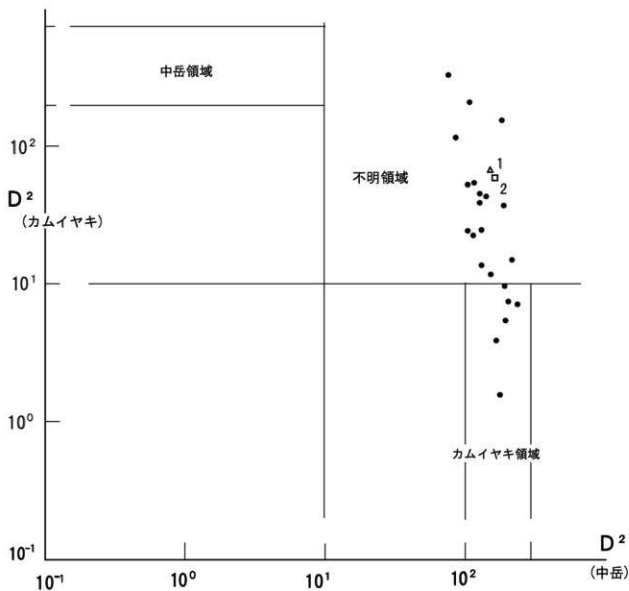


表48 沖縄県内遺跡出土のカムイヤキ・土器分析データ

Ns	遺跡	出土層位	観察結果	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D2 (カムイヤキ)	D2 (中岳)	判定結果
1	今帰仁グスク	主郭の層	カムイヤキ	0.611	0.394	3.98	0.652	0.413	0.255	68.4	148	カムイヤキ?
2	今帰仁グスク	主郭の層	在地土器	0.724	0.876	2.66	0.838	1.28	0.128	2877	165	在地土器
3	伊波城跡(うるま市)		カムイヤキ	0.459	0.731	4.56	0.447	0.395	0.218	57.2	117	カムイヤキ?
4	伊波城跡(うるま市)		カムイヤキ	0.458	0.735	4.64	0.436	0.334	0.224	26.1	123	カムイヤキ?
5	伊波城跡(うるま市)		カムイヤキ	0.601	0.417	3.76	0.631	0.396	0.217	45.2	122	カムイヤキ?
6	伊波城跡(うるま市)		在地土器	0.619	0.249	4.27	0.674	0.299	0.160	16.0	214	カムイヤキ?
7	座喜味グスク(読谷村)		カムイヤキ	0.377	0.971	4.75	0.397	0.292	0.251	38.2	123	カムイヤキ?
8	座喜味グスク(読谷村)	Pit C-45	在地土器	0.400	1.10	3.59	0.415	0.657	0.234	361	74.2	在地土器
9	波平洞穴		在地土器	0.343	2.30	3.03	0.494	2.91	0.231	20000	2660	在地土器
10	川花遺跡(石垣市)		在地土器 (中壘式)	0.529	11.2	2.49	0.507	2.26	0.109	10000	1212	在地土器
11	川花遺跡(石垣市)		須恵器?	0.423	1.20	4.55	0.404	0.383	0.366	56.7	107	カムイヤキ?

第89図 沖縄本島出土陶器の産地推定 (K, Fe, Rb, Sr)



第五章 まとめ

これまでに小堀原遺跡の範囲確認調査の成果について述べてきた。ここでは、その調査成果を整理し、まとめとする。

本遺跡は、試掘調査の段階では遺跡の有無を確認できずにいた。しかし、西側の砂丘地で遺物の散布状況が確認でき、周辺に遺跡本体が存在することが予想された。そこで、今一度試掘データと周辺遺跡との比較検討を行ったところ、試掘データで柱穴と思われる遺構の存在が判明したことで、遺物散布地と東側丘陵との間に範囲確認調査区を設定し、調査を実施した。調査の結果、グスク時代と貝塚後期の複合遺跡であることが判明した。

調査は、米軍基地返還前に実施した。そこで、調査区は南北に走る道路を挟んで、東側調査区と西側調査区を設け、南北に長いトレンチ（2・5トレンチ）をそれぞれに一本、更にそのトレンチ（1・3・7トレンチ）に直角に挟むようにして短いトレンチ（4トレンチ）を西側に設け実施した。その結果、東側調査区は、東側から北西側にもともと微高地の地形を呈していたと思われる。米軍は基地建設の際にその微高地を削り現在のような平坦地に整地したとみられる。微高地から南は、南側へ緩傾斜をなし、戦前の旧表土が確認された。また、南側には川跡が確認され、遺跡はこの微高地と川に囲まれて展開している状況であることが判明した。しかし、本調査区では明確な遺構及び包含層がないため、西側に展開していくと判断された。

西側調査区の北側は、東側調査区の微高地が続いていたと思われる。本地区も南へ緩傾斜を呈し、トレンチ南端部で、東側調査区で確認された川跡が続いているのが確認された。そして、その微高地と川との間でグスク時代と弥生時代相当期の遺構及び包含層が確認でき、複合遺跡であることが判明した。また、近世期の堆積も確認されている。

西側調査区で確認された各時期について述べることとする。

・近世期

近世期は、溝状遺構（第53図）が本確認できた。出土遺物は、沖縄産陶器・本土産陶磁器・陶質土器・瓦・円盤状製品などが出土している。戦前の状況をみていると、遺跡南西側に桑江又後屋取、北西側に伊礼集落が存在する。丘陵からはナルカーの河川が河口に向かって蛇行しながら西流している。また、遺跡周辺は畑地として利用している状況が窺える。本期はグスク時代以降から、若干移動しながら古集落が存在し、首里からの屋取も加わり戦前の集落へ至ったと思われる。

・グスク時代

グスク時代の包含層と遺構は、5トレンチの北側40m辺りから南側と、4トレンチ北西側、6・7・8トレンチで検出されている。主に、5トレンチの中央部を中心として、7・8トレンチで掘立柱建物址が7基、高床式建物址が4基、土壇墓が1基、溝状遺構が8基、検出されている。特に、建物のプランが明確であり、立て替への少ない短期間の集落が形成されていると考えられる。集落の時期は、出土遺物を見てみると種類、量ともに少ないものの、白磁の玉縁口縁碗やカムイヤキ、滑石製石鍋など古手の資料でまとまっていることから11～12世紀頃と思われる。

掘立柱建物址と高床式建物址の検出事例は、本遺跡の南に位置する後兼久原遺跡、読谷村のターシーモア北方遺跡・ウガンヒラー遺跡、宜野湾市の伊佐原第一遺跡などで報告されている。後兼久原遺跡やターシーモア北方遺跡・ウガンヒラー遺跡などでは、掘立柱建物址1棟に対し、高床式

建物址1棟（4本柱又は6本柱）と掘立柱建物址1棟に対し、高床式建物址2棟（6本柱又は4本柱と6本柱）の組み合わせが判明している。時期も類似していることから、本期の集落の様子が窺い知れる貴重な遺跡である。また、土壌墓が7トレンチの中央南壁で検出された。人骨は歯の分析から誕生して間もない乳児骨で、左右の膝が外側に軽く開いた仰臥屈肢葬であった。乳児骨の埋葬事例は少ないことからグスク時代の墓制及び葬制を考える上で貴重な資料といえよう。

次に遺物について見てみる。本遺跡からの出土遺物は種類、量とも少ないこと、グスク時代の中でも古手にまとまっているのが特徴である。白磁は玉縁口縁碗の出土が多い。玉縁口縁碗に共伴する資料で、口縁部が外反し、櫛目文を有する碗（第62図23）がある。このような事例は、後兼久原遺跡、那覇市のヒヤジョー毛遺跡に見られる。口縁端部が反る皿が1点出土している（第62図24）。本資料の出土例は無いように思われることから、玉縁口縁碗との共伴関係にあらたに加わる資料とおもわれる。滑石は石鍋と二次製品に分けられた。蓋の資料が得られたのは興味深い。カムイヤキは壺と皿が得られている。蛍光X線分析による比較で大変興味深い結果が得られている。カムイヤキ窯群から出土したカムイヤキの胎土分析値（K-Ca・Rb-Sr）によってカムイヤキ領域を設けて比較している。本遺跡出土の資料は分析の結果、K-Caでは領域外で、Rb-Srでは領域内に分布すると異なった結果が得られ、カムイヤキではないとは判断しがたいようである。鉄関連資料としては、鉄滓が5トレンチで多く出土している。丸底型の鉄滓が1点得られていることから窯の存在も想定される。後兼久原遺跡では砂鉄も検出されていて両集落における鉄生産を考える上で大変貴重といえよう。

・貝塚後期

貝塚後期の包含層と遺構は、4～6トレンチで検出されている。特に、6トレンチと5トレンチのグスク時代の遺構が比較的少ない中央部から南側で行ったため調査範囲は狭い。ピット状が、南10～20mの北側のIV層bと南5～10mのIV層cでそれぞれ1基検出されている。性格は不明である。また、5・6トレンチのIV層bでは貝溜まり、IV層cではイノシシの下顎骨の出土が顕著であった。

出土する遺物は土器・貝製品・石器などが出土している。土器は無文が主体で、他に有文や貼付突帯・有孔・耳を有する土器、搬入土器がみられる。器種は大型・中型・小型の甕・鉢形と壺が得られている。搬入土器はⅢ層bで1点確認できるが、概ねIV層bで、5トレンチの南20～28、28以南でまとまる。壺型は有頸と無頸があり前者が多い。出土傾向は搬入土器に類似する。甕・深鉢形は無文で最も多い。口縁部の形態、器厚、器面調整などで8種類に分類され、Ⅰ～Ⅲ類・Ⅶ類は器面調整が丁寧で器厚も均一である。Ⅳ～Ⅵ類はヘラやユビナデ調整がみられ、外面は雑に仕上げ、内面はハゲで調整し、外面に比べやや丁寧である。最も多かったのはⅥ類（粗隆文土器）で5トレンチの北5～南5、南5～10、6トレンチのIV層bで多い。次いでⅤ類（直口）・Ⅳ類（外反）となり、同様な傾向を示し、この時期の中心をなす地域と考えられる。また、Ⅳ類は大当原貝塚上層グループに先行するもので大当原式土器より器壁が薄く丁寧に仕上げている。古手のⅠ類（阿波連浦貝塚下層タイプ）、Ⅱ類（浜屋原式土器）は5トレンチの南20～28、28以南でまとまり、この時期は本地域が中心になるとみられる。Ⅶ類（くびれ平底土器）は、量は少ないが4トレンチでまとまっている。Ⅷ類（グスク土器）は2点出土した。胴部破片で詳細は不明である。また、第30図89は復元資料（Ⅲ類：胴部上部で屈曲する）で、5トレンチ南10～20mのⅤ層（緑灰色砂層）より出土し、上限の土器に位置づけられる。

本遺跡出土の土器は厚手で、器壁が不均一なものが多く、口縁部は外反・内湾・直口などバリエーションがある。しかし、これらの器面調整はヘラ及びユビナデ調整を行うなど共通している。これ

ら土器は本遺跡の主体を成し、当該期の土器グループとして小堀原タイプ（大当原式土器の先行タイプ）として位置づけたい。

貝製品は少ない。得られた資料から装飾品と実用品に分けられ、後者の貝匙のなかでヤコウガイ腹面を利用した資料は最も古くなる出土例のようである。石器は、出土数は少ない。得られた種類は石斧・蔽石・凹み石・磨石・石皿などで石材は輝緑岩や石灰岩・砂岩・チャートなどである。

貝類遺体は海産腹足類19科57種、淡水産腹足類3科4種、陸産腹足類3科7種、海産二枚貝類20科48種の合計116種確認された。若干、グスク時代の遺体も含まれるが概ね貝塚後期になる。海産貝類をみてもと本島周辺に生息する種で、分布域を大きく変化させたような種は認められていない。

動物遺体はイノシシが主体で、次いで魚類が多い。当該時期の一般的様相とは異なった出土傾向であった。他にジュゴン・イルカ・鯨類が確認された。（ウシも検出されているが後世の混入と判断される。）イノシシは5トレンチの北5～南20m及び6トレンチIV層cに集中している。

以上、各期のまとめを述べてきた。今回の範囲確認調査は、遺跡の西側の遺物散布地から遺跡本体の位置を予測し確認できたことは大きな成果といえよう。また、グスク時代の初期頃の集落様相が窺え、キャンプ桑江北側返還地域内で後兼久原遺跡のⅢ期と同時期で最も古く、続いて後兼久原遺跡のⅡ期、千原遺跡、伊礼原D遺跡、伊礼原遺跡の砂丘区、伊礼原E遺跡と14～16・17世紀の遺跡がある。また、返還地の南には北谷城があり、集落との関係やグスク時代の変遷を考える上で貴重である。貝塚後期は調査範囲が狭い状況であり、出土遺物が少なかった。この状況が本遺跡の特徴かどうかは判然としなないため、今後の調査で明らかにしていきたい。キャンプ桑江北側返還地域内における本期の遺跡は、平安山原B遺跡、伊礼原遺跡の砂丘区、伊礼原D遺跡がある。本遺跡はくびれ平底土器を主体とする伊礼原D遺跡よりは古く、浜屋原式土器・縄文晩期系土器を主体とする伊礼原遺跡の砂丘区、平安山原B遺跡よりは新しいようである。

今回の調査では調査範囲が狭いため本期の詳細な様相は窺えなかったが、今後の本発掘調査で各遺跡の状況も検討しながら位置付けを明確にしていきたい。

＜参考文献＞

- ・名嘉順一・東恩納みさき・八田夕香『北谷町の地名－戦前の北谷の姿－』北谷町文化財調査報告書 第24集 北谷町教育委員会 2006年
- ・山城安生・東門研治『後兼久原遺跡 庁舎建設に係る文化財発掘調査報告』北谷町文化財調査報告書 第21集 北谷町教育委員会 2003年
- ・仲宗根求『楚辺ウガンヒラー北方遺跡発掘調査速報』読谷村教育委員会 2004年
- ・鶴元寿光・富銘清乃ほか『伊佐前原第一遺跡－宜野湾北中城（伊佐～普天間）道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書（Ⅲ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 第4集 2001年
- ・仲宗根求『読谷村発見のグスク時代の掘立柱建物跡について』読谷村立歴史民俗資料館紀要 第27号 読谷村立歴史民俗資料館編 2003年
- ・金武正紀・城間千栄子『ヒヤジョー毛遺跡－那覇新都心土地区画整理に伴う緊急発掘調査報告Ⅰ－』那覇市文化財調査報告書 第26集 那覇市教育委員 1994年
- ・中村恵・東門研治・島袋春美『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－』北谷町文化財調査報告書 第23集 北谷町教育委員会 2005年
- ・中村恵・東門研治・島袋春美『伊礼原遺跡－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－』北谷町文化財調査報告書 第26集 北谷町教育委員会 2007年
- ・中村恵・東門研治・島袋春美『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡－キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業－』北谷町文化財調査報告書 第27集 北谷町教育委員会 2008年
- ・東門研治・島袋春美『伊礼原D遺跡－キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業－』北谷町文化財調査報告書 第28集 北谷町教育委員会 2008年



6 トレンチ
(東側より)



5 トレンチ 南5~10
(南東側より)



5 トレンチ 南10~20
(南側より)

図版64 貝塚後期 (IV層 b・IV層 c 面検出状況)



イノシシ下顎骨出土状況
(5トレンチ 北5～南5)



土器出土状況
(5トレンチ 北5～南5)



3トレンチ 木の炭

図版65 貝塚後期 (IV層c面 遺物検出状況・炭化物)



5トレンチ グスクピット出土状況



5トレンチ 北側 近世溝状遺構



8トレンチ ピット・溝状遺構出土状況



5トレンチ 溝状遺構 織敷布状況



5トレンチ 北側 滑石の葺出土状況



8トレンチ 石斧出土状況

図版66 グスク時代 (遺構検出・遺物出土状況)



5トレンチ～8トレンチ全景（東側より）



5トレンチ 発掘作業（東側より）

図版67 発掘作業風景（全景・作業風景）



作業風景 (5・6トレンチ 西側より)



作業風景 (2トレンチ 西側より)



作業風景 (8トレンチ 東側より)



発掘調査員 集合

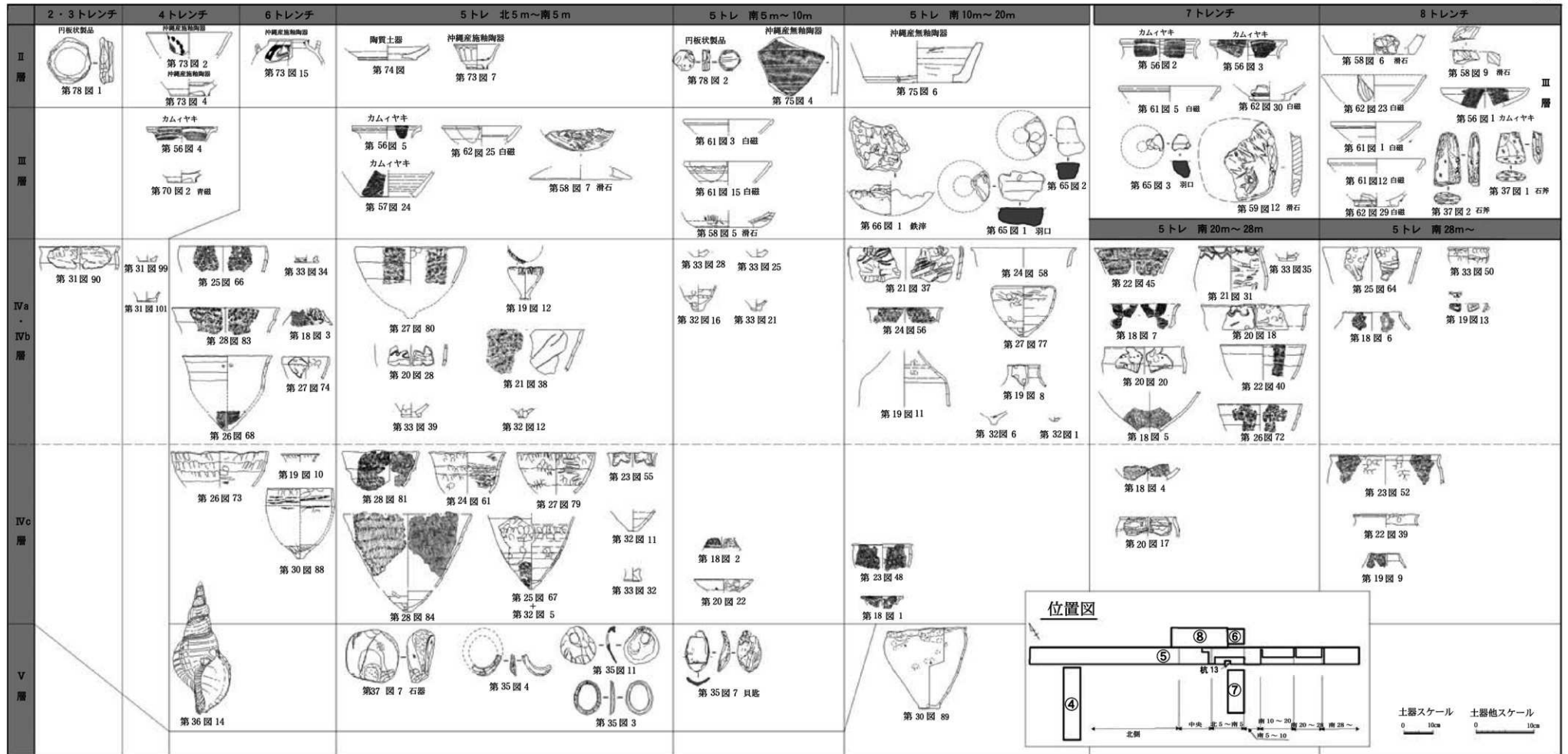


実測作業



発掘調査員・新任教員研修 集合

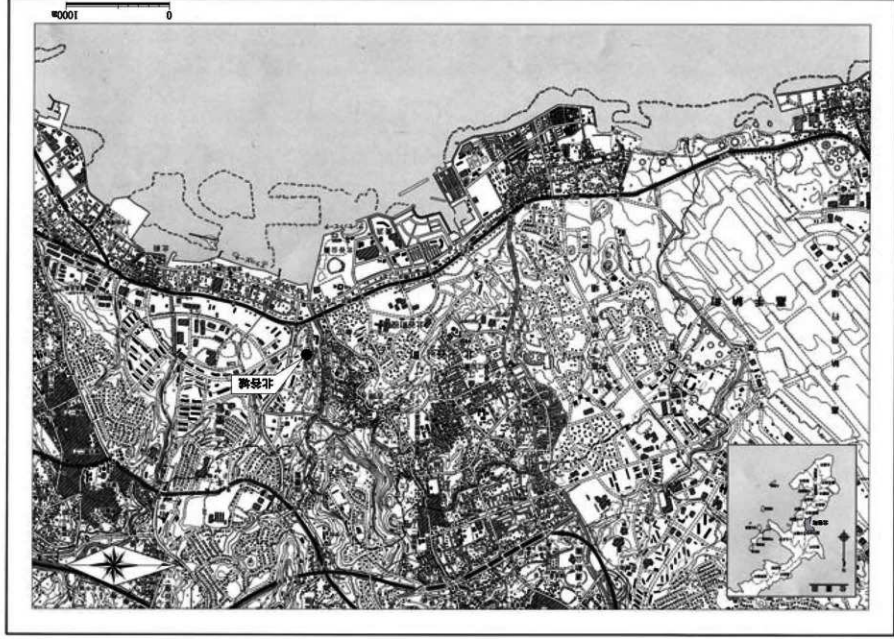
図版68 発掘作業風景 (作業風景・集合写真)



第90図 小堀原遺跡の遺物変遷図

<付篇> ちやたんぐすく 北谷城の調査概要

第1図 北谷城の位置



調 査 概 要

ここで北谷城の概要を述べるが、今回は平成9年度～11・13年度に実施した、第十三～十六次調査がこれまでの調査対象としていた丘陵の調査から中腹と麓を対象に調査を行うこととなった。そこで、これまでに行われた調査を振り返って丘陵の状況をまとめて紹介し、第十三～十六次調査の状況を若干述べることにする。

北谷城は昭和35（1960）年の多和田真淳氏により、北谷城貝塚と『文化財要覧』に報告されたのが最初である。その後、昭和54年に琉球大学考古学クラブOBの恩河尚、呉屋義勝、米田善治、照屋正賢の諸氏によるフィールド調査が行われ、北谷城丘陵周辺には7カ所遺物の採集できる地区が確認されている。

本町教育委員会が北谷城の調査を行ったのは、昭和57年で平板測量調査が行われた。4つの石垣の区切りで、3つの平場をもつ城郭であることが確認されている。昭和58年には城周辺のフィールド調査が行われ、城の範囲や按司墓、その他古墓が82基、戦時中の水雷艇施設が確認された。

これらの状況を踏まえて昭和59年より城の丘陵部を中心に調査を開始した。以下、各調査の状況を紹介する。

・第一次調査（昭和59年2月13日～2月27日）

第一次調査は包含層の確認とその広がりを把握するために実施した。調査区は城郭すべてを覆う範囲でグリッド設定を行い、西から東へ算用数字を用い、北から南へはローマ字を付した。起点は二の郭のO-100グリッドを基準にした。

調査は、一の郭の北側隅にD-112、南側隅にV-115グリッドを設定。二の郭は、北西部にK-90・91・92、L-91・93、中央部にO-96、P-92、南側にV-101グリッドを設定して行った。調査の結果、包含層が確認され、大まかに2枚の文化層の存在が明らかになった。K-90・91・92、L-91・93グリッドの第三層で敷石遺構が確認されている。遺構はテーブルサンゴやキクメイシが数センチ大の大きさと破砕されている状況で一面に広がって見られた。

O-96・V-101グリッドでは柱穴が確認され、O-96グリッドでは第V層から第VI層に掘り込まれていて、径50～60cm、深さ30cmほどで、柱穴内に根石と思われる拳大の数個の礎が立位の状態が確認された。V-101グリッドも第V層から第VI層に掘り込まれた柱穴が4基、グリッドの東側で南北に約40cm間隔で連なって確認された。

出土遺物は土器・青磁・白磁・陶器・カムイヤキ・瓦質土器・鉄製品・銅製品・銭貨などの人工遺物と貝殻・獣魚骨の自然遺物が見られた。

出土遺物の青磁から13世紀のものが数点あるが、14～15世紀のものが主体を成していること、16世紀の遺物がないこと、染付が出土しないことから北谷城の盛行期はこの頃に位置づけられることができた。

・第二次調査（昭和59年10月22日～12月8日）

第二次調査は三の郭の性格についての把握に重点をおいた。

三の郭は平坦を呈しているが、北東側には岩盤の石灰岩が露出している。このことから旧地形は北東側の方向が高く、南西側が下がる緩斜面であったものが、グスク時代やあるいは後世に平坦に改変されたことが考えられる。包含層もこれらの影響を受け、北東側では薄く、南西側では厚いことが予想された。

調査区は、三の郭の南西部に拝所北谷のトゥン（殿）が位置し、それを中心に南西側に設定した。トゥンは、三の郭の南西側より略東西15m、南北12mの約50坪の敷地の周辺に石垣が巡らされており、その中心部から東側にT-82・83・87グリッド、西側にW-77グリッド、南側にX-86グリッド、南西側にB'-81グリッドの計6カ所で調査を行った。

・第三次調査（昭和60年5月20日～6月27日）

これまでの第二次の調査から二の郭に本格的な施設のあることが予想されたことから、遺構検出に終始した。

第一次調査においてO-96グリッドに見られた人頭大の礫が施設の一部と考えられたので、それを中心として周辺部にグリッドを設定した。

グリッドの設定は、M-93・94・95、N-95、O-93・94・95・97・98・99、P-95・96、Q-95・96・97・98、R-95・96・97・98・99・100グリッドの計22カ所設定して行った。

調査の結果、R-95・96・97・98・99・100グリッドで、グリッドに沿って長さ約9mにわたリサング石灰質の切石による家屋の両端ラインが検出された。

・第四次調査（昭和62年2月20日～3月28日）

これまでの第二次の調査から、北谷城は二の郭に舎殿をもつ本格的な居城であることが判断できた。そのことから、丘陵部の西側がどの範囲まで取り込まれているのか、その利用されている規模を把握することに努めた。

まず、四の郭が郭として利用されているかの有無を確認するために、南側の縁辺部にどのような施設があるか、中央部の旧耕地には生活層が確認できるのか試掘区を設けた。

南側の縁辺部の崖にM'-N'-55グリッド、M'-N'-60グリッドの2カ所設置した。この2カ所では、込め石を多量に用いて平坦部を形成していることが判明した。崖よりには人頭大の礫、山手側には拳大の礫を用いていることが判明した。礫に混在して土器や青磁・褐釉陶器（南蛮焼）が出土したことから14～15世紀の時期のものであることが判明した。このことは、ほぼ二の郭の舎殿址や三の郭の上層と同時期に当たるものと考えられる。

三段の畠地となっている四の郭には、上段の北側にL"-44グリッド、二段目にはY"-47グリッド、三段目にはS"-44、P-32グリッドの計四カ所設定した。P-32グリッドで柱穴らしき遺構を確認したのみで、他のグリッドでは地山であった。

・第五次調査（昭和63年2月1日～3月14日）

これまでの第四次の調査から、二の郭の南側（舎殿址の南側）がどのような利用のされかたをしていたのか、また、どの範囲まで取り込まれているのか、その利用されている規模を把握することとした。

S-92～98・111、T-98・111・112、U-99～104・110、V-99・100・107・109、W-

100、X-100~102、Y-100~102、Z-100~102グリッドの計32カ所の調査区を設けた。

調査の結果、S-98グリッドからY-100グリッドを直線に結ぶ石垣の内側が見られ、更にY-100グリッドからY-102グリッドには直線に曲がる石垣の内側が確認できた。その石垣に相対する形でZ-100グリッドからZ-102グリッドには角丸の外面の石垣が確認された。内側の石垣は縦約25cm、横約45cm、幅約30cm大のサンゴや石灰岩の切石を用いているのに対し、外面の石垣は縦約50cm、横約80cm、幅約70cm大の大型の石灰岩の切石を用いていた。

このZ-100グリッドからZ-102の外面の石垣のラインを、東側の一の郭の方向へ追っていくと、U-110、T-111・112グリッドで延長ラインを確認することができた。更に、T-112グリッドでは直角の角が確認でき、S-111・R-111グリッドへ延長することが確認できた。この一の郭あたりの石垣は縦約25cm、横約45cm、幅約30cm大のサンゴの切石を用いていた。

二の郭のU・V-100、U-100・101・102グリッドでは、さきほど石垣の内側にほぼ直角に接するかたちで長さ約4.5cm、幅約70cmほどの両面に面をもつ石垣が確認された。石垣は縦約10cm、横約20cm、幅約30cm大のサンゴの切石を用いていた。

これらの石垣は、周辺から出土する青磁・褐釉陶器（南蛮焼）などから14~15世紀の時期のものと考えられる。

・第六次調査（平成2年7月13日~7月24日）

本調査は熊本大学文学部考古学研究室の白木原和美教授に委託して行った。

これまでの調査で、二の郭の南側広場で見られた石垣の内側の一部には、X-100グリッドにおいて根石の上面が幅約2mの間擦れた箇所がみられ、出入口らしき部分が想定できたことから、その確認を行うこととした。

発掘区はV-99、W-98・99、X-96~99、Y-96・99グリッドの計9カ所設けた。その結果、X・Y-99グリッドで石垣の外面が確認された。石垣は全て幅60cm、高さ25cmほどのサンゴの切石を用いていて、第五次調査で確認された石垣のコーナー部分とは異なっていた。

・第七次調査（平成3年7月8日~7月21日）

本調査も熊本大学文学部考古学研究室の白木原和美教授に委託して行った。

第七次調査は第二次調査で確認された、三の郭の柱穴群のプランの把握に努めた。

発掘区はW-85・86、X-85・86、Y-85~87、Z-85・86、A-85・86グリッドを一つの区域として進め、C-85~87、D-85~87グリッドを二つの区域として行った。その結果、1mほどの略楕円形と50cmほどの略円形の土壌群、20cm前後の柱穴の三種類の遺構が確認された。これらの遺構内の覆土や遺物から、くびれ平底土器を含む15~16世紀の時期に区別された。プランは調査面積が狭く、明確にはできなかった。

・第八次調査（平成4年8月2日~9月30日）

第八次調査からは、これまでの調査区であるグリッド設定の方法を変え、座標による区画を設定し、1/500地図の地形図を基本として、グリッド設定を行った。座標の基点は、X=33度850分、Y=26度800分を基準とし、5mのメッシュを被せた。南北はイロハ二・・・とし、東西には算用数字を用いた。基点はナ-71グリッドと付した。

調査では、北谷城の最も東の石垣の規模とその性格の把握に努めた。調査区はソー71・72、ソー71～74、ネー70～72、ナー71～73、ムー71～73グリッドの計18カ所設けた。

東の石垣は丘陵の最も細く高い場所を直角に切る形で見られる。南北の軸線71ラインを基線として見ると、北北西に18.5度ずれた直線を内面として積まれ、それを基準として外面は6mのものと、9m幅の2つが確認された。6m幅の石垣は粗い面取りされた石が並べられ、9m幅のものは、切石であった。略東西の外面の石垣は長さ25mあり、両隅の角は丸く積まれていた。

・第九次調査（平成5年8月2日～10月25日）

第九次調査は、1つ目には北谷城の石垣から東側50mの地域に窪地があることから、人為的な施設ではないかとの可能性が考えられることから、その性格について把握することに努めた。2つ目には、北谷城の西側に広がる四の郭の地形測量を行った。

窪地の調査区は南北から窪んでいる場所に、横断するかたちで東西に幅1.5m、長さ5mのトレンチをヨー82・83、ヨー85、ター83、レー83グリッドの5カ所設定した。

調査の結果、ヨー82・83トレンチで長さ6m、深さ1mの窪地が確認された。窪地には上下の貝層があり、上層は青磁が混在するくびれ平底土器の層、下層はくびれ平底土器が単純に出土する層が確認できたが、窪地の性格については明確にはできなかった。

・第十・十一次調査（平成6・7年度）

第十・十一次調査は、三の郭の南西角から南側に下る、通称ノロ道と呼ばれる傾斜地の発掘調査を行った。第十次調査はエー55、テー56・57、アー57・58の5カ所。第十一次調査は第十次調査区の継続に、エー56、アー56・59、サー54～58、キー54・56・58の11カ所を加え計16カ所設定して行った。調査の結果、エー55・56、アー57・58で階段遺構、テー57・アー57で城門遺構、アー56・サー56（城門遺構の南西）で東西を区切る石垣遺構が南北に設置されているのが確認された。城門遺構は三の郭の南西角から南側斜面に下る地域に4×8の約32㎡の岩盤の平場があり、そこに切石が積まれていた。門は平場の中央部に約50cm台の切石で開き戸を支える臍穴が検出された。臍穴は南側でも検出されたことから東に開いた門であることが判明した。城門は臍穴を挟んで約1.8m幅で切石が積まれていたと考えられる。城門から南西側下（アー56・サー56）に石垣遺構が南北に延び、西側に広がる四の郭を区切っていた。

階段遺構が二カ所に検出され、エー55・56は三の郭と城門への上り下りするもので、アー57・58は城門への上り下りする遺構であった。

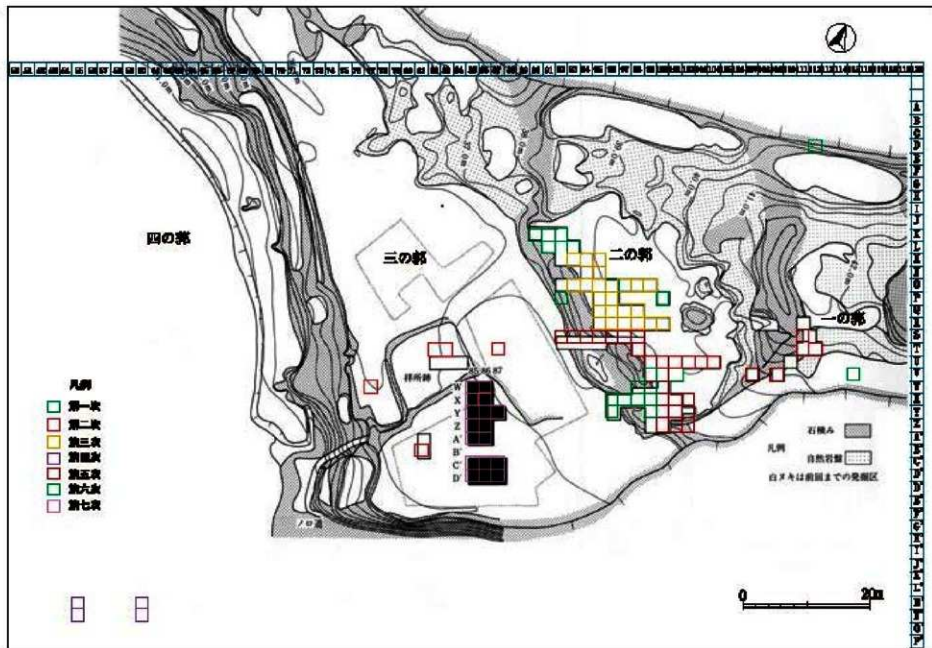
以上がこれまで行われた発掘調査の概要である。これまでの成果をまとめてみると、北谷城は長さ約500m、幅30～100mの細長い丘陵の西側半分を利用して、一の郭～四の郭をもつ連郭式のグスクであることが判明した。そして、一の郭は最も高く標高44.7mで、東西約20m、南北約20mで約400㎡。二の郭は東西約30m、南北約50mで約1500㎡。三の郭は東西約40m、南北約70mで約2800㎡。四の郭は東西約100m、南北約100mで約10000㎡。総面積約1.47haを有し、本島内のグスクの中でも大規模である。

各郭で確認された遺構は、一の郭は郭の東に幅6mと9mの根石が確認されている。二の郭の中央部にはサングの切石で9×9mの舎殿址と思われる遺構があり、その南側には幅1m、長さ6mのヒンブン状の根石が確認されている。三の郭は、中央部に戦前まであった拝所「殿」があり、そ

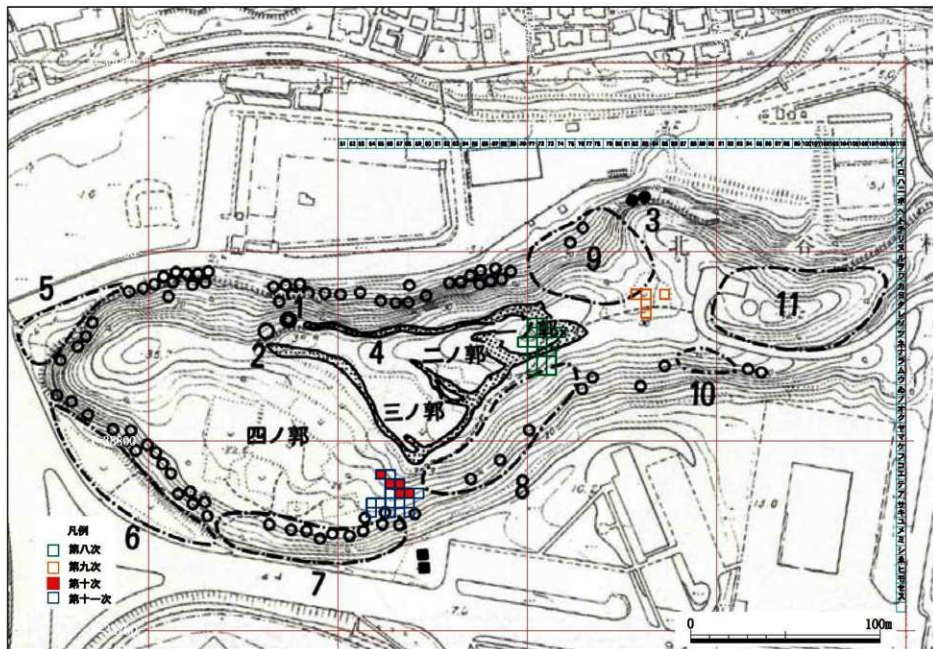
の南側に柱穴群が確認され施設があったようである。その時期は出土遺物から14～15世紀頃のもの、その下層はくびれ平底土器の時期がある。三の郭の南西角から南側斜面に下る地点に階段遺構と東に開かれた城門遺構が確認された。四の郭は石垣の痕跡が確認されている。ここまでが丘陵上部から三の郭南側斜面を調査して確認された主な状況である。

・第十三～十六次調査（平成9～11・13年度）

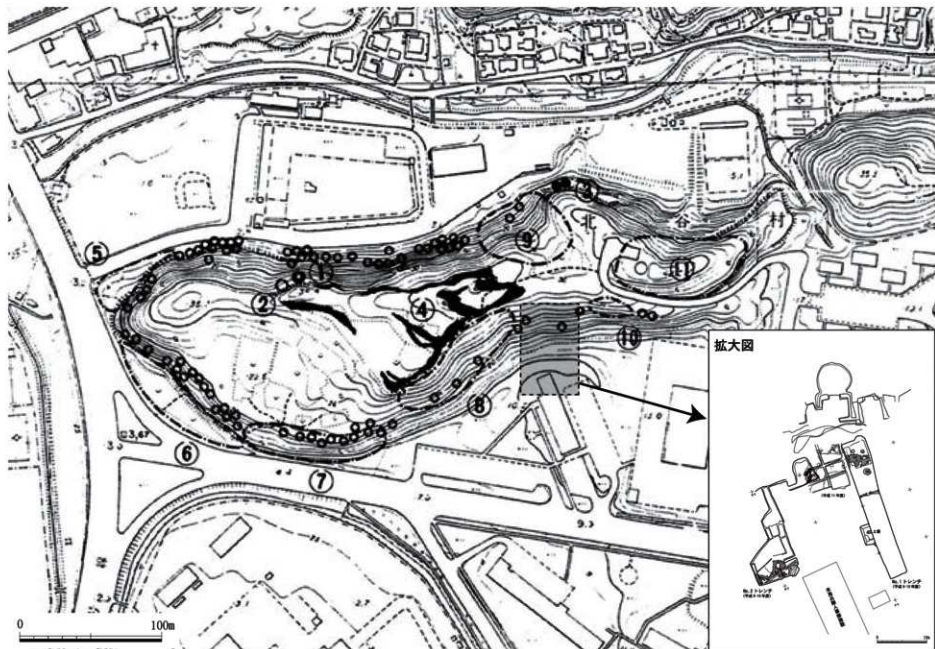
これまでの調査状況を踏まえて平成9年度から11・13年度（第十三～十六次調査）は、城門から東側にノロ道やグスク南側にある北谷・伝道・玉代勢集落から上り下りした道の確認を行うため、グスクの中腹と丘陵麓を調査することとなった。南側に上り口は二つある。一つは丘陵南西側にヌールガーがあり、このヌールガーから城門へ上るルートと、もう一つはヌールガーより東に位置する所にチンガーから上るルートがある。今回の調査は後者のチンガーから上るルートの調査を行った。調査の結果、麓から平坦地に広がる部分でチンガーを検出、その東側では12世紀頃の埋葬人骨が検出された。また、斜面地を調査してみると包含層があり平坦に整地されていた。石灰岩及びその風化土である赤土に14・15世紀頃の建物の礎石が検出された。この施設が上り口で何らかの役割を果たしていた可能性があると思われる。更に、この建物跡の礎石の南に石垣が東西に延びており施設を囲んでいたようである。出土する遺物は中国産陶磁器、沖縄産陶器、グスク土器、くびれ平底土器、鉄製品などが出土している。これらの詳細な報告は次回の報告としたい。



第2図 北谷城 第一次～第七次調査範囲



第3図 北谷城 第八次～第十一次調査範囲



第4図 北谷城 第十三次～第十五次調査範囲



図版 1 第十三・十四次調査 (全景北側より)



No. 1 トレンチ (南側より)



図版2 第十三・十四次調査 (No. 1 トレンチ・No. 2 トレンチ) No. 2 トレンチ チンガー周辺



No. 2 トレンチ チンガー完掘状況



No. 1 トレンチ 土墳墓出土状況

図版 3 第十三・十四次調査 (No. 2 トレンチ・土墳墓)

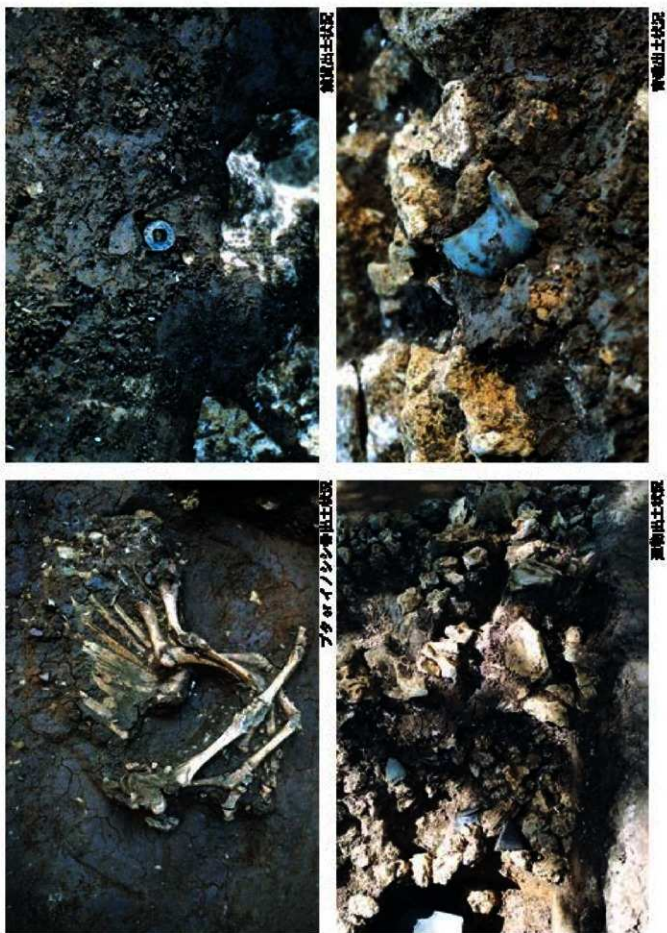


石列検出状況（南西側より）

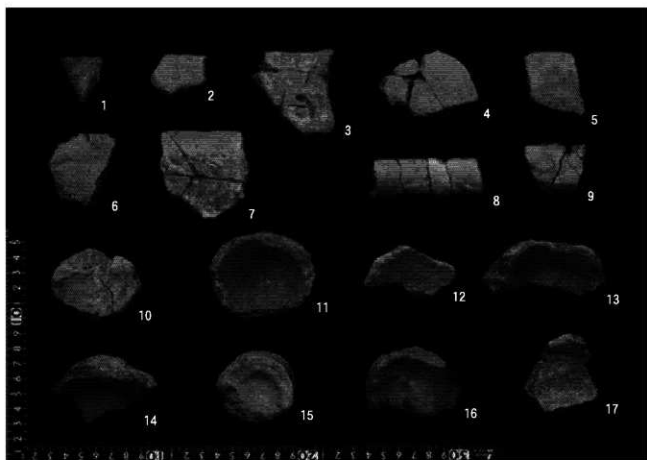
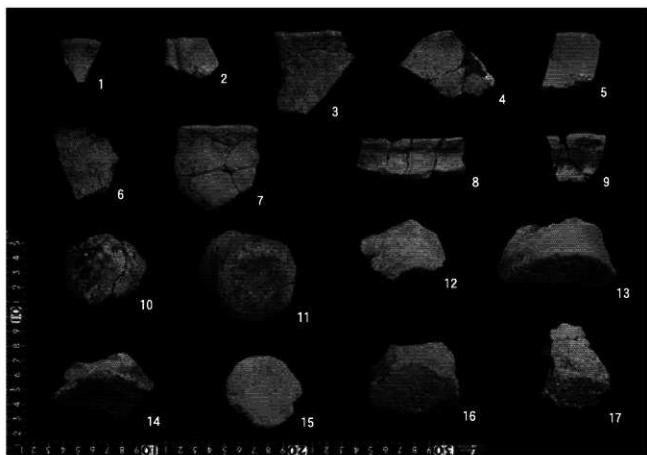


石列検出状況（南西側より）

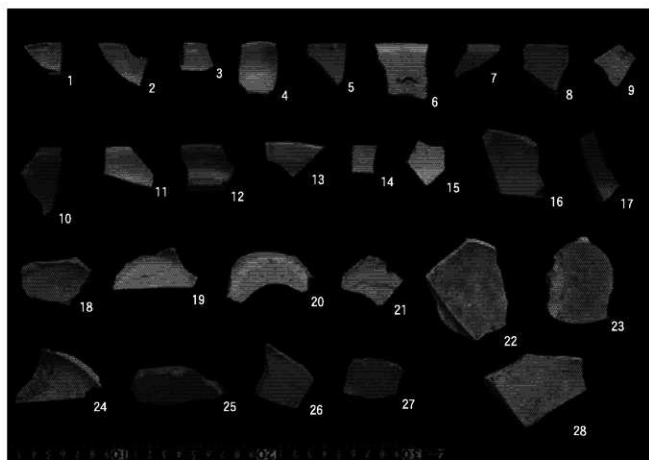
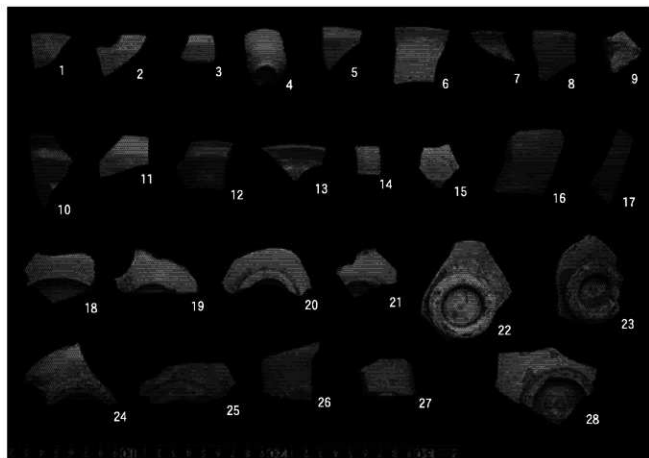
図版4 第十五次調査（石列検出状況）



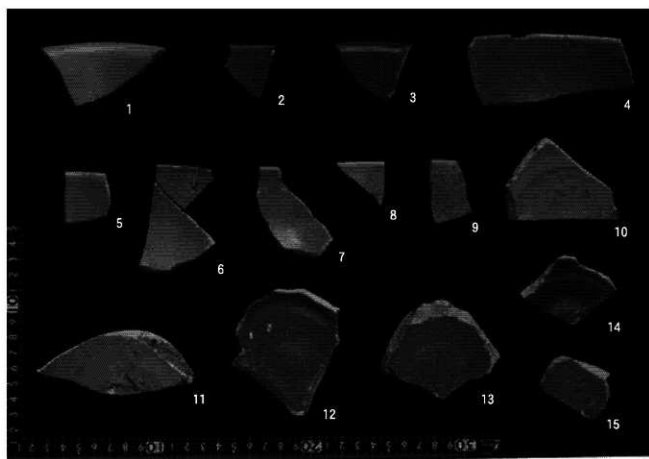
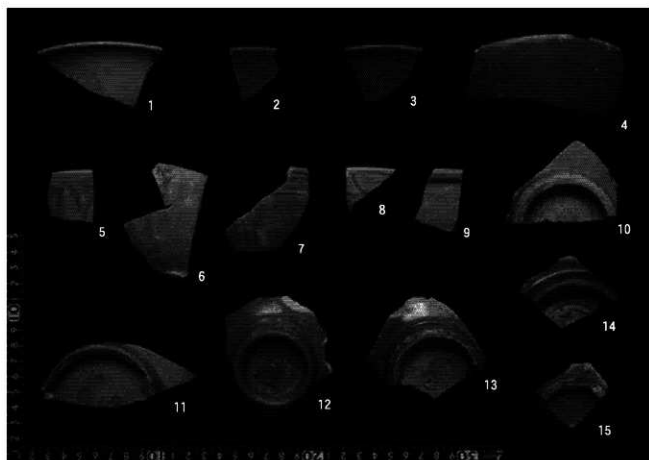
図版5 第十五次調査（獣骨・遺物出土状況）



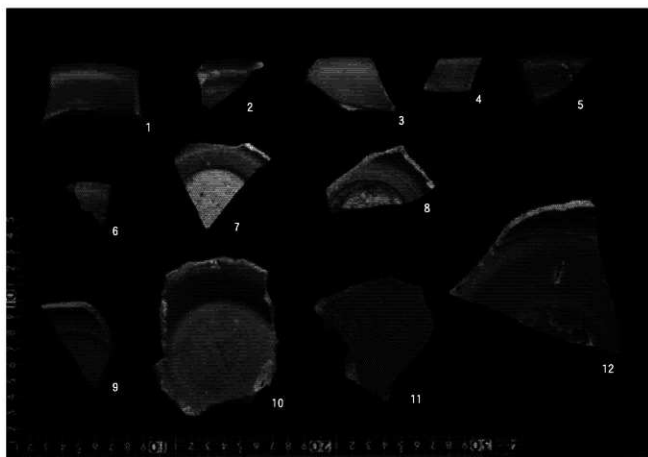
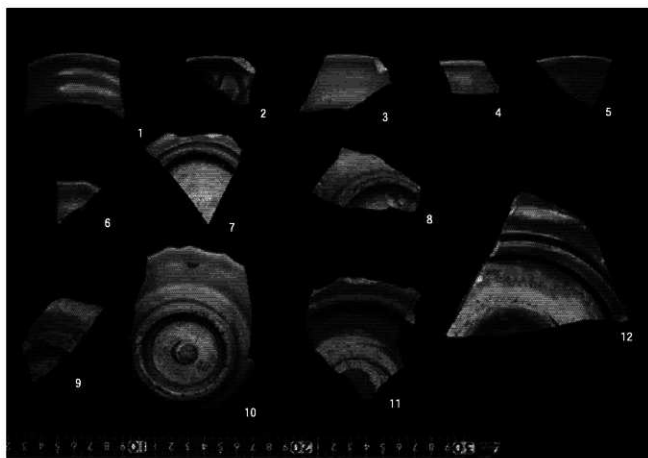
図版6 土器



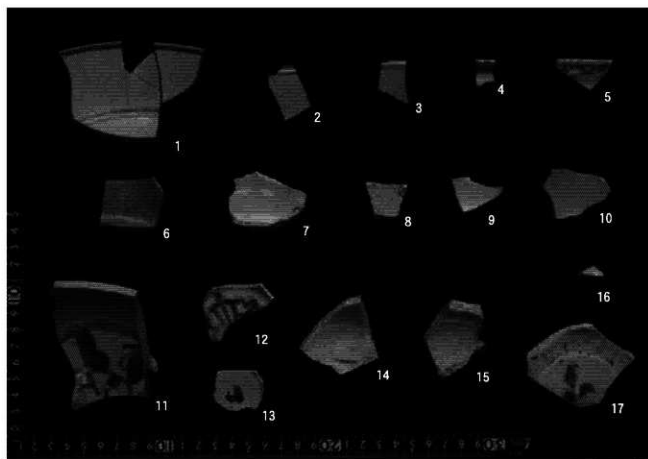
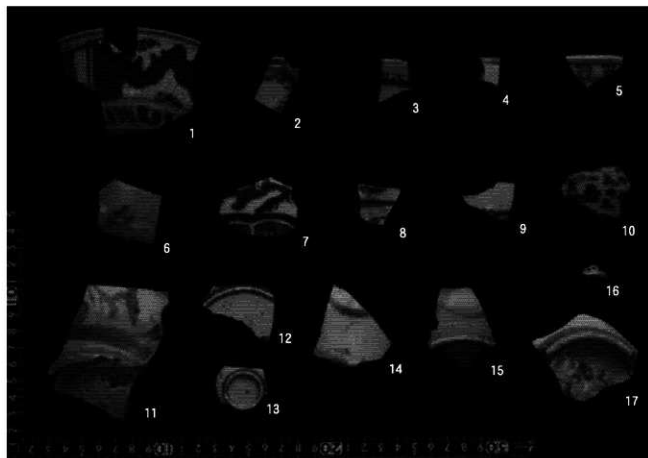
圖版7 白磁



圖版 8 青磁 1



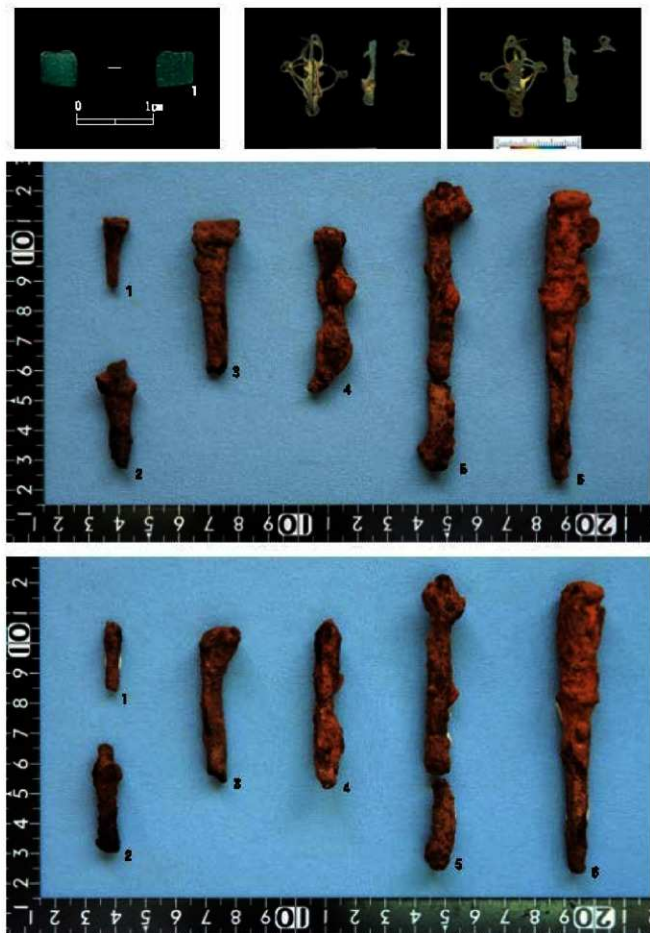
圖版9 青磁2



図版10 染付



図版11 本土産陶器（備前焼）褐釉陶器（中国・タイ）



図版12 ガラス玉・青銅製品・鉄製品

北谷町文化財調査報告書 第30集

小堀原遺跡

— キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成11～13年度） —

付篇：北谷城ヒコノノ調査概要

編集：北谷町教育委員会

発行年：2009年（平成21年）3月
〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地
TEL 098-936-3490

印刷：有限会社金城印刷
〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町 5-9-16
TEL 098-995-0001
